

この作品は2003年2月15日、日本放送出版協会
(NHK出版)から刊行されました。

「武蔵」をテーマの小説の筆者にわたくしを指名し
ていただいたのは道川文夫さんでした。

道川さま、その節はありがとうございました。

2016.08.06 高野 澄

kuupachi@jade.plala.or.jp

<http://takan-o-kiyoshi.com/>

目次

第1章	「父と子」	2
第2章	「投げ殺す」	19
第3章	「刀変貌」	35
第4章	「歌の命」	47
第5章	「出雲阿国」	60
第6章	「下り松」	78
第7章	「光悦の神秘」	94
第8章	「わが剣技」	116
第9章	「武芸伝授」	139
第10章	「巖流」	152
第11章	「三百人の磔」	173
第12章	「構え」	186
第13章	「大坂冬の陣」	199
第14章	「武蔵入城」	210
第15章	「鷹ヶ峰」	224
第16章	「生涯独行」	235
第17章	「吉原の歓声」	247
第18章	「天啓」	258
第19章	「素足のわれ」	273
第20章	「絶縁を唆す」	293

かつて――

上泉（かみいずみ）武蔵守信綱（のぶつな）という剣の達人がいた。

上野国（こうづけのくに）の上泉の領主である。箕輪（みのわ）の長野業政（なりまさ）に仕え、大胡（おおご）の城をあずかっていた。

信綱は二度にわたって上京し、みごとな剣技を正親町（おおぎまち）天皇と將軍義輝（よしてる）のご覧に入れて、称賛された。

信綱の官は伊勢守から武蔵守、位は従五位下から従四位下へとすすんだ。武士としての戦功よりも、剣の技を称賛されて従四位下になったのだ。希有な例である。

武蔵守が亡くなり、しばらくして――

その武蔵守信綱のことになると熱狂する武士があらわれた。

播磨国の新免無二斎、または宮本無二斎と称し、信綱と名のつていた。無二斎は無二介とすることもあった。上泉武蔵守信綱を尊敬するあまり、みずから信綱と名のつたにちがいない。

無二斎にはふたりの息子があった。兄は田原氏の家名をついで久光と名のり、小笠原家に仕えていた。

弟は名を弁之助といい、われらの物語の主人公である。

あけてもくれても、無二斎は弁之助に武蔵守信綱のことを語った。「おまえは腕がいい。稽古をかさねて武蔵守さまのような剣の達人になれ」

励まし、強要していた。

それから四十年、弁之助少年は剣の達人となり、宮本武蔵と称した。おのれの一派をたて、二天一流と称した。二天一流の技術と理論について武蔵自身が詳細にのべた書を『五輪書』という。

父は息子に「武蔵守さまのようになれ」と期待をかけたが、弁之

助は「武蔵守」ではなくて、あえて「武蔵」とだけ称したようである。そこにはそこに宮本武蔵こと弁之助少年の見解というものがあつたはずだ。

無二齋は弁之助に剣の稽古をつける。

稽古のかたわら、武蔵守信綱のあれこれを語る。武蔵守信綱のことを語るかたわら稽古をするというほうが適切だ。

弁之助としては、武蔵守のことよりも稽古のほうが好きである。いや、信綱のことをしつつこきかされるのが嫌さに、よりはげしく稽古にうちこんでいたというべきか。

父は息子の迷惑を理解しない。

武蔵守さまについて、われ以上に熱をこめて語れる者はいないと
の思いこみ——それは事実なのだ——があるから、なおさらにくわしく、熱をこめて、

「武蔵守さまは、そこで……」

耐えられない息子は、話題を変える狙いもあつて、とつぜん反抗の言葉を吐く。

「そんなことより、馬だよ、馬。わしのために馬を一頭、買つてくれ！」

「そのようなカネが、わしにあるものか」

「田畑を売ればいいではないか」

「田畑を売れば、親子ともども真つ裸だ。それで、どうして生きてゆくのか」

どうして生きてゆくのかと問われ、ああすればいい、こうすればよいと反論する知恵は息子にはない。まだ少年といふべき年齢だ。

いつもなら、ここで争いはおわる。

父には敵わぬことを息子が悟り、しばらくは不機嫌な無言がつづいて、もとの暮らしにもどる。大名からは被官(ひかん)とよばれ、百姓からは代官とよばれる播磨の農村の武士の、父とその子の暮らしである。

父の無二齋は馬をもっている。

ただし、無二齋が所有する馬とはいえぬかもしれない。主筋の武士から、農地をあずかって管理するために馬を拝借しているというのが実状にちかい。

一頭だけでもカネがかかって困るのに、もう一頭の馬を、それも十歳をこえたばかりのほんの少年の息子のために買う余裕などあるはずがない。

そこで息子は、

「農地を売ればいいじゃないか！」

かんがえぬいたつもりの名案を、父にむかって披露する。田畑を売れば馬の一頭ぐらいは買えるではないかと。

だが、厳密にいうと、その田畑というものが父の所有とはいえないのを、したがって、売り買いは父の思うようにはならぬことを、弁之助は知っているようで、じつはよくは知らない。

百姓たちを叱咤激励して耕作させてる父の仕事を見てみると、その田畑が父の所有であるように錯覚するのは無理もない。しかし、父の所有ではない。

かつては父の所有であったが、いまでは父がお館と尊称する大名に権利をうばわれてしまい、父は代官の立場で、かつてのおのれの田畑を管理する立場におとされてしまった。

そのあたりの事情が、息子にはよくのみこめない。

だが、かつては父の所有で、いまは他人の手に奪われている田畑がある——らしい——のを知っているようでもある。

ときどき——精神が激しているときにかぎるようだが——

「ととが取られた田畑を、わしが奪いかえしてやる！」

さげんで、父を苦笑させることがある。

「もしも、万が一にも、のはなしだが……」　くどいほど念をおして父が息子にたずねることがある、万が一に馬を買えたとして、その馬を、どうするのだと。

「武者修行に出る。馬がなければ修行にはゆけぬ」

父が悪かであるのに気づいた、とてもいうような返答である。

武者修行をすれば強い武士になる。

強い武士になって、ととの敵を負かして、ととが取られた田畑をとりもどしてやる。

だから、田畑を売って馬を——という理屈だ。

田畑を売るはなしになると、とたんに父の顔が曇る。

息子の武者修行は霧のなかのはなしだから本気で相手にならなくてもいいが、田畑を売るとなると、霧のなか、どころではない。横腹をちくりと刺される苦痛の感情が走る。父はかーっとなって怒鳴り、息子が怒鳴りかえして、やがて、たがいに沈黙する。

いつもはこのようであるが、この日はちがっていた。

真っ裸になって、どうやって生きてゆくのだ——？

問い詰められる苦しさに耐えかね、息子は父に打ちかかった。道具は、そばにあった薪か木切れか、そのようなものである。

父に油断があった。打ってかかるほど息子が激しているとは思ってもよらない。

ほんの一瞬、父は気をうしなったようである。片肱(かたひじ)を囲炉裏(いろり)の端につき、肱のうえにからだを横たえた。

父に気をうしなわせるつもりなど、毛ほどもない息子である。ただひとつ、この場にいる勇氣のないのを悟って、表に飛んで出た。

ばたばたと不用意な足音が、父を覚醒させた。だが、父には、息子が家を出てゆくこうとしているのはわからない。

息子に打たれた記憶だけがある。記憶がよみがえってくるのを感じながら、父は弱々しい口調で、つぶやいた。いや、自分では怒鳴りつけたつもりだろうが、つぶやいたとしかきこえない。

「ムサシノカミさまをめざすならともかく、ただ、強くなりたいというばかりで……」

父のつばやきを足蹴にする気分で、息子は家の戸をくぐって外に出た。

そのとき――

息子の背中に、父のつばやきが粘土の帯のようにからまって、いつまでも付いてくる感じがある。

ムサシノカミさま……………？

毎日、二度も三度も耳にしている言葉であるが、この日は、生まれてはじめて耳にしたかのような新鮮なひびきがあった。

宿命の言葉――この表現を息子はまだ知らないが――とは、これであろうか。

もどるのは恥ずかしい気がする。

だが、ムサシノカミさまのためなら、もどっても恥ずかしくはない、そんな気もしている。

息子は決心して、戸をくぐりなおした。

「やはり、そうか。耳には入れても、頭にはおさめられなかったのだな、ムサシノカミさまの名を」

いつもとはちがう、神妙な顔つきの息子に教えてやれる嬉しさはある。それよりもなによりも、息子はムサシノカミさまのことをはじめて頭のなかにおさめたらしくある。そういう息子をまえにしているのが嬉しくてたまらぬ父である。

「字を書けるかな。書いてみよ、ムサシノカミと……………」

おぼつかぬ手つきで息子は「武蔵守」と書いた。

「字が書ければ、わかりは早い。武蔵守さまともうすのは上野国の大胡の上泉から出られたの名人である。武蔵守のまえには伊勢守とも、もうされて……………」

残念だが、武蔵守さまはもう生きてはおられないのだと前置きして、父は息子に語る。

上野国の西半分は長野氏が支配していた。長野氏の本拠は箕輪（み

のめ)城であり、厩橋(うまはし)に支城があった。厩橋のほか、大胡にも長野氏の支城があった。大胡城を守っていたのが上泉武蔵守信綱だ。

足利尊氏は鎌倉の幕府をたおし、新しい幕府を京都にたてた。

関東を支配する機関として鎌倉府をおき、公方を派遣した。公方の補佐役を関東管領といい、上杉氏が世襲することになった。上野国は上杉氏の支配下におかれた。

それから二百数十年、京都ではじまった大乱——応仁の乱が地方にひろがり、群雄割拠の戦国の世になった。

上野の上杉氏の支配は脆弱になっていた。その隙をついて、北条氏康が攻めてきた。北条氏は伊豆と相模、武蔵の三国を支配していた。

氏康は上杉憲政の平井城を攻めおとした。憲政は越後に亡命し、長尾景虎の保護をもとめた。天文二十一年(一五五二)のことだ。

天文二十四年、こんどは越後の上杉謙信が上野に手をのばしてきた。

上杉謙信とは、じつは長尾景虎である。保護をもとめてきた上杉憲政から上杉の姓と関東管領の役職をゆずられ、上杉謙信と名を変えて上野を攻めてきた。憲政が奪われた平井城を奪回し、本格的な上野攻略の基地にしようというわけだ。

そうと知った上泉信綱は越後に密使を派遣し、謙信に秘策をつたえた。いきなり平井を攻めるのではなく、武蔵や下野の周辺の小勢力を攻めて屈伏させ、しかるのちに平井を攻めるのがよろしゅうございましょう、と。

信綱の秘策を採用した謙信は迂回作戦をとって上野に攻めこみ、北条氏康の勢力を追い出した。

箕輪城の長野業政は上杉謙信のちからを背景に上野の西半分の支配をとりもどしたが、不幸なことに永禄四年(一五六一)に病死してしまふ。

業政のあとの業盛(なりもり)は十九歳であった。若いとはいえない

が、甲斐の武田信玄が虎視眈々と狙っている箕輪城を守るには経験が足りない。

いや、たとえ経験が豊富であったにせよ、碓氷峠をこえて殺到する武田の軍勢を追い返すのは難事であった。

そのうえ、武田信玄と北条氏康は手をにぎって、越後の上杉を共通の敵とする戦略をかためていた。上杉が上野に救援軍を送れないようにしたうえで信玄の軍勢は上野の箕輪に殺到したのである。

永禄九年（一五六六）、箕輪城は一万五千の武田軍に包囲された。長野業盛を将とする防衛勢はわずか一千である。上泉信綱をはじめ、藤井豊後守、赤名豊前守、寺尾豊後守、土肥大膳亮、神奈図書助といった関東に名のきこえた猛将が詰めている。反撃は激しく、千をこえる武田の軍勢の命を奪っていた。

だが、多勢に無勢の戦局をくつがえすには至らない。箕輪城は陥落し、長野業盛は切腹した。

上泉信綱は箕輪城の外曲輪をまもっていたが、これ以上の抵抗は無意味だと悟って、すぐに脱出した。

箕輪を出て、北に迂回しながら東へ途をとり、桐生城の大炊之助 8
直綱を頼った。

弁之助が、しずかに質問を發する。

「上野国は武田信玄に占領された。ならば、桐生の大炊之助も、これを頼った武蔵守さまも、どちらも危険な境遇になったのではないだろうか」

無二齋が、しずかに、論すような口調でこたえる。

「大炊之助と武蔵守信綱さまの両名から信玄にたいし、反抗する意志はないとつたえられておる。それでも信玄が攻めてくるなら、命をかけて闘うまでだ」

「はい」

「土地を支配する能力をもつ武士を、たとえ昨日までは敵だからといって、いきなり殺すことはせぬ。ましてや信綱は反抗する意志の

ないことをつたえてあるのだ、殺してしまつては上野の武士の総体を敵にまわす」

「わかります」

「そのうえ、信玄としては、上泉武蔵守信綱を大切にあつかわねばならぬ重大な理由があつたのだ」

息子は勢いこんで、膝をのりだす。

武蔵守信綱は剣の達人であつた。

剣の達人——戦場で剣を揮ふるつて敵の将兵を斬り殺す名人を指す言葉ではない。

剣の達人——かれらの剣は 感動させる剣 である。

公開の場で、一名または複数の剣士を相手にして剣技をふるい、勝利をあげて称賛をあびる。

相手を傷つけるのが目的ではない。

ならば、勝負は、いつ、どのようなかたちできまるのかというと、相手が敗北を宣言して剣または剣に類似の道具——木刀や竹刀——を棄てることで勝敗がきまる。

第三者の剣の達人が勝敗の判定役をつとめることもある。

剣の達人として名があがると、主君に仕えている武士ならば待遇が上昇し、主君をもため武士——浪人武士——ならばあつちこつちから剣師として仕官を誘う声がかかる。

主君に仕えるのではなく、顧問格として臣下に剣術を教授する指南役におさまることもある。

優秀な剣技をもつ武士を臣下にかかえるのは高位の武士——大名の誇りである。

剣士としても、高位の武士に招聘されて仕官するか、剣技指南役として招かれることに期待をかけて剣技に磨きをかける。

とつぜん、父が息子に質問を發する。

「最高の高位の武士——それは、だれだ？」

息子は動転した。

武士の世界に高下の差があるのは知っているが、最高の高位となると、見当がつかない、かんがえたことがない。

「將軍だ」

「ああ……足利將軍」

將軍家の足利の名は知っていたが、その足利を「最高の高位の武士」と表現する方法があるとは知らなかった。

「上泉武蔵守信綱さまは將軍の足利義輝に、われに仕えぬかと誘われたのだ」

「將軍に……！」

信綱は永禄七年（一五六四）に上京した。四方から強敵に狙われ、滅亡の危機がちかづいている主家の安泰をたもつ途を模索しての上京であった。

このころすでに信綱の剣士としての名はきこえていた。「上野国の一本槍」とは信綱の剣技を称賛した言葉であった。

上泉家は、すでに信綱の祖父の時秀の代から任官されるしきりになつていた。時秀は従五位下・伊勢守、父の義綱は従五位下になつた。

信綱は上泉家を相続した享禄元年（一五二八）に従五位下・伊勢守になった。武蔵守になるのはもうすこし先である。

將軍の足利義輝から信綱に、「剣技を観たい」と誘いがかった。信綱は弟子の丸目蔵人（まめくらんど）をつれて伺候し、丸目を相手にさまざまな剣技を演じて義輝のご覧に供した。

義輝は信綱の剣技に感激し、仕えぬかと誘ったが、信綱は謝絶した。主家の安危が揺れているうちは、たとえ將軍といえども仕える気にはなれない。

つぎの年の五月、義輝が宿舎としていた二条の武衛陣に松永久秀や三好三人衆がおしかけ、斬りかかった。

義輝は床に何本もの刀を突き刺しておき、折れた刀は捨て、床に刺した刀をつぎつぎに抜いて闘った。だが、ついにちから尽きて殺

されてしまう。

もしもあのか、信綱が義輝の剣術指南役として仕えていたと仮定すると、この襲撃の結果は異なったものになっていた可能性がある。

將軍でさえ魅惑された剣技の主の上泉信綱である、殺さぬまでも、粗末に扱おうと武田信玄の大名としての評判に傷がつく。

桐生の大炊之助直綱のところを身をよせた信綱を、信玄は咎めようとはしなかった。

信玄は、長野業盛から奪った箕輪城には内藤昌豊を城代として配し、西上野の七郡を支配させた。

内藤の臣下は五十余人である。七郡を統治するには不足であるから、長野業盛の遺臣のうちから二百人ほどを選抜して召し抱えた。

信綱も選抜され、桐生からもどつて箕輪の城に詰めることになった。

大胡のちかくの上泉には、わずかながらの領地がある。浪人の境界では領地の維持が困難である。信玄の臣下になっておけば、息子の秀胤にゆずって死ねるだろう。

武田信玄は信綱に、おのれの名の一字をとって信綱と名のらせた。それまでは秀綱といていたのである。

信玄が信綱に期待したのは庶務ではない。「上野の一本槍」の武名をさらにいっそう高めるために、箕輪の城下で剣技の鍛練にはげむことだ。

新しい主となった武田信玄は天下を手に入れようとして、朝も夜もなく戦場を駆けまわっている。だが、長野の遺臣の箕輪衆を戦場に連れてゆくことはしなかった。

師も弟子も、思う存分に剣技の鍛練にうちこむことができた。このころの信綱の門人としては足田文五郎や神後伊豆守宗治が双璧である。

太刀打ちのときに相手を傷つかせぬ道具として、信綱は袋竹刀(ふ)

くろしな)を考案した。

それまでは信綱も、ほかの剣士とおなじく真剣や木刀を使っていた。真剣や木刀で打ちこめば相手を傷つけてしまうから、太刀を型に合わせて組み、たがいの手元に詰めた時点で太刀を止めねばならぬ。

信綱の考案した袋竹刀は、竹を三十本から六十本に割ったのを一本に束ね、切っ先から鐔元まで革の袋をかぶせる。

袋竹刀は撓(しな)うから、使いづらい。

使いづらい袋竹刀で稽古をすると、真剣をにぎったときに使いやすくなる。相手を傷つけないから、思いきって打ちこめる。

室町時代のはじめ、剣の流派というものがはじまった。剣士はおのれの剣技の独特の型をまとめて一流とし、流の名をつけ、秘伝として弟子につたえるのである。

上泉信綱の流儀は新陰流(しんかげりゅう)といった。新陰流の名は「陰流(かげりゅう)に鹿島神流(かしましんりゅう)の奥義をあわせた新しい派」を意味している。

陰流(愛洲陰流(あいしゅういんりゅう))——伊勢の五ヶ所浦に愛洲移香齋久忠(いこうさいひさただ)という武士がいた。移香は惟孝とも書く。

長享年間(一四八七〜八八)、移香齋は日向の鶴戸神宮の岩屋に参詣して剣術の上達を祈願した。祈願する移香齋のまえに神猿があらわれ、剣の奥義をさずけた。これが陰流の創始とされている。

移香齋は晩年は日向に住んで鶴戸神宮の神職をつとめ、子の元香齋宗通が二世となって常陸にうつり、関東に陰流——愛洲陰流をひろめた。

鹿島神流——常陸の鹿島神宮につたわる剣術の流派である。常陸の豪族の鹿島氏の家老職で鹿島神宮の祝部の松本備前守尚勝という剣士がこの派の基礎をかため、名をひろめたようである。

上泉武蔵守信綱は愛洲陰流と鹿島神流をまなび、そのうえで独自の剣法をあみだして新陰流と名づけた。

征夷大將軍という地位、それは本来ならば途轍もなく高くあるべきであった。

それが、ちかごろは凋落の一途をたどり、將軍などあつてなきがごとき気配であるのを息子の弁之助は知っている。

父とふたりで暮らす播磨の村があわただしい。將軍の地位の低下に由来しているのと、播磨のあわただしさとのあいだにつながりがあるのも、弁之助は理解している。

「上泉武蔵守のころも、將軍の地位は低かった……？」

「いまほどではないが、足利義輝が殺された一件をみても、それはいえる。殺人者の乱入にそなえた警護役もいなかった」

「それでも、將軍にお目にかかつて剣技を披露するのは、名譽であつた……？」

父は、権威や名譽の概念を息子に説き明かしてやるに充分な言葉をもたないことに気づいた。

だが、なんとしてでもこれは説き明かしてやらねばならんと決意はかためている。

名譽や権威とは別なもの、たとえば……

「松永久秀(まながひひで)を、だれも褒めはせぬ！」

「はあ……？」

息子の驚愕の表情に気づいて、父はいささか気恥ずかしそうであった。

「いやいや。將軍を殺してしまったのだから松永久秀は強い。強いけれども、それが松永の権威や名譽を高めるわけではない」

強さと比較すれば権威や名譽というものを説明できそうな感じになつてきた。

強いということと、権威がある、名譽があるということの相違、それはなにか？

「強いだだけの松永久秀には、だれも会いたくない。だが、上泉武蔵守には、將軍が会いたいと切望した」

「なぜ……でしょうか？」

「世間が、多くの剣士が武蔵守を称賛している、そのことを知ったからだ。世間から称賛されている人物に会い、名譽をさずけるのは將軍の任務といってもいい」

「そうか、それが名譽というものだ！」

武田信玄の臣下となつてから、武蔵守信綱の身の安全はたもたれている。箕輪の城下で剣技の稽古と教授にあけくれ、ときには大胡の城や上泉にもどる。

そのうちに、欲が出てきた。武者修行をしながら、もういちど京都にゆきたくなつた。

そして、もしも可能ならば、のほなしではあるが、天子さまに拝謁したいとかがえていた。

「武蔵守は天子さまに会いたいと……」

こんどもまた、息子の弁之助が驚愕の色を隠せない。

天子さまというものが京都にいるのを、弁之助は知っている。

將軍に權威をあたえるのが天子さまだというのも、うすうすは知っている。

だが、天子とは神さまのようなものであつて、神社の祭神のようなもの、ふつうの人間ではないらしいという噂もきいた。

天子さまが内裏の外へ出ることは、めつたにない。内裏の外の間が会いたいといつても、すぐには会えるものではないらしい。

「將軍に会つて剣技を披露し、褒められた。それでは充分ではないと……」

「天子と將軍では、なんというか、權威の格というものに相違がある」

「天子さまが上、將軍が下……」

「そのとおりだが、それだけではない」

「では、どうすれば……ああ！」

ここまできて、ようやく弁之助は、信綱が上京を計画した意味を

悟った。

上京して天子さまに拝謁し、剣技を披露して称賛にあずかり、称賛の言葉をかけていただく。そうすれば、たとえば武田信玄のように、手続きのうえでは官位をいただいてはいるが、天子さまに拝謁したことのない武士とのあいだに格段の差がつく。

剣技を称賛されての拝謁だから、剣士の仲間における立場にも一段のかがやきが出てくるわけだ。

元龜元年（一五七〇）に上泉信綱は上京した。

武田信玄の臣下であるから、信玄の許可を得る必要がある。箕輪城の城代の内藤昌豊を通じて信玄にうかがいをたてると、昌豊が懸念をしめした。信綱は他家に仕えるのではなかるうかと疑ったのだらう。

そこで信綱は、新しい剣技の流儀が完成しかかっているのです、武者修行に出て他流の長所短所を知り、自流の完成に欠点がないようにしたいのでありますと説明した。

信玄の許可が出た。

信玄は信綱に、京都や他国の様子を知らせてくれよと丁寧に注文してきた。

- 1 5 -

元龜元年は、どのような年であったか。

織田信長が足利義昭を奉じて入京し、天下取りに王手をかけたのが永禄十一年（一五六八）、元龜元年はそれから二年目だ。

信長は自信にあふれて統一政権の構築にとりかかっていた。

諸国の関所をつぎつぎに廃止させた。

イエズス会のルイス・フロイスに、京都でキリスト教を布教するのを許可した。

「おまえは、まだ生まれておらん」

「わたしは、その織田信長という男とおなじ空気を吸えなかったのです」

信長に擁立されて室町幕府の十五代將軍になった足利義昭（よしかき）

「だが、やがて、信長と対立するようになる。信長の傀儡の境遇からぬけだしたくなつたのだ。」

織田を倒せ、信長に反抗せよと義昭は諸将によびかけた。信長を包囲する政治勢力ができかかっている。その中心にいるのは甲斐の武田信玄である。

「上泉信綱は、天下取りの争いなどから逃げたかつたのではなからうかと、わしは推測しておる」

「信玄に仕えていれば天下取りの争いに巻きこまれ、新陰流の完成どころではない」

「弁之助よ。おまえが馬にのつてゆこうとしているのは天下取りの道だ」

息子は、父の言葉の意味が理解できなかった。かけられた謎に取りつく島もない、といったように、

「はあ……？」

にえきらない返答で、父にたいする満幅の信頼のしるしとした。

つい先刻、父に打ちかかって気をうしなわせたことなどは忘れたふうである。

「馬だよ、馬……」

「はあ……馬……ですか」

「信玄のようになるのは、容易なこと。馬の二、三頭もあればいい。天下を取るか、取れぬかは時の運だがな」

「天下を取る……のですか」

「信玄はいま、天下を取ろうとしておる。だから、上京する信綱に、他国や京都の様子を知らせてくれと頼んでおる」

それは、弁之助にも理解できる。返答のかわりに、首を縦に、ちよこんと振つた。

「いま——というのは、あるとき、だが——天下は信長の手にある。

だが、磐石とはいえない。なにかのはずみで、信長から足利義昭と武田信玄の手に天下がころがりこんでくるかもしれない」

父の唇にちからがこもる。それが息子にわかる。

「天下を取るかもしれないぬ信玄を足蹴にするようにして、信綱は京都に出てゆく」

弁之助の顔が、ひきつった。驚愕が深い皺になって、面の皮を引き裂きそうだ。

上泉信綱は上京した。神後伊豆守宗治と甥にあたる足田文五郎景廉を供につれている。

さまざまの立場のひとが信綱の上京を歓迎した。なかでも、熱狂と違って大げさでないのが山科言継(とむく)である。山科言継は権大納言、内蔵頭や御厨子所別当として皇室財産の管理にあたっている公家だ。

信綱から言継へ、軍隊を指揮する心得が伝授された。親しい公家が言継の屋敷をおとずれ、心得書を筆写する。そのあいだに剣技や武芸一般について懇談があり、将棋や双六をして楽しむ。言継は酒肴をすすめて信綱を歓待する。

上泉伊勢守信綱は剣技を正親町天皇のご覧に供し、元龜元年六月二十七日に従四位下に叙され、武蔵守に任じられた。

つぎの日、信綱は山科家をおとずれ、従四位下に叙された件について感謝の意を表明した。信綱の叙任については言継がいろいろと奔走したにちがいない。

信綱と弟子たちはしばらく在京し、翌年七月に東国にもどった。暇乞いにきた信綱に、言継は親王の直筆の色紙二枚を贈呈した。

このとき信綱は、下野の結城正勝にたいする紹介状をいただきたいと願った。そこで言継は、「上泉武蔵守が上京なされ、將軍をはじめとして多数の高貴の方々に兵法を伝授された。これに勝る名譽はない」と書いた紹介状をわたした。

はなしはおわり、の合図だろうか、父は緊張を解いて寛(クワ)いだ姿勢になった。

息子の弁之助は、父とは反対に緊張した。つぎの父の言葉を予想したからである。

信玄の真似はだれにもできる。だが、上泉武蔵守信綱のように、世の評判だけで天子さまから官と位をいただくのは希有なことだ。たぶん、このようなものと弁之助は予想した。

だからこそ、弁之助は緊張せざるをえないのである。なぜなら、おのれの返答が予想されるからだ。

息子の予想どおり、父は「信玄を足蹴にする気を持ってよ」といった。

息子はまず、「武蔵守を目指して生きてみようと思います」とこたえ、「武蔵守に近づいたなと思つたら、武蔵と名のすることにしましよう」とつけたした。

「武蔵守ではなくて、ただの武蔵だな。それならば妙な味がする」「馬には乗らない、城はもたない。ならば武蔵守の『守』は余計です」

『丹治峰均筆記(たじねびひき)』という名の書に、弁之助と父が喧嘩をした逸話が出てくるそうだ。父が楊枝をけずっていたが、弁之助には、それが不器用に見えた。嘲笑した息子に、父は、楊枝をけずっていた小刀をなげつけたというのである。

この記事に触発され、父と子の争いのなかから少年武蔵の立志がかたちづくられたという光景をつくってみた。

剣豪宮本武蔵が志を追うひとであったのは否定できない。

ならば、若いころの、どこかの時点で立志の光景が見られたはずなのだ。

第2章 「投げ殺す」

「まずは、敵を打ち殺せる技とちから」

父が息子に、教える。

「身を守るのは、そのつぎ」

いかなる敵にたいしても、いかなる場においても、わが身をまもる技とちからをつけるのが目標だ。

だが、はじめからその段階をめざすのは不可能である。ゆえに、まずは敵を打ち殺せる技とちからを身につける。

「敵を殺せるちからと技を身につけたからといって、殺してはならん。目標はあくまでつぎの段階、身を守るちからと技を会得することだ」

弁之助がうけて、「殺せる技はもっていても、殺さぬ。そういうことですか」と確認する。

「ところでな、弁之助。剣士として名を知られるためには、このよくな理屈を身につける必要もあるぞ。屁理屈のたぐいにちがいはないが、屁理屈だといって馬鹿にはできない」

まえおきして父は、その屁理屈なるものを息子に伝授する。

「敵を打ち殺すのと、打っても殺さずにおくのと、どちらがおまえの得になるか？」

さあ、息子よ、おまえの意見をきこうで はないか

弁之助は窮した。

打っても殺さないほうが得になる——そうこたえれば、父はかならず、「理由をいえ」と迫ってくる。それに応じるちからがないのを知っているから、息子は沈黙せざるをえない。

息子が窮するのを気持ちよさそうにながめて、父はおもむるに説明にかかる。

「打っても殺さぬ、このほうがおまえの得になる。なぜなら、敵を殺してしまうと、おまえは、おまえの強さを証明してくれる証人をうしなうからだ」

打て、打て、いくらでも打て。だが、殺すなよと父は、念を入れて教える。

打つても殺さない。すると、打たれたが殺されなかった相手は、世間にむかって、おまえの強さを吹聴してまわってくれる。これがあるがたい。

「よいか。殺すところを見せても世間は感心してはくれぬ。どんな敵でも打ち殺せるほど強いのに、殺さない、その姿を見せてやるのだ」

どこで耳に入れるのか、父は、上泉武蔵守信綱そのほかの剣士の剣技にかかわる言葉を集めて書きたため、一冊の冊子にしている。

父が武蔵守信綱に逢ったことがあるのか、ないのか、弁之助は知らない。知りたいとは思わない。

信綱の噂、あるいは信綱の生涯から発している空気のかたまりとといったもの、それと濃厚に接しているのが父である。それさえわかっただけならいい、そんな気持ちの息子だ。

武蔵守信綱が柳生宗厳(やぎゅうはし)とはじめて剣技を闘わせたときのことを、父は息子に語る。

信綱が足田景廉や神後宗治をつれて上京したときに、大和の柳生を通った。柳生の宗厳は中条流の剣の達人として名があった。

宗厳は信綱を歓迎し、あたらがぎりの逗留をのぞみ、信綱がうけた。すでに高名な剣士の信綱と立ち合い、打ち伏せて、わが名を信綱の名の上におこうとした宗厳の目論見(もくろみ)はあきらかだ。

立ち合いが実現した。

いや、実現したのは柳生宗厳と上泉信綱の立ち合いではなく、宗厳と足田景廉の立ち合いであった。信綱が「まず、わが弟子の足田とお手合わせを」といったのである。

信綱との立ち合いをのぞんだのは宗厳だ。その信綱が「まず、足田を相手に」と応じたからには、宗厳がうけないわけにはいかないのである。

信綱が工夫してつくった袋竹刀がもちだされ、双方が手にして立ち合いとなった。

おのれよりも桁違いに格の低い剣士を相手にする羽目になってしまった！

苦い想いが、宗蔵にはある。さつさとかたづけ、めざす信綱と立ち合いたい。

軽い気で疋田の様子をうかがったが、そこで、息が止まった。

打ちこむ隙がない。

気づかぬうちに師と弟子が入れ替わったのではないか——そんな、途方もない疑いの気も生じた。

打ちこむ隙はないが、といって、疋田のからだから宗蔵を圧倒する気が発しているわけでもない。

自縄自縛の宗蔵に、疋田が声をかけた。

「その構えは、よろしくありません」

よろしくないか、どうか、受けてみればわかるう。

打とうとした宗蔵より一瞬だけ早く、疋田から「参る！」と声がかかり、声の気が袋竹刀の一撃を伸ばして宗蔵の面を打っていた。

袋竹刀である、からだの中心に達する衝撃はないが、ここに受ける傷は深い。

「もう、一手を……！」

屈辱のままでは引き下がれない。

なにごともないふうで、疋田はふたたび竹刀をかまえ、

「その手も、よろしく、ない！」

竹刀が飛んでくる影も見えないのに、またまた面を打たれていた。

宗蔵は顔を真っ赤にしたまま、

「それでは、伊勢守殿、お相手を願いたい」

約束の実行をせまった。

宗蔵は聡明をしめした。

格下——のつもり——疋田景廉に敗れた復讐をしたいという気

をすこしも見せず、約束の実行をせまったことで矜持を維持したのである。

信綱と宗蔵が相対した。

宗蔵の構えに緊張があるのは、おそらく、剣技のこころえのない者にもわかつたはずである。

「その構えでは……」

間をおいて、

「取りますぞ！」

信綱のからだは宗蔵のからだに巻きついたかと思うと、つぎの間、宗蔵の手から竹刀が奪われていた。

それからしばらく信綱は柳生に滞在し、新陰流の奥義を宗蔵につたえた。

「柳生宗蔵と立ち会ったときの上泉信綱さまの心境を言葉にすると、だな、ええと……」

冊子をめくって、

「兵法は他人の助けとしておこなうものではない。進退きわまり、一生に一度あるかなきかの緊急の役にたてるのが兵法である。それゆえ、世間の評判にとらわれるのは意味がない」

朗々と読みあげ、

「こんなところだな」

「ハイホウが剣術ですか？」

問いを発した息子にそのつもりはないが、父は意表をつかれた。

「いろいろのひとが、さまざまなことをいうから混乱がおこる。ハイホウはハイホウだというひとさえ、ある」

息子のてのひらに、「兵法」と「平法」の二語を指でなぞって教えた。

「平法とは、はじめて耳にしました」

「世の中をタイラにする、悪者を、敵を、タイラグル、だから平法だと説明するひともある」

「すると、弓馬の家の立場から出てきた言葉のようすな。弓馬の

家なら、世の中をタイラゲルことに興味があるはずですよ」

「世の中をタイラゲて、ふんぞりかえる」

「武蔵守信綱さまはタイラゲル平法ではないと……」

「もちろん」

「わかります。一本の剣や太刀で世の中をタイラゲられるはずはない」

「わかってきたであろう。馬や弓矢などというものは剣技の邪魔なのだということが」

「わかりましたが……」

「が、とは、なんだ？」

タイラゲル平法はわかったが、となるとこんどは、兵法との相違、意味がわからなくなってきましたと率直なところを白状した。

父は父で、これまた率直に、タイラゲル平法がわかってくると、兵士の法の兵法がわからなくなってくる。不思議なものだたと告白した。

「剣技ではなく、学問のはなしとして扱わなければ解決はつかぬ。そういう種類の問題かもしれんな」

- 2 3 -

「上泉信綱との出会い、信綱と立ち会って手もなく負けたのが大和の柳生の新陰流のはじまり……」

息子の弁之助もちかごろは、剣技の世界の風評に耳をそばだてる姿勢が出てきた。

大和の新陰流——柳生新陰流——は宗厳から息子の宗矩（むねのり）に代替わりし、徳川家康の剣術指南役として高名を得ている、ぐらいのことは知っている。

家康は関東八カ国を領し、太閤秀吉に服する大名のなかでは一、二をあらそう位置にある。

「宗厳は若いころから、それなりの剣技を工夫し、弟子もそだてていた。新陰流のはじまりとはいえぬが、武蔵守信綱との出会いがなければ今日の隆盛はなかったといって過言ではない」

弁之助は、父とは別の径路で、柳生のことを知っている。

大和の添上郡の柳生荘を領知していた小豪族が柳生氏である。くわしい由緒や領地の高は知らないが、すくなくとも父の新免氏よりは規模の大きな武士であったとはいえるようだ。

戦国の世になると、柳生氏は自前の権力は維持できなくなった。

まずは三好氏に、つぎには筒井順慶にと主を代え、宗敵の代になつてからは松永久秀や織田信長に屈することで、かろうじて柳生の土地をまもっていた。

「柳生家には馬があった」

「馬はある。いや、馬はあった、というのが柳生の世渡り上手を知るには早道かな」

父は上機嫌である。

「広くはないが、ともかくも柳生荘の領主である。馬は持っていたが……」

馬を頼らなかつたのが柳生の聡明なところなのだ。父は力説した。

「弓馬の家」などという、耳に響きのいい言葉に惹かれて馬を頼ると、合戦のあけくれになる。

負けると悲惨だが、勝てばいいではないか——そうはいうものの、いつまでも闘って勝ちつづけるのは愚劣だ。

それもこれも、馬を頼る結果だ。「弓馬の家である」などという愚劣な言葉に心身を売ってしまった報いなのだ。

どうだ息子よ。それでもまだ馬を頼る気を捨てぬかな……

「柳生の家は馬を捨てて剣を頼った。だからこの乱世を上手に生きてこられた……こういうわけですか」

父の顔の、莞爾とした笑いは、「でかしたぞ、わが子よ！」と称賛している笑いであった。

父の冊子の記事のうちで、いちばん数の多いのは塚原卜伝(ぼくでん)にかんするものだ。

「多すぎる。眉唾物もあるようだ、いや、ほとんどが眉唾物で、本

当のところがあるのかわからないのかわからぬ、といったものかもしれないがな」

そういう父だが、ト伝にかかわることはひとつのこらず集めてやるぞといった、おおげさな意気込みのようなものがある。

父は塚原ト伝が好きなのだと言之助はみている。

塚原ト伝は常陸の塚原に生まれた。父は鹿島神宮の神官のト部覚賢だったという。

おなじ常陸の塚原土佐守の養子になって武士の世界の住人になったそうだが、生まれた年ははっきりしない。

上泉武蔵守信綱に入門して新陰流をまなんだという説がある。とすると、信綱よりも若くなければならぬが、剣士としてのト伝の名が世にひろまったのは信綱よりは早いのである。このあたり、不明なことが多い。

天文の末年というところ、イエズス会のフランシスコ・サビエルが京都で布教しようとする苦心していた、そのころ、ト伝は上京した。

なんとも賑やかな行列であったそうだと父は息子にいう。従者は百人あまり、乗り換えの馬を三頭ひかせ、大将のト伝は鷹狩の鷹を三羽も据えて堂々と入京してきた。

応仁の大乱がおわっていくらか時は過ぎていたが、まだおおかたの大名の富とちからは回復しない。

そういう時期、ト伝の派手な入京の光景は注目をあびた。

京都は住民の数が多し。なにかの事件や逸話が人気をよぶと、あつというまに諸国にひろまる。ト伝は京都という街の、そういう機能を熟知して、利用した形跡がある。

「ト伝が立てた流派の名は新当流だが、世間には『ト伝は無手勝流』の評判が高かった。琵琶湖をわたる船でやったという、例の一件の印象がよほど深かったらしい」

例の一件——乗合船で琵琶湖を横断していたとき、剣術自慢の男が同船していた。

ト伝がからかい半分、

「拙者も剣をやるが、われの剣技は無手勝流といい、敵に勝とうとはせずに、ただ負けまいとするばかり」

「ならば、その腰の刀はなんための刀か」

「おまえのような高慢を退治する」

「われと無手で闘って、勝てるのか」

「もちろん！」

売り言葉に買い言葉、決闘の約束ができた。

ト伝は船頭に命じて、ちかくの岸に船を寄せさせた。

船が着かぬうちに、男はひらりと身をかわして上陸し、早く早くト伝を急きたてる。ト伝は、「わが無手勝流ではなにごとにも急くことを嫌う」などといい、股立ちを高くとり、腰の二刀を船頭にもたせ、船頭の棹を手に船舷にたっている。

棹を岸にたてて飛んで上陸するはずが、そうじゃない、ト伝は岸边に棹をあてて、ぎゅーっとおした。

おしかえされ、船はゆるゆると岸から離れる。

「それっ、船頭！」

「はいっ。これだ、これだ。こういう手があったんですな！」

ト伝からうけとった棹を、船頭がちからいっばいに使った。船はまたたくまに岸から遠ざかった。これすなわち無手勝流の勝利。

「じっさいに見た者は何人もいないが、はなしにきく者には、ト伝の勇ましい姿が手にとるように見えてくる」

「つぎからつぎへと伝わって、ト伝はまず京都で英雄になるわけですか」

琵琶湖の一件で有名になっても、ト伝自身としては格別に嬉しくない。

しかし、ト伝は無手でも勝つという評判が高くなるのは歓迎する。

ト伝が剣士の生涯のうちに工夫した最高の型は一ツ太刀という。

剣技に興味があれば、一ツ太刀ときいてもなんのことやら理解はできない、一ツ太刀を工夫したト伝の名を噂することもない。

だが、琵琶湖の船の一件があるから、そのト伝の一寸太刀ということ、親しみが出てくる。これがト伝としては嬉しいわけだ。一寸太刀という名は神秘でもあり、難度の高い型のようにきこえる。

じつは、全身全霊をこめて一撃するということだ。

もちろん、一撃で敵をたおすのに失敗すれば死ぬつもり、というわけではない。第一打を外されれば、つぎの一撃を第二の一寸太刀として全身全霊をこめて打ちこむ。

いいかえれば、太刀数をすくなくするのが一寸太刀だ。

「そのほうが、見栄がいい」

こともなげに父はいう。

太刀数をすくなくしようとしたト伝の努力を承知していた武士、そのひとりが丹後の田辺の城主——といっても息子の忠興にゆづっているから田辺の隠居だが——細川幽斎(ゆさい)だと父はいう。

冊子をめくって、「幽斎いわく」の記事を見つけたのだろう。

「幽斎いわく、剣技にかぎらず、あらゆる芸能の達人のしたり顔を見るたびに、ト伝はいったものだ——『まだ手を使っている。手を使っているうちは、だめだ』と」

息子の弁之助がうなずくのに重ねて、父はいう。

「幽斎は生きておるぞ。幽斎に会ったら、そのあたりの詳細を、弁之助、おまは自分の口で耳でたしかめるとよろしい」

「わしが、自分で……？」

息子の驚愕を、父は、気後れのせいだと見たらしい。

「細川幽斎とて、馬よりは剣を大切にしたいと願ってある。おまえとおなじだ。ト伝の評価を直に拝聴いたしたいといえ、会ってくれるだろう」

しかしと、父はつけたした、たとえばいくらかでも剣技の達人として名をあげていなければ無理だろうがな、と。

弁之助は父の信綱を師として剣技の錬磨に励む。

その余暇に、剣技の達人にかかわる逸話を知る。

父からだけではなく、世間に出て行って、剣士のはなしをきく。

これらと思うところで耳をかたむけると、剣士にまつわる多くの逸話が耳にとどく。剣士とか劍客とかいわれる武士の数は案外に多い事実にも、弁之助は気づいた。

剣士の仲間、世界といったものができあがっている。

だれが、だれと、いつ、どこで立ち会ったか、内容はどうか、結果は、といった噂はあつというまにひろまる。

なんという名の大名が、どの大名と合戦して、結果はどうだったかという噂も足は早い、剣士の仲間の噂も早い。

伊藤一刀斎景久、富田越後守重政、小野次郎右衛門忠明、柳生では但馬守宗矩と兵庫助利厳といった名前がひっきりなしに弁之助の耳にはいつてくる。

塚原卜伝や上泉武蔵守信綱はいまはもう黄泉の客だが、この二名の輝きは依然として失われていない。

父はひそかに信綱と名のっている。その気持ち、息子の弁之助には痛切に理解できるのであった。

信綱と名のれない場では、父は味もそっけもない無二斎と名のるのだ。これまた痛切である、悲痛である。

宮本弁之助、のちに宮本武蔵と名のってからの著書の『五輪書』では「生国は播磨」と記されている。だが、播磨のどことは記されていない。

かれの弟子たちが長い時間をかけて作製した『二天記』では天正十二年（一五八四）三月に播磨で生まれたと記されている。

『二天記』によると、かれの正式の姓名は新免武蔵藤原玄信であり、播磨国の佐用の城主の赤松二郎判官すなわち則村入道円心の末葉だという。

ならば赤松を姓とすべきだが、理由があつて外戚の宮本を姓としたと記されている。外戚とは母方のことか。

慶長元年（一五九六）、弁之助は十三歳のときにはじめて勝負をして、勝った。相手は新当流の有馬喜兵衛といい、播磨の剣術者であった。

最初の勝負が十三歳の年、相手は有馬喜兵衛、播磨の新当流の剣士だったとする点では『五輪書』も『二天記』もおなじだが、勝負にいたる経過や勝負の詳細については両書とも黙して語らない。

新当流とはほかならぬ塚原卜伝を祖とする流派である。みずから新当流を名のつたのだから、有馬は当然、一ツ太刀をこころえているはずだ。

しかし、有馬が一ツ太刀を打ちこんだのかどうか、じつは、わからない。有馬が一ツ太刀を打ちこむまえに、弁之助の一撃が有馬を碎いてしまう——これもありえないことではない。

弁之助と有馬が勝負をするにいたった経緯については、『丹治峰均筆記』に述べられている。この記録の筆写の丹治峰均は福岡藩黒田家の中老、立花重種の子で通称は専太夫。元禄十六年（一七〇三）に武蔵の二天一流を継承した剣士だという。

『二天記』も二天一流の門人による編纂書物であるから、この二点はいわば同種の書であるが、記述の詳細では『丹治峰均筆記』が『二天記』をうわまわる。

弁之助と有馬喜兵衛が勝負をするにいたった経緯は、『丹治峰均筆記』によればつぎのとおりである。

新当流の兵法者の有馬喜兵衛が浜辺に矢来をひきまわし、高札をたてて立ち合いの相手を募った。

「のぞみ次第に試合をいたすべし」

仲間といっしょに手習いから帰る途中、弁之助はこの高札を見た。手習いにつかう筆と墨で、有馬の高札に書きつけた。

「何町何方に居住もうす宮本弁之助、明日試闘つかまつるべし」

そのころ、弁之助はある寺の僧にあずけられている身であった。

母にゆかりの寺だという。

弁之助が有馬と勝負をするときいた僧はおどろき、有馬の宿へ出向いて、弁之助が子供であることをうちあけ、試合をやめてくれと頼んだ。

「子供相手に勝負をする気はないが、こちらの面目もある。明日、見物人の前で貴僧が謝罪する。これで、どうか」

僧は承知してもどつたが、そうと知った弁之助はおさまらない。

つぎの日、矢来のなかで対峙するや、僧が謝罪の言葉をいわぬうちに六尺棒で打ってかかった。

有馬も抜き打ちに斬りつけたが、弁之助は有馬の隙を見て棒を捨てて組みついた。有馬のからだを高々とかかえあげ、地面に投げ落とした。

気絶した有馬を六尺棒で滅多打ちし、殺してしまったという。

それからまもなく、弁之助は寺を去って武者修行にでかけたと『丹治峰均筆記』は結末をつける。

『二天記』や『五輪書』では有馬喜兵衛と「勝負」したとしているが、『丹治峰均筆記』のいうとおりであれば、これは「勝負」とはいえない。

だまし討ちである。

有馬喜兵衛は弁之助と「勝負」をするつもりで竹矢来のなかに身を入れたのではないからだ。

そのとき、喜兵衛の頭のなかにあったのはつぎのような光景である。

—— 弁之助の代理として、僧が喜兵衛に、謝罪の言葉をのべる。貴殿の勝負の誘いにたいして弁之助が応じたのは、幼少ゆえの気の迷いである、本気ではないのだから取り消させていただく、と。

喜兵衛は対応の言葉を用意している。いちど約束した勝負の取消しに应じるのは剣士として面目を失うことだが、かんがえてみればそれは大人を相手とした場合である。弁之助まだ子供である、貴僧の謝罪の言葉と執り成しもあることゆえ、このたびの勝負の約束は

なかったこととする、と。

矢来のまわりの観衆は期待はずれの失望の声をあげるが、有馬喜兵衛の沈着で見識のある対応を称賛するにやぶさかではない。去つてゆく喜兵衛の背に、勝負にはならなかったが、勝ち点の二分の1ぐらいはあげてもいいのではないかな――

こういう幻想の光景に浸つて、喜兵衛は酔っていた。

そこへ、弁之助の六尺棒が斬りこんできたのである。

避けられるはずがない。

だからこれは、弁之助のだまし討ちだ。

だまし討ちではあったが、これは当時の剣士の世界の常識であった。

だまし討ちが悪である、卑怯である、だまし討ちで勝利をあげた剣士は剣士の風上にも置けない、という雰囲気はない。

だまされるのが悪いのである。

だれでも相手にすると勝負の予告したら、子供が名のりでできた。子供は相手にしないというと逃げることになる。勝負をするつもりになったところに、子供の保護者だというお坊さんがあらわれ、勝負の約束を解消してくれという。

子供を叩き殺さずにすんだ、やれやれと思つてるところへ、坊さんに連れられて子供が出てきた。

坊さんが矢来のなか、子供は矢来の外で待つのだろうと思つていますが、子供も矢来のなかにはいつてくる。

なにか、おかしいぞ？

気づかなかつたのが喜兵衛の失態なのだ。殺されるのも無理もない。

だまし討ちだが、子供にだまされた喜兵衛もだめな剣士である、という解釈になるのが当時の雰囲気であった。

つまり、弁之助が故郷を去らねばならぬ必然性はない。すくなくとも、だまし討ちをやったことで評判が悪くなり、故郷に居られな

くなつたということではないはずだ。

ならば、弁之助が故郷を捨てたのは、なぜか？

父であった。

上泉武蔵守信綱にあこがれ、みずから信綱と名のついていた父は、息子弁之助のやりかたを許せなかつたのだ。

上泉信綱にたいする宮本無二斎のあこがれや尊敬、それは、剣技や剣士をとりまく世界の革新をめざすものであつた。

観る者に、あれこそが本当の武士なのだと感動させる剣技

命のやりとり、身動きならぬまで叩きつぶす——このような剣技から脱却する

宮本無二斎が「実用」という言葉を、現代のわれわれが使うのとおなじ意味で知っていたかどうかはわからない。知っていたと仮定して論をすすめると、「実用の剣技からの脱却」である。

では、実用の剣技から脱却して、どこへゆくのか？

無二斎にも明瞭には意識されていなかったのだろうが、忖度(そんた)くすれば、

武士が本物の武士らしく生きれば、その剣技はこのようになる
こういうものだ。

無二斎は、上泉信綱を、このような剣技を開拓した、あるいは、開拓しつつあつた剣士として尊敬し、あこがれていた。

無二斎は、おのれ一代ではとうてい完成しないと諦観していた。

だから、息子に託す夢は重く、大きかつたのだ。

息子は、父から託された夢の重さと大きさを知り、耐えがたい苦痛を感じていたのではなかつたらうか。

ここから、出ていってしまいたい！
意識下で切望していた。

世話になつている僧に、そのような無茶をするものではない、わたしは喜兵衛殿に手をつけて謝罪してやるから承知せよといわれ、その気になつた。

その気になつたのはうそではない。

これで父に歩み寄れるのではないかと、甘い気にさえ、なったかもしれない。

だが、僧とふたり、矢来のなかに足を入れた途端に甘い夢は消えた。

有馬喜兵衛はふんぞりかえっている。拙僧に免じて子供のいたずらを許していただきたいと懇願された筋書きをいいことに、勝ちほこっている。

いまなら、勝てる。勝てる相手が目の前にいるのに見逃せば、父はわしを、弱虫といって叱るのではないか

手前勝手な理屈——そういえばそのとおりだ。

敵の隙、油断をみつけたら打ちこんでゆけとは、ひごろ父からたたきこまれていた剣技の初歩だ。

弁之助は打ちこんだ。

有馬喜兵衛が倒れ、たちあがらないのは弁之助にとっては意外であつた。

たちあがれぬ敵を、どうするか、これについて、父は息子に教えていかなかった。

いいかえれば、弁之助は敵をたたきふせる術は知ってはいたが、勝負をきりあげる知恵を知らなかった。

敵をたたきふせる術よりも、勝負をきりあげる知恵のほうが高度であり、会得するのは困難だろう。

播磨国に悲劇がおこつた。

父の無二斎と子の弁之助の対立、衝突である。

弁之助に、有馬喜兵衛という一人前の剣士をたたきふせ、殺した実があるのが衝突を陰惨なものにした。

父は絶望した。

剣技革新の奮闘に息子は理解をしめし、継承してくれると思つていたのが、じつは錯覚だったのだ。

「息子に馬も買ってくれぬ親を、親と思えるものか！」

父がいちばん嫌がると知ってなげつけた言葉である。

「武蔵守信綱が、どうしたというんだ。神さまかなにかのように崇めたてまつってはいても、つまりは武田信玄に屈伏した、弱いだけが取柄の田舎ざむらいにすぎん！」

父上よ、このあたりで夢から醒めてくだされよと、いささかの感傷をこめて投げつけた息子の言葉だ。

二天一流の流祖の宮本武蔵玄信、弁之助といった少年時代が播磨の、どこで経過したのか、くわしいところがわからない。

武蔵自身がくわしく書きのこさなかったこともあり、後年になって、この地である、いや、あちらであるとさまざまの説が多く、整理するさえ困難を感じる。

手に入れられたかぎりの知識の範囲でいうならば、播磨の印南郡すなわち現在の高砂市の米田で生まれ、佐用郡の平福でそだったという折衷的な説に親近感をもつ。

(第 2 章 終)

十六歳の年だと弁之助みずから書いているから、慶長四年（一五九九）であった。この年に弁之助は但馬の兵法者の秋山という者と勝負をして、勝った。姓が秋山だったとわかるだけで、名も通称もわからない。

弁之助が『五輪書』で、秋山は「強力の兵法者」だったと書いている。これは注目に値する。

なぜ、かれは、秋山が「強力の兵法者」だったとわざわざ書いたのか？

生涯に六十余度の試合をしたとかれは書いているが、相手の名がしめされるのは有馬喜兵衛と秋山、この二名だけである。『五輪書』の本文ではなくて序文だから全員の名は書けない、最初の有馬と二回目の秋山だけ書いたということかもしれないが、なぜ、秋山にだけ「強力」の表現をつけたのか、不審はこのころ。

理由がなければならない場面ではないが、気にかかってならない。有馬喜兵衛が箸にも棒にもかからぬ弱い剣士だとは思われないのだから。

最初の相手の有馬喜兵衛の強弱はいわないのに、二番目の秋山某については「強力」と表現した。

最初と二番目との相違が、弁之助には強烈に意識されている。この点をかんがえることによって、疑問は解けるはずだ。

おそらく、こういう次第であったのだ。

有馬は向こうからやってきた相手であったが、秋山は弁之助が自分で選んだ相手であった。ここに答えがあるはずだ。

何人かの剣士に見当をつけ、剣技の優劣を比較検討し、いちばん強いと判断したのが秋山であった。もちろん、日本全国を探しまわり、最強の剣士と見込んだのが秋山だったということではない。

秋山という「強力の兵法者」に、弁之助はどのようにして出会ったのか。

『五輪書』でも『二天記』でも、その間の事情はあきらかにされていらない。推測のほかにはないわけだが、おそらくは、つぎのような経過であったのではなからうか。

弁之助は故郷を出た。

ものごころついたときからはなしをきき、あこがれてきた武者修行に足をふみ入れたのである。

弁之助の足は播磨から但馬へむかった——わけではない。

かれを見送ったのは、おそらく、母にゆかりがあるという寺の僧であつたらう。

僧は弁之助の父、つまり宮本無二齋信綱にたいしてはばかるところがある。だから、ひとの目をおそれる、さびしい訣別であつたらう。

「生まれた地で送るも、他郷で送るも、一生は一生、かわりはない」「いざとなると寂しいにちがいないと思つていたが、和尚、そうでもないよ」

「その気の強さがあるかぎりには、愚僧も案じずにすむ」

案じはせぬといった、その口の裏で、ともかくもあと半年は手元において、せめては『庭訓往来』をおわりまで読ませてやりたかつたと愚痴が出る。

「学問はむだにはならぬ。寸暇を惜しんで書を読めよ」

まだ目の前にいる弁之助に、大声でよびかけるのは惜別の場の特別な感情である。

「和尚。われながら不思議でならんが、書物だけはいくら読んでも飽きがこぬ。目が腐るほど書を読めたらどんなに幸せかと思うぐら이다よ」

「その気持ち、わすれるな」

ところで、和尚がたずねる、とりあえずめざすのは、どこであるかと。

意外なことをたずねられたものだという風情で、弁之助はこたえ

る。

「どこへといって、和尚よ。武者修行というものはまずは都へゆくもの、そうではないのかな」

「都へ……なるほど」

和尚は、「都へ」といった弁之助の言葉から、およそのところを察した。

「吉岡憲法のことを、知っておるのだな」

弁之助は、ちよこんとうなずいた。

「勝負をいどむつもりか」

弁之助はまた首を縦にふって、肯定の合図をかえす。

和尚は熱い唾をのみこみ、氣勢をととのえてから、

「やめておけ」

「わしには勝てぬ——からか」

「おまえには、勝てぬ。勝てぬぐらいはかまわぬが、命をなくす。命をなくすとわかっておって勝負するのは、おろかだ」

和尚の「おろか」の言葉に背をおされたかのように、弁之助はあきらんだ。ふりかえりはしなかった。

弁之助は播磨から京都をめざす。和尚が凶星をさしたように、吉岡憲法と立ち会うつもり、いや、立ち会って勝つつもりで京都をめざす。

だが、弁之助の足はまっすぐに京都にむかわなかった。ゆく先々に剣士があらわれるのである。

「有馬喜兵衛をだまし討ちした弁之助は、おまえだな」

弁之助の無言は肯定のしるしとしてうけとられ、

「おまえと勝負をしたい！」

挑戦状をたたきつけられる。

村の入口や渡船の待合など、ひとの目のあるところをえらんで挑戦する剣士もいる。こういう場所ならば弁之助が逃げられないはずだと計算している。

弁之助は、逃げる。

「卑怯者め！」

「ただの子供だ。有馬をたたきつぶしたというのは、なにかのまじがいだ。あんなやつに有馬を負かせられるはずがない」

罵倒を背にうけて、弁之助は逃げる。

剣士から身をかわしてすすむうちに、東へすすむはずの弁之助の足は北へむいてしまつて、但馬にふみこんでいた。剣士の数が多い山陽道筋から、数の少ない山陰路へ迂回させられたということでもある。

逃げてばかりは、おられぬ

有馬喜兵衛をたたきふせ、殺したのはなんの自信にもなっていない。勝った実感がないのだ。

先方が挑戦してくるのをうけるのではなく——有馬とおなじようにはなく——自分で選んだ相手と勝負をして、勝つ。これをもつて、剣士としてのわが生涯の第一歩にしようとかんがえた。

京都で吉岡憲法と立ち会うには、確実な記憶にうらづけられた一勝が必要である。それも、強い剣士と勝負して勝った記憶でなければならぬ。有馬に勝った実感は希薄だから京都では役にたたない。

このあたりに、強い剣士が居るものだろうか

勝負を挑む相手をさがすが、これほど難しいものとは思つてもみなかった。

いかにも強そうにしている剣士が、弁之助の目から見ると、はなしにならない弱い剣士であるとかわかつてしまう。これが意外であった。但馬だけのことではないだろう。

父の教えは、本物であったのだなあ。さすがに信綱と名のつただけのことはあつたのだ！

ふるさとに飛んでもどり、父に感謝の言葉を述べている場面を想像して、弁之助は苦笑する。

苦笑して気分がほがらかになったとき、目の前にあらわれたのが秋山であつたはずだ。

これは強そうだ

弁之助は「播磨からきた、宮本弁之助」と名のりをあげ、勝負をもうしこんだ。

「まるで子供だが、立ち合いをやりたいというのは本気か？」

「疑うのは、無礼だ」

秋山はすぐに謝罪した。弁之助は秋山の率直な態度に好感をいだいた。

いますぐ、この場で勝負をすることが視線の交差でできた。

「見物をあつめぬ、証人を頼みもせず、かまわぬか？」

秋山の問いは奇妙である。

秋山は自分が勝つときめてかかっている。負けるのは弁之助だときめてかかり、負けるはずの弁之助に「見物人や証人がいなくて、いいのか」と問うところが奇妙なのである。見物人や証人が欲しいのは勝者であり、敗者は証人などは必要としない。

「わしが、あんたに勝つ。それを、わしひとりが覚えていればいい」
頭をひねって出した言葉ではない。問われて、咄嗟に出てきた言葉だ。

葉だ。

不意に口をついて出てきたこの言葉を、弁之助はわれながら気に入った。

証人は要らない。

秋山に勝った実感と記憶を大切に京都にのりこみ、吉岡と立ち会うときのちからにする。だから証人は要らない。

背中にかついでいた袋竹刀を、弁之助はおろした。

秋山は目を見開いて「ほほお！」といい、「もたせてくれ」といい、「いやならば、かまわんぞ」と付け足した。

弁之助は竹刀の刀身をつかみ、柄を秋山のほうにむけて、わたし

た。
秋山の目がぎよろりと光った。

こんなことをして、危険だとは知らんのかな？

柄をにぎると同時に秋山が打ちこめば、ふせぐひまもなく、弁之助の頭は割れてしまふだろう。剣士を自任するものが、やることではない。

秋山の疑問の視線の意味は、もちろん弁之助にはわかっている。強敵として、わしが選んだ剣士である。だまし打ちはやらぬはず。だまし打ちをやるなら、わしの見込みちがいだ。たたきふせられ、死んでしまえばいい

「あなたは、その……なんというのかな……」

「袋竹刀、わしの父の工夫だ」

上泉武蔵守の工夫だとはいわなかった。

秋山が武蔵守の名を知らぬはずはない。ここで武蔵守の名をもちだすと、秋山を精神的におしつぶす策略だと思われるかもしれない。それは避けたかった。

「あんたはその袋竹刀、わしはこの……」

秋山はあらくせりの、長くはない木刀をにぎり、素振りをくれて、「木刀で」

さーっと、離れる。

弁之助には、すぐに秋山の剣技の質がわかった。流派の名はわからぬが、几帳面に型をまもうとする姿勢。おなじ流派のなかでは師匠の代理をつとめられる腕前だが、他流と勝負をした経験はほとんどない、そういった剣士だ。

わしの誘いに、なぜ、のってきたのだろう。わしが子供だから、簡単に勝てるというわけでもなさそうだが……

秋山が計画している第一撃、それは突きだとわかる。突きを第一撃として弁之助の体勢をくずし、第二撃で仕留める作戦だ。

これは新当流ではないな

第一撃の突きで弁之助の体勢をくずそうとしている秋山にたいする最も有効な反撃、それは突きをうけてもくずされないことだ。

弁之助は下段にかまえた。

つーっ――

秋山が突いてきた。

弁之助は下から上に竹刀をふりあげ、木刀を払いのけ、そのまま切っ先で秋山の喉を攻めた。

喉はずれたが、顎を直撃した。

秋山の唇が割れ、血が滲んだ。

「突ききれなかった！」

秋山は木刀の先を地に付けて敗北をみとめた。唇の血をぬぐう様子に、陰惨な感じはない。快活でさえ、ある。

袋竹刀はおもしろい道具だと、秋山はいった。自分でも工夫して作ってみたいから、これを手本にくれぬか、今日の勝負の記念にもなるともいった。

ここで黙っているのはよくないと気づいたので、弁之助は白状した。この袋竹刀をつくったのはわしの親父だが、そもそも発明工夫したのは上泉武蔵守信綱さまだと。

「武蔵守……名をきいただけだ」

「わしが武蔵守さまを手本にしているというと、秋山さん、あんたは笑うかな。子供がなにをいうかと」

「だれが笑うものか」と秋山はいい、「武蔵守をめざす剣士なら、負けても恥ずかしくはないわけだな」と、またまた朗らかに笑ってみせた。

今日の勝負は宮本弁之助が勝った、そのように世間に吹聴するが、かまわないかと念をおすと、秋山はこたえた。

「わしも、いうぞ。上泉武蔵守信綱さまをめざす子供の剣士に、手もなくやられた。場所は但馬国であると、さようにな」

「子供々々とばかり、いつてくれるなよ。ほんものの子供になったような気がして、恥ずかしい」

「すまん。もう、いわぬ。ところで……」

言葉が途切れ、秋山の表情が緊張した。

「勝っても殺さぬ、それがあんたの剣技だ。世間には、殺したいか

ら勝負をする剣士もいる。そういう剣士とも勝負せぬわけにゆかぬから、わしの命がいつまでつづくやら、わかったものではない。命のあるうちに、あなたが武蔵守に肩をならべたところを見たいものだな！」

もう逢えないだろうから、そのとき、なにか、合図をしてくれよという。

「姓は宮本、名は武蔵という剣士の名をおききになったら、それは、あの日の但馬の、あの子供の剣士なのだと……」

「その日を待っておるぞ、宮本武蔵！」

秋山という剣士と但馬で勝負をして勝ったのが十六歳、それから二十一歳になるまで、あしかけ六年の弁之助の足取りは、よく、いや、ほとんどわからない。

二十一歳の年に京都へのぼったと『五輪書』に書いている。

いうにいけない苦悩があったはずだが、その苦悩さえ、京都に行きたい、吉岡憲法と勝負をしたいという熱望を断念させなかった。

六年の年月のうち、宮本弁之助の身におこったことは推測するしかない。

はつきりいえるのは、但馬で秋山をやぶったときよりもはるかに強い剣技を身につけていたということだ。そうでなければ、かれは強力な剣士の刃の下で命をおわっていたはずなのだから。

弁之助の十六歳から二十一歳までの六年は慶長四年（一五九九）から九年までの、激動の六年だ。

武蔵が但馬で秋山と勝負をした年に、豊臣秀吉は伏見で生涯をおえた。

豊臣秀吉と宮本武蔵こと弁之助——ふたりのあいだにはなんの関係もない。生きた場にも天と地の隔たりがある。

だが、秀吉がそのことをやらなかったならば、武蔵の剣の術や理論は、いま、われわれが見るようになかたちにはならなかった。

いや、武蔵が剣士として生きられたかどうか、それさえ、わからない。
くなる。

秀吉のやった そのこと というのは刀狩りの断行と身分法の制定である。

関白になった天正十三年（一五八五）のころから、秀吉は武士ではない身分——町人・農民・商人・宗教者など——から武器をとりあげる暴力的な政策、刀狩りに着手した。

「世のなかは平和になった。武器は不要である。没収した武器は錆漬して方広寺（ほうこうじ）の大佛殿の釘や鋸（かすがい）に再利用する。つまりは子々孫々までの功德になる」

こういつて武器没収を理由づけたとされる。

武器をとりあげられた者は武士ではなくなり、武器をとりあげられなかった者が武士としての身分を承認された。つまり兵農分離ということだ。

武士としての身分を承認された者が、承認されなかった者の武器を強制的に没収する光景が現出したわけだが、この場合、武士と非・武士を区別する基準はどういうものであったのか、これが問題になる。

秀吉は武器を没収しようとする、農民は没収されまいと反抗する。武器を所有する境遇は所有しない境遇よりも有利、強力、安全であるからだ。

武士と非・武士を分ける基準、これは明快なようであって、じつは曖昧きわまることであつた。

そもそも、武士という身分が曖昧なのだ。

平安時代の公家（貴族）階級の末端、麓の階層、これが京都から農村部へ生活の拠点をうつし、根を生やし、農民を支配して農業経営をおこなう新しい階級を形成した。

これを武士というが、武士の世界の階級差ははげしく、複雑でありながら、農業に根を生やしている点では上も下も変わりがない。律令や格式といった明文法が機能しえない世界だから、ますます複

雑であった。

秀吉が刀狩りを決意したきっかけは天正十五年、検地反対からはじまった肥後の大規模な一揆であった。

肥後の一揆の主体は国人(こじん)とも国侍(くごし)ともよばれる階層と百姓である。国人、国侍だけならば戦争を仕掛けて殲滅すればすむが、百姓が加わって強力になっていたから、武力だけでは解決しない。百姓を敵にまわせれば農作業は停止され、収穫はゼロになる。

武士と非・武士の境界ははっきりとはしない。あえていえば、肥後一揆の主体となった二勢力、つまり国人とか国侍といわれる階級と、農業の実質的な推進者の百姓のあいだに境界線が引かれるとかがえればいい。

もちろん、境界線を引くのが可能だといっても、武士の下位の身分に固定され、武器をとりあげられる百姓は抵抗する。

そこで秀吉は、武士と非・武士の差別を現実のものとする政令を布告して刀狩りを補強することにした。すなわち身分法の制定である。

身分法の制定や施行の詳細はわかっていないのだが、天正十八年に小田原の北条氏を征伐して全国統一の展望が出てきたとき、百姓から武家奉公人・町人・職人に転じることを禁止させた。これが身分法制定の実態であったと思われる。

百姓が奉公人——これは武士だ——や町人・職人になろうとするのを阻止する者、それが武士である。秀吉によって明確に身分を確定された、いわば新しい武士である。源頼朝や平清盛、織田信長でさえ知らない新しい武士の階級が、こうして、秀吉によって形成された。

百人、二百人の農民によって運営される一個の農村を思い浮かべていただきたい。

農民だけによって自治的に運営されることはない。かならず、五

人、ないし十人の武士が駐在していて、領主の威力を背景にして農民を威圧し、督励して農作業をさせている。武士の威圧、督励のちからのしるしが刀だ。威圧、督励される立場の農民は刀を持つのをゆるされない。

秀吉以前、いいかえれば刀狩り以前では武器というと大砲・鉄砲・槍が主体であり、刀は大小によらず、武器としては二の次の存在であった。

刀狩りのあと、刀は戦争の武器としてではなく、農民を威圧し、督励する武士のちからのしるしとなった。刀は性質を一変したのである。

刀は武器ではない。

もしも刀が武器であれば、農民を殺す機能を発揮しなければならぬ。だが、農民を殺す武器として刀をつかえば、武士はみずからの生存を保証してくれる農民をうしなってしまう。

刀は農民を殺せるけれども、殺さない。

農民を殺す武器としてつかえない刀は武士の飾りにすぎないかのように見えるが、そうではない。

武士のなかに、悪い武士が登場する。私欲にまかせて農民を虐待し、農村を痛め、結果的には武士の総体を傷つける。

武士は、悪い武士を肅清してみずからを守らなければならぬ。

そのとき、もつとも効力を発揮するのは刀だ。

刀は武士にとって、自浄のための装置なのである。

刀がなければ、武士は武士でなくなってしまう。刀狩り以前の状況に連れもどされ、刀を差す農民とともに農村を営まなければならぬ。

武士が武士であるために、刀は役に立つ。

ならば、刀を正しくつかう技術や理論というものが必要になってくるはずだ。

宮本弁之助は、秀吉によって性質を一変させられた武士と刀の関係のなかで生きてゆくのである。

秀吉が亡くなったとき、弁之助は十五歳であった。

(第3章 終)

第4章 「歌の命」

慶長四年には徳川家康と石田三成の対立が決定的になり、翌五年、ついに美濃の関ヶ原で両軍が衝突した。

『二天記』には、関ヶ原合戦で弁之助は「抜群のはたらきをした。それについては諸軍士が知っている」と書かれている。

だが、しかし、弁之助の戦功を知っていると諸軍士の名が書かれていないので、弁之助の戦功を追跡して証明する手がかりがない。

弁之助が関ヶ原合戦に参加したとすると、どのようなかたちで参加したのだろうか？

合戦が関ヶ原でだけおこなわれたとみるのはまちがいである。関ヶ原からはるかに遠い丹後の田辺（舞鶴）でも、はげしい合戦がおこなわれた。

上杉景勝を征伐する——徳川家康がこういって大坂から会津にむかって大軍をうごかした。慶長五年（一六〇〇）六月である。

丹後の田辺の城主の細川忠興は長男の忠隆とともに軍勢をつれて家康にしたがった。忠隆は忠興と明智光秀の娘、すなわちお玉ガラシヤの子である。ガラシヤは大坂の細川屋敷で留守をまもることになっている。

田辺の留守は忠興の父の幽斎（ゆさい）がまもることになった。忠興の弟の幸隆も父をたすける。

幽斎は六十七歳、歴戦の勇士だが高齢はかくせない。細川家の軍勢の主体は忠興とともに関東へ出征してしまい、幽斎とともにある將兵はわずか五百である。宮津や峰山の支城の勢を田辺の舞鶴城にあつめたが、それでも五百にしかならなかった。

西軍の將は石田三成である。

東軍と対決する戦場は伊勢が美濃になるはずだ。伊勢が美濃の西軍が出動していったあと、田辺の舞鶴城が東軍の手にはうばわれれば挟撃されてしまう。石田としては、開戦のまえに是が非でも舞鶴城を占領しておく必要があった。

七月十七日に忠興の妻のガラシャが大坂城で自殺したとの悲報が、十八日に田辺につたえられた。石田は徳川に味方する大名の家族を人質にしようとしたが、ガラシャは人質になるのを拒否し、自殺したのである。

どうあつても舞鶴城は開戦のまえに占領する！

舞鶴城を占領する石田の決意の堅いことがあきらかになった。

石田は舞鶴城攻撃の大將に小野木公郷を任命した。小野木のほかには、播磨の武士の別所豊後守、山崎左馬助、源仁法印、谷出羽守、生駒左近大夫、川勝右兵衛、藤掛三河守、石川備後守、高田河内守、小出大和守、杉原伯耆守など、あわせて一万五千余人である。

七月二十日、小野木公郷は山をこえ峯をつたい、国境をやぶつて攻めてきた。田辺の舞鶴城は海城である、陸から激しく攻めよせば城兵は海に逃げるしかないと読んで、海側はあけてある。

城に近づくと、奇手は東南西の三手にわかれ、鉄砲をうちかけて住民を追い払ってから民家に火をかけ、城を裸にした。こうしておけば、城兵が撃つて出てきて隠れる場所がないのである。

火をあげてくずれる民家に足軽隊が襲いかつて破壊し、攻城のための道をつくる。

「ぶっこわせ、撃ちこめ！」

小野木の足軽隊のなかから、甲高い声がきこえる。宮本弁之助の声だ。播磨の別所豊後守か、但馬の杉原伯耆守か、どちらかの手づるで舞鶴城包囲勢の足軽隊にもぐりこんだようだ。

こういう場合、もっとも望ましいのは陣借(じんがり)である。馬から軍装から従者から、すべてを自前の費用でとるのえて、客分として合戦に参加するのが陣借だ。戦功をあげればそれなりの褒賞をもらうか、臣下として採用される道がひらけることもある。

だが、このころの宮本弁之助にはできない相談である。馬もない、馬を買うカネもない。

ないないづくしである。あえていうと、有馬喜兵衛をたたき殺し、秋山某と勝負をして勝った剣技の実績があるが、こういうものは本

当の合戦では高く評価されないものだ。仕方がない、格別の鍛練も要らない足軽鉄砲隊にもぐりこみ、いま、丹後の田辺の舞鶴城を攻めている。

くりかえすけれども、宮本弁之助は一隊の将として城攻めをやっているのではない。足軽鉄砲隊の一員として、わいわいと騒ぎながら矢を飛ばし、鉄砲を撃つたり、民家を壊したりしているにすぎない。

だが、そこは弁之助である。なんの目当てもなしに舞鶴城攻めの軍隊にもぐりこんだわけではない。

はつきりとした目標があった。目標があったのだから、目標達成にこぎつける計算をしていたといってもいいわけである。

宮本弁之助の目標、計算というのは、なんであったか。

「細川幽齋が……！」

細川幽齋が田辺の舞鶴城の留守番をすると知って、弁之助はおどりがあつて悦んだ。

いや、最初に耳にしたときには、なんのことが、わからなかったのが真相だ。

石田三成が丹後の田辺の城をみのがすはずはない。その田辺の城は鶴が羽をひろげたかたちをしているから舞鶴城の別名があり、城主は細川忠興、忠興の父で隠居の身分の幽齋が留守をすることになるが、苦しいだろうなといった噂ばなしを耳にして、

「細川幽齋……？」

どこかできいた名だが、はて、なんだろうかなと思つたのである。なんだろう、なんだったかなと記憶の糸をたどって行って、

「あ、ととだ！」

父の信綱が「幽齋はまだ生きておる」といった、あの深刻な言ひ方の印象が、いまは記憶をよびさますちからになった。

あるとき父は、剣技にかんする塚原ト伝の言葉を耳にした経験があつて、まだ生きている重要人物のひとりとして幽齋の名をあげた

のだ。ト伝が主で幽斎が従だ。

播磨の生家を出奔して但馬や丹波丹後をうろついて——みずから欲してうろついていたのではないが——京都にはいるチャンスがしているうち、細川幽斎という大名の特異な存在の意味に気づいた。

京都にはいるだけなら簡単だが、吉岡憲法と勝負して勝利をあげるまでの段取りをするには手間もカネもかかる。カネを調達する目的もあって鉄砲隊にもぐりこんだ。

ト伝も大切だが、幽斎という大名もなかなかのもの、らしいな幽斎に逢っておけよといった父の言葉、父の気持ちの深さまではわからないにしても、無駄にしたくないと思って舞鶴城攻めの軍勢にもぐりこむ工夫をした。足軽鉄砲隊を軽蔑しないかぎり、もぐりこむのに支障はなかった。

この城のなかに、細川幽斎がいるんだなあ！
父が生きていれば、「とよ。幽斎がここで籠城しているよ。急いで来れば間に合うのじゃないかな」と、誘ってやりたい。だが、その父はもう死んでしまったという噂だ。

- 5 0 -

七月二十二日から攻撃がはじまった。

大将の小野木公郷は丹波の福知山城主、三万石。城の西、海にちかい鷲取という小山に陣をとって西の搦手に攻撃をくわえ、かつ全軍を指揮する。

小野木の鉄砲隊の頭は毛の羽織を着て威儀をただしているが、弁之助のようなひらの隊員は全員に一樣に支給される御貸具足だ。鉄か練革の桶側胴、練革の草摺、脚には脚布に裸足で草履。頭の防禦には鍛鉄を剥ぎあわせた三角山形の陣笠。

銃撃戦はほぼ互角だが、多勢に無勢、城側がすこしずつ劣勢になつてきた。

「橋をはずせ。町家を焼け！」

幽斎は命じた。焦土作戦である。

攻城軍は城の東南、二ツ橋のちかくに櫓をくみあげ、塀より高い櫓の上から石火矢をうちこんでくる。照準が合っているから石火矢の命中率が高い。城のあちこちに火の手があがり、鉄砲玉や矢から身を隠すのがむずかしくなった。

籠城の家来の家族にたいして幽斎は、「はやく、安全のところに避難せよ」と指示していた。だが、指示をはねかえし、夫や息子とともに籠城して闘っている家族もすくなくない。

本丸の屋根には粘土が塗ってあるからやすやすとは燃えないが、石火矢を打ちこまれて燃え上がる建物がふえるにつれて、家族の安全がむずかしくなってきた。

「そうだ、櫓(やぐら)だ！」

弁之助は叫んだ。

叫んですぐに、走りだした。

櫓にのぼって塀ごしに城のなかを覗き、幽斎の姿を一目でも見ておこうとかがえた。夜になっているが、昼よりは見通しが利くはずだ。

落城は近い。幽斎は城とともに死ぬ覚悟をきめているはずだ。となると、わしは幽斎の生きた姿を観られぬことになる

弁之助のうしろから、

「止まれ！」

ひきとめる声がして、ばたばたと駆けだした音もする。鉄砲隊の小頭だ。

弁之助のやろうとしているのは規律違反、脱走にひとしい。隊士の規律違反を止められなければ、小頭は合戦のあとで責任を追及されかねない。

走る弁之助は、

つかまって、たまるか

頭のなかで、「幽斎」という言葉がぐんぐんと膨れあがる。「幽斎」に憑(よ)かれてしまったようだ。

憑かれたから嬉しい。ここで小頭に追いつかれると、せっかく憑かれた「幽斎」との縁が切れてしまう。

そんなことが、できるものか！

走って走って、もうすこしで櫓の下に着くというとき、城と寄手の双方からはげしい射撃がかわされた。

耳元を弾丸がかすめるのがわかる。

当たっても仕方はないが、どうか、生きている幽斎の姿を一目でも見て、そのあとで当たってもらいたいものだ

なにか、異変がおこったようである。

うしろから迫ってくる足音がしない。

ひっとすると……

こわごわ、ふりかえった。

小頭がたおれている。

射撃はつづいている。

たおおれた小頭の口から、「止まれ、にげるな」と言葉にならない言葉が洩れている。

射撃がしずかになった。

いまのうちだ

だれも見えていないのをたしかめて、櫓の梯子に手をかけ、足をかけ、のぼった。

思っていたよりも高い。城のなかの手にとるように見える。

しかし、うごいているものはない。籠城兵は、焼けのこった建物の陰に身を隠してつぎの射撃にそなえているようであった。

ともかくも櫓にのぼったのをよしとして弁之助は自陣にもどった。戦死した小頭のかわりが任命され、明日の総攻撃にそなえてあれこれと指示をしていた。

新任の小頭の指示を受けながら弁之助は、痛恨の想いにしずんでいる。小頭の言葉のはしばしから、明日は総攻撃、そして落城まぢがいなしと戦況を見ているのがわかるのだ。ととよ。せっかくこの場にいるのに、幽斎の生きた姿、生の声をきくのは無理になった

ようだ。口惜しいなあ

幽斎の言葉を耳にすれば、いや、遠くからでもいい、幽斎の姿を見るだけで塚原ト伝に一歩も二歩も近づけるのに、断念しなければならんようだ。

あけて七月二十七日、舞鶴城の大手門にあたる杉の馬場口のあたりに異様な緊張がみなぎっている。

「ちよくし……」

「ちよくし……」

ちよくしとはなんのことだ。ちよくし、ちよくし……ああっ！

ちよくし——勅使である、天皇から派遣される使者である。

京都から丹後の田辺へ勅使をおくつたのは八条宮智仁(とひと)親王だそうだ。勅使を天皇の使者と狭義に限定すれば、八条宮の使者を勅使というのはまちがっているかもしれない。だが、八条宮は皇族なのだから、広い意味で勅使といってまちがいともいえない。

ともかくも七月二十七日から、田辺の舞鶴城は勅使をめぐる騒ぎにあけられることになった。

合戦の真つ最中の田辺に勅使なんていうたいそうなものがあらわれる、その意味が弁之助にはわからない。

わからんのはわしだけかと悩んでいたが、鉄砲隊の全員がなにがなにやらわからずにいると知って、弁之助の不安はゆるんだ。

智仁親王の勅使は大石甚助といった。幽斎にむかえられ、使者は城内にはいつて馳走をうけた。

「親王さまには、休戦なされとのご意志であります」

親王の勧告にしたがって幽斎が休戦の意志をしめせば、大石は小野木公郷に對面して休戦への手続きをすめる。そういう予定になっていたようだ。

「お言葉ながら、休戦の儀はおことわりもうしあげます」

幽斎は親王の勧告を拒絶した。

親王の使者が幽斎に休戦を勧告したことは小野木公郷にもつたえ

られた。

小野木はこの日から銃撃を停止した。城の包囲網をいつそう強固にして食料と水の搬入をゆるさず、城兵を干しあげる作戦にきりかえたようである。

休戦になるのか、困ったものだ」と弁之助はかんがえている。

京都へ行って吉岡憲法と勝負して勝ち、剣士として名をあげる――

――当面の計画だ。

京都へ行って、すぐに勝負ができるとは思っていない。数カ月で実現するか、数年かかるか、見当がつかない。

機会を待つにはカネが要る、憲法に出会うには手づるも必要だ。

ここで休戦になっても、小野木公郷の鉄砲隊の一員になっ
ているはずだから暮らしはなりたつ。飢えることはない。

だが、鉄砲隊では剣士として名をあげる機会はやってこない。機
会がやってきたとしても、鉄砲隊にやとわれているのが支障となっ
て機会をのがしてしまうおそれもある。

智仁親王の使者があらわれてから、舞鶴城を鉄砲で攻めることは
なくなった。弁之助はひまをもてあましている。

幽斎は、なぜ、親王さまの休戦勧告をうけられないのか？

わしにはわからぬ、深く広い世界がある。ひまがあるのをいいこ
とに、まだ知らぬ深く広い世界のことを知っておくのは悪くないと
弁之助はかんがえる。

父上よ。どうだろうね？

父の声が聞こえてきた。聞こえるには聞こえるが、何をいつてる
のか、咄嗟には意味がつかめない。

歌のことが、おまえにわかるうとは思われぬが、まあ、やってみ
るよ。やらぬよりは、まし

歌のこと………？

大石嘉助によつてつたえられた智仁親王の休戦勧告を、幽斎は拒

絶した。だが、使者の大石嘉助は手ぶらで京都にもどったわけではない。

幽斎から大石を通じて、古今相伝(きんでんじゆ)の箱、証明状、それに幽斎の歌の一首がそえられ、天皇に献上されたのである。

コキンデンジユ？ それはいつたい、なんだ？

銃撃戦がないのをいいことに、

「知っておるか、古今相伝とか古今伝授というものを？」

たずねてまわる。

足軽隊のなかには、いわゆる物知りとよばれるひとが少なくない。武士としては一人前とはいえないが、なまじの武士よりは知識の広いひとがいる。

「『古今和歌集』という名を、きいたことがあるか」

「名はきいたことがある、それだけ」

『古今和歌集』に採用されているあれこれの歌について特別な解釈をほどこし、それを一代一人の秘伝でつたえてゆく。それが古今伝授というものだ——そうだ。

ならば、剣技の秘伝、相伝とおなじではないか。塚原ト伝の一ツ太刀といったようなものを、一代一人に相伝してゆくのか。

疑問をぶつつけると、そのひとは微笑して、

「剣技の秘伝といっしょにかんがえるのはまちがいだろうな」

「だが、いまうかがったところでは剣技の秘伝とかわらぬような……」

古今伝授には天皇がかかわっている、剣技にはそういうことはあるまいと、そのひとは弁之助の無知をたしなめる口調だ。

「天皇が、かかわっているのか、歌の秘伝に！」

歌といえば天皇である。

古今伝授はながいあいだ皇室の外でつたえられていた。伝授を皇室にとりもどしたい智仁親王の熱望が幽斎にみとめられ、幽斎から親王へ伝授される手続きがはじまったばかりなのに、このたびの田

辺城の攻防戦——

「待ってください。ということは、細川幽齋が古今伝授をうけていると……」

「そのとおり。そのとおりだから、親王から使者が派遣されるとい
う、おおげさなことになった」

弁之助は混乱する。

雪が降った、女が男を思いだすといったような、生きるか死ぬかの剣技に比べれば遊びとしか思えない歌の秘伝を幽齋がうけている。ただそれだけで宮様の使者をひきよせるほどの権威を、幽齋がもっているというのが信じられない。

「先日、幽齋は親王の使者に、伝授の箱をわたしたとか、どうだとか、そんなふうなはなしをききました。箱のなかには秘伝の書がはいつている……？」

「箱のなかにはいつていたのでしような、伝授の書は」

「そうすると、いまはもう、伝授は親王さまのものであつて幽齋のものではない、ということに」

なるのではないかと思つて弁之助は声高にいつたのだが、「ちがうのだよ」と、そのひとはいう。

「伝授は秘伝である。ということは、書類がわたつただけでは伝授は完成しない、そういうこと」

「ははあ……」

弁之助には理解できない、理解しにくい領域にはいつてきたらしい。

「口伝(くでん)というものが、ある、らしいのだなあ」

口伝——弁之助にも覚えはある。

剣技の流派の祖は——塚原ト伝や武蔵守信綱がそうであつたかどうかは知らないが——見込んだ弟子の数人に伝授の書をわたすけれども、口伝をつたえるのはそのうちの、たったひとりだけである。

口伝をうけたひとりが正統、かつ唯一の後継者であるという神秘的な噂を。

「幽齋が……あの、この城にいる幽齋が……？」

「智仁親王のご使者に、伝授の書を入れた箱はわたしたが、口伝はつたえておらんですな」

なるほど、幽齋が親王を唯一正統の伝授予定者として認めていても、口伝をつたえなければ伝授は完成しないわけだ。

「古今伝授というものは、いま……」

弁之助が城の塀を見上げて溜め息をつくとき、そのひとは、

「さようです。古今伝授は、いまはまだ舞鶴城のなかに、幽齋の命とともにあるわけですよ」

伝授の箱にそえて贈った幽齋の歌というものが、だれいとうなく、城の外に洩れて出てきた。

いにしへも　いまもかはらぬ世の中に

こころの種をのこす　言の葉

「おのれは死んでも、歌にかけた執念は消えはせぬぞといったふうな、ものすごい歌ですよ、これは」

「殺せるものなら殺せ。わしを殺せば、古今伝授は途絶えてしまうのだぞと言外に脅している」

大石のつぎに前田主膳正茂勝がやってきて休戦を提案したが、幽齋はうけつけない。前田茂勝もやはり広い意味での勅使の立場でやってきたのだが、相手にされなかった。秀吉の五奉行のひとり、前田玄以の子が茂勝である。

九月十二日、正式な勅使がやってきた。三条大納言実条、中院中納言通勝、烏丸中将光広の三人である。後陽成天皇の天意を奉じている、正式な勅使だ。三勅使を前田茂勝が先導してきた。

小野木公郷は包囲の陣をあけて勅使をむかえ、平伏する。前田茂勝に先導されて三人の勅使が悠々と城門にむかう。

この日、小野木の鉄砲隊は作戦の予定はない。勅使一行を歓迎し、かつ警護する役目もなかったが、宮本弁之助はひとり、勅使一行に近いところに平伏の姿勢をとり、見あげていた。

京都からここまで、幽齋の歌のちからでひきよせられた勅使だ。

どんな感じがするものか、一行の姿をこの目で見ておきたい
三度目の勅使である。これで休戦になるという想いは戦場にみちあふれていた。

何カ月といった計算をしていたわけではないが、弁之助の感じとしては、もうすこし長く合戦していたかった。鉄砲隊士としてうける給料が少なくなる。これは嬉しいことではない。

だが、勅使というものを、それも、歌のちからによって京都から引きよせられた勅使を目の前で見ることはできたのは意外な収穫である。給料がやすくなる損をおぎなって、あまりある。

後陽成天皇の天意が勅使によって小野木公郷につたえられた。休戦の勸告よりは、指示あるいは命令にちかいたいというべき内容であった。

「幽齋は文武の達人、ことに大内(おおうち・皇室)では絶えた『古今和歌集』の秘奥(ひおく)をつたえ、帝王の師範であり、神道歌道における国師の立場にいる。いま幽齋が命をうしなえば、『古今和歌集』の秘奥を後世につたえることができなくなる。よって、すみやかに包囲を解くべし」

小野木は勅諭に伏するほかはなかった。

小野木の屈伏をうけ、勅使は城門をくぐって入城、幽齋に直面し、あらためて休戦を勸告した。

幽齋も休戦に同意した。

舞鶴城は小野木ではなく、前田茂勝にひきわたす。幽齋の身柄は前田茂勝の居城の丹波の龜山にうつされる、この二カ条を約束して休戦となった。

九月十八日に細川幽齋は舞鶴城を出て龜山にむかった。案内したのは前田茂勝である。

幽齋は前田茂勝の部隊に警護され、城門を出てゆく。宮本弁之助は歓送の隊列のひとりとして、幽齋をみおくった。はじめて幽齋の

姿を見たのである。

細川幽齋！

熱い想いが宮本弁之助のからだいっぱいにあふれた。

いま、目の前に細川幽齋がいることを、父に知らせてやりたいと思った。この幽齋が塚原卜伝の言葉に感動して、世間につたえた。それがまわりまわって播磨の宮本無二齋信綱の耳にはいり、無二齋から息子の弁之助につたえられたのだ。

幽齋のうしろに塚原卜伝の存在を感じながら、弁之助は隊列の一人として立ちつくしていた。

(第4章 終)

細川幽斎が田辺の舞鶴城を出て丹波の龜山へむかったのは九月十八日であった。舞鶴城を攻めたのは小野木公郷、幽斎はその公郷の居城の龜山城にあずけられるかたちになったのだ。

このときはまだ、関ヶ原合戦がおわったのも、したがって勝敗の帰趨も、田辺にはつたわっていない。だから小野木が勝者、敗者が幽斎ということになって小野木の龜山城へあずけられる。

宮本弁之助の目の前を通過してゆく幽斎の表情は、敗者であることを否定する威厳に満ちていた。いやいや、あるいはこのときすでに幽斎は、関ヶ原の合戦が東軍の大勝利になったのを密報によって知っていたのかもしれない。

弁之助はともかくも勝者の立場で幽斎を見送っているが、勝者敗者の別にかかわりなく、多人数のまえに姿をあらわすと、あたりが輝いてくる。そういう男が、まさにこれ、細川幽斎であるな！

うらやましい。

足利家の分家の細川家の生まれた幸運をいつまでも失わない男だと思えば張り合う気もなくなるが、

いや、家柄だけではない。あの男には歌がある。京都から勅使をひきよせるほどのちからの、歌がある

そう思うと、

わしにもできぬはずはない。やらぬままでは、後悔するぞ
神妙な気分になってくる。

十八日の夜を、幽斎は檜山であかし、つぎの十九日に龜山について。幽斎は本丸を座所とし、小野木公郷は二の丸へ。幽斎は敗者ではあるが、天皇からあずかった身柄でもあるから優遇しなければならぬ。

その十九日、関ヶ原合戦の様子が龜山城につたえられた。徳川家

康の東軍が圧勝し、石田三成の西軍は惨敗を喫したという。

「息子は……！」

思わず叫んだ幽斎の耳に、「越中守さまは大手柄をおあげになり、いまごろは近江の天津にお着きのはず」と飛報がつたえられる。

二十日の早朝、忠興は亀山の馬堀に到着して、かけつけた幽斎の迎えをうけた。幽斎を監視しているはずの小野木の立場は暗転して、死を覚悟して謹慎している。

「なにごともなく帰陣、めでたい！」

父のよびかけに、息子の忠興は返事もしない。抵抗もせずに舞鶴城をあけわたしたのを怒っているらしい。

「命が惜しくて開城したのではないぞ。三度までも勅使がお出でになり、休戦開城を勧告なされた。われ幽斎ならではのご処置であるぞ、おうけせぬけにはゆかぬ」

忠興は事情を了解し、涙をながした。

謹慎している小野木公郷が忠興の命令によって切腹させられることになった。そうとわかったとき、宮本弁之助は小野木の鉄砲隊から脱走する決心をした。

鉄砲隊の隊士などは忠興の憎悪の対象にはならんだろうが、もしも、がないではない。なにがなんでも勝者の側にいたいとも思わぬが、敗者の一員にかぞえられるのは御免をこうむる。

これまでにもらった給料は充分とはいえないが、脱走して京都へゆき、吉岡憲法と対決手づるをつかむまでの暮らしを支えるには足りる。

関ヶ原合戦が東軍の圧勝におわつたのは慶長五年（一六〇〇）の九月、その年の暮れには、宮本弁之助は京都にはいつていたと推定される。

京都の、どこに住まいをきめたのか、それがさっぱりわからない。わからないから、推測する。推測の材料はつぎの三点である。

吉岡憲法に接触する便利。

住居費が安価であること。

学問をする便利。

吉岡憲法と勝負をして勝つ野望は、いまにして思えば、播磨で父に稽古をつけてもらっているうちに発していた。

「塚原ト伝もない、上泉武蔵守信綱さまも亡きいま、剣技で名をあげているのは京都の吉岡憲法の一門だけである」

「応仁の乱がはじまってからというもの、京都では、武士といわず商人といわず、みんな刀を腰にさして自衛している。刀をさすだけでは頼りないから、剣技をならう。ならうとなれば吉岡憲法だ、ということになっておるのだそうだ」

門人がつめかけて隆盛になり、いよいよ高くなる吉岡憲法の名がまた門人をおつめるといふわけで、吉岡の剣技の名は高まる一方である。

父は、うらやましさを隠さずに、息子にいうのである。

「わしも、京都に出られさえすれば……」

父は、なぜ、京都に出てゆけなかったのかについて、息子の弁之助はたずねないことにしていた。

弁之助は京都に出たらすぐに、

「わしは吉岡と打ち合いをして、かならず勝つ！」

宣言する計画をたてていた。

氏も素性もわからぬ男が、栄誉も名もある吉岡一門と試合をするだけならまだしも、「かならず勝つ」と壮語しているのが滑稽であるというわけで、弁之助の名と顔は京都のなかで有名になるはずだ。それだけの準備をしておいて勝負をいどむためには、吉岡の暮らしの近くに住むのが効果があるはずだ。

——あの男は、まんざらでたらめをいっているのでもなさそうだが、わざわざ吉岡の近くに住まいをさだめたのだから、
——という効果が出るのを計算した。

第二の条件の安価の住居費——もう戦争はおわつたと判断した武士と商人は、あらそうようにして屋敷や店を新築している。武家屋

敷や商人の店が櫛比する地域では住居費が高くつく、弁之助の予算ではまかなえない。

安価がいいとはいっても、郊外でははなしにならない。

多くのひとの視線に身をさらして、

——あいつが、吉岡と闘うと宣言した宮本弁之助という命しらすだ。

そう認識させるには市内に住まなければだめである。

三番目の条件——学問をしやすい環境となれば寺院にちかい場をえらばざるをえない。

以上の三点を条件にして推論してゆくと、弁之助の住まいは相国寺(しょうこじ)のあたりが最適だと結論づけられる。

相国寺の西どなりに幕府、つまり花の御所があつたが、とつくのむかしに廃され、いまは民家がちはじめている。

そのまた西の元新在家とよばれる区域に吉岡憲法の屋敷があつた。相国寺でないとすると、つぎの候補は鴨東の吉田、細川幽斎の京都屋敷である。

関ヶ原合戦のあとの京都を支配したのは徳川家康、その権威を背に京都所司代をつとめる板倉勝重である。

西軍(石田三成の味方)の残党を摘発して処刑し追放すること、キリシタン宗徒を弾圧し、浪人一般を取締る——これが板倉の任務である。

慶長六年の九月——関ヶ原の一周年——家康は京都の社寺にたいして、「浪人を寄宿させてはならぬ」と禁令をくだした。「京じゅうのすべての屋形を丈量せよ」と命令を発したのもこの年だ。建造物を丈量する名目で危険人物を摘発しようとしたものだろう。

京都に浪人が住むのは困難になつてきた。

つきつめていえば宮本弁之助も西軍の残党である。西軍の鉄砲隊に属して丹後田辺で闘つたのだ。ただし、重要人物ではない。乱暴なふるまいをしないかぎりは身の危険はないといえるが、用心するにこしたことはない。

そうになると、田辺城の留守を守って英雄となった細川幽斎の保護下にはいるのがもっとも安全だといえた。敵のふところに飛びこむというわけだ。

手づるは、いくらでもあったはずだ。敵といったところで、所詮は足軽だ、警戒の対象とはなりえない。

剣技を披露してみせれば、称賛されるにきまっている。先方から、「この屋敷で働かぬか」と誘いがくるのは自然のなりゆきであったはずだ。

吉田の細川屋敷というのは南禅寺の塔頭、聴松院の北のあたりにあった。幽斎はこの地で誕生したのだそうだ。

相国寺か、でなければ吉田の細川屋敷か——安全度の高いのは吉田だが、吉岡憲法一門の一挙手一投足を目のあたりにできるのは相国寺である。

宮本弁之助は相国寺に住まいをきめたのだろう。

臨濟宗の相国寺——正しくは万年山相国承天寺——をたてたのは室町幕府の三代将軍、足利義満である。普請を奉行したのは春屋妙葩と義同周信だが、義満は夢窓疎石を勧請開山とし、春屋を二世とした。

夢窓はすでにこの世のひとではないが、義満は夢窓が天竜寺の開山であったのを重視していた。後醍醐天皇の菩提をとむらうために足利尊氏がたてたのが天竜寺である。義満は相国寺を天竜寺の分身のような感覚で建立したから、あえて夢窓を勧請開山として尊敬の意を表した。

全盛期の相国寺は禅宗の総体を牛耳った。禅宗寺院の人事をあつかう役を僧録といい、その僧録には相国寺の塔頭の鹿苑院の住職が兼任するしきたりとなったからである。

相国寺の西どなりには花の御所、つまり幕府があった。

世が泰平ならば、相国寺はおとなりの幕府の権威を背にうけて禅宗ばかりか佛教すべての世界に権威をふるったが、戦乱の世となる

と、まっさきに戦火をあびる。

応仁元年（一四六六）正月、上御霊神社の森に陣取った畠山政長に畠山義就が攻撃をかけた。これをきっかけにはじまったのが応仁の乱である。乱の勃発地となった上御霊神社は相国寺の北どなりにあつた。

天文二十年（一五五一）七月、細川勝元は相国寺に陣をかまえた。その勝元を三好長慶の家来の松永久秀が攻め、戦火をあびて相国寺は全焼した。

荒廃した相国寺に西笑承兌（さいおほはうたい）が入寺して再建事業にとりかかった。

豊臣秀吉や徳川家康から所領の寄進をうけて再建の工事がおこなわれている。その普請作業の警護をするから住居費はほとんど無料という約束で弁之助は相国寺に住みこんだ。

相国寺の普請作業の警護役になるとき、弁之助は宣言した。

「わしは剣士である。しばらく時間をかけて剣技を磨き、いずれは吉岡憲法と勝負をし、勝つつもりだ」

「おまえさんは、吉岡の兵法指南所に勝負をいどむというのか！」
弁之助をむかえた僧は、軽い驚きの表情を西の方角にむけた。吉岡の兵法指南所の権威を知らぬ田舎者だな、といった軽い驚きである。

相国寺の西、かつて花の御所があつた、そのまた西の、元新在家とよばれる地に吉岡憲法の兵法指南所があつた。花の御所のとおりにあるのが兵法指南所の値打ちでもある。

かつてはこのあたりに、絹織物業の集団の練貫座があつた。練貫座の製品のなかでも羽二重は純白であるところが高く評価され、羽二重の白にちなんでこの地が白雲とか白雲村とか通称されていた。

だが、長期にわたって戦場となつたのが原因であるか、地下水が劣化して織物生産に適さなくなったので、織物業者は各所に移転していった。

多数の業者は烏丸通の鷹司町、いまでは蛤門があるあたりに移転して、新在家町をつくった。その新在家町の織物業はふるわず、大舎人座にとってかわられる。大舎人座の織物が現在の西陣織となった。

さて、吉岡家は白雲の織物業と提携した染色業者であつたらう。家業の染色をするかたわら、剣技を中心とする兵法に一流をあみだして兵法指南を自称するようになった。

地下水汚染の影響は織物よりは染色のほうが甚大、深刻である。

吉岡家は白雲から下京の綾小路西洞院に店と住まいを移したが、白雲の屋敷はのこして、兵法指南所の名をつづけていた。

吉岡家が有名であつたのは、綾小路西洞院のあたりが「憲法町」と通称されていた事実で知られる。染色業者としての吉岡家は一名を「シヤム口染」という型染を得意とし、かたや剣技の芸能者として兵法指南所の看板をあげていた。

吉岡家は京都の代表的な商人であり、かつは剣技の家として有名であつた。

その吉岡家に、いずれ勝負を挑んで勝つのだと宣言した男が相国寺に住みこんだのである。

宮本弁之助という姓名だそうだが、はじめのうちは、出身地も主君の名もわからない。武士のようだが主君はいないらしいところからみれば、つまりは浪人か、浪人の子にちがいない。

だが、そもそも吉岡家とは、浪人を相手にするような家柄ではないのだ。

ならば、吉岡家は、どのような格の家を相手にするのか？

征夷大將軍である。

武家の政権を「美」というもので飾ることは三代將軍の義満のときからこころみられていた。

後醍醐天皇の菩提をとむらう天竜寺が尊氏によってたてられてい

る。ならば相国寺は余計なもののように思われるが、あえて相国寺をたてたのが義満の美意識である。

義満は將軍であるだけではものたりなかった。太政大臣になったが、すぐに辞職して「日本国王」を自称したのも権力欲というよりは、新しい権力のかたちをもとめずにはいられない美意識の為せるわざであった。

征夷大將軍としての義満の居城は花の御所だが、武家政権の府を「花の御所」とよばせるところに義満の美意識がある。

そして、日本国王としての義満の政庁はほかならぬ北山の金閣である。のちには金閣寺という名の寺になるこの建物が義満の美意識の結晶である。

義満にとつて、「美」は「ちから」なのであった。

能を政権の飾りとして保護し、育成したのも義満である。

観阿弥と世阿弥は奈良の興福寺に隷属する能の座の作者であり、かつ役者であった。

初期のころの能は神や佛に供覧すべきものであったが、それを義満は、観衆という名の人間の娯楽鑑賞に供するものに変えたのである。神前佛前から能を奪って、いわば「人前」に供した、それが義満であったといつて過言ではない。

あらゆる分野の芸能はとりあえず権力者によつて保護され、しばらくしてから大衆に供されるようになった。このしきたりは義満によつてはじめられた。

義満は剣技を保護することはなかった。剣技をおのれの芸として世間に披露する剣士が誕生しなかったからだ。

だが、さて、いまは幕府という武士の権力は存在しない。征夷大將軍もいない。吉岡が背景とすべき権威は存在しないのだ。

吉岡憲法の一族は、どうすればいいのだろうか。

吉岡との立ち合いについて、宮本弁之助みずからは一言の言葉も、一節の文章ものこしいない。

ただし、『五輪書』で、「都へ出て天下の兵法者にあい、数度の勝負を決したが勝利を得ないことはなかった」と書いている、その「天下の兵法者」とは吉岡憲法一門をさしていると断じていい。

宮本弁之助が強烈な対抗意識をもやしている相手は——『吉岡伝』によれば——吉岡源左衛門直綱と又市直重の兄弟である。別の記録では兄が清十郎、弟が伝七郎、清十郎の嫡子が又七郎という名であったとされる。

吉岡兄弟は古きを好み、義を守り、正直を法としていたので世間から「憲法」と称されて敬愛されていたという。世間の称賛のしるしの「憲法」の通称が吉岡家の屋号になっている。

兄弟の曾祖父の直元が十三代將軍の義晴に仕えて戦功をあげた。これがきっかけで吉岡家は將軍家の剣技指南となったようだ。

義晴は十一代將軍義澄の子である。十二代の義種が細川政元によって追われたあと、管領の細川高国によって十三代に擁立された。しかし、義晴の地位は不安定のまま政局は推移し、在職二十六年で嗣子の義輝（義藤）にゆずった。

吉岡直元の剣技指南は役にたたなかったのではないかと批判の声も出るだろうが、剣技指南とはそういう役目ではない。

剣技を習練して真の武士の生涯をおくろうとした義晴の努力を、師の直元が認める。ここに師と弟子の関係の神聖な意味がある。

吉岡兄弟の祖父も父も剣技をよくしたが、兄弟の技量は父祖を超越するものがあつた。世が応仁の乱に突入したこともあつて、兄弟に剣技をまなびたいと望む者はかぞえきれない。

相国寺から西に花の御所が接している。いやいや、正しくは花の御所の旧跡といふべきである。十五代の義昭が織田信長によって追われたあと、征夷大將軍は任命されなくなってしまった。室町幕府は倒壊し、姿を消したのである。

花の御所の旧跡のすこし西に吉岡憲法の屋敷があつて、夜も昼も多数の弟子たちがつめかけている。そのまた西には刀剣の研磨と鑑定を家職とする本阿弥家の屋敷があつた。

相国寺の宮本弁之助、花の御所の旧跡、御所の西の吉岡屋敷、そのまた西の本阿弥家がほぼ一直線につながっている。直線の共通語は剣、剣技、剣士、武士の覇権、そして刀剣だ。

あつまってきたな……

弁之助の出番である。

緊張感は漲っているが、敵めしくはならないように工夫した服装で弁之助は元新在家の吉岡屋敷の前に姿をあらわす。

弁之助の顔は、ここではお馴染みだ。

「きたぞ。あいつめ、今夜も、きよった」

「骨柄(こがら)が日毎夜毎にけわしくなってくる」

「相手に、なるなよ」

「さようだ。ああいう手合いには、相手にならんのがいちばん」

弁之助は警戒されている。いや、警戒というよりは、どのように対応すればいいのか、これといった名案もつかばないままに突き放されている、そういう感じだ。

弁之助も馴れたものである。とおまわしの群集の垣根のなかをすすんで屋敷の前につつたち、ゆっくりと言葉を述べる。

「播磨の剣士、宮本弁之助。吉岡のご兄弟との勝負を願いたい。道具は木刀、真剣、または竹刀そのほか、そちらのお望みのおりです。よろしい！」

無言の応対がもどってくる。

「お願いいたす！」

無言。

三度目の「お願いいたす」をいってから踵をかえし、相国寺の宿舎にもどる。

もどる道々、吉岡兄弟との勝負が実現したときにそなえて、策を練っている。

弁之助の申入れを吉岡が拒否しつづけるとは思えない。秘密裡にではなく、衆人のまえで勝負をもうしこんできているのだ、拒否す

れば吉岡の名譽にかかわる。

今日まで応諾の回答がないのは、勝ち方をかんがえているからだ
と弁之助は推測する。

吉岡にとつて、いかにすれば勝てるか、は考慮の外である。氏も
素性もわからぬ、剣士としての名が知られていない若僧に吉岡が負
けるはずはない。

勝つときめてかかって、いかに勝つかをかんがえている。だから
いまだに応諾の回答がない、そのように吉岡はかんがえていた。

いかに勝つかは、いかに見せるか、でもある。

ここ十数年のあいだ、京都ではさまざまの見せ物が登場して市民
の耳目をうばった。

慶長三年（一五九八）の三月、秀吉は盛大な行列をくんで伏見か
ら醍醐へゆき、醍醐山で盛大な花見の宴をもよおした。

慶長五年（一六〇〇）——この年は豊臣と徳川の衝突が避けられ
ないという空気が濃厚になった。

だが、というか、だからこそというか、これでもか、これでもか
と強烈な印象の見せ物があふれた。

二月には豊臣秀頼が方広寺（ほうじ）で千僧供養（せんそう）をもよ
おした。方広寺の大佛の開眼供養は父の秀吉がはじめた行事、秀頼
がひきつぎ、豊臣にくらべれば徳川の権勢などはたいしたものでは
ないと誇示する手段として再開した。

千僧供養を見ようとしておびただしい群集が五条の橋をわたり、
洛東につめかける。それ自体も見せ物になる。

初夏のころには、五条河原で少年が集団で躍り狂う興行がもよお
され、群集の目をひきつけた。

九月十五日の関ヶ原の合戦は東軍——家康の大勝利となり、十月
一日には六条の河原で石田三成、小西行長、安国寺恵瓊など西軍の
大將が処刑され、首が三条河原で晒しものになった。

関ヶ原で勝っただけでは、家康は勝利をわがものとはできない。

京都で——天皇の膝元で——死刑を執行し、首を晒すことによって
はじめて家康は関ヶ原の戦勝を政治の勝利に転化できた。

慶長七年には、北野天満宮で菅原道真七百年祭がおこなわれた。
七百年祭を執行したのは豊臣秀頼である。じわじわと家康に圧迫さ
れつつある秀頼は、このような大規模な宗教行事をおこなうことで
権力を誇示しなければならぬのである。

権力とは、そこに存在するだけでは急速に消耗する。権力行使の
様子を世間に公開することによって、継続的に維持できるのだ。そ
れには処刑や梟首、祭礼や演能を主催して都市の住民に展示するこ
と、これが絶好かつ必須の手段なのである。

そして慶長八年（一六〇三）四月、征夷大將軍に任じられた徳川
家康が新築の二条城に公家・大名をまねき、三日にわたって盛大な
宴をひらいた。

二条城の宴の主役は観世の能であった。

「観世の能も、ついに新しい將軍の御前で演能する榮譽をとりつけ
たのですな！」

「足利三代の義満將軍によって観阿弥と世阿弥の父子がひきあげら
れた。あれから観世の栄光がはじまったわけだが……」

「ここ数十年の室町さまの、あの体たらくでは観世も青息吐息を余
儀なくされてきましたな。徳川さまが將軍になって、ようやく観世
も昔日の勢いをとりもどしました」

四月五日の演能の舞台裏で、こんな事件がおこっていた。

山科の農民の進藤権右衛門と京の商人の森田庄兵衛が観世太夫の
門人として二条城の舞台に上がり、権右衛門はワキをつとめ、庄兵
衛は笛を吹いた。庄兵衛はまだ十六歳の少年であったという。

「両名のもの、見事である」

権右衛門と庄兵衛を格別に称賛する言葉が家康の口から発せられ
た。

「御意にかない、恐悦至極」

「百姓や商人をしておるには惜しい。観世よ……」

「ははーっ」

「兩名を観世の役者として召しかかえては、どうじゃな」

「おそれいます」

権右衛門と庄兵衛は観世座の一員として採用された。そのあとからも家康は庄兵衛の笛の技能を賞翫するのを好み、「子笛々々」と呼んで鼻屑にすることになった。

なにがしかの芸をまなび、芸によって世に出ようとこころがける者にとって、庄兵衛の名誉の出世は羨望のかぎりである。

庄兵衛や権右衛門が家康の推薦で拔擢されたはなしをきいて、宮本弁之助はこころの底から感激した。

羨望よりも感激が先になったところに弁之助の想いの純粹があった、そういえる。

昨日までの庄兵衛と、今日からの庄兵衛とでは、笛の音がちがうはずだ。それが、すごい。いや、この耳で聴かなくても、わたしにはわかるのだ

暮らしの安定、それは二の次だ。

商人や百姓には運と不運がある、いつもおなじ暮らしを維持できるとはかぎらない。だが、能役者よりは安定度は高い。安定度の高い百姓や商人の暮らしを蹴飛ばして専業の能役者をめざし、ついに出世の糸口をつかんだ権右衛門と庄兵衛の名が弁之助のからだを感激で包んだ。

徳川の鼻屑をうけるとは、すごい。さすが京都はちがう。播磨や但馬では、こうはいかない

そういう自分も京都に出てはいるのだが、肝腎の吉岡が相手にしてくれる気配がない。

わしを相手に負けるとは思ってもいないはずの吉岡だ、なぜだろ
うと首をかしげつつ、しかしあきらめずに、三日に一度は元新在家
の吉岡屋敷へ出かけ、

「播磨の剣士、宮本弁之助。吉岡のご兄弟との勝負を願いたい。道

具は木刀、真剣、または竹刀そのほか、そちらのお望みのとおりでよろしい！」

やっているうちに、またまた弁之助の魂をゆるがせる大事件がおこった。

大事件の主役は男ではない、女である。

醍醐天皇のときに右大臣をつとめたのが菅原道真である。左大臣の藤原時平とはりあったが、ついに敗れ、筑紫の大宰府へ権帥(ごんのすけ)として左遷され、そのまま亡くなった。

死後の道真は天満自在天神という神になり、太宰府や京都の北野の天満宮（天神社）に祭られた。

北野天満宮の境内はさまざまの分野の芸人が芸を競う舞台となっていた。粗末ながらも床をはって舞台をしつらえ、幕をひきまわすものあり、床ははずずに地面に敷物をしいただけで演ずるものあり、さまざまだ。

その北野で、慶長八年（一六〇三）の春のころから、出雲阿国(いづのおくに)という女の芸が披露されて熱狂的に歓迎された。

阿国は出雲大社の巫女の出身というふれこみである。

紅梅を配した肌着に唐織りの小袖を着て、赤地金襴、萌葱裏の羽織——あくまでも派手な衣装である。

衣紋を思いきって深く抜いて、挑戦的である。

黄金づくりの鍔に白鮫鞘の太刀をひっさげて登場し、真っ赤に塗った唇をなかばひらいて見栄をきる。

首から胸にかけて苛高(いらか)の数珠をかけている。顔をうごかさにつれて数珠がゆれ、じゃらじゃらと高い音を出す。

また、あるときは銀づくりのロザリオに銀のクルスをつけたのを吊るしている。

慶長の八年ともなれば異国の神を信じるキリスト教は厳禁であるが、キリスト教の祈祷具のロザリオやクルスは、信仰とは無縁の飾り物としてならば罰せられることもない。

阿国は男装をしている。

その異様が、

「ロザリオもクルスも飾り、おもちゃでございます。キリスト教の信仰とはかわりはございませぬ」

言い訳を通用するものとしている。

阿国が扮した若衆鬻の男が舞台上に登場し、茶屋あそびの光景を演じる。

男が女にたわむれ、女が男を撥ねつけるやら、媚び誘うやら――

花に嵐の

ふかばふけ

君のこころの

よそへ散らずば

とても名の立たば

宵からおりやれ

よそへ忍びの

帰るさはいや

舞台から客へ唄いかけるのは、いまが流行りの隆達小唄の一節。

挑発され、堪えかねた見物人が感嘆の声をあげる。

これを「かぶき踊り」と呼んでくだされとは、阿国とともに一座をつくって興行している男たちの望みであった。

「かぶき」とは「傾き」である。正規にたいする破格、異例、逸脱である。

阿国は出雲大社の巫女の出身というふれこみだ。

巫女は舞う。巫女の舞いは神にささげる舞いである。

阿国は巫女の出身だという。

巫女であったときには、神にむかい、神に捧げる舞いを舞っていた。

巫女であることをやめたいま、阿国は神々に背をむけ、人間の観客にむかって踊り、唄う。それがすでに「かぶき」なのだ。

北野天満宮の、広いとはいえない境内は阿国の異様なかぶき踊りを称賛、讚美する声で埋めつくされている。

宮本弁之助は阿国の舞台に、魂をゆすぶられた。

阿国のからだから発する華やかな光線が弁之助の肌をつらぬいて、魂を焼いた。

おそろしい、ものだ！

なにがおそろしいのかというと、阿国の舞台に魅入られた観衆のだれも、ここが天満大自在天神の神を祭る神殿であることを忘れていて、それがおそろしい。おそろしいから、なおさらに阿国の舞台に妖しさを添えるのである。

「阿国という女も、阿国を見ている老若男女も、神に背をむけている！」

神に背をむけるのが許されることなのかどうか、判断するちからをもたない自分を知っている。

だが、目の前でおこっている事実を打ち消すことはできない。多数のひとが、あきらかに神に背をむけている。

この日、この目で観た光景を忘れることはない。忘れてはならぬ。泉下の父上よ、あなたに誓います！

北野天満宮の境内で、出雲の阿国は弁之助の魂をゆりうごかした。それでおわりには、ならない。

二条城で將軍宣下を拝賀した家康は、伏見城にもどっていった。その二条城へ阿国がまねかれ、かぶき踊りを家康のご覧に供した。弁之助、右往左往の日々となった。

落ちつかないのである。

出雲阿国の、あの、奇態な踊りを、ひともあるうに天下の覇者の徳川家康が「観たい」といったのだ。

家康の側近のだけれど、阿国のかぶき踊りのことを吹きこんだ。將軍宣下をうけたばかりで気をよくしている家康が「おもしろそうじゃな。呼べ」と命じて阿国の伏見城参上となった——弁之助はこ

のように想像していたが、巷の噂によれば、ちがうのである。

家康はいまから二十年ほどまえ——浜松城主のころ——阿国の踊りを観ているのだそうだ。そのころはまだかぶき踊りではなく、「や・や・こどり」と称していたようだ。や・や・ことは「幼女」「少女」の意味である。

阿国のや・や・こ踊りを観た家康の、褒賞の言葉がどんなものであったのか、京の巷の噂はつたえてはいない。

だが、家康は悪い印象をうけなかった。というのは、それから二十年、かぶき踊りを創作した阿国が「参上してご覧に供したい」と家康にねがって許された事実によってあきらかだ。

噂のなかの、もうひとつの噂、それは家康の長男で、つぎの將軍になることがきまつている秀忠のことである。秀忠も伏見城にいたのだが、かれは阿国の踊りを観なかったというのだ。

弁之助は推論する。

家康と秀忠が仲違いしている。だから秀忠は阿国の踊りを観なかったというわけではないな

ああでもない、こうでもないと推論していつて、なんとも意外な結論が出てきた。

天下の唯一者の家康だけが阿国の踊りを観る。秀忠はまだ天下唯一者ではない、阿国の踊りを観るのはゆるさぬ……そういうことはなかるうか。いや、それにちがいない

弁之助は溜め息をついた。深い、深い溜め息である。

神に背をむけて踊る阿国を、天下唯一者の徳川家康がまねいた。阿国は神に背いて家康の城に参上した。後陽成天皇の母の新上東門院の御所にまでも参上して、女院に踊りをご覧に供したと、そういう噂さえある。

この世に、途方もない変化がおとずれている。

わしは、宮本弁之助は、いまだ神を信じておるのか。神を信じておるうちは、天下唯一者にまねかれて剣技をご覧に供する栄誉に浴することはないかもしれぬ。わしはそれで、満足すべきなのか

剣技で名をあげ、世に出る——播磨を出たときからの決意である。世に出るからには、頂上にまで昇りたい。

ところがいま、弁之助は、頂上に昇りつめた実物——出雲阿国——を観てしまった。

わしは、あれほどの高みにまで昇れるのだらうとかんがえると、自信がない。わしはだめかもしれんなど、しりごみの気分になってしまう。

観なければ、よかった！

しりごみしたい気分をおさえ、自分で自分に勇気をつけて吉岡憲法を勝負の場にひきだそうとする。

うまくいかない。

吉岡からは返答がない。

はつきりと拒否されるならまだしも、無視されているのは我慢がならない。

こうなったら、先方の否応を無視して吉岡屋敷に打ちこんでやるしかないなど、いささかの自棄もてつだって覚悟をきめたとき、吉岡憲法の一門に大事件がおこった。大事件について述べるのは『吉岡伝』である。

九州や西国で有名を馳せている、天流(てんりゅう)なる剣技の一派があつた。天流の主は朝山三徳という。ある日、三徳は門人をあつめて大言壮語した。

「剣士とか兵法者とか称しておるものは天下に数多いが、優れておるのは数人にすぎぬ。われはこれから天下を遊歴して剣士兵法者を打ち負かして天下第一の名を得ようと思う」

門人は一様に賛同し、師とともに博多から武者修行の旅に出た。

兵法者とか剣士とか称している者がいれば勝負を挑んで負け知らず、東へ東へと移動して京都にはいった。

吉岡憲法の屋敷に使者を出して、こういわせた。

「あなたの兵法について、世は妙手なりと称賛してある。おたずねいたし、妙手とやらを拝見いたしたし」

吉岡兄弟から、つぎの回答があった。

「兵法鍛練のために諸国を遊歴なさるおこころざしは神妙である。たがいにまみえ、勝敗を決するに異存はなし」

決闘の期日は慶長九年八月十五日、場所は東山の八坂ときまつたと、『吉岡伝』はのべている。

東山の八坂、それは八坂神社——当時は祇園感神院ともいっていた——と東山のあいだの、しる谷とよばれた低湿地である。天満宮がある北野が北の郊外の遊樂地、鴨東では八坂が遊樂地であつたら、立ち合いを見物する群集があつまりやすい場所である。

この地を指定したのは吉岡であつたにちがいない。群集のあつまりやすい場を指定したのは、負ける気がなかつたからだ。

吉岡兄弟の兄の直綱は病床に伏していたので、弟の直重が単身で相手になる。

朝山三徳は六尺あまりの大男、それが金の筋金を入れた八角の大棒をかるがるとふりまわす姿は夜叉に異ならない。

立ち合つてしばらく、双方が秘術をつくしたが、勝負はつかない。そのうち、直重がつつーと後退したかと思うと、とーんと地を蹴つて飛びあがり、三徳の頭を一撃した。三徳の頭はこなごなに砕かれてしまったと『吉岡伝』は書いている。

東山の決闘の様子はたちまち京の街の噂をさらつた。噂は京から諸国につたえられ、吉岡憲法一門の剣技の名はますます輝いてくるのである。

宮本弁之助が吉岡と朝山三徳の勝負を観戦したのか、どうか、記録したものは見当たらない。

だが、弁之助が見ないはずはない。吉岡の兄弟と一門のうごきの詳細に目を光らせ、勝つべく策を練っている弁之助なのだ。

弁之助は、観戦した。

そして、吉岡の肚を読んだ。

わしに、見せつける気だな

朝山三徳の二の舞になりたくなければ、われらに挑戦する気は捨てて、京都から出てゆけ——吉岡はこのように脅迫しているのだと読んだ。

京都では、宮本弁之助はまったく無名の剣士である。だが、そこは由緒をほこる吉岡である、「宮本弁之助なる若僧の剣士、かれの正体をご存じないか」と諸国に質問を発するぐらいの手づるはもっていたはずだ。

弁之助が播磨で有馬喜兵衛を投げ殺したと、但馬で秋山某と闘って勝利を得たことを吉岡は探知したにちがいない。

勝ちを得るだけでは満足しない。たたきふせ、なりゆき次第では殺すのも厭わない危険な剣士——吉岡は弁之助について、このような判断をくだしたと思われる。

吉岡の剣技は、そういうものではない。

型である、あくまでも型である。

相手が、こう構えたら、この型で攻めるのだ

このように教え、教えられたとおりに攻めてゆくと、相手は次の一手を打ち出せない。そこで勝敗がきまる。

観衆も、その事実を率直に納得する。殺さぬうちは勝利ではない、などとは思わない。これが吉岡の剣技だ。東山の八坂で直重が朝山三徳をたたき殺したのは、朝山が直重を殺すつもりで打ちかかってきたからだ。

宮本弁之助なる、正体不明の若僧の剣技も朝山とおなじ、たたき殺すのを勝利とする剣技以前の剣技だ。

弁之助が吉岡との勝負をのぞんでいるのは世間に知れわたっている、逃げるわけにはいかない。

吉岡にとっての唯一の選択、それは宮本弁之助に必殺の剣をつかわせないことだ。

弁之助に必殺の剣をつかわせると、またまた吉岡家は弁之助を、朝山三徳のように、殺さねばならない。それは吉岡家の憲法——家の掟としての憲法——にたいし、みずから背くことなのだ。

朝山三徳を叩き殺した直重の剣技に恐れをなし、弁之助が立ち合いをあきらめてくれるのが最良である。

だがしかし、弁之助があきらめる気配はなさそうだ。

ならば、次善の策としては弁之助との取引きがある。殺すまで打ち合うとなると、殺されるのはそちらだ。当方としては、殺したくないのです、そういつて。

妥協が成立した。いや、このころの吉岡憲法と宮本弁之助の名声、勢力をかんがえれば妥協というのは誇大な表現、むしろ弁之助にたいする吉岡の憐憫というべきだ。

双方ともに一撃だけを打ち、引分けとする——これが妥協の内容である。

慶長九年（一六〇四）の春、吉岡憲法と宮本弁之助の剣の試合がおこなわれた。

試合がおこなわれたのはまちがいないが、いつ、どこで、どのように、となると諸説があつて一定しない。さきにも書いたが、弁之助自身は吉岡との勝負について一言一句ものべていないのである。

手間をいとわず、諸説それぞれを検討してみる必要がある。

もつとも古い記録とみられるのは、宮本武蔵こと弁之助が没して九年目、豊前の小倉にたてられた『武蔵顕彰碑』（小倉碑文）である。建碑したのは弁之助の嫡子（養子）の宮本伊織である。

弁之助は但馬で秋山という兵法者と闘って勝ち、殺したと『小倉碑文』は書いている。その勢いを駆って京都にのりこみ、吉岡憲法家の嫡子の清十郎と試合をした。場所は「洛外の蓮台野（れんたいの）」である。

蓮台野は京都の西北の郊外、今宮神社の西の高台である。蓮台野の西を紙屋川が南北にながれている。秀吉が紙屋川の東の堤を利用

してお土居をきずいた。洛中と洛外の境はお土居だ、土居の内側の蓮台野は洛中であり、「洛外の蓮台野」とは誤った表現である。

その蓮台野の試合――

弁之助は木刀をつかい、清十郎をたつた一撃でたおしてしまった。清十郎は息も絶え絶えになったが、「双方とも一撃だけ」と約束してあったから、弁之助が二打、三打を打つことはなく、清十郎は辛うじて命だけはとりとめた。

清十郎の弟の伝七郎が弁之助に復讐の試合を挑んだ。弁之助も応じて、第二の試合がおこなわれた。場所は「洛外」とされている、前回とおなじ蓮台野とみていいだろう。

伝七郎は五尺あまりの木刀をひっさげて登場、一撃をくわえたが、弁之助に木刀をうばわれ、その木刀で打ちのめされ、地に臥して絶命した。

吉岡憲法の門人一同は、吉岡清十郎の子の又七郎を擁して弁之助に三度目の試合を挑んだ。

数百人も門人たちが、「兵術に事寄せ」というから、集団訓練といったことを名目にして「洛外下松」にあつまり、それぞれの武器を手にして、弁之助がおびきだされてくるのを待った。

「洛外下松」とは洛北の一乗寺の「下がり松」だと解釈する説が優勢だが、そうと限ったものでもない。船岡山の東にも「下がり松」と通称される地がある。ここには今宮神社のお旅所(たひよ)があり、お旅所をふくめて「下がり松」と通称されていた。

さて、「洛外下松」に待機した数百人の吉岡一門にたいして、弁之助は、どのように対処したか。

この日、武蔵とともに弟子たちが試合の場にやってきていた。師とともに吉岡と闘おうとするつもりの弟子たちを制して、武蔵はいった。

「おまえたちには関わりのないことである。早く、去れ。かれらが群れとなって攻めてきても、われには、なんの恐ろしいこともないのである。案じるな」

門人の味方をゆるさず、群がる吉岡勢のなかに単身で打ちこんで
いって勝利した。

又七郎を打ち殺しはしなかったようだ。勝利のかたちを想像する
のがむずかしいが、多勢のなかに打ちこんでいって、縦横にかけま
わり、何人かの幾分かの傷を負わせ、自分は傷をうけずに危地を脱
したというところではなかったか。

吉岡方は弁之助に重い傷も負わせられず、取り逃がしたのである。
吉岡方の敗北、したがって弁之助の勝利だ。弁之助としては、これ
で充分だ。

『小倉碑文』から遅れること三十年、吉岡憲法の立場から往時を
回想する書が編纂された、『吉岡伝』である。

吉岡の兄弟の名は直綱と直重である。

曾祖父の直元が十三代將軍の足利義晴に兵法指南として仕えたの
が憲法家と將軍家のつながりのはじまりだ。

祖父の直光もなかなかの剣技をみせたが、兄弟には及ばない。応
仁の乱の勃発によって武士ばかりではなく、京都の市民も自衛のた
めに刀を差し、吉岡に剣技をならうようになり、吉岡憲法の名は輝
いた。

八坂で朝山三徳をやぶった勢いを駆って、宮本弁之助の挑戦に応
じたのは慶長十年（一六〇五）だとしている。

場所は「今宮下松（さがまつ）」である。

今宮神社は大徳寺の西北にあるが、お旅所は大徳寺より南の、船
岡山の東の麓にある。ここが通称「今宮下松」だ。

さて、『吉岡伝』によると、吉岡と宮本弁之助が雌雄を決するに
いたる過程に、松平忠直という大物の大名が登場してくる。

徳川家康の次男が結城秀康、その長男が松平忠直である。このこ
ろ秀康は越前一国六十七万石を知行し、忠直は越前家の若様の身分
である。

宮本弁之助は忠直に仕え、二刀をつかう剣の名手として名をうた

われていた。忠直は弁之助を師として二刀の剣技をならい、側から離すことがないほど信頼していた。

忠直は聚楽第の越前屋敷に滞在していた。吉岡の剣技の名が高いのを知った忠直が、弁之助に質問した。

「ちかごろ、吉岡の剣の名声になりひびいておるが、もしも吉岡とその方が剣をまじえると、どうなるのか？」

「兄弟そろって攻めてきても、わたくしの一撃には耐えられませぬ！」

よるこんだ忠直は、所司代の板倉勝重に知らせた。勝重は吉岡兄弟をよび、越前の若様の臣下の宮本弁之助という者と試合をするかと、たずねた。

吉岡が応じて、試合は松平忠直のご覧に供せられることとなった。まず、吉岡直綱が弁之助と試合をした。双方が死力をつくして闘ううち、弁之助は眉間を打たれ、血が吹きだした。

直綱が武器を置いたあと、その場の大方の判定は「直綱の勝利」であったが、相打ちだとする声もあった。

怒った直綱は再度の試合をのぞんだが、弁之助は条件をつけた。直綱とは闘ったから、このつぎは直重を相手にしたいと。

吉岡が承諾し、さて、再試合の日となったが、弁之助はいつになっても姿を見せなかった。

そこで世間は、「吉岡の直重は座して勝利を得たのである」と評し、吉岡憲法の剣の名はますます高まった。

『吉岡伝』が宮本弁之助と吉岡憲法との試合についてつたえるのは、以上がすべてである。弁之助のために贖目に評しても相打ちとするのが妥当であり、厳格に評価すれば弁之助の負けであろう。

重傷者も使者も出なかったところとところが『小倉碑文』との大きな相違である。もうひとつ、『吉岡伝』には直綱（清十郎）の子の又七郎が登場しない。

が世にあらわれた。永以は江戸に住んだ国学者であったそうだ。

『古老茶話』のなかに宮本武蔵こと弁之助と吉岡憲法の試合が述べられている。吉岡と同業の京都の染色業者で、のちに凋落して江戸に出ていった「シャム口染屋」の吉右衛門からきいたはなしだと断っているのがこの書の信用である。

「北野の七本松」が試合の場である。

朝の五時と約束された刻限に憲法は出ていったが、弁之助は姿を見せない。昼すぎに従者を使いに出したところ、弁之助はまだ寝ていた。

「起きられませい」

「こころえた」

いっただけで、起きない。

従者が問うと、

「わしが勝利する光景を想像しようとしているが、なかなか気が満ため。だが、もうすぐだ」

ようやく起きあがり、袴の肩脱ぎで七本松に出てきた。

「待ちかねたぞ」

「不快ゆえに遅参いたした」

弁之助は竹刀、吉岡は木刀で打ち合い、勝負は相打ちになった。

弁之助は左の肩脱ぎのうしろに傷、吉岡は鉢巻きの内側の小鬘に傷をうけた。

『古老茶話』は、吉岡の兄弟のどちらが弁之助の相手になったのか、いわない。兄弟があつたことにも関心はないようである。

七本松とは地区の名ではなく、通りの名である。豊臣秀吉が開通させた通りであつて、北は五辻通から南は下立売通まで貫通していた。「七本松」だけでは地点を特定できないけれども、「北野」が強調されているから通の北端、すなわち五辻通だろう。ここは北野天満宮の東、船岡山の南の地である。

天満宮には近いが船岡山には遠い。この点をかんがえると、柏崎永以は天満宮の森を意識していたのかもしれない。ならば、それは

つまり、出雲阿国がかぶき踊りで名声を馳せた場にほかならない。

宮本武蔵こと弁之助の没後百年あまり、門人の豊田又四郎——彦次郎——左近左衛門の三代の編纂による伝記『二天記』が完成した。この書で吉岡憲法一門と宮本弁之助の試合は、どのようにのべられているか。

京都に出てきた弁之助は天下の兵法者、吉岡庄左衛門の嫡子の清十郎と「洛外蓮台野」で試合をした。清十郎は真剣、弁之助は木刀で対戦し、弁之助の一撃で清十郎はたおれ、息が絶えたが門人たちが家につれてかえり、治療したところ息は吹きかえした。しかし兵法は捨てて剃髪、出家した。

弟の伝七郎が弁之助が「洛外に出て」対決した。伝七郎は五尺あまりの太刀をひっさげて打ちかかったが、弁之助はたちまち太刀を奪い、その太刀で打ちかかり、たった一撃で伝七郎を即死させてしまった。

吉岡の門人たちは弁之助を怨んだ。

清十郎の嫡子の又七郎を擁して復讐戦をしかけた。数十人がそれぞれ武器をかまえ、「下り松」で待ち伏せした。しかし弁之助は一門の総勢の陣を打ちやぶり、大手をふって洛中にもどった。

後年——肥後の熊本においてのことだろう——弁之助は「下り松」の試合をふりかえって、つぎのように語った。

吉岡又七郎と洛外一乗寺村、藪の郷、下り松で勝負を決することになり、事前に弁之助の門弟が吉岡方の布陣を視察し、報告した。

「又七郎は師を父と叔父の仇とみなし、多人数で討ち取るうと計画しております。いかに師といえども、多数の包囲網をきりぬけるのは至難の業、お命にかかります。伏してねがわくは、われら門人一同ともどもお供をいたし、吉岡の奸計を打ちやぶりたい……」

門人の懇願をおしとどめ、弁之助はこのように論じた。

「多数の者が戦闘するのは、いわゆる徒党を組むことであり、公儀が厳禁なさっております。慎まねばならぬ。諸君のうち、ひとりでも我

に付き従う者があれば、それは我を罪に陥れる結果となる。な―に、かれらの計略など、おそれるものではない」

清十郎と伝七郎との試合では、弁之助は約束の時刻に遅れて出ていって勝ちを得た。このたびは先制して攻撃しようとかんがえ、弁之助は未明のうちに洛中から出た。

道端に八幡の社があった。

この社に戦勝を祈ろうと思いつき、社殿にぬかづいて鰐口の紐をにぎった。いざ、祈ろうとした、そのとき、天啓に打たれた。

「われは常には神佛を信じたことがない。いま、この難儀に直面して祈ろうとも、神がうけてくれる道理はないはずだ。ああ、われ、あやまてり！」

鰐口の紐を放し、慙愧(ざんき)の汗にまみれて下り松に走った。

夜はいまだあけず、吉岡一門の大勢は「こんどもまた弁之助は遅れてくるにきまつている」などと口々にいいあっている。

弁之助が身をひめそめている松の木あたりに又七郎がちかづいたとき、弁之助はやにわに名のりをあげ、抜刀して斬りかかり、一刀のもとに真つ二つにした。

徒党の者共があわてて抜きあわせ、あるいは槍で突き、半弓で射てきたが、わずかに一本の矢が袖に当たっただけで、傷はうけなかった。

前後左右の敵を斬りくずすと、あとの大勢は踏みとどまることもならず、退散していったのである。

『二天記』では、吉岡憲法との試合がこのように記されている。又七郎との試合の場が一乗寺村の藪の郷、下り松であったこと、又七郎を「真つ二つ」に斬ったというのも『二天記』ではじめて登場する記述である。

諸説を比較検討して、見えてくることがある。

試合の回数が複数であったのか、ただ一度しかなかったのかをめぐり、宮本武蔵こと弁之助の側と、吉岡方や傍観的立場とのせめぎ

あいだ。

『小倉碑文』は「洛外蓮台野」「洛外」「洛外下松」の三回説である。

『二天記』は本文で「洛外蓮台野」「洛外」「下り松」の三回を記述し、逸話をあつめた別文で「下り松」を補強説明して「洛外一乗寺村藪の郷下り松」としている。そして弁之助の圧勝、吉岡家の惨敗から没落を強く説く姿勢が共通している。

『吉岡伝』は——当然といえば当然だが——「今宮下松」の一回だけとする。その一回の勝負では弁之助が眉間に傷をうけて負けたが、相打ちだとの判定もあつたので、吉岡が再試合をもうしいれ、弁之助も承知した。しかし、再試合の約束の日に弁之助は姿をあらわさなかったから吉岡方の不戦勝になつたとしている。

『古老茶話』は、じつにあつざりと場所は「北野七本松」、試合は一回だけ、相打ち、としている。

『小倉碑文』や『二天記』は——これまた当然ながら——弁之助の勝利と吉岡家の没落をのべるにあつて意識的である。『二天記』は三度目の、又七郎との試合の場を本文では「下り松」としたが、別文では「洛外一乗寺村藪の郷下り松」と詳細をきわめる説明をくわえている。

一乗寺村の「藪の郷」という地名表現にまちがいはない。しかし、詳細の度を越した表現であるのは否めない。現在の京都で「藪の郷」をつかうと混乱する。「一乗寺・下り松」が武蔵と吉岡又七郎の決闘の場ということで洛北の有名な観光ポイントになっている結果でもあるのだが——

詳細をきわめる地名の表現は、なんのためであつたか？

弁之助が三度にわたって懲らしめた結果、吉岡家は没落した、このことを強調したいからである。

吉岡家の没落、これは事実であつた。くわしくは次章でのべるから、いまは概略だけにとどめる。

慶長十九年（一六一四）六月二十九日、内裏で猿楽——能がおこなわれた。方広寺の大佛と鐘楼が完成し、秀頼が開眼供養を計画した。だが、鐘の銘文をめぐって徳川家康から厳しい非難があげられた。徳川と豊臣が絶縁、戦争になるかもしれぬと京都や大坂は戦々恐々としていた時期である。

内裏の演能は市民に公開された。

見物人のひとりの吉岡憲法が警護の役人とは喧嘩をはじめ、憲法が斬り殺されてしまったのだ。吉岡家は染色業はつづけたが、兵法指南は廃業した。

この事件は『駿府記』に記載されている。徳川幕府のなかば公的な記録の性質をもつのが『当代記』と『駿府記』であり、手堅い記録書として信用されている。吉岡憲法が殺されたのは事実とみていい。

『小倉碑文』や『二天記』は、吉岡家が兵法指南を廃業した事実を利用したにちがいない。

内裏に能拜見にでかけて、役人と喧嘩して斬り殺されてしまった結果の廃業とは、なんとも格好がわるく、もったいないはなしだ。弁之助の子孫も二天一流も出る幕がない。

そこで、第三回目の試合が闘われたというはなしを創造した。少年の又七郎を叩き殺して吉岡家を剣技廃業に追いこんだという伝説を創作したのだ。

伝説を創作するにあたってはリアリティが必要になってくる。この場合、吉岡家の当主が内裏で殺されたという事実を利用してリアリティをこしらえた。

もうひとつのリアリティ、それが三度目の決闘の場の詳細きわまる地名の表現だった。

宮本弁之助と吉岡憲法との試合はただ一度だけ、勝負は引分けであつたと思われる。

試合の場所は「蓮台野」か「今宮・下り松」か、でなければ「北

野七本松」のいずれかである。「一乗寺の藪の郷の下り松」ではない。

一乗寺は遠すぎる、あんな辺鄙なところまで剣士の試合を見物にゆくひとは、京都にはいない。見物人がいなければ、試合をする意味がないのである。

ただ一度の試合の場所はどこであったか、それをつきとめるのに必要なのは、場所を指定したのは吉岡側であって、宮本弁之助ではありえないとの推定に確信をもつことだ。

くりかえすけれども、宮本弁之助は京都では名も身分もない剣士である。吉岡に試合を挑んで承知してもらえれば望外の幸運、試合の場をえらんで指定するなど、とんでもないことだ。

吉岡がえらんで指定したのは「今宮・下り松」であつたはずだ。

吉岡家が「今宮・下り松」をえらんだ理由はなにか。

吉岡家は足利將軍家の兵法指南の榮譽をになつてきた。

だが、いまや足利將軍家などは影も形もなく、三河の小大名だった徳川家康が征夷大將軍に任じられるという事態になつている。

吉岡家は、頭上にかがやく新しい権威をもとめている。足利のあとを追つて消えることを望まないならば、新しい権威と手をにぎらなければならぬ。

足利氏のあとの政權掌握者は徳川家だが、その徳川家にはすでに大和の柳生家が接近して、剣術指南の名と実とを手に入れてしまつている。

吉岡家にとって、新しい権威の源泉となりうるかもしれないもの、それは都市の群衆である。後世では観衆とか聴衆の名をつけてよばれるはずの、多数の匿名の市民の総体である。

権威の源泉が足利將軍家から都市の群衆へ変更される。この宿命を吉岡家が認識しているか、どうか、わからない。わからないけれども、神聖な地であつて、かつ賑わう八坂や今宮がえらばれたところに吉岡家の本能のようなものが察せられる。

今宮の下り松——この地はいまでは若宮横町とよばれている。船

岡山の東の麓であり、山の向う側に蓮台野、そのまた奥に、日本国王を自称した足利義満の金閣が寺院となった鹿苑寺(ろくおんじ)がある。ななめ右の方角に大徳寺と今宮神社がある神聖な区域だ。

吉岡憲法が八坂につづいて今宮で勝負をする。それを京都の市民は、意外な衝撃をもってうけとめている。

吉岡家の剣技はいわば閉ざされていた。それがいま、ひらかれた場で、不特定で多数の市民に剣技を見せる。滅多にないことだ。

「八坂のときの、朝山なんとかいうのも正体の知れん剣士であった」「こんどの今宮の、その、宮本なんやらというのも正体は知れん、名も知れん若僧やそうな」

大切にしていたもの、親しくしてきたものの洞落を感じているのと、過去の権威に砂をぶっかけるようにして登場してきた剣士を観察したいのと、「今宮・下り松」におしかけた市民は二分されていた。

今宮神社のお旅所、つまり下り松の試合は相打ちとなった。

吉岡にとって弁之助にとっても、試合の結果が相打ちとなったについて、格別の驚きはない。双方に、相打ちになることが暗黙のうちに了解されていたからだ。

吉岡としては、無名の剣士を相手に勝負をやったという印象を多数の市民にあたえられれば充分だ。負けるわけにはいかないけれども、市民のなかにおのれの姿と剣技を公開する第一歩はしるされた。

宮本弁之助は吉岡と試合をして、相打ちになった。計画していたことではあったが、望外の結果になった。

「宮本弁之助という名だそうだが、吉岡をこういう広い場にひっぱりだして試合をして、負けなかった。えらいやつだ！」

「今宮の神さまは、無名の剣士におなさをかけられたようだ」

「わしも、そう思う。でなければ、あんな若僧剣士が吉岡を相手に試合をして、相打ちとなるわけではない」

ひきあげてゆく弁之助の背に、試合を観た観衆の評価の聲がはりついてくる。

「さて、つぎは北野だな」

「北野だ。北野だ。阿国のかぶき踊りを観にゆくぞ！」

今宮の下り松で剣の試合を観た観衆は、その足で北野の森にまわって阿国の踊りを観るはずだ。

剣技と踊り——似ても似つかぬ性質の見せ物がとなりあって催されていく。それが慶長の京都であった。

北野の阿国にわずかに遅れて、今宮下り松の宮本弁之助が名を売った。

阿国とならんで評判になってきたのを、弁之助ははっきりと認識している。

「わしも、阿国と肩をならべるところまできたのだな！」

阿国の名声ははじめのうちにはじわじわと高まり、そのあとで急成長し、あつというまに天井にのぼった。

弁之助の名声は、最初の、たった一度の試合で急騰した。吉岡憲法という由緒ある剣技指南の家を相手にしたのと、武器を手にして打ち合うという剣技の派手なところが急騰の原因である。

「阿国は北野の天神に背をむけて踊った。わしも、神に背はむけな いまでも、神を頼まぬ姿勢はつらぬこう」

父上よ

宿にもどって、弁之助は古びた冊子を取り出した。播磨の生家を 出奔したとき、父の冊子をひそかに奪って、出た。さまざまの剣士の、剣技にかんする言葉や逸話を父の無二斎があつめて書きこんだ冊子である。

父の冊子に新しい紙を足して、弁之助が自分の目と耳にふれた諸士の言葉を書き足してきた。

「出雲の阿国は天神に背をむけ、ひとびとにむかって踊ってみせた」

「朝山三徳が『諸国を武者修業して、名を天下にとどろかせたい』」

というと、門人たちは『それこそわれらの冀うところですよ』と賛同した」

おのれの文章を読みかえしてみても、

父上よ……

ちいさく、つぶやいた。

吉岡憲法と試合をして、ともかくも引分けにもちみました。あなたに背いて播磨を出奔したときの目標は到達したことになります。

つきましては……

生唾をのみこむ想いで、

いまから、わたくし弁之助は『武蔵』と名のろうかと存じますが、父上は、いかがにおかんがえになれますか

返事があるうとなかろうと、弁之助は今日から武蔵と名のるつもりにしていた。

ご異議はございませんな

ひとり芝居をやって、

わしは、ただいまから宮本武蔵玄信になった！

手もとの冊子になにか書かねばならんと思った。宮本武蔵の最初の言葉を――

今宮のお旅所で吉岡と対面したとき、わしは、なにをかんがえておったのか？

瞑目して、記憶を掘り起こそうとした。

あのととき肌を感じた神秘の感覚、それは今宮神社の祭神の大己貴命と事代主命の神威であった。祭神の名を武蔵は知らなかったのだが、吉岡一門も観衆も今宮の祭神の神威になにがしかの畏敬の念を抱いていた雰囲気は察せられた。

そうだ。あのとときわしは、出雲阿国が北野の天神に背をむけていた、そのことばかり思っていた

筆をもちなおして、武蔵は書きとめた。

「出雲阿国は佛神に背をむけたり。われもまた佛神を頼まず」

武蔵と名のつてから、わなれがら奇妙なほどに性格が変わった。京の町を歩く足取りが、ゆっくりした足取りになった。一歩一歩、地を踏みしめるように歩く。「わしはいま地を踏みしめておる」と実感して、歩く。

「急ぐなよ」

従者が武蔵の踵をふみつけそうになった。叱責するつもりはないが、従者に追い越される姿を世間に見せるのもよくないと思うから小声でいった。

「もうしわけ、ありませぬ」

従者はしずかに謝罪し、主人の気分が悪くないのを察して、

「おとといよりは昨日、昨日よりは今日というようにお足が遅くありません。そこで、つい……」

追い越しそうになってしまうのですと言いつつ訳した。

今宮の下り松の試合のあと、吉岡の門人のひとり、布袋屋(ホテイヤ)三郎と知り合いになった。布袋屋の世話で雇うことになったのが従者の吉太郎である。吉岡の同業、つまり染色を業としている者の次男だそうだが、商売よりは剣技に身をうちこんで父から勘当同様の身になっていた。

吉岡に入門したいと願っていたが、同業者の息子を、親の意にさからって入門させるわけにはいかない。もてあましてるところに武蔵が従者を働かしたいというはなしをもちこみ、ならば吉太郎がいいと、あいだに布袋屋がはいって、とんとん拍子にはなしがまとまった。

武蔵の門人であつて従者を兼ねる、これが吉太郎だ。

吉岡の門人の布袋屋と武蔵が交際をはじめて、その布袋屋の世話で従者を雇った。吉岡と武蔵が今宮の下り松で試合をしたいきさつを知っていると奇妙な感じになるが、本人たちは、どうということもない。

吉太郎が武蔵の名を触れてまわる。西洞院の綾小路、吉岡の染色の店のちかくに住んでいた吉太郎の知り合いはかぞえきれない。知り合いのひとりひとりに、吉太郎が、

「わしの主人、ほれ、今宮の下り松で吉岡憲法さまと試合をして引き分けた……」

あときは弁之助の通称であったが、下り松で引き分けてから武蔵と名のつた。

なんでも、むかしの剣豪のひとりに上泉武蔵守信綱というひとがいて、わしの主人はその武蔵守さまにあこがれて剣士の道をすすんでこられた。下り松の試合を記念に武蔵と名のられことになった。

武蔵と名のるだけで「守」をつかわないのは、武蔵守さまにたいする尊敬の気持ちを失わないようにとのこころがけなのだ。

京都の街は、英雄の登場を待ちこがれている。剣技はもちろん、踊りも舞いも、歌も小唄も、あらゆる分野のそれぞれの英雄の登場を待っている。吉太郎が「わしの主人が……」といえば、そこには新しい英雄の登場を歓迎するひとの輪ができる。

「足だぞ、足の裏だぞ」

うしろをふりかえって、武蔵が吉太郎に、いう。

吉太郎は「はい、はい」とこたえて精神を足の裏に集中して、付いてくる。

武蔵が「足の裏」というのは、こういう意味だ。足の裏の感覚を鍛え、鋭敏にすることで相手のうごきを察知する。勝負を分けるのは相手のうごきを、一瞬まえに察知できるかどうか、この一点だけにかかっているといって過言でない。

「足の裏が鋭くなければ、物を観る目のちからも衰えてしまう。足だ、足の裏だ。天下をとるのは足だ。馬でもない、弓でもない」

武蔵は吉太郎に、「なにも履くな」と命じた。「なにも履かずに冬をすごせれば、さあて、天下の半分は手にはいったと思っただかまわんぞ」といった。

吉太郎の足の裏は罅割れ(ひび)れ、血が吹きだしてきた。罅割れに小石がもぐりこんで、飛びあがるほど痛い。

「肉がもどれば、石ころなど弾き飛ばしてくれる。そうなるまでは、ちよっと痛いだろうがな」

肉がもどって、罅割れが消えた。

吉太郎の足の裏は、赤ん坊の頬のように柔らかになっていた。石ころの地面のように硬くなるとばかり思っていた吉太郎は、おどろいた。

そのことをいうと、武蔵は「天下の半分はとれたような気持ちではないか、どうだ」と笑っていった。

吉太郎が武蔵に教えることもある。

カネのことだ。

世間のなかに、カネを上手にまわしてやるのです。すると、カネは太ってもどってくるのです。それをやるのが商人というものと吉太郎は教えた。

「わしのカネも、太って、もどってくるかね？」

「お武家さまのカネも、商人のカネも、カネに変わりはありません。播磨を出るとき、知人や親戚をたずねてまわって、あつめられるだけ餞別(せんべつ)をあつめた。餞別をあつめたから播磨に居にくくなった面もある。」

餞別のカネに、丹後の舞鶴城攻撃の鉄砲隊の給料を足したものが武蔵の財産である。それをまとめて吉太郎にわたし、

「うんと太ってもどってくるように、たのむぞ」

「お任せください」

吉太郎は胸をたたいて、うなずいた。

「一国一城といえますな。太ってもどってくるカネで、一国は無理でも一城ぐらいは買えますよ」

「カネで、買うのか、国を……！」

「カネで買えぬものは、ない。世間ではそういうのですが、さーて」

あれが吉岡憲法と闘って引き分けた、宮 本武蔵という剣士……

武蔵の名が広く知られるにつれて吉岡憲法の名にも箔がつく。今宮の下り松で武蔵との試合を公開したことで、西岡憲法の名は親近感を増した。

武蔵にも門人ができた。門人の第一号の吉太郎が、いつのまにか先輩格の門人の位置におさまった。

商人である父から勘当された身の上だそうだが、父はひそかに吉太郎の暮らしを援助しているらしい様子だ。期待されているのはあきらかである。

吉太郎が、ふっと声を落として、

「本阿弥さま、ご存じですかな・・・」

「わしは剣士だ。剣士が、京都の本阿弥の名も家業も知らずに、すむものか」

「本阿弥さまの家業の程度が、どれほどのものか、ご存じかと……」
「そういわれると、なるほど、わしは本阿弥を知らない。」

本阿弥の家業——刀剣の研ぎと鑑定——の規模がどれくらいのものか、かんがえたこともないのである。

「お店のなかを、ご覧になったこともない……」

「ない」

布袋屋さんのお声がかかりなら本阿弥さまの店のなかをご覧になれますよと、吉太郎がいった。

武蔵は大小二本ずつの刀をもっている。

刀は研(と)がねばならない。

切れ味が劣化するとか、刀身の輝きが薄れるとか、そういった実利のこととは別の、刀と剣士のあいだの気の交流といったものがある。気の交流を盛んにしておくために研ぎ屋に研ぎに出す、といったような。

刀をそだてる、養生する。刀を研ぐのはそのようなことではない

かな

素っ気ない、あくまで冷淡な武器、それが刀というものだ。

刀のほうから剣士に歩み寄ろうとする気配は皆無である。

剣士のほうから刀に歩み寄って、どうかよろしく頼むぞよと懇願して、その気になってもらう。

その気——敵のからだを斬ってやろうという気——になってもらうために研ぎに出すような感じである。そのくせ、刀がそこにあるだけでは、柔らかい草の葉の一枚も斬れないのである。

一年も二年も研がぬ刀で、はたして人間のからだを斬れないものなのか、どうかというと、経験がないからわからない。

ならば、ためしてみればどうか。愛刀を長期にわたって研がずにおいて、敵のからだを斬ってみれば、すぐにわかることだ。だが、そんなことは恐ろしくて、できるものではない。

そういうわけで、剣士というものは刀に、刀の研ぎということに縛りつけられているのである。研ぎ師のいない世にほうりだされたならば生きた心地がしない、それが剣士の心境だ。

だが、剣士がじっさいに研ぎ師を尊敬することはない。長年のつきあいの研ぎ師を呼んで刀をわたし、研ぎを頼み、研ぎ終わったのをとどけてもらって、それで終わり。

武蔵もそうであった。だから、研ぎ師の作業の実態を観たいと思つたことはない。

本阿弥の三事という言葉があつた。刀剣の目利き（鑑定）・研ぎ・拭浄（ぬぐい）である。

本阿弥の三事といえば他人の目には触れさせぬとされ、その閉鎖性が神秘の感じを高めることにつながっていた。そういうわけだから、本阿弥の技を観たい衝動はわかないのがふつかである。

だが、吉太郎に誘われ、とつぜんに「研ぎの作業を観たいものだな！」

興味がふつふつと湧いてきたのは本阿弥だからだ。京都の研ぎ師の本阿弥、それは研ぎの業界では格別に有名な名であつた。

「布袋屋に、いつてくれ。武蔵が本阿弥の研ぎを観たいと切望して
おる、そういつてくれよ」

「他言なさいませぬように……」

吉太郎が唇に指をあてて、秘密の厳守を迫った。本阿弥の技を観
るのは、これほど大変なことなのだ。

本阿弥の研ぎの作業を観られるまで、手続きはかなり難航してい
るようであった。祈るような気分で武蔵は待ち、とうとう吉太郎が
「ゆるしが、出ました！」と告げてくれたときには、

「やはり、吉岡だ。吉岡の名の威力はすごいものだな」

あらためて感激した。

吉岡と試合をして、相打ちとなった。そのあとから吉岡と交際す
るようになり、いまはその吉岡の名によって本阿弥の研ぎの作業を
拝見できることになった。

本阿弥の研ぎを観ることをゆるされた剣士ということで、武蔵の
名は一段と高まるはずだ。

さて、その日があった。

布袋屋が「では、まいりましょうか」と、おのれの緊張を解くつ
もりでもあったのだらう、わざとらしい気軽な調子でいって、元新
在家の吉岡の屋敷から連れだつて、出た。

吉岡と本阿弥の屋敷はほとんどとなりあつていいといつていい。

元新在家に吉岡の屋敷、そこから西へ元本満寺町、元兼康町、仲小
川町と町数は多いが、面積にすればたいした広さではない。仲小川
町の西の実相院町と水落町、北船橋町の三町にまたがって本阿弥の
屋敷が点在していた。

「町の名をいつても、わかりにくい。本阿弥の辻子(ずし)といえ
ば、
すぐに通じます」

案内を乞うまでもない。このあたりまでくれば、出入りする職人
の緊張の雰囲気では本阿弥の屋敷だと知れる。

当主の光悦は永禄元年（一五五八）の生まれ、四十八歳。武蔵よ

り二十六年の年長である。この日、光悦は武蔵に對面しない約束になっっている。

こちらからどうぞ——作業場の一角に案内された。武蔵と布袋屋のふたりは、存在しない存在ということで拝観をゆるされている。

刀の神秘を信じているひとには、なんとも無惨に感じられるだろう。刀が武士の傍にあるときには、ふつうは一本、多くても二本である。三本より多い数の刀がならばことはめったにない。

それがここでは、何十本何百本という数の刀が、放り出されてはいないにしても、まるで無造作にならんでいる。

反対に、刀など、所詮は殺傷の道具にすぎぬ、神秘もなにもあるものかと、ひごろは刀を冷たく観ているひとなら、作業所を満たす神秘の雰囲気背筋が冷えるはずだ。

武蔵は生唾を呑みこんだ。

喉がごくりと鳴ったのを布袋屋にきかれはしなかつたかと、気がかつた。

ひととおりの作業を観て、去った。お礼の挨拶はしない。存在していない存在という扱いだから、挨拶をすれば失礼になる。

「ナムミヨウ、ハウレンゲキヨウ……」

武蔵の耳に法華経をよむ声がとびこんできた。ひとりやふたりではない、十人、いや二十人とまとまった数の誦経の声だ。

本阿弥は法華である——そういうことを武蔵も知っていた。そのことに不審があつたのではないが、本阿弥では法華がどのように信仰されているのか、信仰のかたちを知りたいという気が、漠然とあつた。

出雲阿国が天満大自在天神に背をむけて踊つたのを観て魂を揺すられた。それからというもの、信仰についてかんがえることが多くなっている。

本阿弥では、刀を研ぐ職人が、刀を研ぐ合間に、一同でそろって

法華經を読んでいるのだ！

さつきまで居た席にとんでもどって、法華經を読む職人の表情を観察したいものだと思った。

無理にきまってはいるが……

足を止め、ふりかえった武蔵の顔に、布袋屋が、なりませぬと視線で合図する。布袋屋に止めてもらって、気がゆるんだ。

「法華の方々は、いま、ご公儀に気兼ねをしながら信仰なさっております。まわりの者があれこれ手や口を出すと、それがきっかけで、どんな迷惑がかかるかもしれませぬ」

布袋屋の宿にもどって、膝をつきあわせ、法華宗のことを語りあった。語るのもっぱら布袋屋、武蔵が聴く側にまわる。

日蓮の弟子の日蔵と日朗によって上総(かずさ)から京都に日蓮宗がつつたえられ、ひろまった。

はやくから日蓮宗をうけいれたのは豪商であった。後藤、狩野、茶屋、そして本阿弥などである。

豪商は分家によって商売の規模をひろげるが、分家の増加は分裂につながるおそれがある。多数の分家をまとめ、たがいの協力を維持する要として法華の信仰が役にたった。法華宗では「異体同心」という言葉が尊重される。

法華宗が大切にする横のつながりは、京都の町の運営にも役にたった。戦争ばかりしている武士勢力を相手にせず、頼らず、市民のちからだけで町を運営してゆく組織の中心を法華の信徒がにぎった。「法華一揆」という言葉がこの状況を表現している。

町の運営と商人の営業——法華宗は二重の同心円で京都の町を牛耳っていた。

天台宗や武士が京都の法華宗にはげしい攻撃をかけた。

天文五年（一五三六）に法華宗の二十一本山が攻撃されて全焼した。法華本山は和泉の堺に難をのがれた。

やがて帰京をゆるされた法華宗は、まえにもまして横のつながり

を強化した。

織田信長は、この状況を嫌悪した。

信長の意図は「天下布武」である、おのれの武力のほかには、いっさいの権力権威を存在させない意志が「天下布武」の言葉にしめられている。

信長は浄土宗をつかつて法華宗に宗論をしかけ、敗北させた。法華宗は「他宗にたいして宗論をしかけませぬ」との詫び証文を提出して、かろうじて滅亡をまぬがれた。

信長の天下を継承した秀吉は、京都に方広寺をたてた。大佛の開眼供養として千僧による読経が計画された。

だが、京都の法華宗のうち、妙覚寺の日奥(にちおく)と、日奥に共感する僧は出席を拒否した。

日奥の出席拒否の理由は鮮明に表明されていた。

「われら法華宗はもともと不受不施(ふじふせ)を原則といたします。せつくながら、他宗の信徒である太閤秀吉さまのおまねきで経を読むわけにはまいりませぬ」

法華経だけが唯一正統の經典である。法華経のほかの經典は邪經である、邪經を信じる他宗徒と宗教のうえの交際をすれば、法華経を汚すことになる。でありますから、われら法華の徒は大佛開眼供養には出席できませぬと弁論した。

だかこのころ、法華宗のなかには不受不施の原則を柔軟に解釈するうごきがうまれていた。かれらは、秀吉の叱責をおそれ、千僧読経供養に出席した。そして、日奥を排斥するうごきをおこした。

日奥と、日奥に共感する日蓮宗の僧は迫害された。多数の僧が流罪された。かれらにたいする尊敬を捨てない法華の徒は、みずからを「不受不施派」と呼んで、迫害のなかに信仰をつづける道をえらぶのである。

秀吉の不受不施対策は徳川家康にもうけつがれた。法華宗のなかの妥協派の裏切りもてつだって、不受不施派は禁教される予想が出てきている。

「本阿弥の法華信仰は……」

「そこです。本阿弥が不受不施を知らぬはずはないのです。不受不施のかがえかたは日興が創始したのではなく、宗祖の日蓮からつづく伝統なのです。不受不施を知らぬ信徒は法華の信徒はいえないといつても、まちがいではない」

「われらの法華信仰は不受不施とは無縁です……そういう顔をしなければならぬというわけ……」

「むずかしい」

「それでも、法華の信仰を捨てるわけにはいかない……」

「本阿弥一族の団結は法華信仰を柱としておるのですから」

武蔵は溜め息をつく。

法華経の刀——こういう言葉があるはずはない。しかし、本阿弥にあずけられ、本阿弥で研がれ、もどされてくる刀は法華経の刀といわなければほかに言い方はないような気がするのだ。

あんなに、すごい技をもっているのに……！

それなのに、法華経のちからを借りなければならぬという。

本阿弥で研いでもらった刀は、法華経の信徒でなければ使えないのではないか。打ちこんでも、敵の肌にあたって、はね返されてしまうのではなからうか。そんなことが、あろうはずはないのだけだ——

本阿弥光悦というひとに逢いたい——とつぜん、そういう想いがこみあげてきた。

問うてみたいのは、ただひとつ、

「刀を研ぎ、拭うあなたと、法華経を読むあなたとは別人なのですか。それとも……」

武蔵は決意している。

わしが宗教のちからを頼りにして剣をふるうことはない。断じて、ない

だが、決意というものは脆弱ぜいじくなものだ。ときには手で触

れ、元氣をつけてやらなければ崩れてしまう。

武蔵は、おのれの決意をちからづけてやりたい。神や佛のちからを借りずに剣をふるう剣士になる決意を激励してやりたい。

神や佛を柱にしなければ一族の団結がたもてないのだそうだ、本阿弥は。

わしには、一族とか一門とかは縁がないのだ。神も佛も無用なり、こういうことになるのではないか

とつぜん、出雲阿国のかぶき踊りを観たい衝動がこみあげてきた。あの女の、なにもものも恐れぬ踊りの姿を観ていると、わしは、勇気がわいてくるのだ

布袋屋という男は、武蔵を興奮させて楽しむ癖があるらしい。

「本阿弥の屋敷、お気に召したようですな」

「よいものを、観させていただいた」

そういつていただくと案内したこちらも嬉しくなりますと布袋屋は調子をあわせ、武蔵の気をくすぐるような視線で見あげて、

「このつぎは、観世を、いかがでしょうか」

誘ってきた。

「観世……観世の、なにを？」

「お屋敷ですよ。またまたお屋敷かと、お飽きなさるかもしれませぬが」

本阿弥の屋敷からほんのすこしだけ西へゆくと、そこに観世の屋敷があるのだと布袋屋はいう。

知らなかった。いや、もちろん、観世の名は知っているが、こんな近くに観世の屋敷があるのは知らなかった。

本阿弥にくらべれば、観世の屋敷はよほど気楽だという。とにかくにも、観世は観てもらおうのが家業ですから、そこに気楽なところがあるのでしょうなと布袋屋はいい、しかし、観世は観世ですからな、気楽なばかりが取柄でもなさそうですと付けたした。

見せてもらうよ、面倒でも案内を頼むよと武蔵は念をおした。

本阿弥屋敷のある北船橋町の西が北猪熊町で、その西が観世町、観世の屋敷は観世町にあった、いや、観世の屋敷ができたから観世町の名がついた。

相国寺の西が花の御所、御所の西に吉岡屋敷、その西の本阿弥屋敷、そのまた西の観世屋敷と一直線にならんでいたのだ。

壮観の基点は花の御所だが、焼けてしまって、いまはない。

御所の主たるべき征夷大將軍の足利氏も消えてしまって、三河の徳川氏が新しい幕府の初代將軍に任じられた。一昨年のことである。徳川の居城のある武蔵の江戸に幕府はたてられた。

十四世紀のなかごろ、観阿弥(かあみ)が伊賀の小波多で猿楽の一座をたちあげた。やがて大和の結城に出てきて興福寺に属した。

文中三・応安七年(一三七四)、観阿弥の子の世阿弥(ぜあみ)が京都の新熊野(いまくま)神社の社頭で演じた猿楽が三代將軍の義満に称賛され、庇護をうけることになる。まもなく、本阿弥屋敷の西に観世屋敷と土地があたえられた。

義満なきあと、観世座には不運が襲った。世阿弥が將軍義持や義教に疎(うと)まれ、世阿弥は佐渡に流罪されたこともあった。

だが、やがて勢力をとりもどし、いまや観世座は猿楽四座の筆頭の位置にのぼりつつある。

当主はお目にかからないとの約束である。そのほうが気楽だ。弟子たちの稽古の様子をたつぷりと拝見した。

猿楽の、どこがいいのか、よくないのか、武蔵にはわからない。わからないものと頭からきめてかかっているから、これまた気楽である。

お礼をのべて帰り道、またまた布袋屋の宿で語りあった。

猿楽の四座は徳川將軍に贖(あが)される権利をめぐって、熾烈(しわ)な争いをくりひろげている。それくらいの知識は、武蔵にもある。

「將軍家の覇屑になるときまれば、街のなかに舞台をつくって有象無象（うちげう）、大勢の者に観てもらうのは許さぬ、こういうことになりはせぬかな」

武蔵の疑問は、ここに焦点がある。

政治の権力は強大、磐石であるように見えながら、そのじつ、衰えがはじまると急速で容赦がない。そのことは、花の御所の没落、足利將軍家の滅亡というかたちで、観世にもわかっているはずではないか。

「街のなかでうようよしている民は権力はない、カネはない。だが、消えるということはないのだ。ならば猿樂の座は、街の民を相手にするほうが永遠の繁栄を見込めるのではなかるうか」

「それでも競争は避けられないのです」

布袋屋が冷めた表情でいう。將軍家の覇屑をうければ、競争の場に身を晒さずにすむ。それが座としてはありがたいはずですと布袋屋が意見をのべた。

「將軍家の覇屑をうけ、座としての安泰が保証されたあとで、街や村の民を観衆とすることをかんがえるのは可能でしょう」

「競争……」

武蔵は唇をかんで、つぶやく。

おのれもまた剣技の競争の世界に身を入れてしまった。その事実の重みを痛感して、苦しい将来を予想して唇をかんでいる。

おくに……

なんの予告もなく、ひょいっと出雲阿国の名と顔と、狂おしい舞台の姿がうかんできたのだ。

「はあ……？」

布袋屋が武蔵の顔をのぞきこんで、不安げな表情である。

「出雲の阿国……」

「ははあ……」

「あの女は競争の場にわが身を晒（さら）すことはない。そうであるう！」

布袋屋は狼狽している。

猿楽の座の権威とか將軍家の鼻屑とか、高いところの話題のなかに、とつぜん武蔵が、出雲阿国などという低いところのはなしをもちこんできたのだ、狼狽も無理はない。

「まあ、阿国の芸を真似ようという者はおりませんからな」

「真似たい者はいくらもある。だが、ほかのだれにも、真似できないのじゃ！」

阿国にたいする自分の羨望の中身が、ようやくわかってきた。

阿国は將軍家の鼻屑などは必要としない。粗末な舞台をつくって登場するだけで、観衆がおしかけてくる。

將軍が観たいといえば、阿国は推参する。家康の御前で踊ったのも知っているが、阿国が是非にと望んだわけではない。

「阿国……うらやましいぞ！」

布袋屋は、あきれた顔。

相国寺のお坊さんを師として、学問と絵をまなぶ。

「ともかくもわしは禅の僧侶だ。『論語』や絵はいわば外道にすぎんのだからな、叱られるかもしれぬ」

「師が叱られるときには、わしが黙ってはおらん」

「そのときのために剣技を磨いておるわけでもあるまいが……」

冗談をいって楽しむ師と弟子である。

『論語』もいいが、それよりは『史記』だろうと師僧がすすめるので、『史記』から読みじめた。

「おまえさんのような境遇を、あちらでは『刺客』と呼んでいたよ
うだ」

「刺客とはおだやかではない。殺すために剣をにぎるわけでは……」

「その刺客とは意味がちがうようだ。まあ、読んでみなされ」

師僧が「曹沫(そまつ)は匕首(ひしゅ・あいく)をとりて斉の桓公をおびやかせり」と読みあげ、つづけて武蔵が「曹沫は匕首を……」
とくりかえす。

曹沫は勇敢かつ大力を愛されて魯の莊公に仕え、將軍となった。

魯は斉と三度鬪つて三度ともやぶれ、莊公は領土のうちの遂邑(すいゆ)をさしだして和睦しようとした。

斉の桓公と莊公が柯で会見して和睦をむそぼうとしたとき、曹沫は匕首を手にして桓公につきつけ、脅迫した。桓公の側近たちは曹沫の威勢におそれ、手も出せない。

「おまえは、わしに、なにを望むのか」

「斉は強く、魯は弱い。魯にたいする斉の侵略は残酷に過ぎ、いまや斉は魯におおいかぶさるうとしております。どうか、政策をあらためていただきたい」

おそれた桓公は、うばった領土を魯に返還すると約束した。

曹沫は匕首をおさめ、しりぞいて臣下の席にすわった。顔色も変わらず、言葉づかいも常のとおりになった。

桓公は怒り、たつたいまの約束をやぶろうとした。すると曹仲(かちゅう)が主君の桓公を諫(いさ)めて、いった。

「なりませぬ。些細な利のために約束をやぶると、諸侯のあいだの信用を無くし、天下の助けをうしないます。遂邑は魯にもどしてやるのがよろしゅうございます」

桓公は曹仲の諫言(かげん)を容(い)れ、遂邑を魯にもどしてやった。

「ははあ。曹沫のような人物を刺客と呼ぶわけですな」

「切羽つまった状況を、刀にものをいわせてきりぬける、とでもいおうか……」

師僧は「予讓(よじょう)という名の刺客もおった」といい、予讓の項を読みはじめた。

「予讓は晋のひとなり……」と師僧。

「予讓は晋のひとなり……」と武蔵。

予讓は范氏(はん)と中行氏(ちゅうこうし)に仕えていたが、名をあげもせず、認められることもなかった。去って智伯(ちぼく)に仕え、重用された。

智伯は趙襄子（ちうはうし）と闘ってやぶれ、智伯の髑髏（どくろ）には漆が塗られて酒杯となった。

予譲は姓も名も変えて受刑者になりすまし、趙襄子の城の厠（かや）の掃除人になって復讐の機会をうかがっていた。

趙襄子が厠にはいったところ、胸騒ぎがしたので厠を搜索すると、刀をふところに隠した予譲が発見、逮捕された。尋問にたいして予譲は「智伯さまの仇を討つつもりであった」と述べた。

厠の役人は予譲を殺そうとしたが、趙襄子はそれを制して、いった。

「かれは義士である。わしは、かれを避けることにしよう。智伯は死んで跡継ぎもないのに、臣下が仇を討つのは正義である。義士であるうえに、優れた人物だ」

釈放された予譲は、からだに漆を塗って癩患者をよそおい、炭を呑んで声を変えて市場を歩いてみたが、妻も気づかなかった。

だが、友人のひとりが気づき、涙をながして予譲にいった。

「あなたほどの才人が趙襄子に身を寄せて仕えるなら、かならず重用してもらえる。となれば、智伯さまの仇を討つ機会はいくらでもできるではないか。からだを傷つけ、姿を変えて趙襄子に怨みを晴らすのは、かえって困難ではないか」

予譲がこたえた。

「殺すつもりで仕えるのは二心をいやくことである。わしは、やらぬ。姿を変えているのは苦しいが、二心をいだいて主君に仕える者どもに恥とすることを教えてやるために、こうしてある」

趙襄子が外出するのを知った予譲は、橋の下に隠れて待った。趙襄子が橋をわたろうとすると、馬が騒いだ。「予譲が隠れておるにちがいない」と、しらべさせたところ、はたして予譲であった。

趙襄子は囚われた予譲を、こんどばかりは非難した。

「おまえが以前に仕えた范氏も中行氏も、智伯によって滅ぼされた。だがおまえは、智伯を討って范氏な中行氏の仇を討つどころか、智伯に仕えた。その智伯もいまは死んでおるのに、なぜ、智伯の仇を

討つのをやめないのか」

趙襄子に詰問にたいする予讓の弁明はつぎのとおりであった。

「范氏も中行氏も、わたくしを重用なさいませんでした。だからわたしも、並みの程度の臣下としてお仕えしたのです。並みの臣下が主の仇を討つことはありませぬ。智伯さまはわたくしを国士として扱われました。だからわたくしも国士の覚悟でお仕えするつもりなのです」

国士とは憂国の士、一身を投げだして国のために行動するひとの意味である——師僧は説明をはさんで、また朗読にもどる。

趙襄子は深い溜め息をつき、感激のあまりに涙をながして、いった

「智伯にたいするおまえの忠義の名分は充分に立った。おまえを赦すわしの度量も、これが限度である。好きなようにやるがよい。わたしは、これ以上はおまえを赦すわけにはいかぬ」

予讓がこたえた。

「以前、あなたは、わたくしを赦免なされました。このことにより、天下はこぞつてあなたの英明を称賛しております。今日の件について、わたくしは死罪をおうけいたします」

ここで言葉をきり、気をおちつけて予讓はつづけた。

「お願いがございます」

「よし。もうせ」

「あなたの上衣をいただき、それを斬って仇討ちのしるしといたしたいと存じます。ゆるされますならば、死んでも遺恨には存じませぬ」

趙襄子は感激し、上衣を脱いで予讓にわたした。予讓は剣をぬき、上衣に三度も飛びかかって斬り裂いた。

「これでわたくしは、地下の智伯さまにお目にかかれる！」

予讓は叫び、剣でわが身を貫いて死んだ。趙襄子の国の民の、こころある者は、

「予讓のために涙せり」と師僧。

「予譲のために泣せり」と武蔵。

「まだあるんだがね……」

師僧はいつて、武蔵の想いを探る目つきをした。二名の刺客の頂目を読んだいま、『史記』における、あるいは中国における刺客というものの評価について武蔵の感想があつてしかるべきではないと、師僧の目つきは誘っている。

「いかにして剣をつかうか、よりも……」

息がつまる、苦しい気分になった。だから言葉もつまった。ちがう世界に、とつぜん突き出された感じである。

視野のなかに、ちかちかと光っているものがある。光っているものの、そのまたなかにきらりと輝いたのは剣だ。

これまでに見たことはない——大声で断言してかまわない——剣の輝きである。

「いかなる場で剣をつかうべきなのか、のほうが重要なのだと……」
いつていることが、われながら明瞭ではない。ほかに代わる言葉がないから仕方なく口になっているが、本心では別の表現をしたい、するべきだと思っている。

剣をつかう場の選定、あるいは決定、これが重要なのである。剣の使い方はどうでもかまわないというのではないが、すくなくとも場の問題よりは重要ではない。

わしは、剣の使い方ばかりに頭を使ってきたが、まちがいなのか、無駄であつたのか！

師僧は、どこか愛すべきところのある弟子の武蔵が煩悶しているとみた。

「曹沫の剣は、正しい場でつかわれたといつていいのかな？」

師の僧は、武蔵野問いに答えることで武蔵の煩悶は解消するとみているようだ。

「曹沫の剣……ああ。もちろんです、正しい場においてつかわれております。だから、曹沫の剣は光っている、輝いている」

「曹沫の剣は血塗られなかった。それでも正しくつかわれたといえるかね？」

師の問いの言葉がおわらぬうちに、武蔵の答えの言葉は用意されていた——「よろしいのです、正しいのです」

だが、それをいうには勇気が要る。

いつてしまうと、取消しができない。だから勇気が要る。

「正しいのです。曹沫の剣は正しくつかわれました」

武蔵の言葉に張りが出てきた。予譲の剣も正しくつかわれましたと、師に問われるより先に答えた。

「刺客とは、剣をつかう正しい場を知っている者ということになるわけだな……」

「あるいは、正しく剣をつかう場をさがしもとめる者とも……」

「宮本武蔵よ。わが国では刺客といわずに剣士とか、武者修業の者とかよぶが、剣士とはなんぞや——簡潔に表現すると、どういうことになるか？」

武蔵は答えに窮した。

師よ、その問いに答えるには、わたくしはまだ修業が足りませぬというのが精一杯であった。

慶長九年（一六〇四）のおわりごろ、武蔵は京都から奈良へ行った。

興福寺の塔頭のひとつ、宝蔵院に槍術がつけられていた。宝蔵院槍術の祖は覚禅房法印胤栄（いんえい）である。胤栄はまず槍をまなび、つぎには上泉武蔵守信綱に剣をまなんだ。柳生宗厳と同門である。

胤栄は宗派の異なる日蓮宗の奥蔵院の道栄（どうえい）に剣技を伝授したのだが、法の弟子の胤舜には伝授しないまま、没した。佛門の身をおく者が武芸に精出す功罪の、功よりも罪を重くみたのだろう。

だが、胤栄の法の弟子の胤舜は武芸に興味があったから、槍術をまなんで後世につたえたいと思って奥蔵院にまなび、宝蔵院槍術の

二代目を名のつていたといわれる。

武蔵が期待したのは奥蔵院道栄である。道栄のほうが上泉信綱の剣技をよくつたえているとかんがえたからだ。

京都の吉岡のつぎは奈良の奥蔵院と、武蔵はかねてから目標をさだめていた。

「奈良へゆきます」

「槍か、奥蔵院……」

相国寺の師僧は武蔵の計画を知っていたらしい。

「怪我をするなよ。いやいや、剣士にむかって『怪我をするな』は無用の注文というものだろうが、ともかくも怪我はするな、怪我はつまらない」

道栄にも怪我はさせるな、の意味であるのがわかった。

奈良へゆき、道栄に「立ち合いを所望いたす」というと、気軽に応対してくれた。武蔵の名は知っていたらしい。

「われらの道具は十文字の鎌槍(くさげ)だが、よろしいかな」

「十文字の鎌槍……かねてから願っておまりした」

武蔵は短い木刀である。

かまえて、打ちこむ。

はなれて、かまえて、打ちこむ。

わずかばかり武蔵が優勢であったが、武蔵の勝ちというほどではない。

勝負はきまらなかった。

「まだ、お望みかな！」

荒い息を吐いて、道栄がたずねる。

「充分でござる！」

感謝の気持ちをこめて武蔵が告げ、それぞれ槍と木刀をひいた。

「今宵のうちに京都におもどりにならねば、なりませぬかな」

道栄は武蔵を帰したくない様子だ。武蔵は誘いに応じ、その夜は寺に泊めてもらって剣技の談話に興じた。

はじめのうちは双方に緊張があったが、上泉武蔵守信綱の名が出て、武蔵が「武蔵」の名のりの由緒を披露すると、たちまち和（な）んできた。

「武蔵守さまにはお逢いしたかったが、とうてい、かなわぬこと」「お亡くなりになって……」

「三十年はすぎたでしょうか」

師の胤栄の思い出を通じて武蔵守信綱の風貌を想像してみるが、これがなかなか容易な技ではないと道栄は苦笑する。

胤栄が、なぜ武芸に興味をもったのか、見当がつかないと道栄はいった。そもそも武芸を連想させる風貌でもなかったのにと。

「武蔵守さまが宝蔵院をたずねられたのでしょうか。それとも、胤栄さまがお招きになられたのか……」

「武蔵守さまが、ご自分でたずねてこられたのであろうと……」

柳生宗厳に逢うべく、信綱は大和に足を入れたのだろう。柳生とふたりで剣のはなしうしているうちに、

「奈良の宝蔵院、胤栄とおっしゃる僧が武芸に興味をもっておられます」

柳生から信綱に教えたのだろう。

僧侶と武芸——異風なもの取り合わせに信綱は興味をもったにちがいない。案内も乞わずに、信綱が宝蔵院をおとずれたのだ。

槍の術は得意ではありませんがと、信綱は謙遜しつつも胤栄に教えた。目標をさだめたら最後、奥義をきわめるまでは退かない胤栄の強靱は信綱を感激させたと思われる。

「ああ……」

武蔵がとつぜん声をあげ、道栄をおどろかせた。

「槍術のなかに、世を救い、ひとを導く法があるかもしれぬと思われたのでしょうか、胤栄さまは」

「槍がお好きだから、というわけではない。それはたしかです」

「わたくしは、剣が好きなのです。剣技によって生きていける、そのようになりたいと思っています。わたくしのような者を胤栄

さまがご覧になると、なんと思われるでしょうか」

武蔵の、この言葉は、頭のなかで工夫して出てきた言葉ではない。胤栄の武芸への関心は世を救い、ひとを導くものだとする、おのれはどうなのだ——ここまでかんがえたところで、すらすらと出てきた言葉だ。

わしは、剣技が好きだ。好きな剣技で生きられれば、これほどの幸運はない

おのれを発見した。

確信がわいてきた。

好きだから、剣技をやる。

剣技が好きだから剣士として生きる道をさがし、ひろげる。これでいい。

奥蔵院を去るとき、武蔵はこころの底からの感謝の意を表したいと思つたが、その気持ちがあまい言葉にならない。

武蔵の焦りを察したのか、道栄は「胤栄さまとは別な道をおゆきになる。それが武蔵殿の運命のようですな」と、ほがらかにいつてくれた。

- 1 1 5 -

「京都へ、おもどりになる……」

荷物をまとめて、吉太郎がたずねる。西でも東でも、武蔵が指さす方向に、いつでも、どこまでも付いてゆきますよと誘っているような快活な調子である。

「観たいものが、京都にはまだ、いくらものこつておる気がする」

わしらの師の武蔵は良き思い出を奈良にのこして京都へもどるのだ、吉太郎には、そういう雰囲気を手にとるようにわかった。

(7 章 終)

奈良から京都へ――

木津川をわたろうとしたとき、

「ご存じですか、伊賀の穴戸……？」

吉太郎が怪訝（げん）な顔つきで、いう。穴戸という名に武蔵はおぼえはない。

奈良を出たときから何者かにうしろを跟けられているような、奇妙な感じがあると吉太郎はいう。

木津の渡しで、吉太郎が船頭と交渉していると、うしろから声がかかった。

「宮本武蔵殿の門人……と見受けたが」

かすかな記憶がある。奈良の宝蔵院を出たとき、目の前をつーつと走って消えたのがこの男である。

厭な感じだが、知られているからには隠すのも悪いとかんがえ、「そうだ」というと、男は懐からちいさく畳んだ紙を手渡し、さーつと消えていった。

「これが……」

吉太郎が武蔵にわたしたのは、穴戸という剣士からの招待状ともいえる、挑戦状ともいえる一通の書状である。奥蔵院におけるお手並みを拝見し、感服いたした。ついては一手のご教授をねがいたいというのである。

「穴戸……？」

はじめて耳にする名である。そもそも武蔵は伊賀や伊勢についてほとんど知識がない、播磨の出だから無理もないが。

「どう、なされます？」

拒否すると、「武蔵は逃げた」と宣伝されるはずだ。この、穴戸という剣士の得意な道具がなにか、知らぬけれども、自信の様子が挑戦状の言葉のはしはしからうかがえる。

「ゆかぬわけには、まいらんな」

そこへ男がちがづいてきて、案内をするという。

男は別の一枚の書状をもっていた。「よろしかろうな」とことわり、渡し場の小屋のまえに立札をたて、書状を貼りつけた。武蔵が挑戦に応じるとみて、なにからなにまで支度ができている。

書状には、「伊賀の剣士の穴戸は在京の剣士の宮本武蔵と木津川上流で試合をおこなう、云々(うんん)」と書いてあった。

「承知なされた旨、一筆だけでも書きそえていただけよと主人からいわれておるのですが……」

なるほどなと武蔵はうなずき、「穴戸なる剣士と試合をいたす。宮本武蔵」と、穴戸の字のとなりに書き足した。

男がてきばきと動いて、渡し舟ではない、ちいさな舟が用意された。木津川をわたって山城へもどるはずが、妙ないきさつで木津川をさかのぼることになった。

「穴戸とは、木津川の上流の地名であるのかな？」

武蔵の問いに、男はこたえない。吉太郎がかわって、「丹波の園部にシシウドという村があります。穴人と書きますが、穴戸とはゆかりはなさそうです」といった。

冬がちかい。

木津川の水は多くはないが、ときとして激しい瀬にさしかかる。すると、南の岸から三人、五人と男があらわれ、だまって舟を押しあげる。瀬を越えると、消えてゆく。穴戸という剣士はこのあたりで勢力をもっているのがわかる。

このままさかのぼると、伊賀の上野に出るはず。すると、穴戸は藤堂高虎の臣下なのか

大名の臣下の剣士を相手にすると、後始末に困ることがある。浪人の立場の剣士なら、だれでも知っていることだ。だが、穴戸の身分がどうであれ、約束してしまった。いまさらあとにはもどれない。

左右がひらけた岸辺に、男たちがあつまっていた。穴戸と武蔵の試合につれだされた連中、おそらくは穴戸の門人だ。

武蔵が岸に降りたつと、挨拶もなしに進んで出たのが宍戸であるが、宍戸の手にある道具を見て、武蔵はあつと思つた。宍戸の道具は鎖鎌である。

奇を衒(てら)つておる。これならば、負けはせぬ

農具の鎌の手に長い鎖をつけ、鎖の先に分銅をつける。分銅を磔のように飛ばして攻撃し、命中したら相手のからだに鎖をまきつけて引き寄せ、鎌の刃を打ちこむ。これが鎖鎌である。

鎖鎌の名はきいていたが、目で見るのははじめてである。

刀とちがつて鎖鎌は、遠い距離から攻撃がかけられる。飛び道具の性質もある。

鉄砲玉とかわらぬ速度で分銅は飛んでくるから、見えぬ。はね返すのは不可能であろうな

飛んでくる分銅より先に、こちらから飛ばせばいい——なにを飛ばす？——短剣を飛ばせばいいのだ！

宍戸は鎖のなかほどのところを指にかけ、鎖をぶんぶんと振りまわして分銅に勢いをつけている。

そうだ。分銅は自力では飛べぬ。鎖を振りまわして勢いをつけてもらわねば武器としての威力は無いにひとしいわけだ

鎖鎌の弱点がわかつた。この瞬間、武蔵の負けはなくなった。あとは、いかにしてうまく勝つかである。

爪先にちからを入れ、かるく跳んで突っこみ、短刀を抜いて投げた。

地に水平にではなく、やわらかな放物線を描いて飛ぶように、短刀を投げた。

放物線を描いて投げた利点が二点ある、鎖と短刀の性質の違いによる利点だ。

急速に振りまわされることによつて鎖は円弧を描くが、放物線状に投げられる短刀は円弧よりも高い位置に出る。鎖の円弧によつて短刀が搦めとられることはない。

つぎの利点は、短刀が穴戸の視線をひきよせ、穴戸の顔を上に向けたことだ。穴戸の視野から武蔵のからだが消えた。

そしてさて、短刀が投げられた瞬間に穴戸がからだを移動していたならば、局面は変わっていたかもしれない。

だが、それは、ほかならぬ鎖によつて不可能になっていた。猛烈な勢いで振りまわされる鎖と分銅は、穴戸のからだを独楽の芯としていた。独楽の芯である穴戸は、おのれのからだを移動することが不可能なのだ。安定度が強すぎるのである。後世の科学用語では「ジャイロの原理」と表現されるはずだ。

ただひとつ可能であったのは、鎖を手放すことであつた。こうすることで穴戸はからだの自由をとりもどせるわけだが、そのときは試合を放棄せざるをえない。

放物線を描いて空を飛んだ短刀は、見上げる穴戸の胸に刺さつた。このときの刺傷のほどはたいしたことはなかつたが、鎖の回転が乱れ、よろめいて地にたおれたのが穴戸の敗北をきめた。

たおれた穴戸を武蔵は木刀で打ちのめし、あわてて群がる弟子たちを追い崩して舟に飛びのり、太刀をかざして船頭を脅し、急流によつて木津をめざした。

「もう、見えなくなつた」

舟のなかに仁王立ちの武蔵は、うしろをふりかえり、穴戸の弟子たちの狼狽するさまが見えなくなつたのをたしかめて、太刀をおさめた。

「おそろしい目に逢わせてすまなかつた。こうせぬと、あとからおまえがうたがわれるからな」

船頭は頷いただけで、感謝の言葉はない。いまますぐにも木津の渡しに着岸する、言葉をかえすひまはなかつた。

木津に上陸したとき、日は暮れかかつていた。渡しの小屋のまえに立てた札の、穴戸と武蔵の果たし合いの書状が剥がれそうになつていた。

京都では布袋屋の出迎えをうけた。

「奥蔵院道栄との試合、首尾がよろしく、おめでとうぞんじます」
「もう、ご存じでしたか！」

吉太郎がおどろいた。自分が吉報を布袋屋に知らせるとばかり思っていたのだ。宍戸の鎖鎌のことはご存じかと吉太郎がたずねたのは、吉報を知らせる役回りが空振りになった腹癒せのつもりかもしれない。

「なんですか、その、宍戸とか、鎖鎌とかいうのは……？」

吉太郎が得意げに説明するのを、武蔵は苦い表情できいている。とつぜん挑戦をうけ、勝ったのはいい。だが、あのような奇を衝った 道具を得意とする相手だとわかったとき、咄嗟に立ち合いを辞退すべきではなかったのかと、この想いが武蔵の表情を苦いものになっている。

あの場で辞退したならば、宍戸は武蔵を卑怯者だと嘲笑する。木津の渡しの貼り紙に、宮本武蔵なる剣士は伊賀の宍戸の鎖鎌に恐怖して、立ち合わずに退散したと書きそえるだろう。

だが、卑怯者呼ばわりされる恥辱とひきかえに、鎖鎌との試合を拒否した誇りは獲得できたはずだ。それを誇りと観ぬひとは多いだろうが、ひとは、さまざまである。

武蔵の気分の重心は 宍戸と試合をやらねばよかった に、おおきく揺れた。

吉太郎の得々とした説明の調子が鈍ってきた。武蔵の苦い表情に気づいたらしい。

京都の街はますます騒がしくなってきた。大坂城の豊臣氏と、伏見の徳川氏とのあいだの戦争があるのか、ないのか、なんとも予測がつかぬところに最大の原因がある。

慶長十年（一六〇五）の夏には、ついに開戦かと思わせる事件がおこって、京都の街の騒ぎは頂点に達した。

四月に徳川家康が征夷大將軍を辞職し、息子の秀忠を二代の將軍

とする宣下があった。家康は大御所とよばれる身分となり、あいかわらず強権を行使している。

大御所となった翌月、家康は大坂の豊臣秀頼に「上京なされ」と呼びかけた。

豊臣秀吉の後継者の秀頼であろうとも、征夷大將軍のまえには単なる一個の大名にすぎない。この事実を秀頼に気づかせてやろうというのが上京催促の狙いであった。

秀頼がなんと思つたのかは不明だが、母の淀君の意向は鮮明、かつ強力なかたちでしめされた。

「上京など、いたさぬ。強いて上京せよというなら、わたしはまず秀頼を殺し、そのあとで自害する！」

大坂の意向を知つた京都の市民は、もはや開戦は避けられぬと覚悟をきめた。家財道具を車につみこみ、郊外の知り合いを頼って引越しをする者が続出して、往来は雑踏をきわめた。

秀吉に恩顧をうけた大名たちが家康の忍耐をねがつたので、戦争は回避された。

だが、戦争は避けられないとする空気が高まり、京都の街ははやくも臨戦の気分になった。

兵法という言葉に不思議な期待がかけられるようになった。

大局的な立場で兵法を使えば戦争は回避されるはずだといった、政治の学としての兵法である。

それとは別の意味での兵法のたいする期待もあった。戦争がはじまっても、兵法をこころえていれば命をうばわれない、負傷することもないといった、日常の術としての兵法の期待である。

子供たちも兵法の信奉者になった。

秀頼の上京の件が棚上げになってまもない十一月の二十二日、早めの雪が降った。

雪も溶けない二十五日、北野の森で子供たちの喧嘩があった。子供は喧嘩をするものだが、この日の喧嘩はふつうの喧嘩ではなかった。

出雲阿国が舞台をにかけていた。おとなは阿国の踊りに興じていたが、さすがの阿国も、子供たちの興味をひきつけられない。

阿国の舞台に背をむけた子供のひとりが棒切れをもって、

「エイ、ヤーツ」

空を斬る真似をしたのがはじまりだと、目撃者はいう。

「兵法者の真似など、しよって……観たこともないくせに」

「観たことは……あるぞ」

「わけがない。あるなら、いってみろ」

「親戚に、兵法者の叔父さんがおる」

「うそを、いうな。兵法者が親戚なら、お武家だぞ。おまえの家はお武家でも、なんでもない」

うそつきといわれた子が棒切れをふりあげて、打ちかかった。打たれた子のほうが年長だから、軽くかわして棒切れをうばい、打たれたよりも強力な反撃の一打を返した。連れが数人、双方の味方に別れて殴り合いをはじめて、おさまりがつかなかった。

観ていたひとり——おとな——が、こういったそうだ。

「こいつは、おもしろい。だれか、カネをはらってやるひとは、おらんかな」

それを耳にした別のひとが、大声で反論した。

「あほな。子供とはいえ、これは本物の喧嘩やぞ、兵法の見せ物やないんじゃ。本物にカネははらえん！」

見せ物ではない、子供の、本当の喧嘩にカネのはなしが出てきたのは意外だった。だれにとっても意外で、しかも、理屈好きにとつては、これほど刺激的な話題はない。

北野の森の子供の喧嘩のはなしをきいてきたのは布袋屋であるが、いちばん歓び、興奮したのは吉太郎であった。

武蔵はどうかというと、腕を組んで、言葉はすくなく、かんがえこんでしまった気配である。

子供たちは兵法者にあこがれている。いったい、なんのために？

武蔵の頭を、驚愕と問いが満たした。

剣士として生きる——剣士としての武蔵なりの生き方というもの
が予測されている。生き方をかたちにあらわすと、一直線ではなく
て、広い幅の帯のようなかたちをしている。

いちばん上には、理想のなかの、そのまた上の理想の生き方があ
る。武蔵が刀をさーっと振ると、一瞬のうちに天下がおさまり、悪
人はいなくなり、いつさいの貧苦や病苦が消えてしまう。

下のほうには、武蔵が刀をふるって悪人をひとりずつやっつけて
ゆく生き方がある。いつになっても悪人は消えないから、武蔵は焦
ってしまいが、悪人を退治することは止めない。なぜなら、それは
剣士としての最低の義務だから。

まんなかのあたりに、多数の剣士によって模範とされる武蔵の生
き方がある。剣士が武蔵の件の使い方、生き方を模範とし、つぎか
らつぎへと世代を継承して、武士一般に正しい剣の使い方を教える。
そうなれば世は安泰となり、武蔵は安泰の産みの親として永遠に尊
敬される。

北野の森で「兵法、兵法」と叫びながら喧嘩をした子供たち、か
れらは武蔵が思う生き方のうちの、いちばん下の生き方を真似よう
としている。

「やめろ！」

武蔵は思わず、叫び声をあげた。布袋屋と吉太郎が顔をこわばら
せた。

「いや。おどろかせて、すまなかった。兵法とか剣技とかいうと、
子供がすぐに喧嘩や斬り合いのことだとかんがえる。そういうこと
は、許せん！」

子供を門人にして、「そういうことをやってはならぬ」と戒めつ
つ、教えるか——武蔵はそんなことまでかんがえて、すぐに断念し
た。

子供のことをかんがえると、父と自分が喧嘩をした、あの播磨の
ふるさとの日が思いだされてしまうのだ。わしはまだ、子供を教え

るほどには大人になっていないと痛感する。

大坂と伏見のあいだの険悪な空気は、いったんは緩和された。

だが、ひたすら開戦を願う者もいたのである。浪人の武士と、軍需調達で儲けようとする商人だ。

戦争を待っているのに、その気配がない。働き場を得なければ、武功をあげてしかるべき仕官の先をみつげる機会さえもない。

浪人は焦り、京都の辻々で往来の者をからかい、いじめて鬱憤を晴らす。

ふつうの服装を脱ぎ、わざわざ「かぶいた」服装に着替えて乱暴をするところにかねらの屈折があった。極端に巨大な鬘をむすび、極々の長い太刀をさし、田楽役者がはくような高足駄をはきならし、地を摩るように長い袖の衣装をひるがえす。

われらはかぶき者じゃ！

われとわが身に号令をかけなければ、乱暴の勇氣も出ないのである。

かぶきの衣装ぐらいはかまわぬが、刀をぬくのはゆるせぬ！

武蔵は齒をくいしばって、悔しがる。刀をそのようにつかうべきではない。

浪人なら、まだ仕方がないということもあるが、大名に仕えるれつきとした武士がかぶき者の衣装で祇園や賀茂、北野で乱暴狼藉をくりひろげるとなると、ゆるせない。

慶長十一年（一六〇六）六月、こともあろうに將軍徳川秀忠の旗本が乱暴狼藉をして、旗本の身分を剥奪された。

かれらの氏名は判明している。稲葉甲斐守通重、津田長門守元勝、天野周防守雄光、阿部右京、矢部善七、沢半左衛門、岡田久六、大島雲八、野間猪之助、浮田才寿の十人だ。

かれらの乱暴した相手も悪かった、というと奇妙な言い方になるが、京都を代表する豪商の後藤家や茶屋家の女性に乱暴したのである。

後藤家は室町時代からつづく彫金師の家柄であり、後藤徳乗は秀吉の金座役として金貨の鑄造と刻印を独占した。茶屋家は生糸と呉服を商って成長し、徳川家の御用商人として貿易を管理する特権をゆるされていた。後藤と茶屋、これに角倉をくわえると京都三大豪商ということになる。

かぶき者は、その後藤や茶屋の女性が祇園や北野で散策を楽しんでいるのを無理矢理に酒店にさそって、酒を吞ませた。従者は立木にしぱりつけ、「声をあげれば斬るぞ」と脅迫した。

日が暮れて暗くなり、かぶき旗本が酔っぱらったのをたしかめて従者は縄を切り、女性たちをたすけて逃げ出して訴えたので旗本は咎められ、追放された。

ともかくにも、かれらは將軍の旗本である、開戦にならなければ路頭に迷う不安な境遇ではない。それにもかかわらず、主君秀忠の財政顧問格の豪商の家族、それも女性に手を出した。

おそれを知らぬ所行である——そう断じるのは容易だが、かれらの主の秀忠は肝を冷やした。

こういうことをやれば敵罰に処されるという恐怖を感じていないのである。主君の威厳に恐怖を感じない、主君を軽蔑している点でこれほど甚だしいことはない。

秀忠の処置は厳格すぎたかもしれない。

宮本武蔵は、どのように反応したか。

武士として刀をさし、將軍の旗本の身分を誇っており。そういうかれらが、刀の正しい使い方を知らぬ。世も末なりとは、これをいうのだ

このような——悪漢というべき——臣下を旗本に採用していた秀忠は、天罰をうけるべきであるか？

武蔵は自問自答して、

「秀忠も旗本も罪はある。だが、処罰は別々にかんがえねばならぬ」結論をくだした。

秀忠の権威と臣下、財産は父の家康からうけついたものである。

したがって、稲葉甲斐守通重など十人の始末は家康の意向をうかがってから決めるべきである。

稲葉など十人は武士にあるまじき所行、いいかえれば二本の刀をさすことをゆるされる身分にふさわしかからぬ所行をした。ゆえに臣下の籍から削るのは不充分である、命を奪うべきであつた。

「わすれぬうちに、あれを……」

吉太郎をうながすが、吉太郎には武蔵の「あれ」が通じない。あれを、あれを、とくりかえすうちに、ようやく吉太郎が「ああ、あの冊子ですな」と気がついた。

父の形見の冊子をうけとり、武蔵は書きたしゆく。

「武士といえども、世間の、ふつうの善悪の基準から外れてはならない」

「世間の善悪の基準を外した武士は刀をさすことをゆるされない」
ここまで書いたところで、悪魔の声のような声が頭のなかでひびいた。

武蔵よ。悪事を働いた武士が、刀をはずすことを拒んだときには、どうすればよいのか。答えよ！

答えはわかっているのである、武蔵が剣をふるって殺せばいい、殺さねばならない。

だが――

「命がいくつあつても 足らんなあ！」

布袋屋と吉太郎が顔をそろえて、

「わたしくしどもは師の剣技の門人でありますが、そろそろ、『何流の門人』と名のれるようにしていただきたい」

錯覚ということがある。自流を立てて名のるについて武蔵は慎重である、あるいは否定的であると思ひこんでいた。われらの師としては、このほうがふさわしいと思つていたふしもある。

それが錯覚であつた。

表情をやわらげ、とつぜん武蔵は宣言した。

「われらの剣技の名は円明（えいめい）流である。おまえがたに押しつけはせぬが、流名が欲しければ円明流と名のつてかまわんぞ」

「円明流……！」

よろこぶふたりに、武蔵はつげる。いまの技で満足してはおらぬから、円明流を表に出すのは気がすまなかつた。いずれ、流派の名を変えることになるから、そのつもりでいてくれと。

武蔵が「江戸へゆく」と宣言したのは慶長十一年である。

四月に柳生宗厳が大和の柳生で死んだ。八十歳だったという。

武蔵守さまに手をとって教えていただいたのは、奈良の胤栄師だけになった

しんみりとした想いに耽った武蔵である。

その宝蔵院の胤栄の寿命も長いことはなかるう。

時代は変わる。

年齢からいって、おのれは新しい時代の剣士であるが、はたして新しい時代の先頭をきつてゆけるだろうか。武蔵守や胤栄、宗厳の後塵を拝すだけで、うもれてしまうのではなかるうか。

不安の気におそわれた。

江戸へゆけば不安が解消されると思っているわけではない。不安と江戸ゆきとはつながっていない。すくなくとも、武蔵はつながりを意識してはいない。

世は変わる。

新しい世の中心は武蔵の江戸だ。江戸を観ておくにこしたことはない。

江戸にゆけば、新しい世の姿が見えてくるだろう。

それに——吉太郎にも布袋屋にもいわなかつたが——出雲阿国が江戸へいって踊るらしいとの噂を耳にした。

江戸で阿国とおなじ空気を吸う……悪くはない！

江戸ゆきはひとりでもさしつえはないが、吉太郎が、どうしても

連れていってくれとせがんだ。

「親御さんは、なんと？」

「あきらめておりますよ」

吉太郎は勘当同様の身の上なのだというのはなしを思いだした。こ
うなるについては武蔵に一片の責任がないわけではない。ならば、
江戸へ連れて行ってやるのが吉太郎の為にはなるだろうと判断した。
親のあとを継いで真面目な商いをやるのは、吉太郎には似合わない
かもしれぬ。

布袋屋が「首途(かど)八幡にお参りなさって、お出かけになりま
すか」と誘った。そのむかしに牛若丸、つまり源九郎義経が参詣し
て道中の無事を祈り、奥州へ発っていったという伝承があるそうだ。
だから「首途八幡」と通称される。金売吉次の屋敷があり、その鎮
守の社だったともいう。

「神佛にお参りはしないことにしておるんだがな……」
いちおうは断って、

「見物するだけなら、かまわん」

おまえたちは祈るなり願うなり、好きなようにと武蔵がいつて、
三人そろって首途八幡の、丘というにも足りぬ、ささやかな坂道を
のぼった。観世屋敷の、そのまたすぐ西のところに首途八幡はあっ
た。

「あれは……？」

「枚方(ひらかた)あたり……ではないでしょうか」

「伏見は、見えんな」

「ちかい伏見は見えず、とおい枚方が見えるのも不思議なはなし」
吉太郎の言葉が深い哲理をふくんでいるように、武蔵にはきこえ
た。

とおいところは見えても、ちかいところは見えにくい。ならば、
ちかいところを見えるようにするのが剣技の第一歩ということにな
るのか

「上総屋でございます。おつかれでございます。」

「おお。上総屋さん」

布袋屋と取引のある上総屋が武蔵と吉太郎の世話をみてくれることになっている。上総屋はわざわざ品川に出迎えてくれた。

「上総屋にまかせれば、もう……」

心配も要らないと布袋屋が太鼓判をおしてくれただけのことである。あくまで実直、しかし、いざというときには肚をくくって勝負に出る、商人魂のかたまりみたいな印象だ。

上総屋が世話してくれた宿舎におちつくなり、武蔵が「道三河岸はあいかわらず、かね」とたずねた。「日の出の勢いともうしてはお気にさわりましょうか」と上総屋が、遠慮した言い方でこたえる。

道三河岸は江戸城の東の、もともとは築城工事のための物資輸送のために開削された運河である。家門や譜代の大名の屋敷がならぶ山手とはちがって下町にあたり、新規に徳川の味方となった武家の屋敷があった。

その道三河岸に柳生の屋敷があった。慶長十二年には、柳生はまだ大名になってはいない。新参の武家の一家にすぎないが、京都にいた武蔵の耳には、柳生は江戸で屋敷をあたえられ、結構な身分になっているというふうにつたえられている。

誇大な表現にはちがいないが、浪人の身の武蔵にくらべれば、柳生は桁違いに高い身分であった。

江戸についたら、すぐにも確かめねばならなことがあった。柳生家が將軍の剣術指南役になったという、その噂の真偽である。

京都ではじめて耳にしたとき、まさか、とは思った。

武蔵守さまならば、ともかく……

上泉武蔵守信綱さまが生きておられ、將軍家康やその子の秀忠の指南役になったというなら、あたりまえである。なにしろ足利將軍の指南役をおつとめになった方なのだ。

だが、武蔵守さまはとっくのむかしに亡くなられ、武蔵守さまか

ら新陰流をまなんだ柳生が柳生が徳川將軍の指南役だという。

柳生が、なんだというのだ！

そういう気が、武蔵にはある。

武蔵守さまの直接の教えはうけなかったが、わしの父の無二齋は武蔵守さまを敬いもうし上げていた。武蔵守さまにたいする畏敬の想いがだれよりも深かったのは、ほかならぬ子のわしが知っておる。ならば、わしの父と柳生は武蔵守さまの門人として、いわば同世代ではないか。なぜ、柳生だけが――

江戸にいつて、噂の真否をたしかめたいと思いつつ、いまようやく、江戸についた。

噂は真実であった。

家康は新陰流を導入したいとかんがえ、楠田長政の臣下を使者として柳生に派遣した。文禄三年（一五九四）の春のこと、使者の名は栗山善助といったそうだ。

宗敵よりも、息子の宗矩が乗り気になり、父と子がそろって上京し、家康に父子の剣技を披露した。

家康はその場で柳生流の門人になりたいと希望を表明し、起請文を書いたのである。

敬白

- 一、新陰流の兵法、相伝のこと
- 一、印可なき以前は親子といえども他言すべからざること
- 一、その方にたいし疎意あるまじきこと

右のおもむき偽るにおいては、日本国中大小神祇、ことに麻利支天、天当（天道）の御罰を蒙むるべきものなり。よって起請文、くだんのごとし。

文禄三年

五月三日 家康（花押）

柳生但馬入道殿

このときの各人の年齢をならべておこう。徳川家康 53 柳生宗敵

徳川家康は新陰流の祖の武蔵守信綱の孫弟子ということになった。天下の主は秀吉である。家康にはまだ柳生家の領地を安堵してやる権力はない。柳生家の本領が安堵されるには、家康の天下掌握が条件となった。

慶長三年（一五九八）に秀吉が死んで、家康は実質的な天下の主になった。

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の合戦に柳生宗矩が戦功をあげた。家康は宗矩にたいして柳生の二千石を安堵した。まだ將軍にはなっていないが、あたかも將軍であるかのような権限を行使しはじめた。

慶長六年（一六〇一）には千石が増加されて、宗矩は秀忠の剣術指南役となった。九月一日づけ、秀忠から宗矩にあてた誓詞の文言はつぎのとおりとされている。

一、新陰流兵法につき相伝、手字種裏剣より奥まで、その方の許しなくて他言いたすべからざること

右、この旨いつわるにおいては日本国中大小の神祇、ことに麻利支天、天道、御罰を蒙むるべきものなり
よつて起請文、くだんのごとし

慶長六年

九月一日

柳生又右衛門尉へ

秀忠（花押）

「手字」は「せんじ」と読み、刃を十の字のかたちに合わせるのを意味するらしい。「種裏剣」は手裏剣。

慶長八年に家康は征夷大將軍になった。柳生宗蔵は將軍の剣術の師、宗矩は將軍の世子の、次期將軍となるのが確実視されている秀忠の師となった。

もちろん柳生家は徳川の旗本である。旗本は臣下だが、剣術指南役はあくまでも師である。將軍父子の臣下であり、師でもあるという異例なかたちの柳生家が誕生して、江戸の屋敷を城にちかい道三

河岸にあたえられた。

噂は、真実であつたな！

先を越されてくやしい——そういった感情はない。差をつけられたとも思わない。柳生家はすくなくとも領主とよばれるだけのものがあつたのだ。どころんでも領主とよんでももらえぬ宮本武蔵とは比較にならない。

だが、剣技の上下は家柄とは別のことである。宗矩に負けたくはないものだ！

宗矩に負けるとは思っていない。勝てる自信がある。

だが、柳生宗矩と試合をする場を想像することそれ自体が武蔵を当惑させる。

宗矩は徳川の臣下だ。徳川でなく、並みの大名であっても、臣下とか剣術指南役の立場は窮屈である。武蔵が試合をもうしこみ、宗矩がうける、というわけにはいかない。剣技の試合であっても、武士の闘いにかわりはない。主の許可なしに他人と闘うことなど、もつてのほかなのだ。

ならば、あらかじめ主の許可を得ればどうなのだというはなしになるが、これも現実的ではない。大切な飾り、あるいは宝物としての指南役が一介の浪人剣士と、それも公開の場で闘うのは主君としては歓迎したくはない。

武蔵としては、許可を得るも得ないも、もともと主というものがないのだから、問題にはならない。だが、宗矩は自由ではない。武蔵からみると、宗矩は聖域に住む剣士なのである。

すこしずつではあるが、人生の展望というものが鮮明なかたちをとって見えてくる。

武士の権力の最高のもの、將軍の剣術指南役になることはないということ、このことが武蔵の前途に確定された。

晴々とした気分、意外に心地よい。

天下の権力者の指南役、それは絶対、唯一の職である。この世に展開される競争という現象のなかの、もっとも激しい競争である。人間がひとり潜り抜けられかどうかというほど狭い場に、おのれを追いかんでおいて、「抜ける！」と命令するのに似ている。

わしの剣技は、もっと広い場で、もと大勢のひとに観てもらいたい

権力者の指南役をめぐる競争、その、狭苦しい場から弾きとばされたという想いはなかった。だから心地よいのである。

江戸でも、門人になりたいといってくる者がいる。京都を出るとき、布袋屋が冗談めかして、

「京都の剣技では天正の吉岡、慶長の宮本……こうなるかもしれないせんな」

われながら嬉しくてたまらないといった表情でいていたのが思いだされる。布袋屋よりももっと嬉しそうな顔の吉太郎は「京都で第一の剣士なら、この世の最高の剣士というわけだ！」と叫んだ。

柳生は気の毒なことになったものだ。好きなようには門人をとれないのだからな

そうだ、いまのうちにと、武蔵は吉太郎にいつて冊子をとりだし、江戸にきて最初の書き足しをするのである。

「権門を頼ってはならぬ。依怙頼屋(えひき)が避けられなくなる」

家康の將軍在職はあしかけ三年、短期であった。はやいうちに秀忠にゆずり、豊臣支持の大名の政権の交代にかける期待を打ち砕いてやる必要があったのだ。

慶長十年四月、家康は京都において秀忠が二代將軍になるのを見届け、十一年の正月は江戸でむかえた。

三月に江戸を発して上京。たちよった駿府で、駿府を退隱の地とさだめた。

駿府に滞在していたとき、京都から江戸にくだる能の金春大夫の一行が駿府にたちよった。家康に挨拶したところ、意外な結果にな

ったのである。

「ただいま江戸城は普請の最中である。ここから京都にもどれ」

大御所の命令である、拒むわけにはいかない。金春大夫の一行はさすがと京都にもどらざるをえなかった。江戸の興行の収入をあてこんで多額の投資をしていたが、それが家康の「江戸城は普請の最中」の一声で流れてしまった。

大御所さまは金春がお嫌いで観世を贖戻になさるのだろうか、それならば偏頗のこと、などと不審の声があがったが、そういうわけではなさそうだとわかったのが八月だ。

八月一日、公家衆や門跡が二条城をおとすれ、家康に八朔の祝いをのべた。八朔すなわち八月一日は天正十八年（一五九〇）、家康がはじめて江戸にはいった、めでたい記念日である。

翌日と翌々日、家康は二条城に公家衆と高台院すなわち秀吉未亡人をまねき、昨日の返礼として能楽をもよおした。金春の一行を駿府から帰京させたのは、この日にそなえての措置だったのだろう。

江戸城は普請の最中であるといった家康の言葉はうそではない。

秀吉から関東をあたえられ、家康が江戸にはいったとき、太田道灌（どかん）がきずいたことで有名な江戸城は荒れていた。しかし、改築の余裕はない。

関ヶ原合戦に勝って、家康はようやく江戸城の改築に手をつける余裕がでてきた。秀忠に將軍職をゆずった、隠居のための駿府城も築城工事がはじまった、江戸城の修築も見苦しくはないところに漕ぎつけた。

年があけるのを待ちかねたように、家康は城中で連続して能を興行した。「勸進能」と銘打ったものではないが、連日にわたる演能は家康の執念を感じさせた。

——
なんのための執念であるか

重病の噂をうち消すためである。

京阪では「家康は重病であるらしい」との噂が出ていた。放って

おけば消えるはずのところ、時とともに強い噂になり、放っておくどころではなくなった。豊臣系の大名が意識して流しているにちがいない。

病気の噂を吹きとばすべく、家康は強気になって城中で演能をおこなった。

この演能が評判をよび、家康も気をよくした。規模をもっと大きくして、「勸進能」をうたい文句にしたのが二月十三日から四日間連続の演能になった。

演じるのは金春と観世である。本城と西城のあいだに臨時の能舞台をつくり、舞台正面に家康と秀忠の棧敷がつくられた。家門と譜代の大名にたいしては、自費でもってそれぞれの棧敷をつくることが課せられた。

舞台と棧敷のあいだの土間、つまり芝居の観客席は市民に有料で開放される。日本橋、浅草橋、芝の札辻、四谷の札辻、それと神田明神の五カ所に「お能を拝見したい者は遠慮なく参れよ」と誘う高札がたった。

江戸城の修築について、家門と譜代大名は相当な額と量の負担を課せられている。それにくらべればたいしたものではないが、ひきつづいて勸進能興行の棧敷造営を課せられるのは苦痛だが、否応がいえるわけではない。加役を命じられるのは家門か譜代の家柄の証拠であります、ありがたいことだと嬉しがってみせなければならぬ。

こんなはなしがある。

水谷と皆川という旗本があつたが、どうしたわけであるか、両名には棧敷建造のことが命じられなかった。命令がないものを、おのれの判断で造るわけにはいかない。自前の棧敷がなければ、お能を拝見することもできない。他人の棧敷にすわることもできない、かといって、旗本たるものが芝居にすわることもならない。

皆川が、でなければ水谷が、その筋に不服をもうしたたのだから、家康の耳にはいった。

「水谷も皆川も、三河や遠江のころからわれらに味方してくれた者

譜代に準じて扱うべき家柄である。なぜ、棧敷づくりを命じなかったのか」

弁明する役をひきうけたのが大久保忠隣と本多正信である。

「皆川はともかく、水谷はただいま常陸の笠間へ監察に出張しております。江戸には不在でありますから……」

大久保のいうのをさえぎって、家康が命じた。

「武家というものは些細なことにも名を重んじる。譜代の列からはずされるのは水谷にとっても皆川にとっても、屈辱のほかのなにものでもない。両名に棧敷を造らせよ。本人は江戸を留守にしておいても、代理の者が棧敷にすわれればよろしい」

二月十三日の初日がちかづいて、観世と金春が連名して、係りの役人に「おそれながら」と訴えて、出た。

「ややこ踊りと同列の扱いは、われらとしてはなはだ迷惑に存じます。どうか、おあらためくださる……」

「ややこ踊り……？」

勸進能の名目だから、ひとり幾らの拝観料を徴収する。入口のところに「ひとり十銭」と書いた札をたてることになったが、それを観世と金春は「ややこ踊りと同列の扱い」として苦情をもうしたためたのである。

少女の愛くるしさが売り物のややこ踊りは広場の芸である、野の芸である。地面に幕をひきまわして木戸をつくり、木戸銭をとる。木戸銭をとれば、崇高で神秘的な能がややこ踊りとおなじ低次元の芸、見せ物の芸に墮落してしまう。とんでもないことだから、それだけではどうかやめてほしいと、切実な願いであった。

誇り高い願いはうけいれられた。

そもそもが担当の役人の失態であった。最強の権力者の征夷大將軍と大御所が、最高権力の存在の場の江戸城で主催する能である、ややこ踊りと同列になるのは將軍の権威にド口を塗ることになるのだ。

さて、その日、宮本武蔵は入城した。
能を観たいわけではない。

柳生宗矩とは、どんな風貌の男なのか？

たしかめておきたかった。

いや、ともかくも観ておきたいと思った。

自分の名と自分の費用でつくった自分の棧敷にすわる旗本の柳生

宗矩

自分の棧敷をつくることを強制もされない、ゆるされもしない浪
人武士の宮本武蔵

強烈に意識して、武蔵自身は芝居にすわる。

吉太郎は宗矩の顔を見たことがある。武蔵にいわれ、道三河岸の

柳生屋敷のそばまでいって、帰宅する宗矩を確認した。

「おりますよ」

吉太郎が、顔をまわして柳生の棧敷を教えた。

宗矩がいた。

あえていうと、優男である。

楽しんで能を観ている様子ではない。宗矩が能を好きかどうか、

武蔵は知らない。好きだとしても、この日は主君が主催する能を拝

見するのである、楽しいはずがない。

お能を拝見する栄に浴して、からだもふるえるほど緊張しており
ます——そういう態度をよそおわなければならぬ。

「棧敷にすわるのは窮屈なようですな」と吉太郎がいった。なに
かいわねばならないから思いついた言葉を口に出した、そんなよう
な口つきである。

あのような席でも、宗矩は剣技のことをかんがておるのだろう
か？

柳生宗矩は剣士の視線で観世大夫の演技を観ていた。

観世大夫に斬りこむとすれば、いつ、どのように斬るべきか

いまか、いまか――

演能をおわり、観世大夫が橋懸から消えていった。

宗矩は肩のちからをぬき、溜め息をついていた。

「だめだ。隙は見えなかった！」

武蔵はからだを斜めにねじって、宗矩の顔に視線をあてている。

宗矩の唇がわずかに動くのは見えたが、なにをいったか、わからない。

(第8章 終)

目をひん剥(む)き、生唾を呑んだ。

うそではないか、なにかの間違いではないかと吉太郎に問いつめたが、吉太郎自身も驚嘆、興奮しているのが真実のしるしだ。

出雲阿国がお城でかぶき踊りを踊る、そういうはなしを吉太郎がききこんできた。

最初に武蔵の口から出たのは「うそでは、あるまいな」である。

いや、もうすこし厳しい、吉太郎を叱責する口調か。

「二十日に、先日の勸進能の舞台で……」

吉太郎が息をきらせて、いう。場所と日にちがはっきりしておるからにはうそではない。

「やはり、勸進(かじん)で……」

「そのようすな。つまり、勸進かぶきというわけです」

武蔵も思わず、つぶやいていた。

「勸進かぶき」

いま、この時刻に、この国に、「勸進かぶき」という言葉がうまれた。その瞬間にわしは立ち合っている！

江戸城での勸進かぶきというからには、主催者は征夷大將軍の秀忠である。

秀忠はかぶきが嫌いだというのはなしは、京都でできたことがある。阿国にかぎらず、秀忠はかぶきと名のつく遊芸が嫌いだ。

だが、好き嫌いにかかわらず、秀忠は勸進かぶきを主催しなければならぬ。家康から継承された政策なのだから。

家康はかぶきが好きだった。

本人が好きだったか、政策としてかぶきを保護したのか、そのあたりの詳細はわからない。

しかし、新しい芸能を保護してやらねばならないという権力者の義務を知っていたのはまちがいない。本能というべきもの。この一事だけでも、家康が最強権力者の座に就くのは当然だった。

室町幕府三代將軍の足利義満を、家康は意識している。

初代の尊氏や二代の義詮のころには弱体だった幕府の権力を磐石の強さにかためたのは義満だ。

家康はその義満を意識し、模範として真似ることで義満の強権にちかづきたいと思っている。

応安七（文中三・一三七四）、京都の新熊野神社の境内で義満は観阿弥と世阿弥の能を観て、魅了された。義満は世阿弥を保護し、贖戻することを政策とした。このときから能は権力を飾る役割を背負うことになった。

世阿弥の末裔の観世大夫や同業の金春に江戸城で勸進能を演じさせる、そこに義満を意識した家康の政策があるのではない。これは単なる継承である。

観世と金春が演能した舞台で、地の芸、野の芸のかぶき踊りを演じさせる。そこに義満を意識した家康の政策がある。

細川幽斎はこのとき、国元の豊前小倉にいた。もしも幽斎が、家康が江戸城で阿国のかぶき踊りを許可したと知ったなら双手をあげて共感したにちがいない。

というのは、これよりすこしまえに家康から幽斎へ「室町家の旧例を知っておいてのはずだ。つぶさに記して献納してもらいたい」と依頼があった。

室町家とはもちろん足利家のことだ。足利家の分家の管領の細川の、そのまた分家の大名の細川の主であり、かつは文人として、細川幽斎は足利家の記録を大量に保存していると思われる。文字になっていない、口承とか言い伝えと称されるものもあるはずだ。

家康は、それを記録にして教えてくれと幽斎に命じた。家康の趣旨をつたえた永井右近大夫の書状には「室町家の旧例」と表現されているから、幕府の儀礼にかかわる文書というのが正しかろう。

二月十五日づけで、幽斎は「室町殿御家式の儀」の、おのれが所持していた記録三巻を進上し、このほかにも探すべきかどうか、家

康の御意向をうかがってくださいと言上したのである。

徳川家は足利家を模範として政治をおこなうべきだと幽斎はかんがえている。自分が所持する足利家ゆかりの旧記をよるこんで進上したのも、徳川にそうあってほしいからだ。

旧記のなかには芸能政策にかんする文書もあるはずだ。義満が観阿弥、世阿弥の至芸を発掘して以来の、能にかんする政策にかわる記録もあるだろう。

それを読まぬうちから家康は、江戸城のなかでの出雲阿国のかぶき踊りを許可した。この事実を知れば、芸能保護にかんする姿勢では家康は義満を凌駕するものをもっていると判断して、歓喜するはずであった。

阿国が城内でかぶき踊りを興行する。それも、こともあろうに、つい先日、観世と金春が格式の高い能を演じた舞台で踊ってみせるというのである。

観世も金春も仰天した。

木戸をたて、「ひとり幾ら」の木戸銭を徴収するという、ややこ踊り並みの計画は辛うじて阻止した。

栄光ある能とややこ踊りを並列におく愚劣な策を阻止して快哉をあげた直後に、あの舞台上、阿国が、かぶき踊りを興行すると発表されたのだ。仰天せずにはいられない。

名は知れないが、知恵のある役人の存在を思わせるのである。

阿国のかぶき踊りが先、能が後からというのであれば、観世と金春は全力をあげてかぶき踊りを興行させない工作を展開したにちがいない。そうなれば大騒ぎになるとかんがえた知恵のある役人が、はじめに能、それからかぶきの順序にしたのだ。

二月二十日、武蔵と吉太郎はまたまた城の門をくぐった。肩と肩がすれあうほどの雑踏である。

木戸がたち、木戸銭を払って芝居にすわれる。京都の北野でおな

じみの光景が、征夷大將軍の城のなかに移されている。

阿国が登場した。

阿国のふりまく愛嬌が芝居にはねかえり、どよめきとなって空気を濃厚にする。

武蔵は舞台から棧敷に視線をうつした。家康も秀忠はもちろん、柳生宗矩の姿は見えない。この場に宗矩が姿をあらわさないと知っていたが、

柳生宗矩よ。観世や金春は観なくてもかまわんが、阿国の踊りは観ておかねばならんぞ。この理屈がわからんのか

武蔵は宗矩にたいする優越感をあじわっていた。

家康は二月二十九日に江戸を発つて駿府にむかった。

家康が駿府から江戸に出てきたのは昨年暮れ、十一月四日である。あしかけ四カ月の江戸滞在で、家康が手をかけた最大の行事は能とかぶき踊りの興行であったということになる。

播磨の出身で京都で修業した——江戸における宮本武蔵の立場をひとくちでいうと、めずらしい剣士である。

関東で武芸というと、なにをおいても鹿島(かしま)と香取(かとり)の二社とのかかわりが云々されるのである。鹿島か香取の神威によって神聖なものとなる、それが関東の武芸だ。

播磨には江戸のひとは馴染みがない。京都なら知っているが、その京都から、剣士が、徳川さまの旗本でもないのに、江戸にやってきてどうするんだと不審な顔をする。

吉太郎は、わが師は浪人であると正直なところを宣伝する。浪人であつて剣士だから、刀をもたせれば恐ろしいという。どれほどの剣技であるか、弟子のわしが相手になって試合をするから観にいらつしやいと——やわらかい京都人の口調で——宣伝する。

江戸でも門人はとるが、武蔵の名をおおげさに広めぬようにしている。派手にやると、一味徒党をくわだてたというので、お上から睨まれるおそれがありますぞと上総屋が知恵をつけてくれたのだ。

稽古をしてやって、その都度の謝礼をうけとる。このほうがさっぱりしていて、いいと思っている。

「足の下の地面を、頭で、しっかりと掴むこと。これができれば……」

ほかの剣技はおのずから習得できる、これが武蔵の伝授のすべてである。

そばから吉太郎が、

「はじめは、わしも疑ったものだが、まあまあ、いわれたとおり足の下の地面を頭で感じて、やってごらんさい」

体験にもとづいた助言をする。

吉太郎の言い方の京都弁のやわらかさが剣技伝授のたすけになるということ、これは江戸に出てきて、はじめてわかったことだ。

柳生家の剣技とは、いかなるものであるのか、それを知りたいものだと武蔵は痛切に思っている。

だが、柳生の剣技が世間の目に触れることはほとんどない。将軍のための剣技である、世間の目に触れる必要はない。

ぜったいに触れてはならぬ、というほど厳格な掟はないが、触れるより隠せという傾向になっている。

「道三河岸へゆけば……」

吉太郎が案を出したのを上総屋がひきとって、

「柳生さまが稽古なさるのを覗くというわけですか。気づかれたら、その場で宮本さまの首が飛びますよ」

吉太郎は首をすくめる。

吉太郎が「柳生さまのご門人の方が試合をしたいそうです」と告げた。

「柳生の……家来が？」

武蔵も上総屋も半信半疑である。

柳生の家来だというのが偽りでないとすれば、主人の宗矩の許可

をえていなければならぬわけだ。だが、はたして宗矩が、一介の浪人剣士にすぎぬ武蔵と試合をするのを許可するだろうか？

師の不審の表情に気づいた吉太郎が、「氏井弥四郎さまともうすお方が」と、この間のいきさつをうちあける。

柳生の門人の氏井弥四郎という剣士があつた。氏井は宗矩の許可をえて細川家の屋敷に出入りし、江戸詰めの臣下に剣をおしえていたらしい。

吉太郎はまず、この氏井に接近した。どういう手づるを使ったのか、吉太郎は武蔵にも上総屋にもいわない。おそらく、上総屋が細川家と取引があつて、そこから手をまわしたらしい。

吉太郎は師の武蔵のことを氏井の耳に吹きこんだ。

はしめのうち氏井は、武蔵など知らぬというふうであつた。

だが、京都で吉岡憲法と試合をして勝つた剣士こそわが師の武蔵であると告げると、態度が一変、柳生の同門のうちの、しかるべき剣士と立ち合つてはいただけぬものと丁寧な様子で頼んできたのだという。

「わしに勝てば柳生の門人のなかで名があがると、このように勘定しておるのか」

「吉岡を相手にしてお勝ちになつた。そうときくと、居ても立つてもおられんようです」

「場所は……？」

「細川屋敷ではいかがかと」

細川屋敷ときいて、武蔵の気が動いた。

柳生の屋敷でというなら、うけるわけにはいかない、勝てないからだ。

いやいや、勝つのは容易だとしても、勝てば柳生屋敷から生きては出られまい。万が一、生きて出られたとしても、試合の結果は世間には伏せられるだろう。武蔵としては闘う意味がない。

だが、細川屋敷ということなら、細川家も柳生家も公式には関与していないという了解がついているはずだ。家来や門人が試合をす

るのを黙認する、ということでもある。

細川家は外様大名である。だからこそ、というのはおかしいが、細川の殿様はなにかと評判が高い。その細川の江戸屋敷で柳生の門人と試合をした相手、ということとで武蔵の名はひろまるはずだ。

うけるべきであると武蔵は判断した。試合をして損にはならない。もちろん、負けるはずはない。

武蔵と立ち合うのは大瀬戸隼人と辻風某の二名である。大瀬戸と辻風が、どのような種の剣士であるか、さぐってくれと頼むと、吉太郎ははりきって出ていった。あの男のことだ、なにかしら掴んでくるはずだ。

吉太郎の探索の結果、大瀬戸は素早い技で相手を攪乱して勝ちにもってゆく。もうひとりの辻風は、

「たいへんな大力。走っている馬に横から飛びついて首を抱きかかえ、ドウドウドウと留めてしまうそうです」

「ちからもち……であるか」

その日の細川屋敷、一風かわった雰囲気はただよっていた。剣技に格別の興味をもつ藩士は、屋敷の片隅でもしるい試合があるのがわかっている。殿様もご存じのだが、おもてむきにはご存じないことになっている。

はじめに大瀬戸が出てきた。

ともかくも先手をとる、これが大瀬戸の剣技のすべてであるところであった。吉太郎の探索は鋭い。

そこで、

先手を取ろうという大瀬戸の、その先手を取る

第一打で仕留めるつもりの大瀬戸が上段からくりだす、その先手を取った武蔵の突きが喉に当たって、大瀬戸はのぞけて倒れた。

つぎに、辻風が出てきた。

武蔵が無造作に、しかし満身のちからをこめ、左の肩を下から上にもちあげる角度で体当たりする。

辻風のからだだが、棒のようにまっすぐのまま、うしろへ倒れた。あとで知ったのだが、このとき辻風は手水鉢の角で背骨を打って痛めたといい、背骨から病を発して死んでしまったそうだ。「宮本武蔵は当たってくるぞ、武蔵の当たりに気をつける……こういう評判が細川のお屋敷から世間に広まってゆくのでしょうか」かえりみち、吉太郎がいう。大瀬戸は先手に勝負をかける剣士、辻風は大力自慢と観た探索が的中したから、吉太郎は得意になっている。

「大力自慢の剣士は、いっぱいの中からを込めて構える。そこへわしが当たるから、おのれと、わしと、ちからが合わさって二倍のちからになる。耐えられるわけがない」

「それ、わしが書いておきましょうか」

武蔵がふところから冊子を出して、吉太郎にわたす。吉太郎はたちどまり、矢立をだして、

「ええーと。ちから自慢はちからで負ける……これでよろしいでしょうかな」

「悪くはないが、相国寺のお坊さまの説経みたいな文句だな」

慶長十二年に、奈良の宝蔵院の胤栄が亡くなった。上泉武蔵守信綱の手ずから武芸を伝授されたのは、この胤栄をもって最後とするのだろう。

八十七歳だときいた。歳に不足はないが、武蔵は、奥蔵院の道栄が落胆している姿を思いうかべた。

「夢想……！」

「名は権之助とか……」

上総屋を通じて夢想権之助なる剣士が試合を申しこんできた。上総屋が夢想を知っているわけではない、商売のつきあいから上総屋にもちこまれたはなしだそうだ。

「宮本さまを抱えておるのが上総屋だという評判になりました、恐

縮いたしております」

武蔵のまえで、上総屋が身をすくめて恐縮している。抱えているというと事実ではないが、世話をしている。その武蔵の名が高まるのは上総屋のよろこびでもある。

いつものように吉太郎が街に出てゆき、夢想の剣士のさまをしらべる。

なんとも派手で、おおげさな剣士である。背中に、肩から腰のあたりまで金文字で「兵法天下一、日本開山、無想権之助」と大書している。背中をわざとゆすって、金文字を日の光で輝かせている。

いかにも強そうな男——多数の門人のうちから選抜されたという顔をしている——を八人ひきつれ、諸国漫遊武者修行の風情をたっぷりとうちだしている。

吉太郎がおかしなことを耳にした。権之助は以前、武蔵の父の新免無二斎とは試合をしたことがある、と自分で触れているというのである。

父の口から、無想のムの子も、権之助のゴの子も、きいたことはない。武蔵が生まれる以前のことかもしれないが、ならば権之助は相当の年配だということになる。吉太郎にも、権之助の年齢は見当がつかないそうだ。

無想権之助は、武蔵と試合をすることになったと宣伝しているそうだ。これは策略なのである。武蔵の側が「試合の約束はしておらぬ」といって拒否すれば、無想は「武蔵は勝てぬと知って逃げた」と宣伝するつもりなのだ。

無想は勝つつもりだ。そうでなければ、この策略は使えないわけだから。

「うけるよ。うけざるをえない」

「そう、なさいますか」

場所は先方で用意するといい、おっかけるようにして、池之端の空き地にお出でくだされと知らせてきた。試合のはなしを通じてきた、上総屋の知り合いの商人が所有している土地のようだ。

武蔵は作りかけの楊弓(よきゅう)を道具として、立ち合った。楊弓は武器というよりは遊戯の弓である。武器としてつかえないことはないが、殺傷力ははなはだ弱い。弓としてではなく、軽いのが取柄の打撃具としてつかうつもりで楊弓をもって出た。

「めずらしい道具であるな」

無想はまず、嘲笑の言葉で攻撃をかけた。楊弓などで奇を衝(つら)つても、その手にはのらんぞという嘲笑である。

軽い会釈をして、そのまま、普通の調子で歩いて無想到ちかづき、楊弓を下からはねあげて無想の顎を打った。

筋金入りの大木刀を揮ったのは無想のほうが先だが、先に当たったのは武蔵の楊弓である。

細い楊弓が思いきり撓(しな)って、無想の顎を攻めた。無想はのぞけて倒れ、苦痛にのたうちまわった。背中の「兵法天下一」の金文字が泥でよごれた。

京都の布袋屋から手紙がとどいた。そろそろ江戸にも飽きたのではなかるうかと推察している、いちど帰京なされ、元気なお顔を見せていただきたいと、武蔵を懐かしむ気持ちが率直に出ている。

首を長くして帰京をお待ちもうすが、帰京までに時間がかかるのであれば、念のために大切なことをお知らせしておくと前置きしてあつて、

「おあずかりしている金子(きね)は安全を第一に慎重に運用いたし、手紙にはしるせませぬが、相当の額に達したと承知ねがいたい」

浪人のわしに、しばらくの暮らしには困らぬカネができたのか。

不思議なものだ

とつぜん、父のことが回想されたのは不思議な気分だ。カネには苦勞していた父、子供の武蔵にはくわしいところはわからないが、カネの余裕はなかったはずの父――

土地を売って馬を買ってくれなどと無理をいい、困らせた父にはもうしわけないが、それよりは懐かしさが先にたつ。

剣技を見せて、教えて、

父上よ、わしはどうやら、あなたが憧れていた暮らしにちかづいてまいったようです

よろこばせてやりたい。

お逢いしたいが、まだしばらくは江戸ですごし、それから諸国漫遊の旅に出る。帰京はまだ先になります——布袋屋にそう告げた。

手紙を飛脚に託したあと、「帰京」などと書けば、まるで京都が故郷であるような意味になるなど不思議な想いに耽った。

帰京を先送りしたのは、大坂と伏見——豊臣と徳川のあいだに、まだしばらくは戦争はおこりそうもないと観たからだ。

吉太郎に、おまえはどうするかとたずねると、師について漫遊したいという。もちろん許してやった。吉太郎には吉太郎で、帰京したくない事情があるようだ。武蔵は吉太郎の事情の中身の詮索はしない。

「まず、どちらを……」

東西南北のどの方角に足をむけるのですかと吉太郎が質問した。

「西へ……」

師と弟子は、こうして江戸から西をめざした。武蔵はもうすこしで三十歳になる。

東海道をのぼって桑名へついたが、近江路はとらず、鈴鹿を越えて宇治川をわたり、伏見から大坂まで舟にのった。

わざわざ京都を避けたのは、豊前の小倉へゆく気がゆるんでしまうのを避けたかったからである。

小倉は細川家、この機会は逃したくない

豊前の小倉へゆく計画のそもそものは、ふるいはなしから、はじまる。

むかし、父から塚原ト伝（たけでん）のことをきいた。ト伝の剣技——というより剣技論というべきか——をつたえる言葉がいくつあ

るうち、細川幽齋の言葉がもつとも味わいが濃いと父は語ったのである。

ト伝ほどの剣士となると、他の兵法者、剣士の技の批評を頼まれることが多い。ト伝の場合、晩年になるにつれて兵法批評は厳しいものになるのだが、批評の核ともいうべき用語があった。

「まだ、あれこれと手をつかっております。手をつかううちは、だめですな」

からだがすーっと反応して攻撃の手が出てゆくのではなく、あたまのなかで「あの手」「この手」とかんがえながら攻撃の体勢をとる、これがト伝のいう「手をつかう」なのだろう。

このはなし——逸話というのが正しいのだろう——をきいたときから、武蔵は、塚原ト伝もさることながら、ト伝のこの批評の重要なことに気づいた細川幽齋はたいしたひとだという想いに憑(つ)かれていた。

ト伝は亡くなったが、幽齋の言葉や動作から、ト伝を思わせるなにか——気 のよなもの——が振りだされているのではないかと思うようになった。父は武蔵に、「ト伝は亡くなったが、幽齋はまだ生きておるぞ」といった。これは父の遺言のような意味をもったのである。

おおげさにいうと、武蔵は幽齋を追いかけつつ、成人した。関ヶ原合戦のとき、丹後田辺の舞鶴城を攻撃する西軍の兵士になったのも、幽齋の闘う姿を観たいものだと思ったのがきっかけなのである。細川家は幽齋から忠興へと主がかわり、丹後から豊前の中津を経て慶長七年（一六〇二）に豊前と豊後で三十九万石、居城は豊前の小倉へ移った。

細川家の家老で、松井佐渡興長という人物がいた。松井は長岡の姓を名のることもあった。いうまでもない、長岡とは細川幽齋の別姓でもあった。

この興長が父の無二齋と剣のうえでの交際があったと知ったのを幸い、興長を通じて、細川家の主と臣下のまえで剣技を披露する機

会をつかみたいと計画するにいたった。

だが、相手は三十九万石の大身である。そのころの武蔵はまだ無名の剣士というほかはない境遇であつたから、なかなか計画がすまない。

京都の吉岡と闘つて勝ち、江戸に出て柳生の大瀬戸や辻風、無想権之助などと闘つて自信をつけると、

小倉へ行つても笑われない、むだにはならないのではないか。素性の知れ無名の剣士というわけでもないのだから

長岡興長との連絡はついていて。そろそろいかがでしょうかと打診すると、

「お世話をいたす。お出でください」

こころも躍る返事がとどいた。

京都の布袋屋から「カネが貯まりましたよ」と知らせてきたのも手伝つて、小倉ゆきを決断したのである。

いやいや、もうひとつ、武蔵を決心させたのは幽斎の死である。

慶長十五年（一六一〇）八月、幽斎は京都の二条車屋町の屋敷で死んだのだ。享年七十七。

しまった、まにあわなかつたと後悔したのも後の祭、長岡興長との連絡を頻繁にして、ついに小倉ゆきを実現するところにこぎつけたのである。

そこまでの苦心を知らぬ吉太郎は、伏見まで来ていながら入京しない師に、いささか不満を抱いたようだ。

巖流（がんにゅう）佐々木小次郎という剣士が小倉にあらわれ、忠興の指名をうけて臣下の剣技の師となつておる。貴殿（武蔵）の名を知らぬでもなさそうである、試合なさつてはいかがが――

興長の誘いに、武蔵は一も二もなく応じた。

巖流佐々木小次郎とはいかなる経歴の剣士であつたか。

出身は越前の宇坂荘、浄教寺村だという。越前の有名な剣士の富田勢源（とだせいげん）の門人である。

加賀の前田家の臣下、富田越後守重政が創始したのが富田流の剣技である。ももとは中条流の剣技をやっていたが、前田利家・利長・利常の三代に仕えて軍功をあげたので、みずからの剣技を富田流と名づけたものらしい。

重政の剣技がどれほど優れていたかを語る逸話には事欠かない。

主君の利常が、「おまえの家の剣技には無刀取というのがあるそつだ。ならば、これを……」といひざま、佩刀をすらりと抜いて重政につきつけ、「取れるか」という。

「無刀取は秘術でござる。襖の陰からわれらを窺っております。あれをまず、お叱りいただいて……」

利常が襖に視線を向けたその隙に重政はとびかかり、利常の手をつかんで、「これが無刀取でございます」といった。

またあるとき、重政が下僕に命じて鬚を剃らせていた。家僕が思うに、いかに天下の名人だろうと、いまこの隙に刺せば防ぐ手はあるまい。

重政は下僕の顔を見て、いった。

「尋常な顔つきではないが、いま思っていることを実行する勇氣はなかるうな」

下僕はちぢみあがつたという。

この重政にまなんで一流を編み出したのが富田勢源、その勢源にまなんで一流をあみだしたのが佐々木小次郎なのである。

佐々木小次郎という剣士のことを、武蔵はほとんど知らない。だが、細川家に目をつけたのは並みの剣士ではないしといわねばならぬ。

大切にそだててきた剣技を披露するに値しない大名はいくらもあるが、細川の幽斎も忠興も、剣士ならば、その前で技を披露できれば死んでもいい、というぐらいの価値のある大名であった。

小次郎と武蔵では、細川忠興に目をつけた意味はちがうだろうが、それはそれでかまわない。細川忠興、その名は芸術芸能を鼻に、保護する大名として鳴りひびいていた。

おそらく、武蔵の目にも耳にもとどいてはいなかったろうが、こんな逸話がある。

まだ幽斎が生きていたころ、忠興がもったいぶった口調で、いった。

「わたくしが歌を作ると、父上の歌人としての名を汚すことになりましょう。ですからわたくしは歌は遠慮して、茶道一本でゆくことにします」

すると幽斎は、「ふふん」と嘲笑するかのような前置きをして、「おまえごときが歌をやって笑われたとて、わしの名を汚すことなど、できるものか！」

茶人としての忠興は、あの千利休の弟子のうちの「七哲」のひとつである。つまりこの逸話は、忠興ほどの茶人でさえ、父幽斎の歌には対抗しえなかったということを物語っている。

その忠興が佐々木小次郎の剣技を評価し、家来の指南役としているという。武蔵がかんがえるに、これは放ってはおけない事態なのだ。

くりかえす、小倉の細川だから放ってはおけないのである。ほかの大名ならば、気にするものではないのだが――

武蔵はまず下関へ、それから小倉へわたって、松井興長にその旨

を告げた。

試合は四月十三日の辰の上刻（午前七時）におこなう、場所は小倉の沖の舟島ときまつて、松井から兩人につたえられた。

舟島は向島ともいい、豊前と長門の国境の島、小倉からは海上一里、長門の下関からもほぼ等距離である。

当日、双方の関係者や見物人が島にわたることを禁止すると布告され、さらに武蔵は松井興長の舟で、小次郎は藩主忠興の舟で島へわたすと指示された。

以上のことがつたえられたとき、武蔵は満面に喜色をうかべ、松井の尽力にたいする謝辞をのべた。

ところが、その夜のうちに武蔵の姿が小倉の宿から見えなくなつた。知らせをうけた興長は小倉の城下の隅々まで探させたが、武蔵の行方は皆目わからない。

自分から望んではみたものの、いざそのときになって、怖じ気づいたのではないか——武蔵をあざける声を背中にききながら、興長は、ふと、武蔵は下関へ行ったのではないかなと思いついた。

これまでの付き合いからして、このような場にきて怖じ気づく武蔵ではないと信じている。姿を消したというが、それこそ武蔵の戦術なのではないか。小次郎はともかく、武蔵はすでに、明日を待たずに闘いをはじめているのではないかと。

武蔵は昨日、まず下関について、下関から小倉へわたってきた。

いまは、下関へ行っているのではないか。

「下関をさがせ！」

下関の問屋の、小林太郎左衛門という者の家に身をひそめていた武蔵を、興長の使者が探しだした。使者が興長の言葉をつたえたところ、武蔵は返書をしたためて使者にわたした。長文であるが、意訳して紹介する。

「明日の試合につき、小生は貴殿の舟で舟島へ送っていただくことになりました。おこころづかいのほど、かたじけなくぞんじます。

しかしながら、ただいま、小次郎と小生とは敵であります。小次

郎がご主人忠興さまのお舟、小生は貴殿のお舟となりますと、ご主人にたいする貴殿の立場がむずかしくなるのではなかるうかと愚考いたす次第。

どうか、島送りの件につき、小生をお構いなさらぬが宜しいかと存じます。

このこと、さきほどもうしあぐべきでしたが、ご承知なさらぬに相違なしと存じ、もうしあげず、こちらへ参りました。お舟での島送りについては幾重にもお断りもうしあげます。

明朝は、小生が舟を用意して島へわたりますから、いささかも支障はありません。適当な刻限をみはからって、舟島へわたります。左様に思召しください。

つまり松井興長は、武蔵が「適当な時刻をみはからって」島へわたると意志表明したのを知っていたのだ。

だが、松井がそのことを他人に告げたか、どうか、わからない。

さて、四月十三日の朝になった。

下関の小林の店の武蔵は、日が高くなってもまだ寝ている。主の太郎左衛門が心配して「起きなされ。もはや辰の刻」といったが、まだ起きようとしない。

小倉から飛脚がきた。「佐々木小次郎はすでに到着した。はやくお出であれ」との催促である。

「そろそろ参る」

飛脚に返辞をしておいて、やおら布団から起きあがった。手水をつかい、朝飯を喫し、太郎左衛門に頼んで舟の櫂を一本とりよせてもらい、自分でざっと削って長めの木刀をつくった。木刀を削っているあいだに、小倉から二度目の飛脚がきた。

さっさと立ちあがり、絹の袷を着て、手拭いを帯にはさみ、上から綿入れを羽織って小舟にのった。漕ぎ手は太郎左衛門の店の者である。

小舟のなかで武蔵は紙捻(こり)をつくって襷にかけ、綿入れを頭

からかぶって船底に伏せていた。

武蔵の舟が舟島についたのは巳刻（午前十時）を過ぎていた。

武蔵は舟を州崎に停めさせ、かぶっていた綿入れをぬぎ、刀はずして舟底におき、短刀を腰にさし、衣の裾を高くからげた。

舟の櫂でつくった長めの木刀を手にさげ、素足で舟から降りた。

波打ち際を数十歩、じゃぶじゃぶとわたって歩きながら、帯にはさんだ手拭いをとって一重の鉢巻きをした。

岸辺に待つ佐々木小次郎は猩々緋の袖なしの羽織、染革の裁つ着け袴、草鞋を履いて三尺あまりの太刀をさしている。備前長光（びぜんおさぶね）の銘刀だそうだ。

小次郎はあきらかに待ちくたびれ、焦燥の様子を隠せなかった。

「われは刻限どおりに来て、待っておった。武蔵よ、なんじは氣後れしたのか！」

武蔵はきこえぬふりをして、相手にならなかった。

小次郎は太刀をぬき、鞘（さや）を水中に投げすて、水際で武蔵がちかづくのを待つ。

武蔵はまだ水のなかに立っていたが、にっこり笑って、いった。

「小次郎、負けたぞ。勝つつもりなら、鞘を捨てるはずはない！」

小次郎は怒り、そのまま両者が双方から歩みよった。

小次郎は長光を真つ向からふりあげ、武蔵の眉間を打った。

武蔵が打った木刀が小次郎の頭に当たり、小次郎はたおれた。小次郎の一撃は武蔵の眉間の鉢巻きの結び目に当たり、鉢巻きはふたつに切られて、落ちた。

武蔵は木刀をさげたまま、たおれた小次郎を見つめていた。そして武蔵が第二打を打とうとしたとき、小次郎は伏したまま、刀を水平に払った。小次郎の刀は、武蔵の袴の、膝の上に垂れた三寸ばかりを切り裂いた。

武蔵の第二打は小次郎の脇腹の骨を叩き折った。小次郎は氣絶し、口と鼻から血が吹きだした。

武蔵は小次郎の口と鼻に手をあてて覆い、顔を寄せ、呼吸してい

るか否かをうかがっていた。

すぐに立ちあがり、はるか遠くにいる検視役にむかつて一礼、木刀をとって元の舟にのって、漕ぎ手とふたりで棹をさして下関にもどった。

下関から松井興長に一書を呈して、感謝の意をのべた。

それから武蔵は小倉へゆき、興長にたいして細川忠興の臣下との試合をねがった。忠興の老臣が協議した結果、武蔵の新しい願いは却下されたのである。協議の結論をきいた武蔵は、またまた下関にもどっていった。

以上の試合の経過は『二天記』に述べてあるとおりだが、これとは異なる試合の様相をつたえる記録がいくつもある。

この試合で武蔵は二刀を使ったという説をたてたのが『武將感状記』である。

武蔵は舟島にわたる舟の船頭に權をもらいうけ、ふたつに割って二尺五寸と一尺八寸の二刀をつくった。小次郎の刀は三尺あまりである。

武蔵が二刀を——おそらく十字に組んでだろう——組んでかかり、小次郎が拝み打ちに打とうとしたのを武蔵が外して頭を攻めた。小次郎が身を横に振ったので、武蔵の刀が左の肩に当たった。

小次郎が踏みこんで横に払うと、武蔵は足をちぎめて飛びあがった。武蔵の革の袴の裾が三寸ばかり切られて、落ちた。

武蔵が全力をこめて小次郎の頭を打ったので、頭が微塵に碎かれ、小次郎は絶命した。

武蔵が二刀を使ったというのもさることながら、この試合を、下関の者がのこらず囲んで見物したとするのが『武將感状記』の特異なところだ。

細川家から「見物は厳禁」の指示が出ていたのを下関のひとは知らなかったか、見物厳禁の指示そのものがなかったか、もうひとつは、小倉の細川家の指示を下関の者はあえて無視したのか、どれか

一条が真実を伝えているはずだ。

旗本の松平忠栄に仕えた中村守和という武士の証言が『武芸小伝』に引用されている。中村が老翁にきいた昔話だというが、それによると、大勢の見物人が舟島の試合を観におしかけた。

大勢の見物人が小倉からわたったのか、下関からか、これだけでは確定できないが、つぎの一件から、小倉からだつたと確定できるのである。

佐々木小次郎が渡し場にいったところ、おびただしい群集が舟島にわたろうとしていたというのだ。

渡しへ舟の船頭に小次郎がたずねた。

「こんなに大勢が、なにを観たいと舟島へゆくのか。今日は、特別なことでもあるのかな？」

「ご存じないのですか。佐々木蔵流という兵法者が宮本武蔵という剣士と舟島で試合をするのです。試合を見物しようと、今日は朝はやくから大変な混雑」

「いやー。じつは、わしが、その蔵流なのだ……」

船頭はおどろき、目をむいた。

同乗の群衆の耳にはいらぬように、小次郎の耳に口をちかづけ、秘密めかした様子で船頭がささやく。

「島のお役人に知られぬように、別の渡し場に着けます。島にあがったら、すーっと隠れてお逃げなされ」

「逃げるのか、わしが……」

「あなたは神技をおもちだろうが、武蔵の門人どもは数が多い。試合で武蔵を打ち負かせば、門人どもがあなたを恨んで、復讐しないはずがない。逃げられませんか」

小次郎はしばし瞑目して、やがて目をひらいて船頭に告げた。

「今日の試合で、わしは負けるかもしれぬ。いや、死ぬかもしれぬ。だが、武士が堅く約束をしたのだ、死ぬとわかってても約束をやぶるわけにはゆかぬ」

小次郎はふところから鼻紙袋を出し、船頭にあたえて、こういつた。

「わしが死んだときいたら、わしの魂に水をかけて祀ってくれよ」

小次郎は舟島に上陸した。

武蔵もやってきた。

小次郎は「電光のごとく、稲妻のごとく」剣をふるったが、不幸にして打ち負け、命を舟島にとどめることになった。

小次郎が舟島にわたったのは藩の御用舟でもなく、特別に仕立てた舟でもなく、試合見物の群衆とおなじ渡船だったというところがおもしろい。おびただしい数の見物の群衆のなかにまじって小次郎が舟島にわたったという記述は、なにかしらリアルなものを感じさせるのである。

船頭が小次郎に「武蔵の門人は数が多い」と警告したこと、そして、舟島への渡航が禁止されたのか、否かをめぐって諸説がせめぎあっている状況をあわせてかんがえると、第三の点が浮上してくる。武蔵の門人が数多いというのは、細川家が意図的に触れだした噂であろう。

なんのために？

数多い武蔵の弟子たちは、師の敗北にそなえて大挙して舟島にわたる。武蔵が勝てばともかく、負けた場合、かれらは島で騒動をおこし、佐々木小次郎を包囲して攻撃し、師の敗北にたいする復讐をするにちがいない——という噂をふりまいておいて、じつは対岸の毛利家を警戒したのだ。

中国地方に十カ国をもっていた毛利氏は、関ヶ原合戦合戦ではおのずから首領の位置をしめていた。

だが、西軍は大敗した。毛利氏の領地はわずかに周防と長門の二カ国に削られ、安芸の広島から長門と周防に追われた。毛利の本家は長門の萩を城とし、分家の毛利秀元が周防をあたえられて長府藩をひらいた。下関は長府藩領にくみいれられた。

敗者の毛利氏は首をすくめ、徳川の覇権に迎合している。正面きって徳川に反抗する気はないが、かといって、臣下のうちに、なにか事をおこして対岸の小倉の細川家を困らせてやろうと、手ぐすねひく者がないともいえない。

細川が舟島で剣の試合をやりと知り、血気にはやる若者がひそかに島にやってこぬ保証はない。

だが、細川は勝者である、毛利を警戒せよとはいいいにくい。毛利におびえていると思われたくはないのである。

宮本武蔵の弟子どもが大挙してのりこんで、小次郎を逃がすまいと網をはっているぞ

舟島へ群集がわたるのを禁止するのに、毛利家のことを口実にした。これなら外聞は悪くはないというわけだ。

小次郎の弟子に命を狙われておるかもしれぬと警戒しつつ、武蔵はしばらく小倉に逗留していた。試合の結果はいちはやく小倉の城下にひろまり、弟子入り志望者があらわれる気配を感じたからである。

佐々木小次郎との試合がこれほど評判になるとは……
意外であった。

武蔵は見込み違いをしたことになるが、くすぐったい感じの、嬉しい見込み違いなのである。

見込み違いの原因はどこにあったか。

小次郎との試合の価値が大きいことを過小評価した。重いものを軽くかんがえていた。

過小評価した原因がわかってきた。京都における、吉岡剣法一門との試合の印象が後をひいている。

吉岡との試合のあと、京都の街のひとの武蔵にたいする視線は熱かった。

吉岡一門の権威をたった一撃でたたきふせた剣士が歩いてくる！
異様なもの、強烈なものを目の前にしている興奮が、見られてい

る武蔵自身にもつたわってきた。

そういうわけで武蔵は——綿密に検討したのではないが——これ以上の重い価値のある試合をやることはなかりうと思つた——らしいのである。

故郷の播磨で有馬喜兵衛と闘つたのが最初で、そのつぎが但馬の秋山、そして京都に出てきて、吉岡と闘つて勝つた——剣の世界に顔を出してすぐに頂点に立つてしまった感じがある。

江戸に出て、無想権之助をはじめとする群小の剣士と闘つたが、物足りない、手応えが弱い。

手強い者を相手にしなければ鈍つてしまうという、いくらかの不安の気分が出てきたところに細川家の世話で佐々木小次郎と試合をやるらないかと誘いがあった。

細川という名は武蔵にとって憧憬のひとつである。一も二もなく承知して小倉にやってきたのだが、このときすでに最初の錯覚をしていた。

京都の吉岡と闘つて勝つた、われ、宮本武蔵である。外様ながら徳川の覚えのいい細川ではあるが、京都の内裏さまと比較にならん。没落はしたが、足利家の足元にも及ばぬ

吉岡に勝つた自分が大名の世話で佐々木小次郎と試合をする、あたりまえだ——どこかにこういう気があつた。

錯覚だつたのである。

小次郎との試合は、江戸を発つたときからはじまっていた。

いまになってようやく気づいた次第だが、武蔵が承知して江戸から小倉に足をむけたとき、佐々木小次郎はもう武蔵との試合にそなえて構想を練っていた。構想を練るといふのが大げさならば、単純に「小次郎は武蔵を待っていた」といいかえてもいい。

京都と江戸でめきめきと名をあげている宮本武蔵の試合をする剣士——これが小次郎なのである。

「あれが、巖流だ」

「知つとる。佐々木小次郎。江戸からくる宮本武蔵と剣技を闘わせることにきまつた。肝煎りは松井興長さま」

小倉の城下では、まず細川の家来の武士が——剣技に格別の興味がある者にかぎられるが——しきりに話題にして、それが城下の民の噂の的ともなり、武蔵がくるのをいまや遅しと待つていた。

武蔵の、そういう小倉にのりこんでいったのである。

武蔵には、小次郎を待たせる計画はなかった。待たせれば小次郎は焦る、焦れば剣をにぎる手に余計なちからがはいり、鈍るはずだから、などと計画していたわけではない。

だが、小次郎は待つた。充分な時間があるから必勝の作戦を練らねば、などと待つた結果として、負けてしまった。

小倉の城下の、おおきな噂の渦のなかで、小次郎は負け、武蔵は勝つた。

おおきな噂の渦といえ、あの日、舟島にわたって試合を観ようとした群衆のことは吉太郎も知らなかった。前夜、武蔵といつしよに小倉を出て下関までは行つたが、武蔵は舟島へ吉太郎がわたるのはゆるさなかつた。

勝負の結果は、武蔵本人の口からきくより先に知つていた。だが、小倉の渡し場の群衆の騒ぎは数日後まで知らなかつた。

「お役人がちからいっぱい押しもどしていたそうです。島へわたるのはゆるされておらぬ。もどれ、かえれと」

「それほど」

騒ぎの様子をききながら武蔵は、幻想にとらわれていた。

小倉の渡し場の混乱へ、わしがちかづいてゆく

群衆のなかから、「武蔵だ、武蔵だっ」という声があがる

わしは——臆病なことだが——群衆が恐ろしくなつて、一歩また

一歩と後ずさりするが、自分が後ずさりしているのは気づかない

群衆からわが身を剥ぎとるように、一歩一歩とはなれて、群衆を

一個の塊と見えるところにきて、わしは安心する

あれがよかったのだ！

あれ、とは、試合の前夜に小倉から下関にわたったことだ。

自分の舟で舟島にわたしてやろうと松井興長は好意をしめしてくれた。だが、好意をうければ、あとで興長が窮地におちこむ予感があったので、あえて拒絶するために下関へ逃れたのだ。

あのまま小倉にいて、小倉から舟にのっていれば、おおきな渦に巻きこまれ、佐々木小次郎にやぶれていたにちがいない。

この幻想は、わしに告げてくれておるのだな。おおきなものに巻きこまれるなよ、と

佐々木小次郎が、どの方法で舟島にわたったのか、武蔵は知らない。細川家の御用舟でわたる計画だときいていたが、じっさいにはどうであったか、知らないのである。武蔵が島についたとき、先にわたった小次郎は待ちくたびれていた。

小次郎は、おおきなものに巻きこまれたから、わしに負けた

細川家の世話で小次郎と闘ったことの重大な意味が、すこしずつわかってくる。

京都の内裏も吉岡も、たしかに高い権威をもってはいた。

だがそれも、いまや凋落しつつあるのだ。内裏は遠く高いところにあるが、吉岡は思いのほか近くにあって、武蔵の一撃をうけて痛んでいる。

それにくらべると、細川の権威は上昇をつづけている。丹後の田辺の舞鶴城で肌を感じた 幽斎の凄味が、あれから凋落も停滞もせずに上昇しつづけ、息子の忠興はいまや北九州一帯を支配するまてになった。

「幽斎——幽斎に逢いたいものだな。遠くからでもいい、姿を観たいものだな！」

おのれが輝いているのを、武蔵ははっきりと感じている。

輝いているおのれが観れば、細川幽斎の輝きは、これまでとは違って見えるのではなからうか。逢いたい！

武蔵の熱いつぶやきを耳にしたのか、吉太郎がおそるおそる、
「細川のご隠居さまは、もはや……」

この世のひとではないのですといわぬうちに武蔵が気づいて、
「父と子ながら、幽斎と忠興さまとは、なんというか、威厳のち
からの桁がちがうようだ」

小倉に、というよりは細川の家来のなかに門人ができた。京都、
江戸につづいて小倉が門人の培養池となる予感がする。

舟島の試合のあと、武蔵は松井興長に「細川殿のご臣下のうち、
しかるべき方と剣の試合をさせていただきたい」と願ったのだが、
興長からは承諾が得られなかった。

潮時であるなとかんがえた。

いつまでも小倉にいと、佐々木小次郎をやぶって獲得した名声
に翳(かげ)りが出てくるかもしれない。

吉太郎は察しのいい男である。武蔵が小倉を離れたい気分になっ
たのを察したらしく、「こんどは、どちらの方角へ……？」

「東の、北だ」

武蔵の反応は早かった。小倉から東の北をめざして行って、やり
たいことがきめてあったのだ。

武蔵と吉太郎は信濃の飯田についた。

飯田の城には慶長六年（一六〇一）から小笠原秀政が城主となり、
五万石を知行している。

「京都よりも寒いですな」

「信濃だからな」

縁も所縁もない信濃の飯田である、城下を歩けば地元のひとの目
について、さぞかし鬱陶しい気分になるかと案じたら、そうでもな
い。宿をきめたその夜から、ひとりまたひとりと客があつて、吉太
郎は応接にいそがしい。

そもそも、城下町へいきなり浪人がやってきて、すぐに宿をとれ
るはずがない。吉太郎の知らないところで武蔵が手をまわして宿そ

のほか、準備万端ととのっていたようだ。

京都や江戸なら、こういうことは吉太郎が任されていた。武蔵が自分で、それも吉太郎には知らせずにやっていたとわかって吉太郎は奇妙な気分になった。

毎日のようにやってくる客の顔が武蔵に似ている。ひよっとすると兄弟、お兄さまかもしれぬと思いつき、だまっていられなくなつたので、

「あの方は、もしや……」

武蔵は唇をぎゅっと嚙んで、口のなかで「うむ」と唸り声をさせて、「兄だよ」といった。

師の兄だというひとは田原甚兵衛久光といい、小笠原秀政に仕える侍であった。

田原と宮本——兄弟だというのに、姓がちがう。兄弟で異なる姓を名のるのは珍しいことではない。兄さまか、わが師か、どちらかが他家の養子になったのだろう。順序からいえば、わが師が田原家から宮本家に養子にいったのだろうな。

吉太郎の頭のなかの推理を、武蔵は察知したのだろう。「世間に、¹いうなよ」と釘をさした。師にいわれなくとも、口外すべきことではないのは吉太郎にもわかる。

ぶらりと城下をあるき、木刀をまじえる音がすると、のぞいてみる。お城には田原家の客として届けてある、不審者に扱われるおそれはない。

十日ほどして、笑顔の田原久光が吉報をつたえた。

「生まれた！」

「生まれましたか！」

田原久光の次男が誕生したというのであった。

久光が去ってから、武蔵がぼつり、ぼつりとはなすのをきくうちに吉太郎は、なんとまあ、お武家というものは厄介なことをするものだと感じ入った。

久光と武蔵のあいだで、久光の次男が生まれたら武蔵の養子にするはなしがすすんでいたのである。

武蔵には妻もいない、妾というべき女もない。妻も妾もないから、子をもちたければ養子をとるしかない。

そもそもわが師は女というものを嫌いなのではないかと吉太郎は思うことがある。女は嫌いでも、子は欲しいという男はいくらもある、わが師もそうなのだろう。

剣士として生きてゆこうと決意したときから、武蔵は「家」の継承というものに興味をもたぬことにした。「家」を維持するには土地を所有していなければならぬわけだが、父を回想するにつけても、土地を所有することの難儀は想像できる。

あれほどの些細な土地、しかも、自己の所有地であるのかどうか、それさえわけのほからぬ土地でさえ、父は苦勞していた。

土地をもたなければ後継者は要らない。

だが、このごろ、武蔵のかんがえに変化が生じた。剣技に自信が付いてきたのである。わが剣技は後世につたえるべき価値がある。いや、つたえるのはおのれの義務であるとかんがえるようになった。となると、子が必要だ。

継承されるのは「家」ではない、剣技である。おのれの血をひく実子では、才能に不足があった場合に困惑する。養子をとるならば選択が可能である。そこで武蔵は兄の次男を養子にするときめた。

そこまでは、わからないでもない。いや、わかる。わからないのは、その先だ。

久光さまの奥方はこの飯田には来られていない。播磨の印南郡の米田が田原家の本貫地であって、奥方はその米田でご次男さまを出産なさったというのだ。

武蔵の説明をきいて——このときほど武蔵に親近感を感じたことはないのだが——吉太郎は内心で首をかしげざるをえない。

武蔵が自分の手で、久光の次男の貞次をそだてるわけではない。

しかるべき年齢までそだったら、だれかの手によって江戸なり京都なり、武蔵のところにとどけてもらって養子にする。

それでいいはずなのに、わざわざ信濃の飯田まで足をはこんだのは、なぜか？

疑問を兄さま——田原久光にぶつつけたところ、久光もおなじ想いであるらしく、「江戸が京都で待っておれば、こちらからとどけるよといったのだ。だが、弟は、是が非でもそちらへゆくというのでな……」と、これまた首をかしげつつ、いうのであった。

なぜか——？

養子をむかえる一連の手続きを、武蔵は神秘というもので飾りたいたとかんがえていた——あとから思うと、そういえる。

実の兄の次男を養子にむかえたのだが、武蔵はこれを天から、あるいは神の手からいただいたのだというふうに装ったのである。

「貞次よ、おまえを養子にむかえたについては不思議なはなしが……」

ものごころのついた貞次にむかい、こう前置きして武蔵は、その「不思議なはなし」なるものを語る。

それとは別に、知り合いのだれかれに、こう前置きして「不思議なはなし」を語る。

「あの子を養子にしたについて、じつをもうせば、なんとも不思議なはなしが……」

その不思議なはなしというのは——

武蔵は常陸から出羽へ、武者修業の旅をつづけていた。

出羽の庄内の正法寺ヶ原村を通っていたとき、道端で、泥鰯（どじょう）を小桶に入れて売っている童子が目についた。

「泥鰯を、売ってくれぬか」

童子は桶をすーっとわたそうとする。

「わしは、ひとりじゃ。たくさんは要らぬ、少々でよい」

手拭いを出し、このなかに少々だけ入れてくれというと、童子はほがらかに笑っていったのである。

「旅のひとが泥鰯を買ってくれるんだ。惜しいことはない、桶ごと、ぜんぶ持ってゆきなよ」

桶をわたして、くるりとうしろを向いて去っていった。武蔵は、あきれた想いで桶をもつて立っていた。

つぎの日、武蔵は宿をさがしあぐねた。日は暮れてきた、先の村までは三里、ひきかえしても四里か五里はある。困惑していると、ちかくの山の麓に灯が煌(きら)いているのを発見した。

足をはやめ、粗末な小屋の戸をたたいた。

「だれ？」

「旅の者、宿がなくて困っておる。泊めてもらえぬか」

「この狭い小屋にわれひとり、食べ物はないにもない。泊めるわけにはいかない」

「片隅でよろしい。横になれば……」

なかから出てきたのは、昼間の泥鰯売りの童子である。

「あれっ。泥鰯を買ってくれたひとじゃないか……ならば、おはいいり」

小鍋の下に火をもち、渋茶を出してくれた。聡明で俊敏な印象の子だ。

「その歳で、ひとりか。御両親は、どうしていおる？」

「両親は正法寺村で農業をしていたが、やめて、ここに引っこんで死んだ。姉がひとりいる、三里はなれた農家へ嫁にいった」

栗飯ののこりを出して勧め、夜は冷えるから早く寝たほうがいいといつて、童はつぎの間にさがった。

深夜、こしこしと刃を研ぐ音がして目が覚めた。夜盗がきたのか、わしが眠るのを待って忍びこむつもりだなと、わざと大きな欠伸をした。

「おじさん。眠れないのか」

「刃の音がしたぞ」

童は笑って、「臆病なおじさんだ。こんな子供に大人が殺せるものか」という。「ならば、なぜ刃を研いだ」と問うと、童はしんみりした調子になった。

「父が死んだのはつい昨日のことだ。母の墓にはこんで埋めようと思いが、重くてはこべん。ばらばらにしてはこぼうと、刀を研いでいる」

「わしが手伝ってやる」

死体の肩を武蔵が、足を童がかかえ、山の麓にはこんで母のかたわらに埋めて、石をたてて墓誌とした。小屋にもどると夜があけていた。

童は武蔵に、しばらくここで一緒に住んでもらえぬかと頼んできた。

「ここに住むより、わしと一緒にくれば出世の世話をしてやるぞ」

「どこへでもゆくが、いつまでも奴隷の身ならば、いやだ。槍をもつて馬にのる身になれるなら、ゆこう。それが出来ないならば、ここにひとり住んで自由な一生をおくるほうがいい」

わしに付いてくればいつまでも他人の奴隷ではないと勧めて、童子とともに正法寺村を出た。そのとき、童は小屋に火をつけて始末したが、これも武蔵を感心させた。

童はやがて伊織(いおり)と名のり、武蔵の養子になり、信濃の飯田から豊前小倉へ移封した小笠原家に仕え、家老となった。のぞみのおりに馬にのり、槍をもつ身になった。(『二天記』)

実の兄の次男、つまり実の甥にほかならない伊織を、武蔵はなぜ泥鎧売りの童であるなどと仮装したのか？

伊織と自分を、神秘の世界の住人にしたかったからだ。天から授かった子、という神話を、ちかい将来のわが子の祝賀として贈ったのだ。

「おまえは、じつは……」

「じつをいうと、この子は……」

やっているうちに、武蔵も半分ぐらいはその気になったろう。

おさない伊織にいたっては、おのれの出生について養父が語るこ
とがすべて真相だと思っただけである。伊織の「父が語っていたと
ころによれば」が伊織の周辺につたわり、『二天記』の記事になっ
たと思われる。

武蔵と吉太郎は信濃の飯田から京都へもどった。京都生まれ、京
都そだちの吉太郎はもちろん、播磨うまれの武蔵でさえ懐かしく思
う京都。

「どうだろうな……」

「ちらりと、うかがってきました。むかしの威勢はないが、落ち目
というほどでもない」

吉岡憲法の一門の様子である。

武蔵は吉岡のことを気にかけていた。吉岡に怨みがないのはもち
ろん、例の試合のあとからは親しみを感じてさえいる。おのれが名
を売りだす踏台になってくれたと思えば、吉岡は恩人だというべき
なのだ。

もともと無名の武蔵にやぶれたのである、兵法指南の吉岡の名が
涸落(ちようらく)したのは仕方がないが、武蔵は没落(ぼつらく)はのぞん
でいない。吉岡の名を踏みつけはしたが、吉岡一門の没落を見たく
はない。

武蔵の気兼ねを察している吉太郎は、京都にもどるとすぐに、吉
岡憲法一門のその後をさぐってみた。

元新在家の屋敷はそのままだが、剣術指南からは手をひいた様子
である。吉岡の名をささえていたのは足利幕府の権威だが、その幕
府が消滅した。武蔵に勝ったとしても、あかるい展望がみえている
わけではない。

吉岡はいずれは没落せざるをえない。わしに負けなければ一年や
二年は長生きしたかもしれんが、そうなれば吉岡はもっと苦しむ
そうかんがえて、気が晴れた。

吉岡の家業の染物は繁盛しているそうだ。

染物の作業と商売は元新在家ではなく、西洞院の綾小路でやっている。このあたりには西洞院川の良質な水をもとめて染色業者があつまっている。

「剣法染はシャム口染……ともいうのか」

「サラサ染とも、ただシャム口ともいいますな。鉄の粉を薬につかって黒の茶の色を出すのがシャム口染」

「黒の茶色をね……」

信濃からもどってきて、馴染みのない街の様子が気になった。吉太郎から剣法染のはなしをきいて、シャム口染の衣装を着るひとが多いせいだとわかった。

黒色なのに派手な感じがする、武蔵を刺激した異常感はこれだったのだ。

黒はすべての色彩を吸収するから、黒色が基調の衣装を着るは勇気が必要だ。いまの京都の市民は、黒の衣装をまともにも吸収されない顔色をして、黒の衣装が映える身のうごきができるのだ。

黒茶の地色に黄色を縫い取りした衣装などは、胸を衝かれるほどの刺激を感じる。合戦するにせよ、しないにせよ、豊臣も徳川もはやいうちに決着をつけないことには市民に愛想をつかされてしまいたい。そうだ。

武装の武士が往来するのを見かけることもあるか、黒茶の衣装の市民の姿とくらべると弱い。弱いというより、汚らしいというべきだろうか。

大坂と伏見、豊臣と徳川の争いが、なにもなしに、このままでおわるとはだれも思っていない。戦争の不安を気づかぬはずはないのに、市民は黒の衣装をまとも派手にふるまっている。

吉岡よ。これほどの事業ができるのに、なにを好んで兵法などやったのだ。悪いことはいわん、二度と剣法などに手を出すなよ！

吉岡憲法にたいしては、胸のなかで、「兵法など、やめろ」と忠

告はするが、それとは反対に、おのれ自身は燃えている。京都のひとのすべてが、宮本武蔵の剣技に驚きの声をあげる日がちかづいているという確信に燃えている。

（第10章 終）

「ノビスパン……！」

「はあ。遠くはございますが……」

「遠いというか……」

布袋屋が、なんとおどろいたことに、ノビスパンという言葉を口にした。「新・イスパニア」という意味でノビスパンというのだそうだ。地元ではメキシコという名で呼んでいるらしい。

海のむこうの国だと知ってはいたが、布袋屋がノビスパンへ行くといいだしたので武蔵が仰天し、吉太郎が布袋屋さんはなにを血迷ったのかと不審な顔をした。

だが、布袋屋が冗談でノビスパンなどというはずがない。

豊臣秀吉がキリスト教の宣教師を追放し、あとをうけた徳川家康もキリスト教を迫害する姿勢をかためている。

ポルトガル系のイエズス会が徐々に撤退をはじめ、あとからやってきたイスパニア系のフランシスコ会も、京都や大坂、堺における妨害勢力の強い壁にぶつかって苦心しつつも布教活動をしていたが、そろそろ限界を感じたようだ。

ポルトガルやイスパニア系の宣教師会の撤退によって困惑するのはキリシタン信徒であるが、日本の商人たちも恐惶状態におちいった。南蛮貿易が杜絶するのは確実になり、となれば、これまで手にしていた利益が消えるしまう。

いっそのこと、

「海のむこうへ出て行って、先方の商人とじかに取引きをするしか手はないのではないかという声があがりました……」

京都では田中勝助という商人がその気になり、出資者をつのりはじめた。布袋屋も出資したらしいが、どういう風のふきまわしか、自分も勝助といっしょに船に乗ろうと思いついたらしい。

台湾よりもっと南の、ルソンという大きな島をイスパニア人が占領していた。本国から総督として派遣されていたロドリゴ・デ・ビベロは任期がおり、ノビスパン経由で帰国する途中、漂流して

上総に上陸した。

ロドリーゴは江戸や駿府で家康と秀忠に拜謁して優遇され、日本とノビスパンのあいだの通商路を開拓することに成功した。

帰国するにあたり、ロドリーゴは日本商人の臨時の組合をつくる案を出した。組合の商人を、まずはノビスパンへ、うまくゆけばそのもつと向こうのイスパニア本国へ連れて行って直接の貿易をやればいいではないかという案だ。

家康と秀忠の許可が出て、京都の田中勝助が筆頭商人となり、仲間を募集するはこびになった。

「田中さんの仲間に入れていただくのかなと……」

「ノビスパン……！」

武蔵がついた溜め息は不安と困惑の溜め息である。

ここまでやってこられたのは、なんといつても布袋屋のおかげ——
—そういう気が武蔵には強い。カネの問題である。

播磨を出るときにあつめたカネ、京都にくるまでに稼いで貯めたカネ、それをあわせて布袋屋にあずけ、布袋屋に運用して太らせてもらっている。

はじめは無名な剣士の宮本武蔵だが、吉岡憲法の一門と試合をして勝ったことから評判が急上昇した。ついでに、その武蔵を保護している布袋屋の評判もあがってきた。武蔵の利が布袋屋の利につながり、それがまた、という循環である。

武蔵は対等な関係だとは思っていない。

海とも山ともわからぬ武蔵に、商人の言葉をつかえば 元手をおろして、保護してくれたのだ。

布袋屋に感謝し、布袋屋を頼りにしているのである。

「くわしい事情はわからぬが、ノビスパンなどへゆかずにはすむ手はないものかな」

「これまでのかたちの南蛮貿易は杜絶するでしょう。そうなるのを座して待つよりは……」

「いまのうちにこちらから出てゆけば、貿易を継続するのは可能である……」

「はあ……」

「いうわけだな」

懐手をして巨額のカネを儲けている、とは思ってはいない。布袋屋の眉間の皺を見ていると、商人の苦心苦労もなみたいていのものではないということが、いまさら実感される。

メキシコへ、そのまたむこうのイスパニアまで自分でゆかねば商売ができんのか！

布袋屋の顔つきからして、まだ決心していないのはあきらかだ。

ゆくか、ゆかねか、かんがえあぐねて、むしろ武蔵に相談をもちかけている気配でもある。

商売のこともノビスパンのことも、なにも知らぬ武蔵に相談をもちかけているらしいところに布袋屋の苦悩があると知れた。

武蔵の頭に、ひょいっと名案がうかんだ。布袋屋のノビスパンゆきを止められるかもしれぬ名案である。

「行ってもらいたくはないが……」

口もって、

「ゆかねばならぬ、という次第であれば、布袋屋さんの似顔絵を描かしてもらいたい」

「わたくしの、顔を、絵に……」

ノビスパンへ、さらにはイスパニアということになるとこの世のお別れかもしれぬ。せめてもの形見に、あなたの顔を描いて手元においておきたい。ゆるしてくれと武蔵は嘆願の口調でいった。

武蔵が世話になり、禅や儒教をまなんでいる相国寺の師僧は水墨画を得意としていた。寺のなかでは吹聴できない雰囲気があるらしく、武蔵を相手にしているときにかぎって水墨画のはなしをして、興奮する。

何百枚でも何千枚でもかまわない、布袋の肖像を描きつつけてい

れば、いつかある瞬間に水墨画の名手になっているおのれと出会う——これが師僧の言葉であった。

ところで、布袋屋はじつになんとも布袋に似ているのである。本人にいわせると、祖父の代からの商号が布袋屋であり、その祖父が格別に布袋に似ていたわけでもないのだそうだが、

「祖父よりはわしの父が、父よりはわしが、布袋さまに似ておるそうです」

はじめて会ったとき、布袋屋はそういつてほがらかに笑った。

布袋——布袋和尚——布袋さま。

梁代の禅僧、浙江省のうまれ、名は契此で号は長汀子、四明山に住んだ。腹がぶつくりと膨れた、福々しい容貌の和尚さま。

身のまわりの品物すべてを大きな布の袋に入れて歩いていたので、「布袋和尚」と愛称された。精神の自由闊達の境涯をあらわす人物として尊敬されている。亡くなったのは十世紀のはじめか。日本では七福神の一とされるが、中国では布袋は弥勒菩薩の化身だとするかんがえも強い。

今日は師僧のもとで布袋を描こうときめると武蔵は、朝から夕方まで布袋の画を描いている。

「そんなに眼光の鋭い布袋が、おる訳がないではないか！」

ならばと、目の光のおだやかな布袋を描いて観てもらうと、

「死んでいる。これでは死人の目だ」

とりつく島もない。

日が暮れ、からだはへとへと、目も見えなくなってきた、今日はこれでおわりにしたいと許しを乞うと、「あれが良かった」と、武蔵にとっても意外な作品を褒めてくれる。昼ちかく、快活な気分るときに描いた布袋であるが、武蔵としては、

「こんなもの、だめだ」

酷評の対象でしかないと思っていた作だ。

しかし、ちかごろでは、画を描くということの深刻な意味がわかってきた、いや、わかってきつつあるという感触がある。

この世の、どこにも、おなじ存在のない絶対唯一の独特な存在
それを作るのが——「作る」というと師僧に叱責されるが——水
墨画なのだ、画を描くということなのだ。

いつのことであつたか、武蔵が、おずおずと師僧に、
「画を描くのは神の業を真似ることなのですか？」
たずねたら、ぎよろりと睨まれた。知つたかぶりをするな、とい
うわけだろう。

師僧はまた、絵筆や墨にあれこれと注文をつけぬほうがよろしい
と諭してくれた。道具の良し悪しに気をとられると、できあがった
ときの満足感をそこなわれる、楽しい気になれぬから、という理屈
であつた。

これはそのとおり、まことに至言だと感服したから、その夜、吉
太郎に冊子を出してもらつて、書き足した。

「兵具は格別の物を求むべからず」

咄嗟のとき、あの刀でなければ闘えぬ、などとはいつておられぬ
はずだ、そうであるうと吉太郎にいうと、吉太郎は、

「そのような初歩のことまで、師が弟子にいわねばならぬものです
か。まるで赤子に乳の飲み方を教えるような……」

「剣のことなら知らぬことはないという武士でも、じつは乳の飲み
方を知らぬ者が多いものだ。乳の飲み方も知らずに剣をにぎれば、
るくなことはやらぬ」

布袋の画を描くから、それまでノビスパンゆきをきめるのは待つ
てくれと、武蔵は布袋屋にいった。

まじないをかけたつもりだ。

布袋屋には恩恵を感じている。その布袋屋の形見となるほどの上
出来の布袋の画を描けるわけがない。つまり、いつになつても画は
完成しないから、布袋屋のノビスパンゆきは立ち消えになるとい
まじないである。

「ありがたいことです。一介の商人にすぎぬわたしが武蔵さまの布

袋の画の題になるとはこのうえもない名誉」

武蔵は布袋の肖像にとりかかる。

わざと下手な画を描くつもりはない。それではまじないの具にならない。傑作を描くつもりで苦闘するが、ついに傑作は描けなかったということだまじないになる。

布袋屋はノビスパンへはゆかないときまった。武蔵の布袋の画のまじないが効いたのか、どうか、わからない。

武蔵は布袋屋に、なぜ、ノビスパンにわたらんのかとは、たずねなかった。布袋屋の落胆の様子はひどかったから、たずねるのは気の毒な気がした。

布袋屋が気をとりなおすに、十日ほどはかかったろうか。「異国へゆかなくなるとも、儲ける手はいくらでありますよ」といって武蔵を安心させてくれた。

嬉しい気分になった。

剣技を観せ、剣技を教えて世をわたってゆくおのれに、ときとして不安を感じることがある。そのとき、布袋屋のような、剣とか武士とかいったことと無縁なひとが側にいてくれると安心するのである。

布袋屋は商人として生きてゆく、わしは剣士として生きてゆく。

どちらが難しいとか、易しいとか、くらべても意味はないが、わしには布袋屋の真似はできんなあ！

慶長十七年、武蔵が二十九歳であったこの年は慌ただしい気分の連続であった。

四月に豊前の小倉の舟島で佐々木小次郎と試合をして、それから信濃の飯田にでかけ、甥の貞次の誕生を確認し、いずれは養子にむかえる約束をとりつけた。

京都にもどると、布袋屋のメキシコゆきの件が待っていた。それをなんとかきりぬけてほっとしたところへ、

「三百人はくだらぬとか……」

「みんな、殺されました！」

「殺されたか！」

武蔵は大きく、深く溜め息をつき、
「危ないところを、なんとかきりぬけたものだな」

もういちど深い吐息をついた。

大鳥居逸平(おとりのいっぺい)の一味が江戸で一網打尽となつて、ついに三百人が処刑されたという。

江戸にいたときから大鳥居の名は知っていた。なにをしているのか、およその見当もついていた。

大鳥居逸平、それは武家奉公人の頭領であつた。

武家奉公人の多くは厳密な意味では武士の身分ではない。武士の家柄の出の者もいたはずだが、祖父か父の代に土着して農民として生きてきた家の者が多い。

あえていえば農民その他の身分の出身であり、はたらくべき土地がなく、仕方のないままに新興都市の江戸にやってきたか、あるいは農業を嫌つた若者が江戸に出てきて武家の屋敷に奉公口を見つけた。それが武家奉公人である。

江戸は日に日に膨張をつづけるから、武家奉公人はおびただしい数にのぼっていた。かれらがいなければ、大名や旗本の屋敷の日常は一日も送れない。

奉公人は武士ではないが、武家で働いているから、おのずから武士の生活に親しむ。武士ではないが武士にちかい、武士のような身分という気が濃厚になつてきて、雇い主の旗本を主人として尊敬しない傾向が出てくる。

奉公人は旗本の日常の仕事に駆使される。小姓として屋敷内で奉仕することもある、主人の外出のお供をしたり、厩(うま)と馬の世話をしたり、弓や槍の手入れをすることもある。

屋敷を警護するのも奉公人の仕事だ。われらがいなければこの屋敷が盗人にねらわれても不思議ではないという想いが顔に出て、こ

れが主人の気に障る。

奉公人は雇い主の横暴にたいして怒るけれども、おさえられる。

雇い主は奉公人の傲慢を叱責し、ときには従者にたいする主人の権利を行使すると称して切捨てにすることさえあった。旗本の主人たる徳川秀忠や家康は、これを見ても知らぬふりをするだけである。

旗本と奉公人の雇傭関係が、武士のあいだの主従の關係に類似するものとして解釈されるところに問題があった。

いつしか奉公人は、たがいのあいだに連帯をつくり、主人の横暴に対抗するちからをもつようになった。

連帯の組織の世話役は浪人武士である。世話役のなかの頭領が大鳥居逸平であった。

武蔵の農家出身の大鳥居は江戸に出て、旗本の本多百助の徒士(かち)をふりだしに、大久保石見守の目付、大久保信濃の中小姓などをつとめたあと、奉公人の組合を結成して頭領になった。

大鳥居の部下には大風嵐之介、大橋摺右衛門、天狗魔右衛門、風吹散右衛門といった異様な名をもつ者がいて、奉公人をまとめ、旗本にたいする敵愾心(てきいん)を煽っていた。

京都にも、江戸の大鳥居逸平のような人物は存在していた。

江戸に住んだ体験からして、武蔵は京都の武家屋敷は奉公人なしにはやっていけないのは知っていた。ならば、大鳥居逸平のような人物がいなくてはならない。

いないはずはないと見込みをつけて、京都所司代は市内を探索していた。

武蔵は相国寺に世話になっている。その相国寺のあたりに所司代の探索の手がはいった気配を感じたこともあった。関ヶ原の敗者、敗者にゆかりの者が潜伏している容疑と、武家奉公人の組合の頭領の身辺探索を兼ねていたにちがいない。

武蔵自身は、奉公人の組合の頭領の嫌疑をかけられているとは思わなかった。剣士として有名になりつつある、幕府の手先の所司代

が嫌疑をかけるには武蔵の名と顔は世間に知られすぎていた。

だが、危険がないわけではない。奉公人の頭領のほうから、奉公人の味方としての協力を期待される、その危険だ。剣士として名をあげつつある武蔵は、なるほど、奉公人にとっては頼もしい味方に見えるかもしれない。

江戸の旗本と奉公人とのあいだに険悪な空気がたちこめてきた。

旗本はますます激しく残酷になり、奉公人は反抗の顔色を隠さないようになってきた。

武蔵の知らぬことだが、じつは、大鳥居逸平は伏見にいたことがある。徳川秀忠が伏見に在城していたとき、旗本の奉公人たちが寄り集まってさわいだ。馬の扱いや主人のお供のやりかたについて、主人側と奉公人側とのあいだに意見の相違があったのだ。

大鳥居逸平は本多百介の奉公人として、草履取りをつとめていた。伏見城の騒ぎに火をつけた疑惑があてられたので、大鳥居は逮捕をのがれて佐渡にわたった。佐渡の代官をしていたのが大久保石見守長安（ながやす）である。

長安の目代の大久保信濃の小者としてはたらくうちに目をかけられ、侍に抜擢されて中小姓をつとめていた。槍や刀、弓や鉄砲の訓練をして上達し、佐渡に駐在する旗本のあいだの評判になった。名馬や名器、そして優秀な奉公人をもつのは羨望の的だ。

逸平の評判が、かつての主の本多百介の耳にとどき、百介から信濃へ、逸平を返してくれと要求された。

逸平の雇傭権は本多の手にある。やむなく信濃は逸平を本多に返すことになった。佐渡から江戸へ出るときの逸平の行列は豪華であった。供の侍五、六人に武器をもたせ、乗り換えの馬をしたがえ、犬を牽いて百介のところへやってきた。

その後はいろいろあって、逸平は武家奉公をやめて浪人となり、あぶれものの頭領となった。あぶれものの仕事が武家奉公人をまとめて旗本に対抗することだ。

非道な旗本にたいし、奉公人を代表して楯を突くあぶれもの。武蔵は、かれらの意地張りに共感するものを感じていた。大鳥居逸平という名を耳にするたびに、「頑張れよ！」とはげましてやりたい気がおこってくる。

あぶれものの反抗は、徳川幕府の堪忍袋の緒が切れるところまで激化した。

幕府はたまりかね、すべての旗本にたいして、

「あぶれものの影響下にあると認定される奉公人を雇ってはならぬ」
厳しい指令を発した。現に雇っている奉公人で、あぶれもの影響下にあると思われる者は即刻に誡首せよと、強硬な指示である。

幕府の指示にしたがって、旗本諸家であぶれもの吟味がはじまった。

大御番松平大隅守重勝組の与力の柴山権左衛門正次の家でも吟味をした。小姓のひとりがあぶれもの一味である疑いが強まった。

なおも厳しくとりしらべ、まちがいなしと判断したので身柄をおさえて公儀へ送ろうとしたが、じつは、柴山家の奉公人五、六人の全員が一味であったのだ。

かれらは連帯の堅い約束をしていた。仲間の者に無理難題をかける者は、たとえ主人であろうとも命をすてて闘うという誓約をとりかわしていた。誓約にしたがって、かれらは主人の柴山を斬り殺して立ち去った。

柴山家の事件から、あぶれもの吟味はいつそう厳格になった。夜中、神田の町中を笠をかぶって頭を隠して通っていた者をとらえて吟味にかけたところ、あぶれもの一味であると白状し、五百人あまりの仲間があるとみとめた。

大鳥居逸平は八王子の高幡にひそんでいるのがわかった。内藤平左衛門が捕手役に任じられて、おりから八王子の不動堂の相撲を見物していた逸平の逮捕にむかった。

平左衛門が逸平に組み伏せようとしたが、逸平はもともと相撲好

きの大力、組み合い、ねじあうところに、平左衛門の手下が大勢で寄ってたかつて取りおさえた。

業物（わざもの）とはいえないが、逸平は八王子下坂康重に打たせた太刀を差していた。刀の中心（なご）には「生き過ぎたり、二十五」の文字を象嵌で入れさせていた。

手を替え品を替えての拷問に、逸平は屈しない。尋問にたいして完全に黙秘したのである。

「いわねば、骨を砕いて尿を吞ませるが、それでもいわぬか」

逸平は口を堅くつぐんだままである。

七月の中旬、大鳥居逸平と一味の三百人が江戸じゅうを引回しのうえで、磔（はりけ）にかけられた。

御家人のなかにも、あぶれものの一味と断定され、罰せられた者があつた。穂坂長四郎と坂部金太夫は越後の村上に、米津勘十郎は津軽に、井上左兵衛は佐渡に、岡部藤次郎は南部にあずけられ、その家は改易された。

「三百人……！」

腕をこまぬき、首を垂れ、武蔵は唸っている。

奉公人は、なにがなんでも反抗するというわけではなかった。主人の扱いが穏当であれば、唯々諾々として毎日の仕事にはげみ、すくない給料に満足はしないまでも、主人にむかつて剣をふりあげはしなかつたはずだ。

だが、奉公人の怒りをまとめて集団の反抗に仕立てていった大鳥居逸平の行為に、あくまでも正義が貫徹していたであろうか。

自分ひとりの利益を図ったわけではなさそうだ。むしろ、おのれの利益は度外視して、正義の意地をつらぬいた行為であつたといえる。

だが、そこに三百人という数字を入れると別の問題が出てくる。

大鳥居が正義の意地をつらぬくのを美しい雄姿と見て仲間にはいつてきた奉公人は多いはずだ。この種の参加者がほとんどであつたと

さえ推測される。

指導者が、わが身の利益や危険は度外視して強敵に立ちむかうのは尊敬されるべき姿である。

そのとき逸平は、これほど大勢の生活と命をわれひとりで守れるのかと自問自答すべきであった

自問自答したならば、こたえはかならず 否 であつたはずだ。

圧迫される奉公人たちは連帯を実現できず、個々人がばらばらになつて、職さえうしない、路頭に迷つたかもしれない。

ではあるが、

それでよかつたのだ、逸平よ！

自信をもつて、武蔵は逸平の靈にむかつていうことができる。

奉公人はそれぞれ武士の身分に強い関心がある。武士であつたが、落ちぶれたのだ思っている者もいる。どうにかして武士の階級に成り上がりたいと切望している者もある。

ということとはつまり、全員が刀に関心も興味もあるということだ。

逸平よ、おまえもそのはずだ

刀に関心があり、武士の身分にあこがれている奉公人——そういうかれらに正しい刀の使い方を教えてやればいい。

正しい刀の使い方を知っていれば、人生、迷うことはないのだ。

絶対に！

はやいはなし——

正しい刀の使い方を知っていれば盗みをやらずにすむ、他人の妻や娘を犯す気にならなくなる。他人の不幸と不運に涙をながすことができる。組織の権威という無惨な系につながるのが人生の最終の目的である、などとかんがえることから解放される。

わしを、見る！

わしが大鳥居逸平に教え、大鳥居が奉公人に教える。ならば、すくなくとも三百一人は磐石の精神につらぬかれて安定した生涯を送れたはずなのだ。

逸平よ。そうすべきであつたのだ。われらふたり、じつに惜しむ

べき機会を逃したものだなあ！

縁もゆかりもない大鳥居逸平であったが、武蔵は仲間をうしな
った 喪失感を味わった。

うしなってはじめて気づくということ、とりかえしがつかないとい
うこと、それが喪失感の中身である。

大鳥居逸平の一味が処刑され、武蔵は意外千万の喪失感をあじわ
った。

逸平の喪失感を埋め合わせるものを、意識して求めたわけではな
い。ならば無意識に、といえいいのか、武蔵は出雲阿国の踊る姿
に共感を味わおうとして、みごとに失敗したのである。

出雲阿国——彼女が京都から消えてしまったのだ。四条河原でも
北野天満宮の森でも、阿国のかぶき踊りを観ることができなくなっ
ていた。

阿国よ。まさかおまえが、おまえより新しいものに負けることは
ないはず……ではなかったのか！

(第 11 章 終)

出雲阿国をのりこえるものがあらわれるかもしれぬ——その気配ははやくも慶長十二年か十三年にはみえていた。

四条河原に「おんなかぶき」、「遊女かぶき」と称するものが登場したのである。

竹矢来と幕をめぐらせ、棧敷をつくり——ということは能の舞台とおなじ——四本柱をたてて床を板で張った舞台は五間ずつ四方の広さであった。阿国の舞台——というほどのものではないが——がせいぜい七枚か八枚の板敷きであるのにたいし、こちらは二十枚はこえる板敷きであろうか。

舞台の中央に三味線を弾く女がひとり、きらびやかに飾った椅子にすわり、それをかこんで十数人の女の踊り子が整然たる輪になつて踊る。

太刀もちの男がひとり控え、脇座には三味線をかかえた女が数人、横になって坐し、そのほかに囃子方と後見の女、茶屋の女など、賑やかである。

阿国の舞台では見られず、「おんなかぶき」「遊女かぶき」の舞台で輝いているもの、それが三味線だ。

琉球に独特の楽器の三味線は、永禄年間つまり織田信長が天下とりに王手をかけたころに堺につたわり、堺で改良をほどこされて京都にはいつてきた。

それまでの楽器といえば琴だが、力強く、しかも微妙に変化する音を出せる点では三味線にかなわない。多数の観客の喝采をうけることまちがいなしとわかっていても、阿国には手が出せない高価な楽器であった。

だが、「おんなかぶき」「遊女かぶき」の興行主が五本や十本の三味線を調達するのは容易であった。なぜなら、かれらは遊女屋の経営者であったのだ。

秀吉のころの遊廓は二条通りの東京極にあった。家康の時代とな

り、二条の堀川に二条城が出現したことで二条京極から六条通りの柳町に移転した。

この過程で遊廓経営が大きく変化した。豪華で堅牢な屋敷をかまえ、多数の遊女をかかえて客をまねく、大規模な遊廓が主流となった。「遊女かぶき」を興行した遊廓のひとつの佐渡島屋も大規模な業者であった。

この興行は地方を遊行しない。京都の四条河原に、ほぼ常設の舞台をもっている。

阿国は北野天満宮の森で演じたが、北野にかぎったわけではない。ひとの群がるところに阿国があらわれ、阿国が踊るところにひとが群れたものだ。

阿国の一座では芸人と興行主とが別れてはいなかった。「おんなかぶき」「遊女かぶき」では、興行主と芸人が別であった。前者が後者の雇傭主であり、後者は芸という労働の対価として給料をうけていた。

阿国の踊りを観られないとわかつてはいるが、阿国の幻想をもとめて、武蔵は四条河原の「おんなかぶき」「遊女かぶき」の客となる。

三味線の音は刺激的、かつ魅惑的である。弱から強へ、緩から急へ、自由自在に楽曲をかなでる。

だが、舞台の主役は踊り子の塊であって、個々の踊り子ではない。三味線の音にみちびかれ、塊としてにぎやかに踊りはするが、塊としての意志があつて踊るわけではない。塊には意志がないのだ。個々の踊り子が個々の意志を否定されるところに塊が塊として存在できる。

ここには、阿国が踊る場はない。寂しいが、このほうが阿国にとってにはよかつたのだな

遊女は舞踏の訓練をうけていない。素人とはいえないにしても、専門的な舞踏家ではない。遊女の踊りをみちびく三味線にとっては

物足りないことであつた。

「おんなかぶき」「遊女かぶき」といいながら、じつは、いささかもかぶいてはいないのである。阿国が懸命にかぶいた次元から一段も二段も後退したところに成立したのが「おんなかぶき」「遊女かぶき」であつた。

これからしばらくの時をへて、三味線の音と太夫の語りにもちびかれて演技をする人形の舞踏と演技が登場してくる。三味線の音と太夫の語りにとって、訓練をうけていない遊女の踊り子からだは邪魔であつたのだ。

意志も意欲も、なにももたない人形と出会つた三味線と語りは幸せであつた。

武蔵は、人形の舞踏と演技が確立するまでには生きていられなかつた。もしも人形の踊りと演技を観たとすると、どのように感じたであろうか。

阿国よ。おまえが人形の舞踏を観るならば、満足するだろうよ。ただし、人形の動きではなく、三味線の音と太夫の語りにたいして、ではあるがね

- 1 8 8 -

出雲阿国の退場、それにくわえて大鳥居逸平の一味の肅清——武蔵の身にひしひしと寄せてくるのは寂寥の感覚である。

わしひとりが、この時代にとりのこされるような……
とりのこされまいとする者は、人間の塊(かたまり)のなかにわが身をねじ入れてゆく。

だが、わしは、塊のなかにわが身を入れることはしない。塊のなかに身を入れようとするひとの数が多いたるは知っている。つまり、そのほうが生き易いのであり、そのようにせぬほうが生き難いのだ。しかし、わしは生きられる。これが、あるから。

これが、太刀と刀があるから、わしは人間の塊の外で生きられる。

相国寺の藪の空き地で、武蔵が吉太郎に稽古をつけている。布袋

屋がそばにひかえている。

メキシコ渡航が実現しないとわかったあとで、布袋屋は「わたしが刀をにぎっても、悪いことではないのでしような」と、武蔵に教えてもらおうようになった。布袋屋は吉太郎のつぎに稽古をつけてもらう。

「まず、足だ」

「足」という言葉は武蔵の剣技にはない技である。技のまえの技といえばいいか、履物を履かぬ裸の足裏を地面につけて、じーっと立っている。それだけのことだ。

いや、じーっと立っている、といつてはまちがいだろう。足裏と地面が一枚の鞣革(なめし物)のように一体化して、足とも地面とも區別がつかなくなるまで立っている。からだは微塵もはたらかさず、意識だけを激しく作動させる。

はじめは、自分がなにをやっているのか、訳がわからぬ吉太郎であった。

このごろでは、訳はわかってきた。

なにをやっているのかわからぬ不安がすこしずつ希薄になり、いうにいえない安定した感覚が生じてくる。刀——木刀は利き腕の反対の手にもって、だらりと下げているだけ。訳はわかるが、その先の、これで、どうすれば勝つのか、それはわからない。

武蔵にたずねると、安定した気分になれば勝つ必要はなくなる。

だから、如何にして勝つかは問題にならなくなる、という説明で躲(か)されてしまう。武蔵は吉太郎を「躲している」「つもりではないらしいが、吉太郎としては「躲されている」感じが強い。

叱られるのを覚悟で強いてたずねると、待っていたぞといった様子で、武蔵は丁寧に教えてくれた。

理不尽に攻められ、ほかに仕方がないときにかぎって刀をふるって勝つ。勝てば気分は安定して、不安や危機感はなくなる。不安や危機感がないのは勝つたのおなじだから、地面にじーっと立っていて安定した気分になれば、目的は達成されたではないか。このう

えに、敵に勝つなんていう厄介なことはかんがえるだけ無駄であるぞ。そうではないか、吉太郎よ——

気がつかないうちに、相国寺における武蔵の師僧がその場に立って、観ていた。

「わたくしどもは座禅というが、宮本武蔵の剣技では座禅ではなくて、立禅（りぜん）である、こういうわけですか」

「立っているだけで真理を悟る……なるほど立禅ですな」

それでは、理不尽に攻められたときに勝つための刀の使い方を教えてくださいと吉太郎が願うと、こんどもまた武蔵は、待ってましたといったふうになって、丁寧に教えてくれる。

武蔵が突然に緊張した顔つきになり、「言葉も大切なのだ」という。

「剣技はからだのことである、こころのことではないから言葉は必要なしという剣士がいるが、わしは、そうは思わぬ。自分の言葉で自分に語りかける、そうすることで、わからぬことがわかるようになるものだ」

構えあつて構えなし——まずはこの一句だけで充分だと武蔵がいった。

「構えあつて構えなし……言葉はやさしいようですが、いざ、実地に、となると」

吉太郎は木刀をはなして地面に横たえ、懐から冊子をとりだして、「構えあつて構えなし」

いつものように書き足した。

書き役の仕事を先にやってから、もういちど木刀をもって教えてもらう。

「持て！」

吉太郎が見よう見まねで正眼に構えた。

びしーっ——武蔵の木刀が吉太郎の左の籠手を叩いた。はげしく

叩かれ、吉太郎は思わず木刀を落としてしまう。

「持て、といったのだ。構えよ、とはいわぬぞ。ちがいが、わからぬか」

持て――

構えよ――

どこが、ちがうのか？

ここへと、武蔵は吉太郎を手招きした。立つ位置を入れ替われと指示したのである。

立つ位置を入れ替わると、武蔵は吉太郎に「わしになったつもりで、わしに『持て』といってみろ」

武蔵の意図を理解した吉太郎が、おそろおそろ、小声で、

「持て」

武蔵の木刀が一閃、吉太郎の肩を突いた。かゝるい突きだから痛くはないが、師の予想外の攻撃に吉太郎は呆然としている。

「わしの耳が、おまえの声の『持て』をきいた。だから木刀を持って肩を攻めたのだ。刀を持ってといわれ、持ったままでばーっと突っ立っている阿呆がおるものか！」

師のいう、「持て」と「構えよ」と相違というのがこれなのだ、吉太郎は察した。「構えよ」といわれて構えるだけではだめだということ、「持て」といわれて木刀を持つだけではだめなのだということ。

持て――持つてすぐに攻める――これがよろしい。

構えよ――構えて、構えの善悪を批評してもらおうと審判者や師の顔をうかがう――これが最悪。

「だが、攻めるには、いずれかの位置と角度に刀を置かねばならない。これも構えだ。であるから、構えあつて構えなし、となる」

吉岡憲法もゆくらしいと、吉太郎がききこんできた。

吉岡がゆく、という、その先は後水尾天皇の内裏である。

先帝の後陽成天皇のときから、さまざまの芸能者が内裏にまねかれ、主上や女院のまえに芸を披露するしきたりのようなものはじ

まった。

内裏——天皇が権力の実質をとりもどそうとしていたことしるしだ。権力の実質を掌握するものは、さまざまの分野の芸能を積極的に保護する。権力の本能のようなものだ。

内裏で能が演じられる、のぞみの者は参って拝観せよと触れられた。内裏演能は慶長十九年（一六一四）六月二十三日である。

武蔵は内裏へ参るときめた。吉岡憲法がゆく、ゆかぬとはかわりなく、内裏というところを一度はのぞいてみたいと思っていたのである。

だが、あれが胸騒ぎというものであるか、その時がちかづくにつれて武蔵は、吉岡憲法のことを気にかかつてならない。

わしは、ただ、内裏というところを観たいものだなど、そればかりだが……

吉岡は、わしとは別に思うところがあつて内裏へゆくのではないかと、それが気がかりになってきた。

内裏の能を拝見する理由が吉岡憲法と宮本武蔵と、それぞれ異なつてもかまわない。当然のことだ。だが、吉岡憲法の家、あるいは憲法の胸のなかになにかの異常が発生しているような気がしてならない。

布袋屋に、商売のことで吉岡になにか異常がありましたかとたずねたが、これといったことは耳にしていないとのことだ。

二十三日がちかづいてきた。

そういえば、と吉太郎がいう、憲法の顔色に赤みがさしてきているようでもあります。異常に赤いわけでもありませんが——

二十三日になった。

町人も武士も、内裏につめかける。

町人の脇差し、武士の両刀も差したままで許される。内裏の門に木戸があつてお能拝観の料金をとるわけでもない。

紫宸殿の南庭に臨時の能舞台がつくられていて、いよいよ能がは

じまった。

芝居の者は膝を折ってすわり、背を低くしてお能を拝見しなければならぬ。脇差しも両刀もかまわぬという寛大のなかで、背を低くせよというだけが内裏演能の、いわば掟とされていた。

だが――

いかな。吉岡は、喧嘩をふっかけるつもりなのだ

芝居のなかに、ひときわ目立って背の高い見物人がいる。ほかならぬ吉岡憲法だ。つーんと直立して両腕を組み、あたりを睥睨（へいげい）している。

吉岡憲法の顔と名を知らぬものはなかるうが、知らぬというなら、ほーれ、とつくりと見せてやるぞ――咆哮している様子だ。

「憲法だ、吉岡だ」

「すわれ、見えんぞ！」

「しーいつ、吉岡憲法だぞ、殴られるぞ」

「吉岡が、どうした。内裏さまのお庭で、ひとを殴れるものなら、おお、殴ってもらおうじゃないか！」

役人が芝居のなかをかきわけて憲法に近寄ろうとしたのと、武蔵が、

「おい。吉岡、やめろ、やめろ」

小声でいい、近づいたのと同時であった。

「武蔵だ。宮本……」

「宮本武蔵。蓮台野で吉岡と試合をして、勝った」

はげしい後悔の想いが武蔵のからだをつらぬいた。恐怖の感覚に、からだが震える。

吉岡憲法は役人にとりおさえられ、叱責され、打擲（ちようちやく）され、内裏の庭から追いだされる。それはいい、それでいい。そこで終りにしてやるうと、つまり吉岡のからだをかかえて、ひきずって内裏の外へ出してやるうと思つて武蔵は観衆をかきわけ、吉岡に近づこうとしたのだ。

だが――

おのれの顔と名がこれほど知られているとは知らなかった迂闊、それが武蔵の失敗である。

役人に反抗するつもりはない。これ以上の騒ぎにならぬよう、吉岡を連れ出してしまおうというのが武蔵の肚だから、役人に協力する姿勢だといつてもいい。

だが、あれが武蔵と知った観衆は、そうは思わない。剣士の仲間
の仁義として、吉岡をたすけて役人と闘おうとして腰をあげた、そ
うかんがえて、拍手喝采をするにちがいないのだ。

足が竦すくんだ。

役人の手にかかりたくはない。剣の相手に負けるならともかく、
役人と争うなど、そもそも剣士として最低の姿だ。

卑怯者とみられても、仕方はない。逃げるのだ、去るのだ！

はやくも役人と争っている吉岡を背に、武蔵は逃げた。観衆が、
まだ騒然となっていなかったのが幸いした。逃げる武蔵に道をあけ
てくれた。

武蔵が無事にぬけだしたあとの南庭は、どうなったか、吉太郎が
教えてくれた。

役人がちかづき、いきなり金の棒で吉岡の頭を殴った。怒った吉
岡は一尺八寸の脇差しをひきぬき、役人を斬ってしまった。

能の舞台と棧敷、芝居は騒然となった。

吉岡憲法をつかまえようとする役人の数がふえてきて、わが身が
危うくなってきた。吉岡は逃げるよりは闘いを優先させた。前を
ふさぐ役人に斬りつけ、横にまわる役人を突きたおし、南門をめざ
した。

南門は閉ざされている。閉ざされているのを知っているはずの吉
岡である、吉太郎も、吉岡が錯乱したのかと疑ったそうだ。

吉岡は錯乱してはいなかった。

南の堀の下にくると、腰をかがめ、えいっやと飛びあがった。堀
をのりこえて逃げるつもりだったのだ。

「さすがは吉岡——わたしは、そう思いました」

吉太郎は興奮が冷めない。

この日、お能拝見のためにあけられているのは東の門である。東の門には大勢の役人が配置されている。その東門から抜け出ようというのは至難のことだ。

そうと知っているからこそ吉岡は、南門というか、南の堀をめざしたのである。

えいやつと飛びあがったのはよかったが、つぎがまずかった。袴が堀の丸瓦にひっかかって、うごきがとれなくなった。もぎとろうとするまに役人がすがりついて、吉岡をひきずりおろし、その日のうちに首を斬った。

吉岡家は武家ではない。主人もいないわけだから、憲法の子か甥か、しかるべき者が継承して染色業をつづけるだろう。

だが、剣技の吉岡家はこれで終りだ。足利將軍に剣を教え、兵法指南の名をほこった吉岡憲法の名は慶長十九年六月二十三日をもつて途絶える。

吉岡憲法が居なくなった。

武蔵にとっては、憲法が殺されたことよりも、この世から消えたことのほうが強烈に意識された。

播磨の家で、父を相手に、ときには口論、ときには親しみ、剣士として生きてゆく技と知恵をどうやって身につけるかを語っていたとき、吉岡憲法は高い、遠くの空に輝く星であった。

播磨で闘い、但馬で闘い、ようやく出ていった京都で、吉岡と試合をする手づるをつかむまでが、これまた大変な苦勞であった。

そして吉岡に勝ち、弁之助の通称から武蔵と名のることにした。あの、上泉武蔵守信綱の名から「守」を削ったところに、武蔵の謙遜というよりは、官にたいする無頼の気持ちが出ている。

広い世間の、多くのひとに名を知ってもらえばいい。天子さまとか、將軍さまは、どうも……

吉岡にたいする喪失感、だから、官の場における吉岡の権威を羨望しているしではない。

兵法指南の肩書が名だけのものではなかったこと、それを武蔵は、吉岡と闘った血なまぐさい体験から熟知している。剣と木刀をにぎり、振ってきた長年の経験が足利將軍家兵法指南吉岡憲法という名のなかに塗りこめられている。

容易な技ではなかった。

そのことは、武蔵自身がいちばん深く知っている。

あれだけの技をもちながら、今日の内裏における、みずから死をもとめて突っこんでいったような吉岡憲法の態度は、なんであったのか？

布袋屋と吉太郎、そして相国寺の師僧が武蔵のために、あれこれの聴き取りをもってきてくれる。

「ここ数年、内裏のお役人さまと、しきりに会っていたそうです」

「西洞院の綾小路の宅で、とつぜん染色作業に手を出したかと思うと、数日後には見向きもしなくなるとか」

「店の職人としては、迷惑なのだそうです。憲法自身は染物の腕があるわけではないのですから」

「宮本武蔵に負けてから、憲法は剣技とか兵法から手をひいたといわれているが、わしの知るかぎり、そうではない。深夜、四条の葛野大路の野宮神社の森で、びゅんびゅんと木刀を振っていたのを、わしは知つとる」

内裏の役人としばしば会っていたという、このあたりに今日の内裏の吉岡の異常なふるまいの真相があるように思われた。

察するところ、つぎのような次第であったのではないか。

武蔵にやぶれた吉岡はいちどは兵法から手をひく決心をかためたが、まもなく気持ちを変えた。技を磨きなおし、武蔵に試合を挑んで勝利してから、内裏の兵法指南の肩書を得ようとしたのだろう。

足利將軍家が消えてしまったいま、権威に裏打ちされるとすれば内

裏しかないのである。

「内裏の役人衆は、とりあわなかつた。これが真相なのでしょうな」

「天子さまが剣士の技をご覧になる。それは前例がないわけではないが……」

「ひえーっ、まさか！」

頓狂な声をあげて驚きのしるしとしたのは吉太郎である。上泉武蔵守信綱が正親町天皇に剣技をご覧に入れた件を教えると、吉太郎は深くうなずいて、いった。

「その武蔵守という剣士の水準に、吉岡は達しなかつたということになりますな」

「じつさいに試合をしたわけではないから、なんともいえんが……」

武蔵守と吉岡の相違の最たるもの、それは武蔵守が弓馬の家であり、吉岡はそうではないことだ。吉岡は武装して馬にのつた経験はないだろう。

武装して馬にのるのを、いわば家業とした武蔵守と、馬には縁のない吉岡憲法——ふたりのあいだの刀の意味はまったく別のものがある。

吉岡が命に替えても欲しいと思つた——にちがいない——内裏の権威の裏打ちは、武蔵守信綱のような弓馬の家にとつてこそ意味はある。両手を染料で染めて作業をし、余人に真似のできないシヤム口染で一世を風靡する吉岡家に、内裏の権威などは不要であつたのだ。

吉太郎はもちろん、世間の知恵がいつばいに詰まつた知恵袋のような布袋屋でも、この理屈の神髄を知るのはむずかしかろう。

「武蔵守さまは武蔵守さま、吉岡は吉岡……おなじ秤では計られんよ」

吉岡憲法——武蔵には他人のような気がしない。播磨の家で、父からはじめてきかされたときから、奇妙な親近感があつた。

いま、ようやく、親近感の意味が理解された。

だからこそ、吉岡をうしなつた喪失感がますます強くなるのを感じ

じる。

遠ざかる吉岡の幻影に、武蔵は言葉をかける。吉岡とおのれをむすぶのは、いまでは言葉だけしかないのだという痛切な想いが、身を苛む。

吉岡よ。あなたは、無縁のものを追いかけてきたんだな。あなたの苦戦を手本として、わしは、わしには無縁のものは追いかけぬこととするよ

(第12章 終)

内裏の紫宸殿の南庭にながれた吉岡憲法の血は、六月の暑熱ですぐに乾いた。

憲法が殺されたのが六月二十三日、七月の十八日に京都から板倉勝重、大坂から片桐且元が駿府の徳川家康のもとに伺候した。

板倉は徳川幕府の京都所司代、片桐は大坂の豊臣秀頼の重臣である。

「方広寺の諸堂と大仏殿、開眼供養の日時と式の次第が決定いたしました」

秀頼の父の秀吉が畢生の大事業として着手した方広寺の堂と大仏殿の工事は、はじめから故障の連続であった。

秀吉の死によって頓挫するかとさえ思われたが、秀頼と淀君は工事をつづけ、堂と大佛の供養をおこなうまでにこぎつけた。

供養の日時や式次第をめぐって、徳川方と豊臣家のあいだには小競り合いがあった。徳川の顧問格、武蔵の川越の喜多院の天海は天台宗を真言宗の上席としなければ天台は出席せぬと家康を通じて強要し、天台から下位にみられている真言宗では、高野山と醍醐のどちらが上位につくかをめぐって、内紛をおこしていた。

予定された八月三日について、はやくも家康は非難の姿勢をみせる。堂と大佛の供養を同日におこなうのはよろしくない。堂の供養は十八日に延期せよと注文をつけた。

家康の注文をもって帰坂した片桐から、あらためて、八月十八日は故太閤秀吉の十七回忌にあたり、豊国神社の大祭をおこなうことが先決している。なんとしても八月三日に堂と大佛の供養をおこないたいから、承知していただきたいと願ってきた。

片桐の願いにたいする家康の回答が、側近によって伝えられた。

「大御所さまはひどく立腹なされておる」

意外千万の展開におどろき、立ち竦む片桐に、「大御所さまのお怒り」なるものの内容がしめされた。

「方広寺の鐘の鐘銘に、不都合千万な文句がある」

「鐘楼の棟札に宜しくないところがある」

家康の怒りとはこの二カ条であると説明された。

鐘銘も棟札もすでに五月にはできあがっていて、駿府の家康にも伝えられている。そのときにはなんの非難もなかったのに、いよいよ供養が近づいたいまになって非難したところに家康の強い意志がしめされていた。

棟札に大工頭の中井正清の名が書かれていないこと、鐘銘に徳川家康を呪詛し、豊臣家の繁栄を祈る文章がぎざまれていること、この二点が非難の核心であった。

鐘銘の文章について、家康が非難をあびせたのはつぎの諸点である。

「国家安康」——これは家康を分断するものだ。怪しからん！

「君臣豊楽、子孫殷昌」——豊臣を君として子孫の殷昌を樂しむ、の意味である。許せない！

「右僕射源朝臣家康公」——右僕射（ほく）とは右大臣の唐名だが、豊臣方の下心では「右僕」の二字はないものとして、「源朝臣」つまり徳川家康を「射る」という殺意を密かに表明している、大胆不敵である。

無理難題、いいがかりの典型である。

つまり家康は、棟札と鐘銘を知った五月の段階で、大坂方に非難をおしつけて開戦にもってゆこうと決意していたのである。

大坂城の主戦派は大野治長と治房の兄弟、兄弟の母の大蔵卿局である。母と子は淀君の信頼を背に、あくまで強硬な態度をとっていた。

片桐且元は主戦論には共感しない、あえていえば穏和論者だが、だからこそ駿府の家康にたいする交渉役を一任され、右往左往するばかりである。

家康はイギリス商人などから大量の弾丸と火薬を買いあつめ、い

つ開戦になっても応じられる準備をしながら、大坂方の使者を、ネコがネズミを苛めるように翻弄した。

片桐は、大坂城の主戦論者を説得しようとして、自分でかんがえた講和条件を家康の名義で提示した。

一、秀頼が大坂城をあげわたし、他国を知行する。

一、秀頼が江戸に参観する。

一、淀君が江戸に参観する。

このうちの「一カ条を選択せよ」というのが家康の意見であると、片桐は大坂方に告げた。

大野兄弟や大蔵卿局をはじめとする強硬派は怒り、片桐を「裏切り者」として追放した。

大坂城から片桐が追放された時点で、開戦が決定した。もう、あともどりはできない。

大坂方は、秀吉の恩顧をうけた西国の大名に期待していた。かれらは先を争うようにして大坂城にはいり、徳川への対決姿勢を表明すると観測し、期待していた。

だが、期待は裏切られた。

秀頼がもつとも期待を寄せていたのは薩摩の島津である。だが島津は、婉曲な言辞で拒否を通告してきた。

秀吉の幼なじみという伝説につつまれていたのが蜂須賀正勝、その子の家政でさえ、「わたくしどもは根っからの関東の味方であります」と、軽侮の気分をこめた拒否回答をおくってきた。

ひとりの大名も大坂へ入城しなかった。

大坂城のなかで氣勢をあげているのは、いわば「元・大名」ばかりである。関ヶ原合戦の敗者たちだ。

十月十一日に家康が駿府を発して、二十三日に二条城にはいった。二条城が幕府軍の本営になる。

十月二十一日に秀忠が江戸を発し、十一月十一日に二条城で家康

と対面したあと、伏見にむかった。秀忠は伏見から大坂城の南へ進軍して開戦にそなえる予定になっている。

夏のおわりごろから、京都の市民は郊外へ避難をはじめていた。関ヶ原の合戦からあしかけ十五年、避けられないと覚悟していた戦争がはじまるのである、市民のなかに当惑も混乱もない。

宮本武蔵は大坂城へゆくつもりだ。

豊臣に肩入れし、豊臣の崩壊をくいとめるつもりはない。

徳川に味方し、新しい武士の覇権の樹立に協力する気もない。

なんのために大坂へゆくのかというと、

「両軍をあわせると、人数は……？」

「城のなかには騎馬で甲冑を着る武士が七千から八千、雑兵が十万、女が一万ばかり。幕府の軍勢はざっと二十万とか……」

「上から下まで、ともかくも武士と名のつく者が三十万！」

大坂城の中と外に、武士と名のつく者が三十万ばかりあつまってくる——数字を耳にするだけで武蔵は興奮してくる。

「見せて、やるぞ！」

宮本武蔵の剣技のものすごさというものを三十万の武士に見せてやれる。これほどの機会は二度とはやってこない。

大坂城へゆくときめてはいるが、その先のこまかいところはきめていない。城方が、攻め手が、どちらに付くかさえ、きめていないのである。

戦争に出てゆくというのに、両軍のどちらにつくかはきめていない——ありえないはなし、滑稽なはなしだが、武蔵の場合にかぎって、これでかまわない。敵も味方もないのだから。

だが、ともかくも戦争である。氏名を名のり、系譜をしめし、過去の戦歴を誇示することで有利な地位を得てから参加しなければならぬ。

そうになると、武蔵は不利である。これといった戦歴がない。

関ヶ原のときに丹後の田辺の舞鶴城を攻める鉄砲隊に属していま

した、などといえば、足軽だったのかと軽蔑されるだけで、戦歴にかぞえてはもらえない。

浪人の定義を狭くすると、武蔵は浪人ともいえない。れっきとした武士が敗戦のあとで立ち直れないとか、主家がつぶれてしまった遺臣であるかと、それが浪人なのである。

大坂城へは、いきたい。いかなばならぬ。だが、ゆく手段がない。みかねた吉太郎が——師の苦悩を弟子がみかねるというのもおかしなはなしだが——知恵を出した。

「ともかくも城へはいる、これは容易のはずですな」

「それは……」

「お城にはいって、師とわしと、大勢のまえで試合をやるのは、いかがでしょう」

「戦争だぞ。木刀をもつての試合ではないのだが……」

「試合をして、師がわしを滅多やたらに打ちのめす。そこで宮本武蔵と名のりをあげれば……」

滑稽な案だが、吉太郎は真剣である。

吉太郎を大坂城に連れてゆく気はない。これは、武蔵個人のことなのだから。

それを告げると、吉太郎は悄然とした。武蔵とふたり、大坂城で派手な武功をあげるつもりでいたらしい。

「おおつ。まさか……！」

はじめは、うそだ、うそにきまっていると思ったが、布袋屋が「わたしも、はじめは……」と落ちついた様子でいうのをきくうち、本当のことなのだとな納得して、あらためて驚いた。

相国寺の西の竹藪、花の御所の廃墟のあとにぼつぼつと家屋がたちはじめた一郭、柳図子(やなぎのすし)ともよばれる小路に、ささやかな庵があった。

庵の主は祐夢(ゆうむ)といい、歳ころは四十ぐらい。近所の童子をあつめて寺子屋をひらいていた。

背筋をすらりと伸ばし、優しい表情のなかにも、ときとして厳めしい雰囲気を出すことがある。

寺子たちにはあくまでも優しいお師匠さんである。吉太郎などは、「相国寺のお坊さまたちがみんな、祐夢さまのお弟子になってしまいそうだ」と冗談をいつていた。禅寺の厳格な教えに耐えられない若僧がいる、それを皮肉っていったのだ。

秋がちかづいたころ、祐夢の庵から騎馬武者が一騎、さーつとあらわれ、東にむかって駆けてゆく。いかにも馴れている様子の乗馬であった。

「あれえ……？」

お師匠さんではなかるうかと気づいたのは寺子のひとりだ。そばにいた親に「お師匠さんが、お馬にのって」と告げたが、親は相手にしない。

祐夢の庵から出た騎馬武者の、すぐあとが一騎、また一騎とあらわれ、相国寺のまえを通りすぎて寺町の角に出たころには三十騎ほどになっていた。

寺町の今出川で方向を南にかえ、三条では二百騎ほどになっていた。

「あれは、土佐の……！」

土佐の前領主の長宗我部盛親（もりちか）であった。

土佐の長岡郡の領主の長宗我部は応仁の乱のころに、流浪の公卿の一条教房と房家を擁して勢力を伸張した。だが、兼序のときに周辺勢力の怨みをかけて、滅ぼされた。

一条房家が兼序の遺児の国親を保護して旧領を回復させ、国親の子の元親が他勢力を駆逐したうえに一条氏をも追放して四国全体を一円知行するにいたった。天正年間のことである。

だが、豊臣秀吉の四国征伐軍のまえに敗北を喫し、元親は土佐一国だけに閉じこめられた。元親の四男が盛親である。

元親の長男の信親が戦死したあと、元親は次男と三男をさしおい

て四男の盛親を後継者に指名した。これについては激しい抵抗もあったが、元親は強権を行使して盛親をあとつぎとしたのである。

秀吉が小田原の北条氏を攻めたとき、元親と盛親の父子は出陣して功績をあげ、秀吉によって盛親の長宗我部の相続が承認された。

この時点で、長宗我部氏は秀吉恩顧の大名の典型的な存在になった。盛親は二度にわたって朝鮮へ出兵した。朝政の戦争で強いられる勢力消耗は甚大であったが、ともかくも耐えて帰国した。

関ヶ原合戦——はじめ盛親は東軍に味方するつもりであった。二名の使者を家康のもとに派遣して東軍内通の意をつたえようとしたが、使者は近江の水口で石田三成の軍によって遮られた。内通の意を通じられないうちに開戦となったので、やむなく西軍として闘うことになったという解釈もある。

西軍の大將の増田長盛と盛親は親しい仲であった。だから、盛親の本意は東軍に属したかったのだという説はそのとおりには信じられない。

しかし盛親は、関ヶ原の合戦が西軍不利となるやいなや、いちはやく戦線を離脱し、軍隊をまとめて土佐にもどった。

わたくしは西軍の敗北を最初に認め、戦線離脱によってそのことを宣言したのであります。このこと、ご記憶なさっていただきたい。家康に合図をおくったつもりだろう。合戦がはじまるまでは西軍、はじまってからは東軍、これが長宗我部盛親であった。

盛親は土佐一国をうばわれたが、命は取られなかった。西軍ではあるが、東軍の利益のために戦線を離脱した——このように家康が認めたのだろう。

京都に住んだのは家康の指示にしたがったことだ。

だが、時がたつうちに、盛親は忘れられる存在になっていた。相国寺の門前の竹藪、柳辻子で寺子屋をひらく祐夢先生がかつては土佐一国を領した長宗我部盛親だと知るひとはすくなくなつた。

盛親が柳凵子の庵を出ると、あとを追ってひとり、またひとりと騎馬武者があらわれてきた。かれらは盛親に寄り添うように、しか

し、それと気づかれぬように相国寺のまわりに散在していたのだ。

「祐夢先生が長宗我部だなんて、知らなかったなあ！」

「気がつきませんでしたね！」

毛ほども気がつかなかったから、やられたという口惜しさではなくて、爽快な感じがする。

これは武蔵の知らぬことだが、京都所司代の板倉勝重はさすがに、長宗我部の主従の動静は把握していたようである。

寺子屋の祐夢先生が土佐の前領主の長宗我部盛親に変身して登場した、その瞬間に勝重は江戸の秀忠に急報を発したのである。

「長宗我部盛親が相国寺門前の庵から出奔いたしました。お知らせいたします」

武蔵がときおり感じていた、なにやら周辺を探られている不審な雰囲気、それは盛親の動向を監視していた所司代の眼であったのだろう。

だが、武蔵と吉太郎と布袋屋はそれとは別の口惜しさに唇をかみしめなければならなかった。

「祐夢先生や、ご家来たちは、わが師のことを……」

「そうだ。知らぬはずはない、あの吉岡憲法と試合をして勝った宮本武蔵だと」

知らぬはずはないと、武蔵も思う。

だから、口惜しいのだ、「大坂城へいっしょに参りませぬか」と誘ってくれなかったのが。

盛親が、わしの名を知らぬはずはない。大坂城へ同行すれば、五百や千の足軽隊には負けぬはたらきをすると知らぬはずがないであるのに、なぜ、かれは誘わなかったのか？

こたえは、出ない。

なぜ、なぜ——かんがえて、またかんがえて、武蔵は方向を変えた。

「わかったぞ。盛親が、われを誘うはずがない」

布袋屋と吉太郎が表情をぱーっと明るくして、武蔵の顔をみつめる。

「わしが応じぬと知っていたからだ。なぜなら、わしの剣は戦争には役にたたぬ。ひとを殺す剣ではないのだから。ひとを殺さぬ剣士を戦場に誘っても無駄である、そうと知っている盛親、えらいものではないか」

布袋屋と吉太郎の表情が、また暗い色にもどった。武蔵のいいかたによると、誘わなかった盛親が良くて、誘われなかった武蔵と布袋屋と吉太郎が悪いかのようである。

「それが、そうではないのだよ」

ふたりの懐疑を見透かした武蔵が、しずかに、論すように、いう。「相手を殺すために剣技を磨いておるのではないこと、それはわれら自身が知っておるはずなのに、忘れていた。忘れて、大坂へ誘ってくれぬ盛親を恨んでいた。吉太郎よ、布袋屋さんよ、われらの思い違いであつたよ」

思い違いを無言のうちに指摘してくれた盛親に感謝しなければならん——そういつてから武蔵は、

「さーて。こちらから盛親に、どうか大坂城へつれていってくれと頼むことにしよう。すぐには承知してもらえぬだろうから、布袋屋さん、ここは商売人のやりかたで、なんとかならんだろうかな」

武蔵は快活な気分になっている。そうと察した布袋屋が、おのれも武蔵につきあつて快活な気分になり、ずばりと名答を出した。

「商売人のやりかたは、よくいえば正直、わるくいえば狡猾(こがっ)、つまり、欲しい気持ちを抑さずに告げるのです。これこれの品を、これこれの値で欲しい、売りたいというふうに」

それから、「欲を告げたあとは、相手まかせにする。どうにでもしてくれよとふんぞりかえるのです」と付けくわえた。

それでゆこうと武蔵が応じ、吉太郎が使者になり、長宗我部盛親のあとを追いかける役目をおおせつかった。

「豊臣の、大坂城の味方になるといふわけではないのですな」

念をおす吉太郎に、武蔵にかわって布袋屋がこたえる。

「かといって、徳川の味方になるわけでもない。あえていえば、正しい剣の使い方をまなびたいと願う者の、すべての味方」

大坂城の状況を文字にあらわすと「雑」「混」「乱」「躁」がふさわしい。

総大将は豊臣秀頼なのだが、秀頼本人は徳川と闘いたいのか、穏和な方法で和解したいのか、はっきりしない。徳川に屈したくないというのわかるが、ならば必勝の戦略をたてているのかというと、その気配は皆無である。

秀頼の意を体して城方軍の総指揮をとるのは大野治長と治房の兄弟ということになるわけだろうが、これまた必勝の作戦をたてているとは思えない。

秀頼の母、淀君にいたっては、秀吉恩顧の大名がひとりも入城してこないことに立腹するだけである。

だが、浪人を主体とする城方の武士の数は多かった。数がそのまま戦力になるならば、城方にも十分な勝ち目はあった。

遺憾ながら、多数を強兵にかえて指揮する知恵と権威と勇氣に欠けていた。つまり、大坂方に勝利はありえない。

多種多彩な軍勢が馳せ参じていた。豊臣の臣下のほかに、浪人がいる。長宗我部盛親盛親も宮本武蔵も浪人である。

浪人は、なにを望んで入城していたか？

注目をあびたい。軍功と名を多くのひとに記憶してもらいたい軍功をあげ、名を記憶してもらえば、人生の次の段階の展望がひらける。

それなら城方では無意味ではないか、徳川方に参加しなければ意味はないのではないか——こういう批判がないわけではない。

しかし、だれでも徳川軍に参加できるわけではない。高名な浪人は、徳川軍への参加は困難である。うっかり顔を出せば、処刑されるおそれもある。豊臣家とはちがって徳川軍としては、カネに糸目

をつけない、とにかく多数の武士を雇うのが先決、という状況ではない。

勝利の展望がないとわかっていのに、なぜ、城方に参加するか——深刻な疑惑のようだが、じつは、そうでもない。

浪人武士にとって勝敗は問題ではない。ほかにゆくところがないから、かれらは大坂城にやってきた。大坂城だけは、かれらを歓迎してくれるのである。

豊臣家はかれらを歓迎するにあたって、巨額のカネを支出することにしていった。ひとりにつき、いくらというカネを——おそらく前金で——払ったはずである。

歓迎され、カネをうけとり、そのうえに——これを最初にいうべきであったが——ともかくも武士として生きられる。

「わしは家来どもに分けてやらねばならないが、武蔵よ、おまえには、家来といつても、あの吉太郎がひとりだけ。そのカネを、どうするつもりか」

盛親の問いに武蔵は、「懇意な商人にあずけ、まわして、太らせてもらおうのです」とこたえる。

「それは、いい。カネというものは、太らせてやらねば機嫌を悪くする。カネの機嫌を損ねると、いろいろと厄介なことがおきるものだ」

豊臣家からうけとったカネを、吉太郎が京都の布袋屋にとどけにゆく。伝言はないかと吉太郎がいうので、武蔵は「怪我はしないように気をつけるから安心してもらいたい」と伝言した。「死ぬ気もない」と言い足そうともかんがえたが、いまのおのれの心境では悲壮すぎると思いなおした。

大野治長や治房は、なにをすべきか、すべきではないか、判断がつかない。

はじめのうちは、つきつきと入城し、氏名と軍歴を登録して力ネをうけとる浪人を、あきらかに軽蔑していた。足手まといとさえ思っている気配もあった。

「太閤秀吉、あの方が出来過ぎていた。ろくな家来がそだたなかつた」

「太閤秀吉……お会いになったのですな」

「父が敗軍の將だよ。父もわれもあの方のまえに平伏したのだが、おかしなものだな、口惜しいという気がしない」

「威厳というもの……」

「合戦はむだである、双方の損害になるばかりだ。元親よ、はいうちに『負けた』といってくれ。そうすれば、こちらもたすかるわけだと、こんなふうな感じて攻めてくる。はいうちに負けたほうが得だと思わせるところが、あの方の威厳なのだ」

「主君の威厳は家来衆にはつたわらぬ、というわけですか」

「つたわる道理がない。あれを……」

盛親が顎で指すところで、大野治房が数人の侍を叱りつけている。やたらに居丈高になって怒鳴るだけ、叱られている侍は、なにが因で叱られているのか、さっぱりわからない様子だ。

「あれだもの、徳川に勝てる道理は、ない」

城のなかの、防禦のためのこまごまとした手立てが、浪人の主導でとのえられるようになった。大野治長や治房といった秀頼の重臣は後退した。

そのかわりに真田幸村や長宗我部盛親、毛利勝永、後藤又兵衛、明石掃部などが指導部を形成した。会議がひらかれたわけではない、秀頼が出てきて指導者を指名したわけではない。だれが口火をきった

ということもなく、ひとりでにそうなった。

指導部ができたといっても、豊臣家の軍として統一の作戦をきめるわけではない。

木村重成と後藤又兵衛が城門をあけて撃って出て鳴野(しぎ)と今福で徳川軍と闘った。

そのときは、だれということなしに、鉄砲隊を城の堀にのぼらせ、徳川方に一世射撃をあびせて木村と後藤の闘いを掩護した。大野の兄弟が指揮をとっていれば、こういう攻撃さえありえなかった。

徳川軍はじわじわと包囲を狭めている。いずれは攻撃をしてくるだろうが、まだ先のことだというわけで、城のなかは退屈である。

木村重成や後藤又兵衛が城門をひらいて撃って出たのは、なにもしない退屈に耐えられなくなったからだ。

長宗我部盛親は城の南、谷町口に持場をあたえられていた。

生玉(いくたま)をぬけてまっすぐ南にゆけば、家康が本陣をおいている茶臼山がある。盛親の西が内藤忠豊、その西が織田長頼、盛親の東が中島氏種、その東が評定組という布陣だ。入城した元・大名のなかで盛親は最高の敬意をはらわれていた。

わしの持場で剣技を披露してはどうかと、盛親から武蔵に誘いがかった。ほかの武将にもはなしをして、家来どもに見せてやるようにする、という。

武蔵は「承知しました」と即答した。

京都からもどってきた吉太郎が、戦争の最中、しかもお城のなかで、剣の試合をして見せるのですかと、目を丸くしておどろいている。

「恥ずかしい……のか？」

吉太郎は口をつぐんだ。恥ずかしいと思ったところに凶星をつかれたから、無言をきめこんだのだろう。

「恥ずかしいことがあるものか。出雲の阿国を覚えておろうが……」

「阿国……」

無言の吉太郎に、たった一言で説明した。戦争の最中に、しかも大軍に包囲されている城のなかで剣技を披露するのが、なぜ恥ずかしくないのか――

「われらのまえに、だれもやったことがないのだ。だれもやらなかったことを、やる。恥ずかしくないどころか、名譽なのだ。胸を張って、試合をして見せてやれ！」

出雲阿国もそうだった。

真つ当なことをやらねばならん、道を外してはならんとだれも思っているところへ、阿国は思いきって かぶいて みせた。

非難の声がないではなかったが、非難よりは感動の声のほうがよほど多く、強かった。それはおまえも記憶しておるはずだ。

吉太郎がうなずいたのを確認して、武蔵はつづける。

―― 剣技の試合を観て徳川との戦争に役立つのかと疑問に思うひとはすくなくない。いや、ほとんどのひとが、そう思うはずだ。

そうではないというところを、見せてやらねばならんのだ。

この城にあつまっているのは武士である。徳川と戦争をするためちにあつまっておるのだから、武士は戦争をするだけが能ではない。

武士として正しく生きるのが武士の義務だということを、見せてやれ。

武士は刀をもつ。

刀を正しくつかえば武士として正しく生きられるということを見せようではないか。

戦争に勝つとか勝たないとかは、そのあとでいいのだということを見せよう。

谷町口の盛親の持場の空き地に、ざつと円形に線をひいて試合の場とした。

盛親が諸将に誘いの声をかけたから、三百人ほどがあつまってきた。城の中と外から密書が往復し、和解休戦の交渉がはじまった十

一月の末である。

このまま年を越すととなると食料と燃料の不足は必至である、どうすればいいのかといった不安が諸将の頭を痛めてきていた。

武蔵と吉太郎のほかに、四郎兵衛、弥市、孫三郎の三人が試合をやる。三人とも京都からついてきた、弟子でもあり従者でもある若者だ。吉太郎に紹介されて武蔵のところによつてきた。合戦をするかもしれないが、大坂城へゆくかと念をおしたら、よろこんで付いてきた。

四人の弟子に、中級武士のあたりを目処にして武装させた。変わり兜の烏帽子兜をかぶせ、畳具足に籠手と佩楯、臙当をつけさせ、革の足袋に貫を履かせた。盛親から借りてきたものだ。

弓矢も太刀も木刀もせさせず、手ぶらのままで場に出した。

見物の衆のなかに囁く声があがった。四人の姿の滑稽な印象が強かったらしい。

そうだとすると、武蔵の狙いは当たったのである。

聴衆のあざけりを確認し——ほーら、ご一同さま、これほど滑稽な見物はありませんでしょう——武蔵は四人に目配せして、兜や具足、貫も足袋も脱がせた。合戦とも試合ともまったく無縁の、普段着の四人の侍がその場に立っている光景になった。

袴の股立をとらせ、上着の袖を禳でくくらせてから、袋竹刀をにぎらせた。

「ほほー！」

滑稽感に発する囁きの声とはあきらかに異なる、感嘆の声があがった。

武蔵は快感を微笑に包んだ。

自分でいうのもおかしいが、そこに立っているだけで、四人の姿が美しいのである。予想していたよりも、もっと美しい。だから思わず微笑が洩れた。

甲冑というものが、じつは、それほど美しいものではない。それを感じさせられれば、わしの狙いは成功したことになる

四人が二手にわかれて、五間ほどの距離をおいて相對した。武蔵がてのひらを、軽くひらいたのを合図に、四人は竹刀を下段にもつて、左右から、ちかづく。

足の裏が地面から離れない。指先の小刻みの蠕動（ぜんどう）で地をうしろに蹴って進むだけだ。砂ほこりが素足の甲の半分あたりまで、舞いあがる。

右の——盛親と武蔵が床几にすわっている位置から右の——ふたりが竹刀を下段から切りあげる——より先に、左のふたりが下段からそのまま突きを入れた。

右のふたりの竹刀の先が動く、それより一瞬だけ早く、左のふたりの竹刀の先は右のふたりの竹刀の先から奥に差しこんであつただ。だ。

左のふたりの竹刀の先が、右のふたりの首の皮に触るか触らないかの位置で、びたりと止まった。

二本の刃が二個の首を刺しつらぬいて血が吹きだす——幻想を観衆が抱いたのを確認するように、武蔵はぐるりと見回した。

こうなるように……

武蔵が指示したとおり四人が動いた、それだけのことだが、観衆の視覚には武蔵の指示の光景は映像をむすばない。

観衆が観たもの——観たという幻想の対象——は、先手をとったはずの右のふたりの下段からの攻撃が、じつは左のふたりの突きに先手をとられていたという逆転現象である。

きゅっ、きゅっという音がするのを、武蔵は耳にした。となりの床几に腰かけた盛親がからだをぐーっと前に突きだした、その音である。

盛親が興味をひかれたのはあきらかだ。うまくいったたと武蔵は実感した。

もうひとつの歎びの実感、それは四郎兵衛と弥市、孫三郎の新し

い三人の弟子が吉太郎に負けず劣らずに健闘していることだ。

三人とも筋のいい若者とはいえない。もともと武蔵は、剣技をやる者の筋の良し悪しは論じないことにしている。筋のいい者だけが相手にしないというのは、武蔵の、剣技を鍛練し、教える基本野姿勢から逸脱しているのである。

ごくふつうの能力の三人が、これほどみごとな剣技を、大坂城の晴れの場で演じてくれたことの歓喜だ。

そのつぎに——こちらのほうが大切——この三人をして、短期のうちこれほどの演技をさせられたおのれの教え方に自信が出てきた。

父上よ。わしは、剣士として生きてゆけそうです！

三十一歳にして 生きてゆけそうだとはいえるが、こういうことは早ければいいときまつたわけでもない。

つぎに、左の二名が突きで攻めた。突き出された竹刀が、目にもとまらぬ速さで斜め下にふりおろされた右の二名の竹刀に叩き落とされた。

右斜め上にきりかえす竹刀が脇腹を突き——と思った瞬間、左の二名の左手に短い竹刀がにぎられ、相手の右の脇の下から背中へ切っ先が突き出ていた。

真剣の勝負ならば、短い竹刀は相手の肺臓に突きささっていた——というかたちの勝負である。

観衆は、四人それぞれの腰に短い竹刀が差してあるのを見ている。だが、その短い竹刀を左手で抜いて攻撃するとは、思ってもみなかった。

「右と左と、二刀をつかうのか……」

盛親がつぶやいた。強い口調であったから、つぶやくというよりは、大きくひらいた喉から吐き出すようにいったと描写するのがいいだろう。

「奇を衒うのではないのです。武士は二刀を差しておりますから、

二刀をつかえるように鍛練するのが当然であると……」

「そのとおりだ。脇差しは飾りである、などとはきまってはおらぬ」

「一本の腕で一本の刀をつかうとなると、筋のちからが必要となります。そこに鍛練の余地が生じてまいって……」

「わしには思いもよらぬこと。弓をもって馬にまたがり、天下をとる、などと威張っておる者は……わしがそうだが……からだを鍛練してはおらぬ。領地を取るも取らぬも、いわばその日の風向き次第なのだ。われながら、われという身が不安でたまらぬ」

まあ、そうはおっしゃらずに、とはいえなかった。大名というものについて、つねづね武蔵が思っているとおりのことを、ほかならぬ長宗我部盛親の口からきいたのだ。

「われが宮本武蔵を指南役にまねければよいのだが、なにせ、ふん、浪人だ。なんともならぬ！」

広いという言葉は何度つかってもおいつかないほど広い大坂城だが、噂がひろまるとなると狭いものだ。

「長宗我部さまの持場に世話になっている宮本武蔵、これがなかなか凄腕の剣士だそうぞぞ」

「弟子が四人。この四人が四人とも、師におとらぬ剣技を見せる」

「二刀をつかいこなすのだそうぞ。本当とは思われんが……」

「わしは、観たのだ。長宗我部さまの陣屋の前で……二刀をつかうのはうそではない。片手で刀を一本ずつ、楽々と振るのを観た」

ところで、どこの世界にも冷静そのもの、つむじ曲がりのひとがいるものだ。

「二刀をつかったとて、雑兵をふたり、いちどに斬れるわけでもない。剣技がどうのこうのといっても、合戦にはなんの役にもたたん！」

そしてまた、どこの世界にも、威勢のいい言葉に同調したがるひとがいる。

「そうぞ、そうぞ。刀を百本、千本そろえて振ったとて、天下が取

れるわけではない。失った天下を取りもとせるわけでもない」

ここが長宗我部の陣屋であることを意識してか、谷町口のあたりで、声高にいうのがきこえる。武蔵と弟子たち、武蔵を鼻屑にしている長宗我部を妬むかのような口調だ。

武蔵は片頬をゆるめて、笑う。おのれの剣技にたいする批判がちいさな渦になっているのがわかって、いい気分なのだ。手応えがあったという実感。

わしの剣技が合戦などの役に立って、たまるものか。斬る、殺す、などは、こちらからご免をこうむる！

盛親が「かまわぬぞ」といつてくれるのをいいことに、武蔵は武装をしない。

休戦和解の交渉がすすんでいる、年内には合戦がおわるかもしれないとの観測が城内では濃厚であった。

休戦ちかし、鉄砲玉も矢も飛んではこぬときめこみ、武装を解いて歩く将士の姿がふえてきた。下級の士や足軽は着替えの用意はないが、上級武士はあれこれと着替えをもちこんでいる。

武蔵の、武装をしない姿が格別の異常とは見られなくなってきた。上級ではないが、といって下級ともいえぬ服装の武蔵が、裸足で歩いていると、そーっと近寄ってきて、

「休戦になったら、お弟子にさせていただきたい。かならず、参上いたします」

そんなことをいう者がふえてきた。手応えはますます厚い。

「いつなりと、お待ちいたす」

簡単に応じて、袂を分かつ。

合戦が一日もやくおわってくれるのを、武蔵は願っていた。合戦がおわり、武蔵と弟子たちの剣技を観た将兵がそれぞれの地へ散っていった、

「大坂城の谷町口で物凄い剣の試合を観た。なんといいいか、言葉もないほど凄かった。宮本武蔵という名の剣士だ」

触れまわってもらいたい。それも、早いうちに触れてもらいたい。理由はわからないが、武蔵はこのところ、「急げよ、間に合わないぞ」と自分で自分を急(せ)かす声を、しきりに耳にする。

京都へ使いにいつていた孫三郎がもどってきた。城の出入りが自由になった、とまではいえないが、戦争がはじまったところにくらべれば危険は減った。

敵に襲われる危険よりも、城の内外をとわず、盗賊に襲われる危険のほうがおそろしくなってきた。

「あぶない目に逢わなかったか」

「おかげさまで。ですが、お城の外よりは中のほうが寒さがきびしいのはおどろきましたな」

はやく休戦にならなければ城方の軍勢はみんな風邪にやられてしまいますよと、孫三郎がおもしろい意見をのべた。

「相国寺のお坊さまから……」

相国寺の師僧から武蔵へ、一通の手紙がとどけられた。

谷町口の試合の好評について、まず祝賀の言葉がのべられ、そのつぎに、悪評に耳を塞いではなりませんと、いかにも師僧らしい厳しい戒めの言葉が書かれている。

「悪評とは、妬みです。ふりはらってはなりません、うけとめなされ。そして、あなたがつねながら主張しておることを、くりかえすのです」

わしが、つねながらくりかえしている主張とは、なんであったかな

忘れるはずのないことを、咄嗟に思いだせない。武蔵は狼狽した。師の狼狽に気づいた孫三郎が、そーっと、

「正しい剣の使い方を知っておれば……」

ささやいたのをうけて、

「そうか。正しい剣の使い方を知っておれば武士として生きられる……このことを、いつまでも飽きずに教えなされと師僧はおっしゃ

つておられる」

武士として生きられる

ここは大坂城のなかである。もともとは自分が造った言葉だが、あんまり禅のお坊さまらしすぎる気がした。中身はおなじでも言い方を変えたほうがよかるうとかがえ、工夫した文句を孫三郎をまえにして、口に出してみた。

「邪悪なものから身を避ける剣の使い方……というのは、どうだろうかな」

「邪悪なものを敵として剣をふるう気分が出ています。武家には歓迎されますよ」

休戦和解の交渉がまとまった。十二月二十二日に誓紙が交換された。

一、籠城した浪人たちを咎めない。

一、秀頼の知行はこれまでどおりとする。一、淀君は江戸にゆくにおよばない。

一、秀頼が大坂を退去するなら、どの国でも望み次第とする。

一、秀頼にたいして（徳川は）いかなる不信の行為もおこなわない。つぎの日から、城の総堀（お堀）を埋めたてる作業がはじまった。作業をするのはもちろん徳川方である。

総堀のことは和解の条項は一言も触れていない。埋めると埋めないとも、なにも書かれていない。

交渉の過程では、堀の埋め立てが最大の焦点になった。徳川は埋めたい、豊臣は埋めさせたくない——とどのつまりは外堀は徳川、内堀は豊臣の分担とするが、誓紙には明記しないという暗黙の協定になったようだ。暗黙の協定だから、はっきりしたところを文章にしたものはないのだろう。

そこが徳川の狙い目であった。

誓紙をかわした翌日から外堀の埋めたてにかかり、「お手伝いたしましょう」といったふうに、本来は豊臣の分担のはずの内堀ま

で埋めてしまった。

太閤秀吉が巨額の財を投入した天下の大坂城は総堀を埋めたてられ、石垣は破壊され、二の丸、三の丸もとりこわされて、はだかになつた。

徳川方に誓約遵守の意志があるのかどうかは疑問だが、すくなくとも「籠城した浪人の罪は問わぬ」と約束された。

長宗我部盛親も宮本武蔵も、四人の弟子たちも去就の自由を得たわけだが、大坂城の谷町口の盛親の陣営は撤去されてしまった。

負けたわけではないが、住むところがない——奇妙な境遇の武士と剣士である。慶長十九年の年末ぎりぎりに、住むところがなくなつた。慶長二十年の正月を、どこでむかえればいいのか。

「住み慣れた、というのもおかしいが……」

「京都に、相国寺の藪にもどりますか」

京都へもどつてきた。

大坂へ入城するまえよりも盛親の身边は安全である。豊臣に味方した浪人の立場を隠さなくてもいいのである。堂々たる浪人というものもおかしいが、そういった感じの存在。

所司代が気をつかつて、どうぞ、その場に定住していただきたい、危険のないように警備いたしますからと願っている気配もある。盛親が行方をくまらずと所司代の責任になるわけだろう。

長宗我部盛親を観察したいと武蔵はかんがえていた。

本物の武士が、どういうものであるか、見本として盛親ほどの適任はない。ともかくも一時は四国の全体を領していた大名である。毛利氏の十カ国にはとどかないが、四カ国とはただごとではない。

ときとして、盛親は強気になる。

肚のなかで、しきりに、徳川とかけひきをやっているのが手にとるように知れる。

関ヶ原合戦まで盛親の手にあつたのは土佐の一國だ。そこで盛親は、幻想のかけひきにおいて、どこかの浪人大名と土佐を半国ずつ

領有させてもらえるなら充分である、ぐらいの条件を呈示しているらしい。

大名の財政、ふところの問題というものは武蔵にはわからない。わからないけれども、関ヶ原で負けた盛親が土佐の半分をいただけならば、と条件を出すのは身のほど知らずではなかるうかと思わざるをえない。

だが、盛親は強気である。

大坂城に籠もったのも強気のなせる業なのだ。われをこのまま浪人としておくつもりなら、豊臣に肩入れして徳川の政権をひっくりかえしてやるぞと脅迫していたのだ。

その反面、ときとして盛親は弱気になる。相国寺のまわりに散居している家来と会うときには、ことさら弱気になる。かれらに与えるべき一片の土地ももたぬことが苦痛なのだ。いや、一片の土地もやれずに済まぬ、そういうわなければならぬ立場を思うと苦しく、弱気になるのだ。

土地をあたえようと、与えまいと、主君は主君、家来は家来、これだけで苦情があるはずはないとふんぞりかえる強さはもちあわせていない。

強気と弱気が入れ替わりながら相国寺畔の盛親の時がすぎてゆき、そのうちに弱気が強気をしのぐようになった。

豊臣秀頼がふたたび大坂城に浪人を呼びあつめた、戦争再開は必至

この知らせは、むしろ盛親を救済した。おそれが半分、期待が半分の気持ちのうちに待っていた死地が迫ってきて、ほっとした心境か。

こんども武蔵は長宗我部盛親の客分として大坂に入城した。

盛親がそもそも陣借りの客分だから、武蔵は客分の客分、居心地は悪いはずだが、このころの大坂城には豊臣恩顧の大名などひとりもない。いってみれば、全員が客分、陣借りである。

さて、入城して――

そうであつたな。あたりまえのことに気がつかなかつた！

なにがあたりまえかというと、谷町口の城門が跡形もなく破壊されて、きれいさっぱり広場になっている。冬の陣のように、まずは諸将それぞれの本陣を設営して、などという余裕はありえない。

まるはだかの本丸は狭い。

浪人すべてが本丸にはいるわけにはいかないから、野営をするしか仕方がない。

堀も堀もない、はかる遠方の徳川の陣まで見通しである。

合戦がはじまったのは四月の末（元和一・慶長二十・一六一五）

だが、いきなり酷暑となつて、敵勢よりも炎熱のほうがおそろしい戦場となつた。

堀も堀もない。城方は出撃して闘うほかはないのだが、野戦こそは徳川家康のもつとも得意とする戦争である――ということを知つて知つていたとしても、いまは意味がなくなつた。

圧倒的な火力のえまに、城方の武士はつぎつぎと倒れてゆく。

後藤又兵衛と薄田隼人は伊達政宗の鉄砲隊に胸を撃たれて戦死した。

- 2 2 2 -

木村重成は藤堂高虎隊と闘つて戦死した。

真田幸村と毛利勝永も華々しく闘つて戦死した。

長宗我部盛親は戦死しなかつた。武蔵の知らぬまに城から脱出し、途中の径路はわからないが、淀川をさかのぼつて八幡に隠れすんでいた。さすがに京都の相国寺の藪は危険だとかんがえたわけだ。

五月十日、家康は京都の二条城で東軍の大名の戦勝祝賀の挨拶をうけた。

その翌十一日、盛親は逮捕され、二条城に連行された。十五日に鴨川六条の河原で頸を斬られ、三条河原で梟された。

秀頼と夫人の千姫のあいだには子は生まれなかつたが、側室の子の国松は伏見でさまよつていたところを発見、逮捕され、盛親とおなじ六条河原で処刑された。

冬の陣とはちがって、夏の陣のあとの豊臣方残党にたいする迫害は猛烈をきわめた。京都や奈良、堺では戦争がつづいていたといいいほどの厳しさで残党狩りがおこなわれたのである。

(第 14 章 終)

慎重を期さなければ命があぶない、弟子たちも例外ではない。夏の陣のあとの豊臣残党狩りは執拗で、かつ残酷をきわめた。

こういう場合、あえて楽天を装うことで苦境をきりぬける策とする武蔵であるが、こんどばかりは、そうはいかない。慎重に、慎重にと自分で自分にいいきかせた。

吉太郎をはじめとする四人の弟子と別行動をとらなかった。武蔵がひとりで行動をすると目に付きやすいかなとかんがえたのだ。

摂津の山づたいに京都にちかづく路をとって、まず布袋屋に連絡をとった。

しばらくのあいだ実相院町の本阿弥家で匿ってもらい、ほとぼりが冷めたら別の場所に移動するのは如何であろうか

布袋屋からは直ちに知らせがあった、実相院町に隠してもらうのは不可能だという。

本阿弥さまが、やられたのか！

本阿弥光悦は追放されはしない、逮捕もされない。光悦の一族の身は安全だが、実相院町にはもはや本阿弥の屋敷はほとんどのこっていないかった。

家康は大坂城から二条城に凱旋した。

戦闘に参加した大名がつぎつぎと出頭して戦勝祝賀をもうしあげる。機嫌よく、丁寧に対応しながら家康は、「本阿弥を、ここへと命じた。」

家康と本阿弥家のかかわりは、家康が駿河の今川家に人質になっていたときからはじまる。

光悦の父の光二は諸大名にまねかれて武器の鑑定や手入れの仕事を請け負っていた。駿府の今川館にまねかれ、ひさしく滞在して仕事をしていたときに、人質の家康とは何度も顔をあわせたのである。家康が光二の仕事ぶりをしげしげと観ることもあったし、今川義

元にいわれ、家康の脇差しをつくる木型をこしらえたこともある。光二の木型をもとにして、島田国彦が二腰の脇差しを打ち、出来のいいのを光二が仕立てて家康の佩刀に、別の一本を光二がいただいた。

光二が没し、息子の光悦の代になっても、家康は駿府城での光二との出会いを思いだして楽しむことがあった。

二条城に凱旋するとすぐに光悦を呼び出したのは往時を回想して懐かしむ目的もあつたろうが、それよりは切実、重要なことがあったのだ。

「その方に知行所をあたえる。うけとれ」

大御所家康が、でなければ將軍秀忠の臣下になること、もうひとつ、駿府か江戸へお供をせよと光悦に命令した。

光悦は江戸や駿河へ供するのは謝辞した。六十歳すぎの老いの身としては江戸や駿府でのお勤めは困難でありますと。そして、知行所ではなく、野屋敷(のやしき)を拝領できますれば幸甚でございますと願った。野屋敷とは京都の郊外の屋敷という意味だ。

家康は承知し、光悦は京都の北西の郊外、鷹ヶ峰に広大な屋敷地を拝領することになった。だから、いま、本阿弥の家業と暮らしは実相院町から鷹ヶ峰へひきうつりつつあり、光悦さまが武蔵と弟子たちを匿うのは不可能だと布袋屋が判断して、つたえてきた。

鷹ヶ峰……そうか。ならば、もはや手遅れであるわけだ

なにが手遅れかというと、じつは武蔵は、必要ならば法華宗の信徒になつてもいいから本阿弥に匿ってもらいたいと、それくらい真摯にかんがえていた。

本阿弥家はむかしから法華の信徒だった。

光悦の代になつて法華信仰はますます強くなり、実相院町の屋敷で働く者はすべて法華の信徒だった。南無妙法蓮華經を口ずさみながら刀劍の鑑定や拭い、研ぎをするのが本阿弥の仕事であった。

そういうことを武蔵は知っていたから、もしも必要なら、法華の信徒になつてもかまわないと決意していたのである。

だが、郊外の鷹ヶ峰に屋敷が移るとあつては、匿ってもらいたいと願うわけにはいかない。実相院町ならばともかく、新しい鷹ヶ峰の屋敷では、武蔵と弟子が仲間にはいればかえって目立ってしまう、匿ってくれとは頼めない。

そう納得してから、武蔵はふと、大変なことに気づき、叫んでいた。

「屋敷をあたえられた、など、とんでもないことだ。本阿弥は追放されたのだ。殺されなかったのが、まだしもましであった！」

こうなったからには、鷹ヶ峰というところをこの目で観てみたい。摂津の山から丹波へぬけて、うーんと遠回りして鷹ヶ峰にちかづいた。

本阿弥は追放された――

武蔵がそのように観たのは正しかった。

天正十九年（一五九一）、秀吉は京都市街の大改造をおこなった。その一環として京都の四辺にお土居――堤防をきずき、洛中と洛外を厳密に分けた。

鷹ヶ峰に与えられた本阿弥の屋敷はお土居の外に突き出した、腫れ物のようなものである。広大な敷地だが、それだけにかえって、追放の地の印象が強烈である。

家康が本阿弥を鼻屑にしているのが本当ならば、こんなことになるはずはない。江戸か駿府に来てもらいたい、老齡ゆえに不可能だというから、やむをえず鷹ヶ峰に移ってもらうことにした――なんていう麗（るい）しいはなしではない。

本阿弥は追放された。しかも、京都所司代の監視の目がとどく距離の、お土居の外に鷹ヶ峰に――

なぜだろう？

家康に反抗したからだ、これしか、ない。

じつは、武蔵の知らぬことがあった。

大坂から凱旋して二条城にはいった家康が京都所司代の板倉を召した。

「本阿弥の息子の、光悦、いま、どうしておるか？」

「息災にしておりますが、京都には『居飽きた』とかもうしておるそうなの」

「京都には『居飽きた』か。なるほど」

「辺土に住み替えたい、と願っておるそうでございます」

辺土とは辺陲の地、田舎というほどの意味だ。本阿弥光悦は京都から辺土へ移りたいと願っている——所司代の板倉は家康にそういったのだが、光悦が本気で、こんなことをいうはずはない。

あの、怪しからん本阿弥は、どこか遠い片隅に追い出すのがよろしゅうございましょう

家康が本阿弥を処罰する筋書きはすでに書かれていたのだ。筋書きを書いたのは家康本人ではあるまい。家康の意を体して重要な政策をうちだすことを許される人物だ。

いまは名を特定できないが、その人物は、本阿弥一族を、刀剣を一手に扱う高等工芸人集団として江戸か駿府に移住させることを立案したはずだ。

知行所をあたえ、臣下として処遇するから江戸へ参れ——そのように居丈高に内示したにちがいない。本阿弥を江戸につれてゆけば刀剣の研ぎと拭い、鑑定という武家にとって欠かせぬ神秘的な技を独占できるのだ。

まさか、拒絶されるとは思ってもいなかった。

本阿弥は拒絶した。

はつきりと言葉には出さないものの、内裏さまと足利の御所さまのご恩をこうむってきた本阿弥が江戸に参るなど、そのような義理を欠く所行はいたしかねます——このような厳しい雰囲気での拒絶であったらう。再考をうながす余地のない、きっぱりとした拒絶であったのだらう。

命を賭けてもというほどの決意があきらかにされたはずだ。とい

うのは、本阿弥ほどの熱烈な法華の信徒ならば、ことがらを法華の信仰の次元に移せば、命などは一文の値打ちもない心境になれるのである。

宗祖の日蓮の生涯をもちだすまでもない、日蓮宗はくりかえされる迫害のなかで成長してきた。

法華経を信じぬ僧や信徒と宗教上の関係をもてば法華経の神聖が汚れる、だから関係してはならないとする姿勢、これを不受不施(じふせ)といった。

日蓮宗の基礎が不受不施だが、豊臣秀吉が京都に方広寺をつくり、大佛の開眼供養をおこなおうとしたときに不受不施が問題になった。

妙覚寺の日奥は出仕を拒否した僧の代表格であった。日奥の強硬姿勢をめぐって妙覚寺をはじめ、日蓮宗が分裂状態になり、日奥は妙覚寺に居られなくなって、隠退した。

不受不施主義にたいする迫害は家康の代になっていっそう激しくなった。慶長五年（一六〇〇）——関ヶ原合戦の年である——に家康は「不受不施は邪教」と判決をくだして、日奥を対馬(つしま)に流罪した。日奥のほかにも多数の不受不施主義の僧が罰せられた。

対馬で流人の生活を送ること十八年、ゆるされて日奥は帰京した。大坂の冬の陣がおわり、城から脱出した宮本武蔵が鷹ヶ峰の本阿弥の新しい屋敷の様子をうかがっているいま、日奥は隠栖を強いられている。

日蓮宗の寺院と僧は、不受不施を主張してはならぬと強制されている。それでも不受不施をいう寺院や僧は寺領をとりあげられ、流罪されるのを覚悟しなければならぬ。

本阿弥一族は強烈な法華経の信徒だった。不受不施が法華経の神髄であるのは肝に銘じている。

実相院町の本阿弥屋敷のすぐ北に妙覚寺があった。目と鼻の先である。

秀吉の開眼供養出仕の命令をめぐって議論が沸騰、やがて分裂し、

出仕賛成派が多数を制して日奥が圧迫され、ついに寺から出てゆかざるをえなくなるまでの経過を、本阿弥一族は息をひそめて聴き、観ていた。

はじめのうち、不受不施の禁止は日蓮宗の寺と僧だけに科せられた掟であった。

もうすこし先へゆき、三代家光のころから、信徒が不受不施を信仰することも禁止された。庶民の身分を証明する寺請制度が始まり、寺請証文には「キリシタンでないこと」と「不受不施でないこと」が記入されることになった。不受不施の信奉者ではないかとの嫌疑をうけると生活の安全をうばわれる。

わたくしどもは日蓮宗でございます、といつているかぎりは安全だ。不受不施の思想をいわず、書かなければ安全なのだ。

本阿弥一族は不受不施を主張しない。

鷹ヶ峰では、朝に夕に、南無阿弥法蓮華経の題目をとなえる声が出ている。

だが、一族の指導者の光悦や、おもだった者は内心に不受不施の四文字を堅持していたにちがいない。

江戸や駿府へお供するのはご容赦くださいと懇願した姿勢のなか、不受不施の禁教にたいする不平が渦巻いている。

そして、そうと知りながら家康は、お土居の外側の鷹ヶ峰に本阿弥一族を移住させた。そこに、本阿弥を手放せない家康の苦心があった。

本阿弥一族の存在は刀剣の神秘をささえている。

刀剣は武士の覇権、すなわち徳川の政権の象徴である。

本阿弥を手放せば刀剣の、したがって徳川の政権の神秘的な正統性はうしなわれてしまう。どうあっても徳川は本阿弥を手放すことはできない。

日蓮宗の不受不施が迫害され、禁教となってゆく過程は武蔵も見聞している。

いかなる宗教にも興味をしめさない武蔵のことだ、不受不施禁止にたいする感想が本阿弥一族のそれとおなじであるはずはない。

だが、本阿弥の業と技の神秘と、刀剣の神秘、そして徳川の覇権のあいだのかかわりに気づかぬはずはない。神秘と俗とが、入れ子のかたちに入り組んでいる。

鷹ヶ峰の本阿弥の屋敷地の、この異様な地形をみれば、たいていのひとは気がつく、追放されて当然なのに追放されない本阿弥の家業の特異な神秘性に。

まえにいちど、どこかで、観たことがあるような……

武蔵は首をひねり、やがて思いだす。大坂の冬の陣のときの、真田丸を。

大坂城の外堀、平野口の石垣の外側に突き出すようにして築かれた攻撃専用の砦、真田幸村がつくったものだから真田丸と通称されていた。小山の地形を利用して高所につくられているから、南から進軍して外堀に迫ろうとする徳川軍は、砦の上から撃ちおろす射撃に身を晒される。

砦の上からの射撃をかわして石垣にとりつくと、こんどは横から射撃される。

また逆に、城から出撃するときには、前方に突き出た真田丸からの出撃が真っ先に敵と遭遇して、華々しい戦果をあげる。真田幸村が「勇将」「猛将」の名をほしいままにしたのは、もっぱら真田丸を効果的に利用した結果だ。

大坂城の真田丸と、鷹ヶ峰の本阿弥屋敷とは地形が酷似している。だが、籠められた意志のかたちは正反対のものだ。

真田丸には、ともかくも武名を轟かせてやろうという進取の意地があつた。

鷹ヶ峰の本阿弥屋敷には、光悦を処罰したい、追放したいのに処罰も追放もできない家康の苦渋の想いが籠められている。

武蔵は恐怖をあじわっている。背筋が凍りつくような恐怖だ。

京都の北の郊外まで来たが、布袋屋と連絡をとるのさえ容易ではなかった。

ようやく連絡がとれたので、「京都は避けて諸国を修業してまわる。このつぎは当方から連絡する」とだけ告げた。「なになに地方を遊行する」と告げるだけでも、これが原因で布袋屋が目をつけられるおそれがある。布袋屋が所司代の疑惑をむけられることがあってはならない。

四人の弟子とは別行動をとることにした。このつぎに会う日時と場所を、おおざっぱに約束して、別れた。

「おのれの身を邪悪からまもるもの、それが剣なり……これを忘れぬように」

「忘れませぬ」

ひさしぶりの単身の日々。

播磨から但馬へ、但馬から丹後田辺の舞鶴城攻めにくわわるまでは単身であった。舞鶴の合戦では鉄砲隊に属したから単身ではなかった。

舞鶴城で細川幽斎の雄姿に感嘆したあと、京都へはいった。

しばらく単身の日々がつづいたが、相国寺の世話になるうちに師として仰ぐ僧と出合つて、「師僧よ、師僧よ」と朝に夕に親しむうちに知人友人、弟子ができた。

単身も悪くない。

幕府の探索を避ける境遇だから、単身であるのは必要でもある。

徳川の政権が磐石の強さを得てきている、大坂方の兵士の探索も時とともに軟らかになりつつあるが、油断はならない。

二度目の諸国の修業をはじめた数年のうちに、武蔵はまた養子をとった。

備前福山の城主の水野勝成の臣下の中川志摩之助、その志摩之助の孫の造酒之助(みきのすけ)を養子にむかえたのである。

すでに武蔵は、実の兄の原田久光の子の貞次を養子としているか

ら、造酒之助は二番目の養子だ。

貞次が養子になったについて武蔵は、「出羽の国の田舎の道端で泥鰌を売っていた少年を養子にした」と、いささか因縁めいたはなしを練りあげた——ようである。

二番目の養子の造酒之助についても、武蔵は事実とは異なる伝説めいたはなしを作ったようだ。

それによると——

武蔵は摂津の尼崎から乗掛馬(のりかづま)にのって西宮にむかっていた。馬の口取りは十四か十五の少年、馬の背から観ると、尋常ならざる気迫のこもった顔つきである。

馬上から武蔵が声をかけ、下から少年がこたえて会話しながらすすむうち、武蔵はこのまま少年と別れるのは惜しい気になった。

「どうだ。わしの子にならぬか。立派な武家の主人を世話してやるぞ」

「老いた両親をやしなうために、こうして馬を牽いて稼いでいる。

わしがおじさんの子になれば、親が困る、だめだな」

ともかくもおまえの家につれてゆけ、親に違わせると、家までついていった。

ふた親に逢い、この子を養子にしたい、親御さんには迷惑はかけぬからと談判し、承知してもらった。

親の当座の暮らしのためにいくらかの力ネをわたし、隣近所に、よろしく頼みますと挨拶をした。武蔵は少年に造酒之助と名をつけた——

備前福山の城主の水野勝成の臣下、中川志摩之助孫の造酒之助であると率直にいえばいいのを、馬の口取りをしていた少年で、聡明なところに惹かれ、などと作り話をするのはどういうわけであるのか、わからない。ともかくも武蔵は、貞次といい造酒之助といい、養子の素性を隠して因縁めいたはなしを作りたがる傾向があった。作り話を作ったのが武蔵である、としてのことだが。

造酒之助の年齢ははっきりしない。これといった根拠はないが、

造酒之助を養子にしたのは元和五年（一六一九）、造酒之助は十三歳と仮定してはどうだろうか。武蔵は三十六歳だ。

信濃の飯田の城主の小笠原秀政は慶長十八年に飯田から松本に居城をうつした。

秀政と嫡子の忠脩、次男の忠真は大坂の夏の陣に出征し、大野治長や毛利勝永、真田幸村などと闘った。秀政と忠脩は戦死し、忠真も負傷したが、將軍秀忠から父の遺領を相続することをゆるされた。元和三年（一六一七）に忠真は松本から播磨の明石に移され、十万石を知行することになった。

小笠原忠真には武蔵の兄の田原久光が仕えている。久光の子の貞次は武蔵の養子になることがきまっている。小笠原家が明石に移封された元和三年、貞次は九歳になっていた。

久光も貞次も信濃の松本から明石に移り住み、それにあわせて武蔵も明石に長く滞在することになったと思われる。徳川による大坂残党狩りも終息した。探索の目をおそれ逃げまわることとはなくなった。

貞次が正式に武蔵の養子になり、やがて元服して伊織と名のるこ
とになった。

くわしい年月日は特定できないが、伊織は十歳をすぎたころに小笠原忠真の小姓として仕えるようになったと思われる。十五歳と仮定すれば、元和九年（一六二三）のことだ。

田原久光が伊織の実父であることはあえて隠されはしなかつたろうし、有名な剣士、かつまた血のつながる叔父の武蔵の養子であるということ、伊織の出世は早かったと推測される。

養父の武蔵が創作して広めたと思われる伊織の伝説がある。

そのむかし、伊織が出羽の田舎の道端で泥鰌（どじょう）を売って生計をたてていたとか、刀を研いでいたのを武蔵がききとがめ、問いただしたところ、じつは病死した父の死体を墓にはこぶのに重すぎて持てないから刻んではこぶ、そのために刀を研いでいると告げた

とか、そのままには信じられないはなしだ。

だが、異常に急速な出世を説明するには、荒唐無稽の伝説のほ
うがうけいれられやすいということも、あるはずだ。伊織の出世はそ
れほど急であった。

(第 15 章 終)

伊織の急な出世の裏には、養父の武蔵が明石城下の町割りを担当し、功績をあげたのも影響していると思われる。

元和元年閏六月、つまり夏の陣がおわった直後に徳川幕府は一国一城令を布告した。一国のうち、大名の居城のほかの支城は破壊せよという、厳しい掟だ。

にもかかわらず、元和三年に信濃から播磨に移封された小笠原忠真は明石に新しい城をきずくことをゆるされた。一国一城令に反することだが、それを許可された背景には小笠原家の格別の家柄があった。

徳川家康の長男は岡崎三郎信康といい、母は築山殿、織田信長の娘を妻とした。

ところが、築山殿と信康が武田勝頼と手をむすんで信長を討とうとしたとの疑惑がもちあがった。

家康は信長と同盟している。家康は信長の指示で、築山殿と信康を殺さざるをえない羽目におこまれた。弱小大名であったころの家康の痛恨きわまる事件であった。

信康には娘があった。その娘が小笠原秀政に嫁いで八人の子を産んだ。長男が忠脩、次男が忠真なのである。つまり秀政は家康の孫娘の夫、忠脩と忠真は曾孫であった。

非業の死をとげた信康の曾孫である、忠真にたいする家康の寵愛にはひとかたならぬものがあつた。

もうひとつ、ある。

明石の西どなりの姫路城は池田光政が城主であったが、元和三年幕府は光政を因幡の鳥取にうつし、桑名から本多忠政を移して明石の城主とした。忠政の知行は十五万石である。

忠政の娘は小笠原忠脩の妻だったが、忠脩が夏の陣で戦死したので未亡人となり、家康のお声がかかりで亡き夫の弟の忠真の妻になった。

そしてまた、忠政の長男の忠刻(たどき)の妻は將軍秀忠の娘の千姫であった。忠刻には父とは別に十萬石があたえられている。

忠刻の弟は政朝だが、この政朝にはおなじ播磨の竜野で五萬石があたえられた。

本多忠政・忠刻・政朝・小笠原忠真の親戚四家が播磨の中央地帯で隣同士に配され、四家には徳川家康と秀忠の血がながれこんでいる。

格別の家柄をほこる播磨の四家のひとつの明石小笠原家に兄の久光が仕え、久光の子で武蔵の養子の伊織が仕え、自分自身は明石城下の町割りの設計と工事監督を任された——宮本武蔵にたいする評価は高くなっていたのである。

町割り——戦国時代のなごころから発生した新しい建築思想である。建築よりは政治学に比重のかかった思想といふべきだろう。

城主の住む本城と、臣下の住む侍町、そして領民が住んで手工業や商いをおこなう城下町を総合的に設計、建築する。

この思想は近江の安土に築城した織田信長にはじまり、信長の家来で近江の長浜城主になった木下(豊臣)秀吉にうけつがれたといえる。

この時期の町割りの名人として名を知られる大名は藤堂高虎である。

高虎は近江の湖東で生まれた地侍の子であった。長浜で築城をはじめた秀吉に仕えた体験が、のちの町割り名人になる素地をつくったのだ。

町割りの秘訣といったもの、それは多くの築城の実態を見聞していることに尽きる。権力はもたなくてもかまわないが、見聞体験の多少は町割りの良否に顕面に影響する。

この点、諸国を歩いている武蔵は有利であった。武士団の主——大名としての肩書からくる発想の固着がないから、自由な目で築城の様子を観察することができた。

武蔵は立場が自由であり、しかも、日の出の勢いで出世する伊織の父なのだ。自分自身は権力をもたないが、主君忠真の権威を伊織を通じて行使することが可能であった。

明石城の普請奉行として幕府から都築弥左衛門と村上三右衛門が派遣され、城の主廊部の石垣や土塁は幕府の直営工事として築かれた。

捨曲輪(すてまわ)は幕府と小笠原家の協同事工、侍屋敷区は小笠原家の単独工事だから、武蔵は侍屋敷区的设计を担当したわけだ。

「旧来の山陽道を思いきって南に移し、新しい城下の真ん中を通過するようにすべきであります」

こういう意見には反対の声が高かったにちがいない。城下の真ん中を「どうぞお通りください」と敵勢に声をかけるようなものではないか——そんな時代遅れの意見も出たにちがいない。

「その名をいうのは憚られますが、秀吉の長浜の城下は北国街道を真ん中に通すことで繁栄を得たのです」

「長浜か……」

「伊勢の安濃津(あぬづ)では、むかしは参宮道が海ぞいに通っておりました。それを藤堂高虎は、新しい城下のなかに移したのです。

津の城下は繁盛してきました。高虎の決断の結果にほかなりません」

関ヶ原から大坂の陣——合戦につく合戦で時をすごしてきた侍たちは、武蔵の豊富な見聞体験のまえには反論するちからもない。

明石城の外堀と石垣は入札による町人の請負として工事がおこなわれた。武蔵が町人を通じて、実質的に入札に参入したのではないかとみるのも、あながちまちがってはいないだろう。

京都で親しくしていた布袋屋が、武蔵を通じて明石城の建設工事に参入するという資金の径路もかんがえられる。

町割りの設計図も描ける。商人と深いつきあいもあり、すくなくない額のカネをあずけて運用し、太らせてもらっている。竹刀や木刀をにぎらせれば、神業かと見紛うばかりの技を披露する——

明石における宮本武蔵は 異様な人物 の典型として注目をあびてきた。

そのうえ、大方の予想を裏切って、武蔵は小笠原忠真に仕官しようとしないうとしない。

あれほどの人物、そのうえ、養子の伊織さまは主君のご寵愛をうけておられる。仕官すれば、伊織さまよりもなお急速に出世の階段をおのぼりになられるはずだ

明石城下の建設の場を——たいていは裸足である——巡回しながら、武蔵はおのれの評判を耳にする。異様な人物として、好奇の視線をあてられているのを実感する。

これによろしい。宮本武蔵は仕官するつもりがない、ということが世間一般の見方として定着するのは、わしのちからになるのだ。武士は主君に仕えるのが常態である。仕官してこそ武士だというのは常識でさえあるだろう。

仕官していれば武士の生涯は安楽、とまではいかないが、一から百まで、暮らしのすべてを自分でやりくりする苦労はない。

仕官の誘惑は強烈である。苦しいとき、ふと、

仕官して地位と俸給をいただくほうが、いくらましか、わからん！

絶叫したい衝動に駆られるが、それをぎゅーっと抑えて、仕官せずに生きる道を長く伸ばしてゆこうと奮闘する。

奮闘する武蔵のちからになるのである、宮本武蔵は仕官をしない武士なのだという世間の評判が。

この時期、武蔵の身边に吉太郎の姿は見えない。夏の陣のあと、京都で別れてからは武蔵は吉太郎を探さない、吉太郎からなにも挨拶はない。手掛かりのないままに、聡明な吉太郎である、なんとかして生きているのだろうと自分にいつている。

「伊織よ」

伊織に字をまなばせ、父の形見の冊子に武蔵の想いを書きこむ仕事をやらせたい——そうおもってきたのが、このころ実現しかかっている。

「よいか……」

「はい。父上」

「では……仕官の望みを持たざるべし」

「仕官の、望みは……」

「つき——剣士の生涯は独行たるべし」

「剣士の、生涯は……」

筆をおかせ、武蔵は伊織に語る。

「武士は仕官するのがふつうだ。仕官をして、知行地か俸給をいただいて、食って生きてゆく」

「はい」

「それが悪いというのではないが、主君にお仕えし、同輩がいるとなると、気がかわねばならん」

「はい」

「主君や同輩に気兼ねをすると、やりたいこともできなくなる。それが、まずい」

伊織はしばらくかんがえていた。

やがて、顔をあげて、

「やりたいことのない武士は主にお仕えするほか、仕方がないわけですね」

「それは、まあ、そうだ」

「わたくしは、伊織は、これといって、やりたいことは「なませぬ」

父上とは異なる、主取りをして生きる武士の道をすすみますと予告して、伊織は武蔵の顔をしずかに見上げている。

小笠原家と深い縁ができたが、仕官したわけではない。行動の自由は武蔵の手にある。江戸にゆけば小笠原の屋敷を訪問することもあるが、ほかの大名の屋敷をたずね、あるいは招かれて剣技を見せることもあるといった自由な境遇を楽しんでいた。

さて、これは江戸の小笠原屋敷でおこった事件のようだ。

足軽部屋の雑談のうちに、宮本武蔵のことが話題になった。こま

かなところでは相違はあるものの、武蔵の剣技の抜群の見事なことには異論はないといった雰囲気になった。

だが、包丁人だけは、

「騙し討ちなら、いかに武蔵であろうと」

勝てる道理がないと強弁して、あとへ退(ひ)かない。

「いやいや。騙し討ちでも、あの武蔵が相手では」

「わしなら、こうして、負かせてやる」

包丁人の手のほどを拝見しようかということになり、その場の者が小銭を出しあつて賭けが成立した。

包丁人が夜陰にまぎれて待っていると、武蔵がやってきた。なにも気づかぬ様子で通りすぎるのを、うしろから声をかけざま、木刀で打ちかかった。

武蔵は背中から包丁人に体当たりをくらわせ、刀の鏑で胸板を強く突いた。

包丁人は仰向けに、どつと倒れ、おきあがろうとした右の腕を、武蔵が四度、五度と峰打ちした。

刀を鞘におさめ、なにもなかった様子で部屋に通つて座をさだめた。

うしろの部屋では、気付だ、葉だと大騒ぎがはじまり、騒ぎに気づいた小笠原忠真が奥から姿をあらわした。

「どうした？」

武蔵が座をすすめ、「何者かが御前のちかくで騒ぎましたので、戒めておきました。しばらくは動けぬはず、ご安心ください」と、しずかに知らせた。

包丁人の命に別状はなかったが、右の腕の傷はなおらない。そのまま追放されたということだ。

怪我もしなかった、さすがは武蔵、騙し討ちなどは見破つてしまつと評判もとつた。

だが、武蔵としては恥ずかしいはなしだ。

賭けごとのタネになったのが恥ずかしい、包丁人に「騙し討ちな

ら、やれる」と思わせたのも恥ずかしい。「騙し討ちはできるが、あの武蔵さまを相手にするのは失礼だ」と尻込みさせる人徳がなかったのが——武蔵としては人徳をそなえていたつもりかもしれないが——恥ずかしい。

こんなことでは、まだ、だめだな、わしは！

恥ずかしいから顔をあげられない。うつむいて、口惜しさのあまりに、血が出るほど強く唇を噛んでいなければならない。

おそらく、武蔵はこのようにしたはずである。事件をつたえる伝説の筆者が、武蔵の剣技の圧倒的な強さだけを強調したかったために、すこしも恥じていない武蔵の像をつくってしまったのだと思われる。

尾張名古屋には武蔵の足跡が色濃くのこっている。

いつのころか、武蔵が名古屋に滞在したことがある。どのような手づるがあったのか、これまた不明だが、尾張徳川家の主の御前で試合をしたことがあった。

藩士のうちから選抜された剣士が立ち合った。武蔵は大小の二刀を組み、大刀の先を相手の鼻の先にびたりと付けたまま、ぐるーっと一回転させた。そして、

「これで勝負がきまりました」

簡潔に宣告した。

つぎの相手が出てきて立ち合ったが、手もなく負けた。

名古屋の城下で宮本武蔵の名が急騰し、弟子にしてみらいたいと願う者が続出した。竹村玄利、林資龍などは武蔵に伝授された妙技を使ったが、時流に合わないこともあって、剣術流派としては有名にはならなかった。円明流というのが名古屋における武蔵の剣技の系譜である。

名古屋では武蔵の剣技は時流に合わなかったという。これは柳生流とのかかわりであるようだ。

柳生宗厳は中条流をまなんで近畿地方に勇名をはせたが、上泉武蔵守信綱と邂逅（かいごう）、立ち合つてやぶれ、発奮して武蔵守の弟子となり、一国一人の印可をえて柳生新陰流をひらいた。

柳生新陰流は宗厳の八男の宗矩がつぎ、宗矩の甥にあたる兵庫助利厳は尾張徳川家に指南役として仕えた。尾張家の柳生が剣技指南を独占したために、いかに宮本武蔵の勇名をもつても対抗しえなかつたようだ。

だが、その兵庫助利厳と武蔵は偶然に逢つたことがあり、意気投合したという逸話がある。

武蔵が名古屋へゆく途中、厳しい雰囲気の男といきちがつた。相手も武蔵の顔に注目している。

立ち止まり、先に口をひらいたのは武蔵であつた。

「ひさびさに、生きた人間の顔を拝見しました。兵庫助殿にちがいあるまいな」

「そういう貴殿は宮本武蔵でござろうな」

たがいの肩を抱くようにして兵庫助の屋敷へゆき、武蔵はしばらく滞在したのである。その間、たがいに酒を呑み、暮をうって楽しんでたが、剣技を闘わすことは一度もなかつたという。

- 2 4 2 -

柳生家――

これは気にかかる。

気にかかる、その中身について、武蔵は誤解されることが多かつた。

「あなたはなぜ、將軍家の指南役をお望みにならんのか？」

剣技をまなぶ、まなばぬにかかわらず、武蔵に接近するひとのほとんども、異口同音にこの質問を発したと思つてまちがいない。

剣技に磨きをかけ、ひとに知られぬ苦行をかさねるのも剣士としての最高峰、すなわち將軍家の指南役になつて尊敬されたいためではないか。そのほかに、なにがあろう。

だが、この宮本武蔵という剣士、柳生宗矩よりもはるかに強いと

いう世間の評判にもかかわらず、手づるをもとめて指南役をもとめない。こんな奇妙なことはないのだ。

この質問にたいする武蔵のこたえは判でおしたように、きまっていた。

「柳生殿がおられる。それでよろしい」

誤解のないように確認しておく、柳生家が將軍家の剣術指南になったというのは、いきさつからいえば、まちがいである。柳生家が剣術指南をしていた徳川家が將軍家になったのだ。

徳川家康が「柳生家の者に逢いたい」といい、黒田長政が使者として大和の柳生にやってきた。そして宗矩が家康に拝謁して劍の師となる約束ができたのは文禄三年（一五九四）である。

天下の権をにぎる豊臣秀吉は朝鮮半島の闘いをつづけられており、家康はまだ秀吉の後塵を拝していた。武蔵は十一歳、弁之助と称していた。

それから九年、家康がついに征夷大將軍になったから、柳生宗矩は將軍家康の剣術指南役になったのである。

柳生殿がおられる——武蔵の言葉にうそはない。

世間は、この点で武蔵を誤解していた。

將軍家指南役になりたくないはずがない。なりたいが、なれないのが武蔵の実状であるはずなのに、武蔵は羨望の様子を見せない、なぜなのかと、世間はこのように誤解していた。

だが、世間とは別の意味で、武蔵は柳生家の存在が気にかかってならないのである。

柳生家の存在が気にかかる、それはどのような意味かということ、柳生と、わしと、どちらの剣技が優れておるのか？

単純そのものの疑問、単純だから、ますます厄介。

柳生と、わしと——このように比較しているときの「わし」の中身は、「吉岡憲法を負かした宮本武蔵」なのである。

足利將軍家が壊滅し、吉岡家が剣技を廃してしまったのは遺憾だ

が、ともかくも武蔵は剣技の最高峰の権威を負かした。だから最高峰の、その上だ。

柳生は、だれを、なにを負かしたというのだ！

これが痩せ我慢というものだろうか、武蔵はおのれの内心を糺(ただ)す。

そして、痩せ我慢などでは決してないのを確認し、安心するのである。

柳生が、だれかを負かすまでは、わしが最高峰の、そのまた上位に君臨している！

柳生の名を耳にするたびに、武蔵のこころは動揺する。柳生よりはわしのほうが上位にあるが、ことによると——という一抹の不安である。

つぎの事件を、武蔵は知っていたであろうか。知っていたとすれば、周囲のだれかに感想を洩らしていたかもしれない。残念ながら真否を追跡する手が見つからないので、その事件というものを紹介するにとどめる。

二代將軍の秀忠は元和九年（一六二三）に辞職し、世子の家光が三代將軍になった。家光は二十歳、いわゆる「生まれながらの將軍」である。

秀忠の指南役だった柳生宗矩は、ひきつづいて家光の指南役となった。宗矩は五十三歳で、父祖からの旧領二千石と、宗矩自身が加増をうけた千石をあわせて三千石、中級の旗本なみの知行をうけている。

さて、事件というのは——
江戸城で能が催された。開演のまえに家光が宗矩を召して、命じた。

「観世大夫の所作をきびしく観察せよ。大夫のこころに隙があり、斬るならばここだと感じたところがあれば、のちほどに申せ」

観世の能がおわると、家光が宗矩を召し、「どうであったか」と

下問した。

「始めから嚴重に観ておりましたが、斬るべき隙はあまりせんでした。強いてもうせば、舞いのうちに、大臣柱（たいじんばしら）に控えたときにいささかの隙が見えました。斬るならば、あのときでございましょう」

そのころ、楽屋で休憩していた観世がまわりの者に語っていた。

「ご見物のうちに、ひとりだけ、わが所作を厳しく観察していた方があった。どなたでござろうか」

「名高き柳生殿、剣の名人でござる」

「舞いのうち、大臣柱で控えたときにすしだけ気をぬいたのだが、あの方は莞爾（かんじ）と笑われた。笑っていただくところではないから、奇妙なお方だと思つたが、なるほど」

観世の感想がつたえられると、家光はすこぶる悦んだということだ。

逸話の主役は家光、宗矩は引き立て役である。観世大夫は逸話の材料。

もしもこの事件を、宮本武蔵が知つたならば――

そうであつたか。このようにするのが、指南役として主君に仕える者の役目であるわけだな！

主君に仕える指南役の義務はなにかというと、主君を抜群の存在に仕上げることだ。

この逸話にみるかぎり、宗矩の義務は完全に果たされた。宗矩の剣技の秘儀と観世大夫の能芸の秘儀の双方をあわせて理解する無類の感覚をもつ人物、それが家光である。そのように仕上げたのは宗矩だから、かれの義務は見事に遂行されたのである。

柳生宗矩は称賛されて然るべきである――こうした見解について、武蔵は満腔の賛意を表するであろう。

柳生殿のお手並みは見事である――そう評しておいてから武蔵は、ではあるが、わしには似合わぬことだ。將軍は將軍であることに

よって、すでに唯一無二の存在であられる。唯一無二の存在に剣や
能で磨きをかけるのは、そもそも余計なことではないかな
たぶん、こういうはずだ。

柳生宗矩にかぎらず、剣士を自任する多くの者にくらべると、武
蔵は「わしが、わしは」の意識が強かったといえる。

剣の世界——それほど広くはないが——では 柳生か宮本か の
比較評判が盛んだが、武蔵はなにがなんでも柳生を越えて上に出よ
うという気はない。

吉岡憲法をたおしたのはわしだ。ほかのだれにも、いまとなって
は不可能であるという気がある。わが身を、あえて柳生との比較の
場に出さない、それで当然だ。

(第 16 章 終)

江戸の吉原遊廓――

寛永十四年（一六三七）の冬、後世にまで語りつがれる、華やかで、粋な遊びをやつてのけた男、それがほかならぬ宮本武蔵。

武蔵の華やかな遊興のじっさいは、庄司勝富（かどみ）の随筆『洞房語園（どうぼえん）』に述べられている。庄司勝富がどんな人物であったかを知るには庄司甚右衛門（じゆうえもん）からはじめなくてはならない。

甚右衛門は相模の小田原の出身とも、東海道の吉原の出身ともいわれる。後説は江戸の吉原の名からさかのぼって類推された伝説かもしれない。

江戸には、京都の六条柳町のような公認の遊廓はなかった。どこと場所をさだめず、遊女が自前で客をひいて商売をしていたのである。

甚右衛門は点在していた遊女の稼ぎ場を一カ所にあつめて幕府に公認してもらい、独占営業の特権を得たいと申請し、許可されて吉原に遊廓をひらいた。元和三年（一六一七）のことだ。

甚右衛門の妻の家を野村といい、甚右衛門の協力をえて、吉原遊廓のなかに遊女屋をひらいた。初代が野村喜左衛門、二代目が小左衛門、小左衛門の子が勝富である。

勝富はたぶん次男か三男だったろう、実子の絶えた甚右衛門家の養子になり、みずからの遊女屋を経営しつつ、吉原全体の名主の役をつとめたこともある。

勝富は俳人であった。六十五歳で遊女屋経営から隠退し、七十一歳の古希をむかえた年に、吉原に関係する人物の俳諧集を編集して『洞房語園』を刊行した。さらに吉原遊廓の歴史や逸話、聞き書きのたぐいをあつめて『異本洞房語園』と『洞房語園後集』を刊行した。宮本武蔵の吉原遊興のはなしは『異本洞房語園』の「補遺」におさめられている。

武蔵がしばしば遊んだ揚屋は甚三郎の見世である。そこへ、河合権左衛門がかかえる遊女の雲井をよんで楽しむ。

そのころの吉原の遊女には、上は太夫から下は揚屋女郎まで八階級があった。太夫・格子・局・新造・太鼓女郎・散茶・うめ茶・揚屋女郎である。武蔵の鼻肩の雲井は上から三番目の局女郎であった。そうだ。

寛永十五年の初春、宮本武蔵はいつになく格式張り、肩肘はった勢いで甚三郎の見世に登楼（とぼう）した。

武蔵さまがお出でになったということで、甚三郎の見世はもちろん、甚三郎の見世のある新町の全体が景気づいた雰囲気になる。

それだけの理由があった。

このころ、江戸で剣士というと柳生宗矩が有名であった。なにしろ、將軍さまの剣の師である、宗矩よりも格式の高い剣士はありえない。

だが、將軍さまの剣術の指南役であるという、まさにそのことで、吉原では宗矩は尊敬されていないというか、評判は高くないというか――

宗矩は吉原では遊ばない。

將軍さまのご家来、しかも剣の師であるから、お側を離れるにはおゆるしが要る。事と次第によってはおゆるしは出るが、まさか、吉原遊廓へ行って派手に遊ぼうと思えますから一日だけお暇をいただきいとは願えない。

そういうわけで、宗矩が吉原にカネを落とすことはない。カネを落とさないから、ほかの世界のようにには評判が高くない。

柳生宗矩か、宮本武蔵か――吉原では武蔵が圧倒的に評判も人気も高かった。

今日は武蔵さまは、どんな遊びをなさるのか――固唾をのんで期待している遊廓関係者が多い。庄司勝富の先祖も、そういうひとりだった。

甚三郎の見世にあがった武蔵は、いつもの部屋にはいらうち、興奮の口調で語りだした。

「今日はいつもとは趣向を変えて遊びたい。そのつもりで、頼むぞ」
「万事、こころえております」

茶屋の男はいつものとおりの決まり文句で挨拶した。客がなにをいおうとも、「こころえております」と応じ、万事にそつなくもてなすのが茶屋の男だ。

「いや。おまえには、わからぬ」

「いえいえ。武蔵さま、みなまでおっしゃいますな。雲井さま、でございましょう」

「雲井……おお、早く雲井を呼べ。だが、その先がいつもとはちがうのだ」

そこではじめて男は、武蔵の様子がいつもとはちがうのを悟る。

武蔵はお供を、それも剣術のお弟子とあきらかにわかるお供をつけてきている。遊廊というところは単身でのりこむのが粹で正しいと知らぬはずはないのに。

お供の方々が揚屋にあがって遊女を呼び、武蔵の払いで遊ぶというならわからないでもない。だが、お供は揚屋にあがりもせず、といて、お供をしたから役目はすんだ、さあ帰ろうというのでもなく、甚三郎の見世のまえに行儀よくならんでいる。場違いな様子だが、通行人に恐怖感をいだかせるわけではない。

よく見れば、お供たちは出陣の軍装である。ただし、吉原のなかには刀を差したままではいれぬ掟だから、お供たちはみな無刀、槍も見えない。じつになんとも奇妙な服装であった。

武蔵さま、あなたはいつたい、なにをおやりなさるおつもりですかと、男は不審な顔で武蔵を見つめる。

「わしは合戦にゆくことになった」

「合戦……いくさ、ですか。本物の」

「本物の合戦だ。おまえ、きいておらぬか、九州の島原でキリシタ

ンが一揆をおこした」

「存じておりますが、まだ、退治されなかったのですか！」

「大勢のキリシタンだ、そう簡単に退治できるものではない」

キリシタンの名は耳にしているが、それがどういうものであるのか、くしわい知識はない。それが江戸の市民というものた。

もちろん、キリシタンがおそろしい宗教であるとか、徳川さまが殲滅なさったとか、キリシタンの信徒であるのがわかればたちまちお縄がかかって、生きてはいられない、ぐらいは知っている。

寛永十四年（一六三七）の十月、肥前の島原半島の一角、南有馬村の角蔵と北有馬村の三吉がキリシタン信徒であると密告された。

島原城主の松倉家の代官が捕吏を派遣して角蔵と三吉、家族をあわせて十六人をからめとり、島原におくった。

正式な吟味もなく、十六人がすぐに処刑されてしまったことに怒った農民は代官をおそって殺した。これが一揆の発端だとされている。

有馬村のほかにも、似たようなはなしがたえられている。ということはつまり、松倉家が支配する島原半島では、重い年貢を払いかねた領民が、キリシタンの名目で虐待されていたのだ。

島原の騒ぎは対岸の天草につたわり、短時間のうちに島原に歩調をあわせるかたちの一揆がおこった。天草は肥前唐津の城主、寺沢広高の領地である。

島原・天草に領地を接する肥後の熊本藩細川家と肥前の佐賀藩鍋島家ははげしい衝撃をうけた。四方からの報知がとどくたびに、一揆が急速に拡大しているのを悟らぬわけにはいかない。

佐賀城も熊本城もにわかの出撃態勢をくんだ。そして、豊後の府内（大分）に駐在していた幕府の目付、牧野伝蔵と林勝正に、「いかがいたすべきや？」と指示をあおいだ。細川の主の忠利、鍋島の主の勝茂はどちらも江戸に参観して、留守であった。

ところで、幕府の目付の牧野と林が、なぜこのとき、府内に駐在していたかというと、松平忠直を監視していたのである。

徳川家康の長男の結城秀康の子の松平忠直は越前の北庄で六十七万石を知行していた。しかし、大坂の夏の陣で軍功をあげたにもかかわらず恩賞がすくないと不平をいい、乱暴な所行が絶えないのを理由として隠居させられ、豊後の府内にちかい萩原（はぎはら）に配流されていた。

林も牧野も、忠直の監視が役目であって天草や島原の支配には関係はない。にもかかわらず、鍋島家も細川家も一揆勃発を報告して指示をあおいだのは、なぜか。

他人の領地に紛争や騒動、災害がおこっても自分の判断で軍隊を派遣してはならないという絶対の掟があった。幕府に報告し、幕府の指示によつてはじめて出動する。指示なしに軍事出動すると、幕府の大名指揮権にたいする重大な違反とみなされる。

他領のなかの紛争を知りながら報告を怠れば、これまた処罰のおそれがある。そういうわけで細川も鍋島も、府内に駐在していた目付に、所轄外の事項と知りながら報告し、ともかくも報告義務は果たしましたよと、形式を踏んでおいた。

- 2 5 1 -

府内駐在の目付は大坂城代の阿部正次に急報を發した。阿部は江戸に急報を転送し、九州の諸大名にあてて指示を發した。

「江戸から指示がくるまでには時間がかかると思われる。その間に、つぎの処置をとるべし。他国から島原・天草への通交を阻止し、面々の領地内での武具の売買を禁止する、など」

江戸に知らせがとどいたのは十一月の九日であつたという。

幕府は上使を派遣することに決した。板倉重昌と石谷貞清が上使に任命され、十一月の十日に江戸を發つた。島原城主の松倉勝家と豊後府内の城主の日根野吉明は九日のうちに帰国せよと命じられた。

佐賀の鍋島勝茂と肥前唐津の寺沢広高は、松倉の兵力で一揆を退治できない場合は越境して加勢せよと命じられた。それでも鎮圧できなければ細川家を加勢させるが、まさかそこまではゆくまいというのが幕府の見込みであつた。

上使のひとり、板倉重昌は京都所司代の板倉勝重の次男である。兄の重宗は父のあとをついで所司代をつとめ、三万八千石を知行している。弟の重昌は一万一千八百五十石、大名といっても、小身である。小身の重昌を上使に任命したところに、九州の事態にたいする幕府の過少評価があった。

板倉重昌が出発した日、有馬家の屋敷で能がひらかれ、多数の客がまねかれていた。そこへ、大事件が報告された。

「肥前でキリシタンが蜂起した。鎮圧の上使として板倉重昌が任命され、たったいま出発した」

楽しいはずの能の席が、いいようのない衝撃で凍りついた。まねかれた客は狼狽するだけ、これといった行動をとる余裕もなかったが、柳生宗矩だけはちがっていた。

「お馬を一頭、拝借いたしたい。なるべくは脚の早いお馬を」
挨拶もそこそこに馬にまたがり、西にむかって走っていった。

品川の駅について、「板倉殿は、いつごろ通過なされたか」とたずねると、通過なされてかなりの時がすぎたという。

鞭うち、鐙に踏んばって川崎に着いてたずねると、板倉は二里か三里は先に行っているだろうとのこと。

「まにあわぬ！」

とつてかえし、もう夜になっていたが、お城の門をあけてもらいたいと願った。日がくれ、江戸城の門が閉じられたあとは、あけられることはない。將軍家光の乳母として権勢ならぶ者のない春日局でさえ、閉門の刻限に遅れて、やむなく門の下で一夜をすごしたことさえあった。

だが、開門をねがっているのは家光の剣の師の柳生宗矩である。必至の形相が奥につたえられ、ついに門があげられた。

入城した宗矩は、將軍拝謁を願って出た。家光はもはや寢所にひきとっていたが、宗矩が至急に拝謁を願っていると知らされ、出てきた。

「夜中、なにごとか」

「板倉重昌殿が上使の命をこうむって出立した由をきき、おいかけ、お上のご命令なりと偽って重昌を押し止めようと……」

「重昌を、押し止める……」

「さようです。ですが、追いつかぬうちに日が暮れました。以上のことをもうしあげようと、夜間、異例の拝謁を願った次第」

「なぜ、重昌を止めるのじゃ？」

「お上におかれては、ただの土民の一揆だとおききなされたゆえ、軽き身分の重昌を上使に任命なされたと拝察いたします」

「土民の一揆……ではない、というのか」

「島原や天草の土地柄からしてキシタンの信徒が多数、いや、ほとんども信徒ではなかるうかと愚考いたします。信仰が柱になっての一揆が容易ならざること、おそれながら神君も苦勞なれました」

「キシタン……」

「板倉重昌は討ち死にするにちがいあまりせめ」

家光は「なにを、愚かなことをいうか」と宗矩を叱りつけ、さつと席をたつて奥へはいった。

だが、宗矩はその場をうごかない。

端座して、待った。

夜は更けてくる。

根負けして、家光が出てきた。

「なぜ、板倉は討ち死にするのか」

「板倉は位は低く、祿は少ない。西国の大名はかれを輕蔑するにちがいありませぬ。西国の大名たちは表向きには板倉の下知にしたがうふりをして、内心では背きます」

「……」

「鎮庄に手間取れば、お上はご家門か、ご老中なみの大名を後詰め
の追討使として派遣なされます。こうなったら、板倉重昌、なんの
面目あって上使の役をつとめられましょか。無謀な攻撃をかけ、死
に急ぐに相違ありません。ゆえに不肖宗矩、御前をものはばからず、

板倉は討ち死にともうしあげた次第でございます」

ここまでいわれて家光は、軽輩の板倉重昌を島原へ派遣した策の愚を悟ったようだ。

「上使に任命なされた、その日のうちに他人に交代させるのは、これまた板倉の名誉を損なうもの。日にちをあらためて交代させるということで……」

家光と宗矩のあいだに、時宜をえて板倉を召還し、他人に上使役を交代させる案が了解された。

だが、ついに、上使交代の時宜はやってこなかった。

天草の一揆勢は島原にわたって島原勢と合流した。堅牢な造りの原城には三万七千の信徒がたてもって抵抗をつづけた。

家光は老中の松平信綱と美濃大垣城主の戸田氏鉄を第二次の上使に任命した。

ただしこの人事は、板倉重昌の作戦指揮を怠慢と判断した結果ではない。一揆はやがて鎮圧されるはずであるから、そのあとに処分については板倉ではなくて松平信綱と戸田氏鉄にやらせるという政策であった。幕府首脳は依然として、島原の一揆の戦闘力を過小評価していたのだ。

板倉重昌は松平信綱と戸田氏鉄が派遣されたのを知った。兩名の到着のえまに一揆を壊滅させなければ名誉にかかわるとかんがえ、焦った。

寛永十五年の正月元旦、板倉は攻撃軍の先頭にたって指揮していた。松倉家と有馬家の軍隊が、城内からの激しい攻撃になやまされているのを見て、激励するつもりであったのか、ひとりだけ前進して城壁にとりついたところを狙撃され、戦死してしまった。

その島原の戦場に、宮本武蔵は出てゆくという。

武蔵が吉原の揚屋の甚三郎の見世にあがって、置屋の河合権左衛門の見世から遊女の雲井をむかえた。

雲井がやってくる。太夫ほどではないが、同女郎にふさわしい風

格を匂わせている。

揚屋のまえに、ひとだかりがしてきた。武蔵と雲井が対面する光景を想像する者もある、あやかりたい者もいる。

雲井の評判が高いのは、武蔵が鼻屑にしているだけではない。剣を通じてできあがっている武蔵の交遊が、そのまま雲井の人気の支えになっている。

吉原の新町で遊女屋を経営している野村玄意は柔術家の一橋如見斎の弟子であった。武蔵と如見斎とは友人であったから、玄意と武蔵の交際がある。

江戸町三丁目の山田屋三之丞、角町の並木屋源左衛門の遊女屋ふたりは武蔵の剣の弟子であった。

野村玄意、山田屋三之丞、並木屋源左衛門があいついで甚三郎の見世にやってくる。吉原の遊女屋経営者の多くは武士出身者がおおかった。野村玄意、山田屋三之丞、並木屋源左衛門の三人も、剣技に身を入れていたところから察すれば武士の出身であったと思っつまちがいない。

大物が甚三郎の見世にあつまってきた。その日——月日の詳細を確定できないのが口惜しい——の吉原雀の話題を独占したのが甚三郎の見世であった。

「息子の伊織、小倉の小笠原殿に仕えてござる。その縁でこのたび、肥前の戦場へまいることになりました」

「武蔵さま、おめでとう、ございます！」

雲井が華やかな声をあげたのが合図になって、武蔵の出征を祝い、武運の長久を祈る宴会がはじまった。

三人の遊女屋経営者も雲井も、武蔵の出征を知らなかったわけはない。まえもって通じてあり、三人が亭主となり、武蔵を客として送別の会をやると筋書きはできあがっている。ほかの遊女もつきつきと顔をそろえ、ちかごろ類のない大盤振る舞いとなった。

見世のまえには武蔵の若者の弟子が数人、手持ち無沙汰の様子で

たっている。武蔵の武器をもっていればまだしも格好はつくが、吉原に武器はもちこめない、大門の外にあずけたから、それだけ余計に格好がつかない。

二階から酒と料理がはこばれてきて、弟子たちもささやかな宴会をはじめた。ふつうならば男衆がすつ飛んできて張り倒されるところだが、客が武蔵、亭主が三人とも遊女屋の経営者である、この日はかりは見世のまえの宴会もとがめられない。

宴もたけなわ、

「お名残はつきぬませぬが、武蔵さまの首途を祝って……」

見世のまえで待つ弟子のひとりが旗指物の布をもって、あがってきた。武蔵の旗指物は篋を二本、交差したかたちである。竹槍の先にくくりつけるのが本当だが、吉原には竹槍ももちこめないから、ありあわせの長い棒の先にくくりつけて、

「これを……」

雲井がさしだしたのは、あらかじめ武蔵から雲井にたのんで縫ってもらった縮緬の袋、棒の先にとりつけ、指物をおさめた。

「それは、雲井が……」

袋の口の紐を、雲井がしっかりと閉じた。戦場にゆくまで袋の口をあけることはない。

武蔵の軍服は青い筋の緞子、陣羽織は雲井がいつも身につけている紅鹿子の小袖を裏に付けた黒の纏子。

武蔵を先頭に、雲井、野村伊玄、山田屋三之丞、並木屋源左衛門の順で二階からおりてくると、

「武蔵さま！」

「二刀流！」

見世のまえに待っていた太夫や格子の遊女がそろって歓声をあげた。

群集にむかって武蔵が大声で、しかし、おちついた様子で感謝の言葉をのべ、「島原にまいります」と挨拶した。キリシタンのキの

字もいわない。勝つつもりだとも、手柄をあげるともいわなかった。
大門の外で弟子たちが武器をうけとり、武蔵は馬に飛びのって走
っていった。

(第17章 終)

立ち寄った京都で、武蔵は、

「本阿弥さまが……！」

光悦はこの年（寛永十四）の二月に亡くなったと知らされた。

知らなかった。もっと近くでお目にかかって、おたずねしたいことがあったのだ

なにを、どのように質問したいのか、じつは武蔵自身でもはっきりはしない。ずっとむかし、布袋屋の紹介をもらって実相院町の屋敷の作業の様子を拝見させてもらった、それだけのことだから、光悦と交際があったともいえない。

だが武蔵は、光悦の死という事態に直面して、いいようのない寂寥感に責められているおのれを実感している。

まだ、五日、ある

島原へ発つまで、五日の間は京都に滞在する予定であった。五日のあいだに、光悦について、なにかやれそうな気がしてきた。哀しむだけではなく、なにか、やれる。

相国寺の師僧を思いだし、ご壮健であられるかと案じつつ、探した。幸いにも師僧は、相国寺の裏の塔頭（たっちゅう）にしりぞいて老いをやしなっておられた。

「剣の名をますます高めておいでの様子、京都でもうかがっておりますぞ」

師僧は、かつて武蔵の師であったことをみずから放擲なさっておられるような、親密な態度であった。

本阿弥さまがお亡くなりになったと知り、こころが落ちつきませんと正直な心境をうちあげた。光悦さまについて、なにか知りたい衝動があるのに、なにを知りたいのか、それがわからなくて困惑しておりますともうちあげた。

「欲しいのは物や品ではあるまいな」

「滅相もない」

「ならば、光悦の最後の言葉とか、そういったもの」

「ご存じなのですか！」

「最後の言葉かどうかは、わからぬ。病床に伏す身となられてからも、いろいろと語り、しまいのうちには意味のわからぬ言葉が多くなつて……」

いたわしい！

ひとの寿命というものの残酷を、無理矢理に悟らされている気がする。本阿弥光悦の、あの聡明と沈着をもつても寿命に逆らうことは不可能なのだ。

「細川の幽斎のことを、くりかえして語っておいでであつたとか……」

「幽斎！」

天啓である。

天啓と感じた中身がなんであるか、見当はつかない。だが、これを天啓といわずに、なにが天啓か。

混濁と暗転のくりかえしのなか、薄れてゆく意識のなかで光悦は細川幽斎のことをしきりに語つて——語つてとはいえないだろうが

——いたというのだ。

師僧も、くわしく知っているわけではなかった。これは推測だが、と断りつつ武蔵におしえてくれた。

細川幽斎の臣下の宮木孝庸というひとは学者で、歌道に精進していた。幽斎の片腕、学問のことに限つての側役といった役目であつたようだ。その宮木孝庸と光悦とのあいだに和歌や国学のことで深交があつた。

あるとき、宮木が幽斎にたずねたのだそうだ。

「世間にとつて有用第一の書、これを一冊だけ指定していただきたいと乞われましたならば、どの書を指定なされますか」

くれぐれも濫用を慎むべき学問の手法である。抜群の効果を發揮することがある反面、いちど味をおぼえると二度、三度と深みに嵌まってしまう手法なのだ。

だが、幽齋は即答したという。

「『源氏物語』である」

「歌学のことを最も多く書いている書の、ただ一冊は……」
「『源氏物語』である。どんなことでも『源氏物語』を読めば理解がつく。『源氏物語』を、百回、念入りに読めば歌学は成就するものだ」

幽齋は宮城に「なにことも、すべては『源氏物語』に」と語り、それを宮城が本阿弥光悦につたえた。

光悦の感激が洩れ、ひろがり、こうしていま、相国寺の師僧から宮本武蔵につたえられている。

語っているうちに師僧は、ことがらの重要さに気づいて感動してきたのではないかと武蔵には思われた。

本阿弥光悦——細川幽齋——『源氏物語』——

光悦の死について、武蔵は濃厚すぎる未練を抱いたというべきかもしれない。だが、光悦の死をめぐって幽齋の名が浮上してきたところに天啓があると武蔵はかんがえる。

光悦——幽齋——『源氏物語』——この三連の意味を忘れるなよ、
頭が痛くなるほどかんがえろよと、天はわしに、おっしゃっているのではないか。それがすなわち天啓ということ

光悦——幽齋——『源氏物語』——三語を一連にとらえたあと、
こたえは向こうからやってきた。

そもそもは父の無二齋からはじまったことなのだ。塚原ト伝の言葉
を幽齋がつたえていると無二齋が語ってくれた、あれがそもそも
のはじまりだ。

塚原ト伝——その剣技の素晴らしさは幼い武蔵にも想像がついた。
だが、想像を他人につたえようとしても、あのころの武蔵には不
可能だった。幼すぎたこともあるが、それだけではない。想像を他
人につたえる表現能力、語彙が決定的に不足していた。

表現するものと、表現する手段——双方が揃わなければならない

のだ。

ト伝は表現する方法をもっていた。だから幽齋につたわり、父につたわり、武蔵につたわった。

わしは、どうなのだ！

表現するものは持っている、つもりだ。

だが、それを表現する手段を持っているかと自問自答すれば、充分に持っているとはいえない。

「『源氏物語』……」

師僧が、つぶやいた。

ああ、師僧――

武蔵は、そこに師僧がいるのを忘れていた。

「お読みになりましたのか、師僧は、その『源氏物語』というのを」

「いやいや。名を知っておるばかり」

「わたくしも名は存じておるばかり。ムラサキ、なんとかという名の、女のひとが」

「紫式部……お寺で、しかも禅寺でそだてば紫式部の名を知っているだけでさえ珍妙な部類に入れられることだろう」

ましてや、『源氏物語』を読もうなどは、禅の世界ではありえぬはなし。

「幽齋は、読んでおったのだなあ！」

師僧が深い溜め息をついた。

禅の世界で『源氏物語』を読もうとすれば珍妙の部類に入れられる。ならば、武士である幽齋が、なみの武士ではない、大名の幽齋が『源氏物語』を読んだというのも、珍妙のなかの珍妙であると、そういうことになるではないか！

幽齋という武士は途方もなく高いところに住み、途轍もなく深いところでものごとをかながえておったのだ！

幽齋が住んでいた、遠い、深いところには近寄れぬかもしれないと思うと、武蔵は絶望せざるをえない。

だが、幽齋が深い、遠いところに住んでいたのを知るだけでも、

まだまし、ということではないのか。

「師僧よ。わしには、その、『源氏物語』というのは読めんのでしような」

「読めぬときまったわけでもないが、それと限ったことでもなかるうと……」

「なにが、どういふことが書いてあるのですか、その、『源氏物語』というのは」

「平安のころの、お公卿さんの男と女のはなし……らしい。男と女が、どうする、こうするといふ……」

「ははあ……」

男と女——大変なことであるような気がする。手に負えないといふ予感もする。だが紫式部という女は、そういうはなしを文章に書いたのだそうだ。

「紫式部という女が、自分のことを書いたのですか」

「よくは知らぬが、そうではあるまいな。その女が観たこと、聞いたこと、触ったこと、味わったこと、そんなものを書いたのだろうよ。いわば、彼女の頭のなか、からだのなかにあつたもの、あつたこと」

頭のなか、からだのなかにあつたもの、あつたことを書くには、頭のなか、からだのなかに、なにがあるのか、知らねばならん。知れば、それを書くのは思っているよりは容易かもしれん。

まず、知るのが先だな。わしの頭のなかに、あるもの、あること、それを知る

師僧に別れをつけ、肥前島原の戦場へゆく準備をしているうち、武蔵は、小笠原忠真という大名について憂鬱な感情をもつおのれに気づいた。

息子の伊織が忠真に仕えている。若さに似合わず異例に速い出世の道をすすんで、やがては家老の椅子にすわるのもありえぬはなし

ではない、などという噂も耳にする。

伊織の父の武蔵も、あれこれ世話になっている。江戸に滞在しているときは、なにか事がおければ小笠原の屋敷にかけこめばいいのだと、安心の糧にしている。

そういう事情があるのに、いまは、小笠原という名が憂鬱なものになってきた。

まさか、わしは、戦争へゆくのがおそろしくなったのか。戦場へ出るのが嫌さに、小笠原の名が嫌いだなどと理屈をつけておるのであるまいな

そうではないのだと、すぐに気づいて安心した。

幽斎との対比なのである。

死を前にした本阿弥光悦が、うわごとのなかで感嘆していたという細川幽斎。

幽斎のあとは忠興、忠利へ継承され、忠利が寛永九年（一一六三二）に小倉から熊本に移封された。

佐々木巖流との試合は細川家の権威によって、小倉で実現した。それだけでも感謝している。

あの試合から二十五年すぎた。細川家は依然として幽斎にゆかりの異風ぶりを発揮していると知っている。幽斎は歌と学問、忠興は茶道、忠利は剣技にうちこんでいる。

細川とくらべられるのも小笠原にとっては酷なはなしだが、それにしても、小笠原は毅然とせぬ家風だな

小笠原とのかかわりを変えなければならぬ時期がきておる、そういうことかもしれないと武蔵は思う。

宮本武蔵が島原の戦場へ出て行って、いったい、なにをやるうと
いうのか？　しかし、島原で武蔵を観られるのは楽しみではあるな

武蔵の顔を観るだけがが楽しみというのではないが、そんなことを思いつつ、渡辺茂は江戸から島原へ急いでいる。

渡辺茂は駿河で生まれて徳川家康と秀忠に仕え、一万石を知行し

ていた。家康がむかし、三組の大番組を編成したときには一組の番頭に任命された。

家康が関東に移封されてからは秀忠の臣下となり、もっぱら伏見の在番をつとめていた。

秀忠の次男の大納言忠長が駿府城の主となってから――すなわち駿河大納言忠長である――茂は忠長の臣下となった。この忠長を兄の家光が肅清したのが寛永八年（一六三一）のことだ。

主を失った渡辺茂を家光の旗本に転属させようという案も出たが、茂は辞退した。はつきりしないが、このころすでに相当の高齢に達していたらしい。

島原の一揆の噂をきいて、渡辺茂は戦場で活躍しようとかんがえた。

隠居の身のうえである、いずれかの大名の軍隊に属さなければならぬが、江戸ではむずかしかるうとかんがえた。

まずは島原の戦場にゆき、島原で、しかるべき大名の手に組み入れてもらう交渉をするほうが実現の可能性が高い。一揆勢がたてこもる城を目の前にすれば、ひとりでもふたりでも、戦士の数がふえるのは歓迎されるはずだ。

島原には西国の大名が軍隊をおくっているが、隠居の自分を入れてくれるのは、まず細川ぐらいなものだろうと見当をつけていた。

茂は柳生宗矩について剣技をならい、免許皆伝をうけている身であった。將軍の指南役である、だれでも宗矩の弟子になれるわけではない。隠居ながら宗矩の弟子の座に名をつらねていたところに、渡辺茂の信用の高さがうかがわれる。

渡辺茂がみるところ、柳生宗矩よりは宮本武蔵のほうが強い。

武蔵の強さを知人に説明するとき、茂は「碁になぞらえていえば、武蔵は宗矩に井目（せいめく）を置かせるほど強い」と表現することがある。

碁盤の目のうえに、あらかじめ九個の点をつけた井目である。桁違

いの腕の者が暮を闘わせるとき、下手は九個の井目に石を置くことがゆるされる。そうしなければ勝負にならないからだ。

茂が武蔵と闘ったわけではないし、宗矩と武蔵が試合をしたわけでもない。だが、宗矩の弟子として茂は、武蔵の剣がどれほど強いのか、機会があるたびに観察していたにちがいない。

その結果、武蔵は宗矩に井目を置かせるほど強いという結論に達したのだ。宗矩の弟子の渡辺茂の評価である、信用に値する。

渡辺茂の関心は細川忠利にも向けられていた。忠利が剣術にうちこんでいる——それは殿様の遊びの域を超えていた——のを知っているからだ、それだけではない。

秀忠の養女のひとり、千代姫が細川忠利の妻だ。

この千代姫は、じつは小笠原忠真の妹であった。小笠原の娘の千代姫が秀忠の養女になり、そのうえで忠利の妻として嫁いだとき、渡辺は千代姫のお世話をしたのではなかつうか。

千代姫は忠真の妹だが、じつは徳川家康の曾孫である。千代姫の母は徳川信康の娘、信康はもちろん家康の長男である。千代姫が江戸から豊前へ嫁いでいったのは慶長十四年の三月のこと、武蔵は二十七歳であった。

渡辺茂の生年ははっきりしないが、天正十年とする説があり、ならば慶長十四年には二十八歳、はたらきざかりであった。

將軍の師、そしてわしの師でもある柳生宗矩に井目を置かせるほど強い武蔵が、わざわざ島原の戦場に出てゆく。キシタンの一揆というものは、いかに武蔵の剣技をもつてしても始末におえぬものを、武蔵は知らんのか？

知らぬはずがない。それなのに武蔵は、吉原で派手な祝賀の宴会をやつてまで島原に出ていった。あれほどの剣士である、戦争で派手に暴れて恩賞をいただこうと、ただそれだけが目的で島原にゆくはずはない。

なぜか？

しかし渡辺茂は、ともかくも島原の戦場で武蔵の顔を観られる、

はなしもできると思うのが楽しくて、武蔵のあとから島原に出ていった。

キリシタン信徒が三万とも四万とも、熱い信仰のこころを支えに籠城している。

四方を包囲して攻める幕府軍は十二万、やすやすと鎮圧できるはずだったのが、そうはいかなかった。

屹立する城壁をよじのぼって攻撃しなければならぬが、城壁にとりついた幕府軍の兵士に、壁の上から容赦なく攻撃がかかる。

雨のように降りかかる弾丸と矢をかわして入城すると、まちかまえた一揆勢にとりかこまれて殺されてしまう。

汚らしく、残酷なだけの合戦である。

合戦とはそういうもののだが、島原の戦争の場合、農民キリシタンを主体とする多勢を少数の武士が指揮して闘う性格が濃厚であったから、それだけいつそう残酷な合戦模様になる。

攻撃の主役は大砲と銃である。弓矢の出番はいくらかあるものの、太刀も脇差しもぜんぜん役割を期待されないのである。

これでは、さすがの宮本武蔵も手を出しようない。困っておるだろうな

渡辺茂の錯覚であった。

武蔵と伊織は小笠原勢の戦闘員ではなく、将兵の合戦の様子を観察して判定する軍監の役についていた。はやくいえば観戦者だ。小笠原の臣下の伊織が軍監役をおおせつかり、父の武蔵は軍監役の伊織の後見といった役どころといえればいいだろう。

馬は、どうか？

馬はまったく役にたたない。颯爽たる騎馬武者というものは、この島原の戦場にかぎって、目にするものがない。

馬はいる、武者はいるが、騎馬武者が闘う姿は見られない。馬はただ、地点から地点までの移動の手段にすぎない。

移動の手段にすぎない馬にのり、武装といえるほどの装備もせず

に、武蔵はこちらの陣からあちらの陣へと、悠揚せまらぬ様子で移動している。

そうだったのか。これは武蔵にやられたなあ！

武蔵の意図がわかって、渡辺茂は苦笑せざるをえない。

武蔵は戦闘をするつもりで島原にきたのではなかった。派手で、しかも異様な雰囲気を見せつけようというのが武蔵の計算であったのだ。

五十四歳、決して若くはないのに、ちからが漲っていると思わせる。ふだんは陣幕のなかに控えているが、ときとして表に顔を出す大名たちのだれよりも武蔵は颯爽として、ちから強い。

島原にきて二、三日がすぎたとき、渡辺茂は、自分がなにをすればいいのか、悟った。

武蔵のことを、大名たちに吹聴してやることだ。わしの名も、それくらいの役には立つぞ

「あれが宮本武蔵、二刀流。ご存じではござろうが」

「そういう、あなたは？」

「上さまの剣術指南、柳生宗矩の弟子、渡辺茂」

「その柳生宗矩と、あの宮本武蔵と、強いのは、どちら……？」

「宗矩は、おそれおおくも上さまの師でいらっしゃる。浪人の武蔵と比較するのは失礼このうえない」

比較するのは失礼といいながら、じつは武蔵のほうが強い、わしはよく知っているとほのめかす。

武蔵の狙いが細川忠利だと、渡辺にはわかっている。忠利ひとりに集中するのはまずいから、あれこれの大名に接近する。だが、狙いをつけているのは細川忠利なのだ。

茂は細川家の軍勢の一郭に地位をしめ、若くはないから安全な場所ではたらし、機会をみつけて忠利に拝謁した。

「越中守（わちゅうのかみ）さま……」

「ひさしぶり。その節は世話になった」

よもやまのはなしから剣技に話題がうつると、茂の立場が優位になる。

忠利の目の前にいるのは一介の隠居の渡辺茂だが、茂のうしろには柳生宗矩が、宗矩のうしろには將軍家光の存在が重みを利かせているからだ。

忠利が剣に興味のない大名なら、茂としても取りつく島もない。幸いなことに、忠利は剣術が好きで、うちこんでいた。初代の幽斎が歌と国学、二代目の忠興が茶道で千利休の七哲のひとり、三代目の忠利は武芸である。天下第一をめざしているから、いわゆる殿様芸で満足する気はない。

忠利は曲馬も得意であった。走る馬の背に仁王立ちになり、茶漬け飯をさらさらと食ってみせる芸を得意にしていた。

細川忠利が渡辺茂や宮本武蔵に狙われている——適切な表現ではないが——のは、忠利と剣術の関係の二面性に由来する。

忠利は肥後熊本で五十四万石を領知する細川家の主、剣術が好きで打ちこんでいるだけではない、藩主としての見栄、誇りの側面もある。

見栄や誇りが有名な剣士を抱えたり、客分として招聘するところにあられる。茶道の名器名物をあつめるのおなじく、有名な剣士を側において飾りとし、自慢の種ともしたい。

傲慢だとか、剣術の本質から逸脱した行為であると非難する声の出るところだが、そうとばかりはいえない。

主君みずから剣術にはげむからこそ、その真摯な姿を慕って有名な剣士がやってくるのである——こういう筋立てで見れば、忠利の有名剣士好みはなんら私的な奢侈ではなく、公的な義務の遂行だとして高く評価しなければならぬ。

こんな逸話が——いや、これは事実のようだ——があった。

鎌倉時代にはじまるという、二階堂流平法なる兵法があった。一

文字、八文字、十文字の三種の伝があり、一・八・十の三字をあわせると「平」の字になるから平法と称したという伝説がある。初代は中条流にまなんで二階堂流をおこしたとも語られる。

それからまた、平法は「タイラグル法」と読み、邪悪なものごとの平定を主眼とするとの説もあつた。

二階堂流平法の何代目かを松山主水(もんど)といつた。主水は江戸に出て、芝の増上寺のお坊さんの紹介で細川の若殿さまの忠利の剣の指南役として仕えることになった。寛永六年（一六二九）か、それよりも前のことのようなから、細川家はまだ小倉の城主、忠興が主であつた。

松山主水は小倉で忠利に拝調し、召し抱えられて指南役になつたようだ。

この年の閏二月、江戸にいた忠興から、おなじく在江戸の忠利のもとへ書簡がおくられた。

「小倉で松山という剣士を抱えたときいた。こちらに呼びよせ、小姓どもに稽古させてやりたい。小倉の留守居にもうしつけ、手配してくれ」

主水はこの年の春、江戸へ出ていって、江戸詰めの家来に剣術を教えることになった。このころ忠興は隠居し、忠利が細川家の三代目の主となつていた。

隠居の忠興は松山主水の剣技を観て、高く評価した。もともとは忠利の眼鏡にかなつて抱えられた主水であり、その忠利が当主になつたからには主水は忠利の臣下、指南役であつて忠興とは一線を画すべき立場なのだが、忠興は頓着しない。

「主水の小太刀の技が見事であるとの、おまえの意見はもつともである」

「柳生流の剣士が主水と試合をすると仮定する。主水の竹刀は相手の顔にあたり、主水は相手の竹刀のかすりをうける結果になろう。その、かすりをうけるのが、まことによろしいのである」

「他流をならう時間があるなら、主水と稽古するほうがよほどまし

である」

忠興による、手放しの松山主水礼讃の言葉が息子の忠利に送りつけられる。忠興の主水礼讃の裏には、いつまでも主水を手元に置きたい、忠利のところには返したくない、そんな気持ちを感じられるのである。

寛永九年、細川家の熊本移封が命令された。熊本城主の加藤忠広が「狂気」を理由に改易され、そのあとへ細川家が、細川家のあとの小倉には明石から小笠原家がやってくる。

細川忠利と忠興に就封帰国の許可が出た。父と子は前後して新領地の熊本へ向かい、双方の臣下がおなじ旅宿に泊まりあわせ、おなじ舟にのりあわせることもあった。

おなじ舟のなかで双方の臣下の口論が高じて喧嘩になった。松山主水が下駄をふりかざして大活躍、忠興づきの臣下をひとりのこらず海に放りこんだという、勇ましいといえはいえるが、乱暴きわまらないはなしものこっている。

忠利の最初の熊本滞在は寛永九年の十月からほぼ一年である。このあいだに松山主水から忠利へ、二階堂流平法の秘伝三法が伝授されたといわれる。

主水と忠利が一室にこもり、竹刀を交わすはげしい息づかいだけが外に洩れてきこえていた。一文字、八文字、十文字の三法のほかに、「心の一法」の秘伝がある。忠利は「心の一法」も伝授していただきたいと願ったのだが、それはた日をあらためて伝授されることになった。

だれも近づいてはならぬと厳命された一室だが、忠利は、部屋の外に不審な気配を察して、怒鳴った。

「求馬(もめ)じゃな、出てこい！」

まだ十五歳にもならぬ小姓の寺尾求馬があらわれ、平伏する。

「だれであろうと近づいてはならぬと、あれほど強く……」

「おそれいます。ではありませんが、松山主水は新参者、いかに殿

の師でありまして油断はなりません。御説（ごい）に背くとは重々承知のうえで……」

お気に障りましたならば、いまずぐお手討ちなされても不平はございませぬ——求馬の真剣な顔であった。

隠居の忠興は、隠居料として八代（やぶら）の城と土地をあたえられた。

息子の忠利に甘く見られてたまるものかという気があり、松山主水を奪い合うだけの覇気はうしなわれていない。

寛永十二年（一六三五）十月、松山主水は熊本城下の宿舎で寝ていたところを襲われ、死んだ。主水を斬ったのは莊林十兵衛といって、八代の忠興づきの臣下であった。

それから二年して島原にキリシタン一揆がおこり、宮本武蔵と渡辺茂が江戸から出陣して行って細川忠利に接近を図っている。

松山主水が不慮の死をとげたのを、渡辺茂は知っているはずだ。つまり、目の前にいる忠利は、せつかく手に入れ、気に入っていた剣術指南の主水をうしなって手元が寂しい感じになっている——ということも知っていたはずだ。

松山主水よりも上等、知名度も高い武蔵を推薦すれば、失礼ながら越中守さまは……

「小笠原忠真の臣下の宮本伊織、その父の武蔵は二刀の使い手として勇名を馳せております」

「二刀……大小を両方ともつかうのか？」

「御意」

「観たいものだな」

渡辺茂の思惑は的中した。

「お逢いに、なられますか」

「と……」

「こちらに参って、小笠原さまの軍監をつとめております」

「武蔵という剣士は、ここに、この戦場に来て、おるのか！」

（第18章 終）

島原の陣のあと、宮本伊織は小笠原家の家老に昇進した。

父の武蔵は依然として小笠原家の客分だが、居心地はますます良い。

小笠原忠真にたいする武蔵の憂鬱な感じは消えないが、それと、居心地の良さは別だ。

小笠原家から細川家へ、客分の身分のまま移籍するのが遅れたに ついてはいろいろ理由があったはずだが、小笠原家の居心地が良かったのが一番の理由ではなかったか。

武蔵をむかえる細川家に、支障が生じていたのはたしかだ。細川 忠利の健康が思わしくないのである。

天草・島原の乱がおこったとき、忠利は江戸に参観していた。し きりに苦痛を訴え、侍医の診察を受けて、季候の温暖な鎌倉へ転地 療養したこともあった。寝汗がひどかったというから、肺臓に障害 が生じたのか。

天草・島原に領地を接する大名のうち、細川忠利は最大規模であ った。それだけに將軍家光から期待されることも厚く、忠利もまた 期待にこたえようと奮闘した。

江戸から島原にかけつけると、時をおかずに鎮圧作戦を開始した のは細川勢であった。

鎮圧軍の総勢を代表するのはだれか、となれば、衆目の一致する のは細川だが、おなじ九州勢の黒田家が反撥する。

細川と黒田が意地をはりあって争うのは鎮圧作戦の成否にかかわ る。その点については家光もこころえていた。忠利が江戸を発つと きに、わざわざ、

「黒田と衝突せぬよう、とくに心がけてくれよ」

念をおしたほどであった。

將軍から期待されている昂(たがり)りと、諸大名とくに黒田家と の軋轢を避けなければならないという心労がかさなって、忠利の病

状は深刻なところへすすんでいたのではないか。これが武蔵の熊本招聘を遅らせたと思われる。

それから三年、忠利の症状が快復の兆しをみせたのであろう、武蔵と細川家の内々の交渉がすすみ、武蔵から細川家に口上書が提出された。

細川家の岩間六兵衛から、「ご身上のことにつき、お訊ねいたした諸件があります」といつてきた。そこで武蔵は、口上ではもうしかねるゆえ、書状をさしあげるとこたえ、そのとおりに書状を提出した。書状の日付は寛永十七年（一六四〇）二月、宮本武蔵は五十七歳になった。

武蔵の口上書の主要な点は、つぎのとおりである。

「これまで正式にお仕えいたした家はありません」

「もはや老年、そのうえに病気がちでありますゆえ、ご当家への仕官は望みませぬ」

「熊本で逗留してはどうかとの仰せをいただきますれば、そのとおりにいたします」

「越中守さま（忠利）が戦争にお出かけなさるときには、相応の武器をたずさえ、乗り換えの馬を用意してお供いたしたく存じます」

「妻はなく、老齢の身であります。居宅や家財についてはなんの望みもありません」

「戦場に出た経験は六度です。そのうち四度までは、わたくしの前に出て闘った者はありません。これについてご不審があれば、何人もの証言を提出いたします。ただし、このことをもうすのは待遇を厚くしていただきたいからでは、ございませぬ」

「合戦の性格によって異なる武具の操作法を教授いたしたく存じます」

「お国における政治の在り方について意見をもうしあげる用意がございます」

「以上のことがらについては、若年から研鑽を積み、鍛練してまい

りました。お訊ねでございますから、おこたえもうしあげました」
武蔵の身上書は坂崎内膳をへて上申され、この年の八月から武蔵は細川忠利の客分の身として熊本に居住することになった。武蔵がうける報酬は十七人扶持に現米三百石、身分は大組頭の格、熊本郊外の千葉城跡に屋敷をあたえられた。

武蔵が熊本城下に姿を見せた。

宮本武蔵は異様である——渡辺茂の口からそれとなく通じてあつたはずだが、目の前にあらわれたのは予想をこえて雄々しく、荒々しく、かつ、汚らしい風貌である。

「素足だ！」

「臭いぞ。この奇妙な匂いはなにが匂うのかと思つたが、あの、新しく殿さまの指南役になる宮本武蔵という剣士だ」

「からだの臭い剣士が、お殿さまの指南役とは！」

まえもつてつたえられた武蔵にかんする風評のうちに、

「お大名でも贅沢とされるピロードを、それも裏と表の両面に使つた羽織を着ておるそつだ」

「ピロードを……！」

ピロードの羽織をまとつた剣士である、なんとも贅沢な衣装を観られると期待していた面々は、いま、武蔵のピロードの羽織の秘密を知つた。

「ピロードの羽織の、その下に、なにを着ていると思うかな？」

「さあ……」

一度も洗つたことのない着物を無造作に着ている。洗わないから、染め色が褪色して醜くなっている。それを隠すための、思いきつて贅沢なピロードの羽織であつた。

「弥四郎を召せ」

細川忠利が指令を發した。

氏井弥四郎は江戸の柳生宗矩の臣下で、かつ劍術の弟子であつた。

弥四郎は「細川さまにお仕えせよ」と師に命じられ、熊本にやっ
てきていた。

忠利が弥四郎を望んでいたのか、宗矩が勝手に忠利におしつけた
のか、はっきりしたところはわからない。

剣術にうちこむ忠利に愛弟子を贈呈する名目で、じつは宗矩が細
川家の内情を探索させたのかもしれない。

將軍家光が内密に指示したのか、でなければ、宗矩が家光の意を
体して弥四郎をおくりこみ、事後承認を得たのかもしれない。

このところ、江戸では、家光と宗矩が毎月のようにとはいえない
が、じつにしばしば剣技をたたかわしている。寛永十七年（一六四

〇）四月には宗矩の別荘に家光がお成りになり、

「もう一度！」

「まだ、まだ！」

「もう一手、頼むぞ！」

日没まで剣をふるっていた。

江戸における家光と宗矩の師弟関係を熊本にもってゆくと、忠利
と弥四郎の師弟関係になる。忠利は弥四郎の正式な弟子というわけ
ではなく、弥四郎はあくまで宗矩の代理の役柄だ。忠利は松山主水
の二階堂流平法のほかに、柳生流の剣技の弟子でもあった。

忠利が弥四郎を召したのは、武蔵と弥四郎を立ち合わせてみよう
とかんがえたからだ。

ふたりをたがいに紹介したあと、忠利は重々しい表情で、告げた。
「試合のあと、たがいの剣技の批評をすることはゆるさぬぞ。よい
な」

勝敗はこの場で決してしまうから、批評をゆるすも、ゆるさぬも、
ない。忠利が命じたのは、たがいの剣技についての批評を世間で吹
聴するということだ。

君主の芸能の師の地位は神聖でなければならない。師の芸能の質
が世間の批評の対象になったり、師の地位が実力による争奪の的に
なるのは避けなければならない。神聖が損なわれるからだ。

「だれも、入れるな」

忠利の太刀持ちのほかは入室を厳禁した部屋に三人だけはいり、武蔵と弥四郎が御前試合をした。

双方が木刀をもって技を競った。三度の試合の三度とも武蔵が勝利を得た。御前の試合というので武蔵は遠慮したのであったか、三度とも、武蔵は強く打つことはなく、弥四郎の技を抑えて働かせぬようにして勝利のしるしとした。

忠利はしきりに首をかしげていたが、

「一手、試してみたい」

そういつて、武蔵に立ち合ったが、齒が立たなかった。

入室を厳禁した部屋から真つ先にあらわれた忠利の表情は、さっぱりとしていた。最後に出てきたのは弥四郎だが、かれもまた爽快な気分のものであった。

「宮本武蔵よ。これほどの技とは、思わなかった。無礼を、ゆるせ」

「おそれいます」

忠利は柳生流の免許皆伝を得ようとしていたらしいが、武蔵と立ち合ったこの日からは方針を変え、二刀流を会得する決意をかためたのである。

- 2 7 7 -

武蔵と細川家をむすびつけた事件と因縁、そして人間は複数である。どれかひとつが単独で決したわけではないが、渡辺茂の存在は欠かせない。

百の条件のうちの九十九までそろっても、渡辺茂の存在、剣技一般にかんする茂の見識がなければ武蔵と細川家はむすばれなかったはずだ。

かれ自身も柳生の弟子であった。免許印可も取っていると自分で語っている。

それにもかかわらず、同門の氏井弥四郎をおさえて、他流の武蔵を細川忠利の客分の指南役の座にのぼらせた。柳生流の名誉はもちろん、存在までも苦境に陥れかねない行為であった。

それを、なぜ、茂はやったのか？

おのれの美意識に正直でありたいと決意していたからだ。

柳生宗矩と宮本武蔵が試合をしたことはない。すくなくとも、渡辺は自分の目で観たことはない。

宗矩の剣技、これは茂が弟子として詳細に知っている。面とむかつて稽古してもらったのも一度や二度ではないはずだ。宗矩の体臭まで知っているのである。

宮本武蔵の剣技、これについて渡辺茂は試合を観たとも、観ていないとも、断言はしていない。

だが、「武蔵は宗矩に井目を置かせるほど強い」という生々しい表現の評価をかんがえれば、試合を観たと判断していいだろう。もちろん、武蔵と立ち合ったり、稽古をつけてもらった経験はないはずだ。

渡辺茂は、武蔵と宗矩の剣技を比較して優劣を判定せよと強制されたわけではない。

武蔵の剣技はこれこれ……………

わが師、宗矩の剣技はこれこれ……………

それぞれ評定をくださったあと、「武蔵は宗矩に井目を置かせるほど強い」と単純で明快な比較判定をくださった。

そのとき茂は、歓喜の想いに全身が震えたはずだ。

茂は知ってしまった。

知らなければよかったのだ、將軍の師で、わが師でもある宗矩よりも浪人の剣士の武蔵のほうが圧倒的に強いのを。

だが、茂は知ってしまった。

あともどりできないわけではない。だが、後退するには、あまりにも惜しい知覚体験なのだ。

これを美意識という。

茂はおのれの美意識に殉じる決意をかためた。決意をかためたのが島原の一揆の発生前であったのか、発生效后なのか、どちらでもかまわない。一揆発生を知り、一揆鎮圧の軍隊に加わったことで決意

はかためられたのだと思われる。

「武蔵は、わが師の宗矩よりも強うございます」
美意識の快感である。

出雲の阿国のかぶき踊りを歓迎した熱気に共通する美意識である。

だが、時代は変化した。

阿国のかぶき踊りは遊女かぶきに駆逐された。遊女かぶきは権威ある芸に変化しつつある。

江戸城ではかつて阿国かぶきも猿楽も演じられたものだが、いまや阿国かぶきは相手にもされず、猿楽はひたすら権威を飾る芸能の道をすすむ。

柳生家の剣技は將軍の指南役を世襲するにいたった。かつての吉岡家の再来かと思うひともいたろうが、これを正しい認識とはいえない。

吉岡家は染色の業のかたわら、まさに美意識の表現として剣技を磨き、教授していた。足利將軍兵法所の称号は、世間の評価をうけ入れた結果にすぎない。

柳生家にとって、徳川將軍剣術指南役はそれ自体が家業である。権威というものの最も深いところに柳生家は根を生やしている。吉岡家の位置よりもはるかに後退した地点に位置しているのが柳生家だ。

権威にむかって後退する時代の壁を、ひとりで突きやぶって顔を出しているのが宮本武蔵だ。

渡辺茂は徳川の権威のなかに身を置いている。しかし、宮本武蔵が権威の壁を突きやぶって顔を出そうとするのを手伝うことで、おのれの美意識に殉じた。

渡辺は天正十年（一五八二）に生まれた。つまり、織田信長と入れ替わるかたちでこの世に出てきて、正徳元年（一七一一）に百三十歳で死んだ。

肥前島原のキリシタン一揆鎮圧の戦争では細川家の軍勢にくわわ

つて奮闘し、鎮圧軍の総参謀の松平信綱から感状をうけた。

そのあとで唐の国にわたって三十年をすごし、帰国して諸国を徘徊していたが、江戸の大塚におちつき、護国寺のあたりに住んでいた。そのころは渡辺幸庵と号していた。

加賀藩士の杉本義隣が幸庵に接して往時の回想をひきだし、一冊の書にまとめたのが『渡辺幸庵対話』である。

幸庵の生涯の物語には虚構がふくまれているだろう。だが、「わが師の柳生宗矩よりも宮本武蔵のほうが井目も強い」と断定した、その言葉に虚構はないはずだ。

熊本で、宮本武蔵はなにをやっていたか？

くわしいことはわからないが、日をきめて登城し、きまった部屋に座して、希望する藩士に剣技にまつわる見解を述べるといったあたりがいわば公務であったのか。

竹刀をにぎつての剣技教授はそろそろ無理になってきた。武蔵は五十七歳だ。

千葉城跡にあたえられた屋敷では絵画、細工物、連歌、茶道などにうちこんでいた。

武蔵の画というと、和泉市の久保惣(くぼそう)美術館の所蔵、重要文化財指定の「枯木鳴鶉図(こけいけず)」をはじめ、水墨画の傑作が知られている。この「枯木鳴鶉図」は三河の田原藩の家老であった渡辺華山が発見して所蔵していた由緒があり、それだけでも神秘的な印象がある。

武蔵の画——これだけの技量は長い年月をかけねば養われないとみるのが常識だ。諸国を武者修行していた早いうちから描かれていたと推測されているのだが、この常識は一考を要すると思われる。

絵画をはなれて、武蔵の文章表現をかんがえてみよう。

武蔵の文章表現——書簡や手記などは別として——といえば『兵法三十五箇条』『五輪書』そして『独行道』の三点だが、三点とも晩年の数年に集中して執筆された。

ここからまず、武蔵の表現活動における短期集中の原則というか、特長というか、それを指摘しなければならぬだろう。

短期集中の原則を絵画その他の美術表現に適用すると、これもまた晩年の数年に集中して製作されたと推測するのが妥当ではなからうか。

画と文章、詩歌や手工芸——こうした分野の表現は晩年の数年、突風のように武蔵を内からつきあげた衝動であつたはずだ。

激しい衝動をもたらしたものは、なんであつたか？

わしは、観られておる。試されておる。問われている。宮本武蔵よ、おまえはいつたい、どのような人間なのか、おまえのからだ、おまえのこころのなかに、なにがあるのかと

このことを意識したからだ。

武蔵は観られていた、試されていた、問われていた。

これまでもこの傾向はあつたのだが、熊本に落ちついてから、ますます強く観られ、試され、問われるようになった。

あるとき——

噂にきいていたよりも年寄りだ。こんな年寄りを大切になさる、われらの主君のお気持ちかわからんなあ——

あるとき——

まねかれて松井興長の屋敷へ行つた。玄関の式台をあがるとき、よろよろとよろめいた。武蔵は態勢をたてなおし、袴腰に手をかけ、「よいやつ」と声を出して式台をあがった。興長の侍が「手をお貸しいたしましょうか」と声をかけたが、「いやいや。それにはおよびませぬ」といった。

それみろ、武蔵は思いのほかに老衰しておるのだ——噂は現実味をおびてくる。

ある日、城下の一丁目八百屋町に火事があつた。大騒ぎのなか、狭い町幅の屋根から屋根へ梯子を横にわたして走ってゆく音がするので、

「だれであろうか。この敏捷なひとは！」

後日、それは武蔵であるとわかって、みなは驚いた。

平生は老衰という言葉を絵にかいたようなひとなのに、危機におけるあの敏捷の秘訣はどこにある？

問う視線が武蔵に集中する。

また、あるとき――

塩田浜之助という棒術と捕手の名人から試合を挑まれた。塩田は五人扶持と十五石をもらって藩士に教授している。

双方が刀、小刀をもつての試合では、なるほど武蔵は強いだろう。だが、わしの棒術は別である。わしと勝負をせよと迫ったら、武蔵は逃げるのではあるまいか

異なる分野においても、武蔵よ、おまえは強いのかと問われたわけだ。

忠利の許可を得て、武蔵は浜之助の挑戦に応じた。武蔵は短刀、浜之助は六尺八寸の棒で対決した。

浜之助が棒を振りだそうとするより一瞬はやく、武蔵は飛びこんで浜之助に刃を当てていた。浜之助は動けない。

つぎに、浜之助に棒を振り外させ、そこへ飛びこんで刃を擬した。浜之助は動けない。

「つぎは無手。わしの間合いの中に飛びこめれば、そちらの勝ちといたそう」

浜之助は棒を捨て、捕りにかかったが、武蔵の間合いの外側で撥ね飛ばされてしまう。何度こころみても、撥ね飛ばされる。

浜之助は敗北をみとめ、武蔵の弟子になることを願った。武蔵はかれを弟子とし、「あなたは棒術を教えるのがよるしい」と激励した。武蔵の門人のなかに棒術を得意とする一団があるのは、こういういきさつがあつてのことだ。

そしてまた、あるとき――

重臣の連歌の会のあとの座談で、だれかが武蔵に、

「旗指物を付ける竿の竹が、折れてしまつて困ることがある。竿竹の良し悪しをあらかじめ鑑定する方法がありますか」

いかに武蔵でも名案はなからう。「こればかりは、その場になつてみなければ」と正直なところをうちあけ、一座の笑いの種を供するしかなからう——武蔵といえども並みの人間とおなじところもあるのだ、そういった感じの問いである。悪意はない。

「竹があるなら、ここへ」

玉名郡の名産の竹をとりよせてあつたのをもちだすと、武蔵は竹の根元をにぎつて縁側に打ちつける。

節と節のあいだで折れてしまうもの、節のところでは折れてしまうもの、いろいろあり、いくら叩いても折れぬ数本の竹を選びぬいたのである。

「これなら、折れることはありません」

奇抜でもない、名人芸でもない。だれでもかんがえつくことだが、といって、ちからのない者には不可能なことだ。

「なるほど。これほど確かな試しはありませんが、あなたのような大力でなければ所詮は無理」

その場のひとはみな、ほがらかに笑つたという。

ある年の正月三日の晩、御花畑で謡初の会があつた。一同はそつたが、会はまだ始まつていない。

上座の志水伯耆から武蔵に質問の聲がかつた。志水は大組頭の重職についている。

志水の質問は、小倉の舟島における佐々木巖流との試合で、巖流の太刀が先に武蔵の頭を撃つたという噂があるが、事實は如何であるのかというものである。

武蔵は無言で席をたち、燭台を手にして志水に近づき、前にすわつた。

「幼少のころに腫物ができ、傷痕がひどいので月代(さかき)を結う

ことならず、このように総髪にしております。もしも巖流の太刀が当たっておれば傷痕がのこっておるはず、とくとご覧ください」

志水伯耆の顔に頭をちかよせ、頭髪を掻き分け、灯火が頭を照らすように燭台をかざした。

「傷跡は見えぬ、が」

「どうか、しっかりとご検分ください」

ぐいーつと頭を近づける。

「とくと検分いたしました。傷痕は見えぬ、傷痕はない」

武蔵はしずかに元の座にもどり、髪のをなでつけて自若としていた。

一座の者はみな手に汗をにぎり、どうなることやらと案じていたが、なにごともなくおさまって、安心した。「伯耆殿の一生の失態であったな」と、その評判だけがのこった。

あるとき――

武蔵が小倉の小笠原家の客分であったころらしいが、細川忠利に誘われ、熊本へ行ったことがある。

若い侍の出迎えに会釈し、式台から客殿にあがて忠利に挨拶し、くつろいだ姿勢になった。

歓談がすすみ、忠利が武蔵にたずねた。

「当家の者のうち、あなたのお眼鏡に触れた者はおりましたかな」

「おひとり、だけ」

忠利は相好をくずした。ひとりでも武蔵の注目をひいた臣下がいる、それは主人として嬉しいことなのだ。

「だれでござるか」

「名は存じませぬが……」

そこで忠利は、ひごろから武芸に精進しているときいている臣下を数人えらんで呼び出した。

居並んだ顔ぶれを一覧したが、武蔵が深い印象をうけた侍の顔はない。

「このなかには、おりませんな」

「ご迷惑ではあるうが、館のうちを探していただけぬか」

案内され、館のうちを、ここ、かしこと探しているうちち、

「おお。ここに居られたか」

その侍の名は都甲太兵衛(とこうへい)である。武蔵は都甲を連れて忠利の前にもどる。

「これは、たしか、都甲とか……」

「都甲太兵衛でございます」

「うむ。都甲太兵衛じゃな。であるが宮本殿よ。この者の、どこが、御身のお眼鏡に触れたのであろうかな」

「都甲殿ご本人に、ひごろの武芸の覚悟のほどをおたずねなされば

……」
ところが、肝腎の都甲は、主君の前にひきだされたのを恐縮してか、口をつぐんで語ろうとしない。

「都甲殿。貴殿には武芸の覚悟がおりだと見込みをつけたから、越中守殿にお引き合わせいたしましたのだ。平生の心がけを、そのままおはなしなさればよいのじゃ」

わしの苦心を無にするのかといわんばかりの武蔵の想いは、通じた。

都甲太兵衛はしばらく瞑目していたが、やがて目をひらき、ぼつりぼつりと語ったのである。「武芸の心がけともうしても、格別のことはいませぬ」と遠慮しながら。

「据物(すえもの)の心得——わたくしはこのように名づけております」

「据物とは……」

処刑された罪人の死体を斬って刀剣の切れ味をためすことがある。その死体が据物だ。据物になったつもり、それが都甲太兵衛の武芸の心得だという。

「ひとは据物である。いつでも、どこでも斬られるもの、さように心得て、平気で討たれてやろうと心がけております」

忠利と武蔵は膝をのりだし、都甲の言葉にききいつている。

「はじめのうちは、とかく、据物の心得を忘れることが多いございました。据物じゃと思うだけで気後れすることもありましたが、あれこれと工夫するうち、忘れることも、おそれることもなくなりました。武芸につき、ひごろの心がけともうすのはこれでござる。たわいもないことをもうして、お耳のけがれにならぬかと……」

都甲太兵衛はゆるされて去った。

「お聴きになりましたか。あれこそ武道ともうすもの」

細川忠利は何度も深く、うなずいた。

武蔵はこのとき、人物鑑識の能力を問われていたのである。

好奇心の集中放火をあびて、武蔵は悟った。

わしは、語らねばならん、わしが、わしという人間を、なんと思つておるのかということ。世間のひとは、わしがどういう人間であるかよりも、わしが、なにをいうのか、なにをかんがえているのか、そちらのほうに興味があるのだ。今日という今日まで、それを知らなかった

悟ったとき、かたわらの筆と墨を見た。筆と墨がおのれを誘っているのを知った。

さあ。宮本武蔵よ、おまえはおまえ自身を描くのだ。ほかのものは要らんぞ。おまえが描いたおまえ自身、なによりもそれが大切。世間も歓迎する

鴉(もず)を描く。

鴉は枯木にとまっている。

遠くを眺望しているようだが、じつは、鴉の視線は下を覗いている。一匹の虫が、もそもそと枯木につたって登ってくるのを、気づかれぬように、凝視している。

餌が向こうからやってくる——こんな好機は滅多にあるものではない。

この鴉はわしのことだと、わしは知って描いておるのか。餌があ

がってくるのを知りながら、知らん顔をしている、ずるいという字を絵にかいたような鴝が、わしであるのか！

だが、待てよ。虫は、鴝の下のあたりに樹液の滴りの残りがあつたのを知っていて、樹液を吸おうとしてもぞもぞと登っているのかもしれない。だとすると、樹液を吸ったあとは、くるりと方向を転換して、地面に降りてゆくだろう。

鴝は当てがはずれる。馬鹿な鴝だ。

馬鹿な鴝がこのわしであるとすると、虫はだれなのか、なにものなのか。

かんがえていても仕方はない。鴝としてはキーンツと鳴くよりほかに手はなかるう。

わしが、わしのことを、なんと思つておるのか。それがいちばんよくわかるのは自画像を描くことではないか。

自画像を描く。

わしが死んでから、わしの肖像画を描く画家があるだろう。なんとも余計なことのように思うが、愚痴はいうまい、礼もいうまい。しかし、わしの肖像画の絵柄について、いささかの好みをいっておくのはゆるされるだろう。

わしの肖像画であるならば、素足でなければならぬ。馬にはのらぬ、履物は履かぬ、それが宮本武蔵であるのだから、肖像画を描くなら、これだけは本人たるわしの好みにしたがつてもらわなくてはならぬ。

とはいつても、素足では画にならぬ、とかなんとか理屈をつけて、履物を履かせる画家がないともかぎらぬ。それを防ぐ手立てはわたしにはないわけだから、せめて、宮本武蔵本人は、本人の武蔵をどのように観ていたか、手本をしめしておく意味もあつて自画像を描く必要がある。

素足の武蔵、武蔵は素足——足の下にはなににも描かぬ。地面に立っているのか、室内なのか、そういうことは素足の武蔵にとって、

重要ではない。

宙に浮いているように見える——それでよろしい。素足で生きてきたわたしには、地面も床も敷物も、区別は感じられない。

さて、描けたぞ。素足の武蔵の自画像が描けた。

願わくは後世の画家たちよ、宮本武蔵の肖像を描くならば、これを手本にして、どんな履物も履かせずにくれたまえ。

刀は一本でも二本でも、こちらとしては注文はない。

武蔵は二刀流ということになってある、一本刀の武蔵の画は世間が承知せぬだろう。二本刀をもたなければ仕方はなかるうが、武蔵は一本刀では鬪えない——このように固まるのは迷惑なのだ。

自画像——じがぞう——ジガソウ—— 自画自賛という言葉も

あつたな！

自分の画を自分で描く——

描くだけで世間には披露しない、ということはない。つまり自画像を描くのは世間に披露するのを前提としている。

はじめ、そこに躊躇するものがあつた。

しかし、臆せずに描いているうちに躊躇も恥も消えた。

見せないほうが苦痛であるとさえ、思うようになった。

見せなければ、世間のなかに、わしはいないことになる。

わしがいない——そんな馬鹿なことがあつて、たまるものか！

ああっ、出雲阿国——！

わしが京都で観た阿国のかぶき踊り、あれは阿国の、動く自画像ではなかったのか！

武蔵の手先が筆をにぎり、

「兵法の道、二天一流と号し、数年鍛練のこと、はじめて書物に顯さんと思う。時に寛永二十年十月上旬のころ、九州肥後の地、岩戸山にのぼり、天を拝し、観音を礼し、佛前にむかい、生国播磨の武士……」

書き出したのは『五輪書』である。『五輪書』とは、ほかでもな

い、文章による宮本武蔵の自画像なのだ。

『五輪書』を書きはじめてとき、いちばん大きな声でいいたいのはなにか、武蔵にはわかっていた。

「兵法とは武士の守るべき法である。将たるものは格別にこの法を実践しなければならぬが、卒たるものもこの法を知らずにはゆるされぬ」(『地の巻』冒頭)

『序の巻』につづいて、『地の巻』『水の巻』『火の巻』『風の巻』『空の巻』の五章編成だから『五輪書』を名とした。

兵法は武士の法である——『五輪書』の論法はこれにはじまり、これを軸として展開して、これにもどってくる。

武士の法は武士を存在させる

武士の法は武士に義務をあたえる

武士の法は、武士が武士の義務を遂行するにあたって必要とする権利を、武士にあたえる

武士が義務を遂行するために必要な手段は刀の所有と行使である

武士の義務とは、民が民の義務を遂行するのを保護することである

民の義務とは生産である

ここまでは理屈が、すーっと通る。

この先が、だめだ。

なぜかというところ、武士は単数ではなくて複数の存在だからだ。

慶長から元和、寛永のころ、武士および武士の家族は何人ぐらいであったか？

総人口を二千五百万人とみて二・五パーセントを掛けると六十二万五千人という数字が出てくる。

六十二万五千人の武士のうち、ひとりでも悪人や義務遂行怠慢者がいると、民の義務遂行を保護する武士の義務遂行率はゼロ、またはマイナスになる。六十二万五千分の一の減少ではすまないのだ。

義務遂行率がゼロ、またはマイナスの武士は世の阻害者である。

武士を武士として生存させている武士の法は、武士を武士として存在させることを拒否する。そのとき、武士は武士として存在できなくなる。

六十一万四千九十九人の武士は存在を否定されぬために、すなわち自衛の策として悪人や義務遂行怠慢者を征伐する。

征伐の道具が刀である。

刀の、唯一の正しい使われ方は良い武士が悪い武士を肅清する場合である——こういう理屈を纏々とのべているのが『五輪書』なのだ。

豊臣秀吉は刀狩り令と身分法（人掃い令）を発布した。これによって創造されたのが武士と民である。刀狩り令より以前にも武士や民という言葉も概念もあつたが、秀吉以後の武士と民は刀狩り令より以前のものの継承ではない。

武士とは、どういう存在なのか、武士自身も深くかんがえたことはない。戦争にあけていたからた。

学者も僧侶も、武士について考究したことはない。武士も人間であることを発見して、悦ぶにとどまった。

秀吉の刀狩り令から五十六年、武士とはなにか、なにをすべきかについての考究がおこなわれ、武士は武士の法を守らねばならない———というかたちで明確なこたえが呈示された。それが『五輪書』である。

日本には武士は存在しない。明治四年（一八七一）の廃藩置県（はぶんけん）によって、武士という階級は消えた。

だから、『五輪書』を正しく———おのれにたいする武蔵の教戒の書として———読めるひとは存在していない。

『五輪書』が正しく読まれる可能性はゼロにちかい。

ゼロではなく、ゼロに近いのは、どういうわけか———みずからを武士に擬すひと、武士になったつもりの一ひとびとがすくなくないからだ。

そういうひとびとに、あえて注文を出すすると、疑似武士のひとりではなくて、人類のひとりの立場で『五輪書』を読んでいたきたい。それが武蔵の期待にこたえることだともいえる。

さて、はなしをもどして、武蔵は『五輪書』が誤読されることを予想し、警戒し、誤読されないための手を打っていた。それが公開の原則である。武蔵の門人たちの集団——二天一流のなかに閉じこめないということだ。

最終の章の「風の巻」の最後の節で、武蔵は公開の原則を主張している。すこし長くなるが、原文を紹介しておく。

一、他流に奥、表ということ

兵法のことにおいて、いづれを奥といい、いづれを表といわん。

芸により、事にふれて極意、秘伝などといいて奥口(おくち)あれども、敵と打ち合うときの理においては、表にてたたかい、奥をもって斬るということにあらず。

わが兵法の教えようは、はじめて学ぶひとには、その技のなりよきところをさせ、ならわせ、合点のはやくゆく理を先に教え、こころの及びがたきことをば、そのひとのこころをほどくるところを見分けて、次第次第に深きところの理を後に教えるなり。

されども、大形(おかた)はそのことに対したることなどを、覚えさずるによって、奥、表というところ、なきことなり。

されば世の中に、山の奥をたずぬるに、なお奥へ行かんとおもえば、また口へ出るものなり。

なにこの道においても、奥の出合うところもあり。口を出して良きこともあり。これ、戦いの理において、何をか隠し、何をか顯(あは)さん。

しかるによって、わが道を伝うるに誓紙罰文などということを好まず。この道を学ぶひとの智力をうかがい、直なる道を教

え、兵法の五道六道の悪しきところを捨てさせ、おのずから武士の法の実の道に入り、疑いなきころになすこと、わが兵法の教えの道なり。よくよく鍛練あるべし。

秘伝や極意を大切にする流派は求心的、閉鎖的な集団になる。われわれだけが善であり正義だという独善にかたまり、集団の外を悪と不義の世界として排除する姿勢が強くなる。

求心敵で閉鎖的な集団のなかには悪や不義は存在できない、つまり敵は存在できない。

敵が存在できない世界では 武士の法 としての兵法は無効になる。

武蔵は、わが流派では秘伝や極意などは否定するとして、公開の原則をつらぬこうとした。

(第19章 終)

天草・島原にキリシタン信徒の一揆がおこるまえから、細川忠利のからだの具合は良くなかった。

西国大名の代表格としての見栄もあり、一揆鎮圧に精力をつかって、病状はますます悪化した。

一揆を鎮圧したあと江戸に参観し、將軍家光の鷹狩に随従した。臣下としての義務だから仕方はないが、からだのためには良くなかったろう。そのときに頂いた鷹狩の鶴の肉も効き目はなかったようだ。

寛永十八年（一六四一）の春、またまた参観の時がやってきた。

だが、もはや忠利は重症であった。

参観を延期させてもらう急使が江戸に向かう、將軍家光の病氣見舞いとして半井以策という針医が京都から派遣される、松平伊豆守・阿部豊後守・阿部对馬守の老中三人連署の見舞い状が江戸からとどくという次第で、幕府の扱いは鄭重をきわめたが、病状は快復しない。

三月十七日、熊本の花畑の館で細川忠利は亡くなった。五十六歳であった。

嫡子の光尚は忠利の夫人、千代姫から生まれた。千代姫は小笠原忠真の娘で、二代將軍秀忠の養女として細川家に嫁いできた。千代姫の母は家康の長男、岡崎三郎信康の娘である。光尚は家康の血をひいている。

光尚はもちろん江戸にいたが、父の病状が篤いと知らされ、見舞いのための帰国を申請した。すぐに許可が出て出発したが、浜松で父の死をつけられ、江戸にひきかえして父の遺領の相続をゆるされた。光尚は元和元年の生まれ、二十四歳。

忠利が亡くなった寛永十八年、宮本武蔵は五十八歳になった。

養子の伊織は小笠原家の家老をつとめ、忠真の恩寵はますます厚

い。もうひとりの養子の造酒之助は姫路城主の本多忠刻に仕えていたが、わけあって致仕し、忠刻が亡くなったときに殉死した。寛永三年のことだという。

武蔵の待遇は高いとはいえないが、侍を六人したがえ、槍持、挟箱持ち、馬の口取りをひきつれて登城する。登城の姿は堂々たるものだが、武蔵は客分だから、藩士一般の、どられくらいの地位に相当するのかわかった比較は意味がない。

忠利は武蔵に、剣の師として尊敬を寄せていた。熊本城下では周知のことである、忠利の臣下一般もまた武蔵を尊敬するに吝かではない。

二天一流の門人としては寺尾孫之丞勝信と弟の寺尾求馬助信行が筆頭格である。兄の勝信は二百石、弟の信行は小姓出身で、鉄砲方となり、はじめは二十挺を、のちには三十挺の鉄砲を担当し、知行も三百石をうけた。

寺尾兄弟につぐ弟子としては古橋惣左衛門の名が知られている。能筆家として知られ、忠興の代から右筆役をつとめて知行二百石であったそうだ。

細川家の菩提寺は泰勝寺と言い、禅宗の寺だ。泰勝寺の開山の大淵和尚が武蔵の相談相手であり、学問の師でもあったようだ。

沢村大学助吉重と宇衛門友好の親子も武蔵の友人であった。武蔵が『五輪書』を執筆したのは郊外の岩殿山豊巖堂である。豊巖堂を武蔵に紹介したのが沢村吉重であったといわれている。

武蔵の晩年の日々は多くの友人知己、そして門人にかこまれて平穩にすぎていたが、忠利の死は早すぎた。

大名の客分という地位は不安定なものである。藩の組織の一員としての明確な地位も役割もない。

忠利の死によって武蔵は契約——このころはまだ契約という言葉はなかったが——を解除されるかもしれない。いや、契約の原則を嚴重に適用すれば、忠利の死の瞬間に契約が解除されたとしても不平はいえない。

忠利は、このあたりを憂慮していたと思われる。死を避けられな
いと悟ったとき、自分が亡きあとでも細川家における武蔵の地位が
いつまでも安泰であるようにと、策を練った気配がある。

枕頭に武蔵をまねき、死の近いのを悟ったとうちあけ、
「わしのために、細川家のために、兵法にかんする師の見解をまと
めて、一冊の書としていただけぬか」

弟子が師に依頼する形式をとった。こうすれば、一冊の書をまと
める仕事がつぎの主君の光尚の代まで継承される。遺言のかたちを
とらぬ遺言でもある。

「たしかに、おひきうけいたしました。こゆるりと治療なされて

「やりたいことが、いろいろある。このままでおわるつもりはない」

こうして執筆にとりかかったのが『兵法三十五箇条』である。執
筆を命じた細川忠利に奉呈する体裁をとっており、末文の日付は寛
永十八年（一六四一）二月。

これから二年、六十歳になった武蔵は『五輪書』の執筆にとりか
かる。『兵法三十五箇条』にくらべると『五輪書』は相当の長文な
のだが、後者は前者の詳細解説の内容になっており、世間全般に公
開する意向を鮮明にした結果でもある。

宮本武蔵といえば二刀の印象が強烈だ。じっさいは、どうなのか。

『兵法三十五箇条』の冒頭をよむと、武蔵が意識して二刀を鍛練
したのは「数年」だと書いてある。これは「長年」と解釈すべきも
のと思われ、やはり、大小の二刀をつかうのが武蔵の剣技の骨格だ
とかがえていい。

二刀をつかうことの意義が、なにやら神秘的なもののように解釈
される傾向がある。だが武蔵にいわせると、二刀をつかうのはじつ
に現実的な課題から出発していた。

「左の手に格別の意味があるわけではない。太刀を片手でつかえる
ように鍛練するのが主眼である」

右でも左でも、刀を片手でつかえれば、右手だけ、あるいは左右の二本の手でしかつかえない剣士よりははるかに有利である。

合戦の場や馬上、川に沿ったところ、細い道、石原などで闘っているとき、武器を右手でつかえない場合がある。そのとき、左手でつかえるようにするのが目的だ。

どのように太刀を持つのが正しいのか——初歩のそのまた初歩の技について噛んで含めるようにいう。これが武蔵の剣術理論の特長だといえるだろう。

「親指と人指し指で太刀をうけ、中指・薬指・小指を締めて持つ」
「太刀の持ち方に『生』と『死』との別がある。構えるとき、受けるとき、留まるときに『斬るために太刀を持っているのだ』ということをお忘れ、ぎゅーっと膠着する持ち方、これは『死』の持ち方である」

「いつもおなじように太刀を持ち、太刀も手もすーっと出るように、かたまらず、斬りやすいように軟らかに持つ、これが『生』の持ち方である。手首はからまない、肱は伸びすぎず、屈みすぎず、腕の上筋は弱く、下筋を強くして釣り合うように持つのがよい」

型に嵌まらない、膠着しない——武蔵の剣術理論はこれに尽きている。

たとえば、たいていのひとは、竹刀や木刀を持つと構えるのである。生まれてはじめて木刀を持つというひとでも、構える。頭のなかに「構えなさい」という号令がかかったかのように、構える。

もちろん、これはよくないのである。
そこで武蔵は「有構無構」という言葉を発明した。「構えあつて構えなし」と読ませるつもりだから、なにやら神秘的な感じが出てくるのも狙っているのだろう。

「太刀を持つのは構えることだが、『構える』という気があると、太刀もからだも膠着してしまって、よくない。敵の出方、その場の状況に応じて太刀の持ち方は変動しなければならぬ。刀をにぎった手で敵に攻め寄せるのではなく、肩で攻め寄ってゆく気になれば、

『構える』という意識はなくなる」

細川忠利が武蔵の『兵法三十五箇条』を読んだかどうか、わからない。末尾の日付は寛永十八年の「二月吉日」、忠利が息をひきとったのは三月十七日である、まにあわなかったのではないか。

忠利にたいして武蔵は、二天一流の剣技の理論書をまとめることを約束した。

約束は果たされたが、忠利のご覧に供せられなかった——かもしれない——ことをかんがえると、『三十五箇条』は宙に浮いたかたちになった、そういわなければならぬのではなからうか。

わしは、どうすればいいのか

武蔵の頭を占めていたのは、宙に浮いたかたちの『三十五箇条』の、その後のことである。このままでは済まない気が強くなってきた。

『三十五箇条』の中身を敷衍して、さらに詳細な理論書を書きあげ、細川忠利ひとりではなく、広い世間にたいして公開する、その方向にゆくべきではないかという気持ちですこしずつ形をととのえてきた。

武蔵が『三十五箇条』の拡大再生をかんがえ、構想を詰めているころ、熊本城下では、細川忠利に殉じて切腹する臣下の数がふえてきた。

忠利が死んだ日から四月二十八日——忠利の遺骸を茶毘(だび)に付した日である——のあいだに十人あまりの臣下が殉死した。

忠利が可愛がっていた二羽の鷹、有明と明石という名の鷹が井戸に飛びこんで水死してしまった。熊本城下では、「お鷹も殉死した」との噂でもちきりになった。忠利の茶毘の日に、茶毘所の岫雲院の井戸に飛びこんだのだから、殉死のほかのなにものでもない、という雰囲気である。

殉死者はその後も数がふえて、十九名に達した。十八名は忠利の生前に許可をうけて殉死し、のこる一名は許可をねがったけれども

許可がなく、許可なしに殉死した阿部通信である。

殉死については、おのずから掟のようなものが出来ている。

主君の生前のうちから殉死を願ひ、許可された者の殉死が正式な殉死である。ここで「正式な」というのは、殉死者は尊敬され、遺族にたいしては新しい主君から格別の恩恵がほどこされるといふきたりである。嫡子の相続が順調にゆるされるのはもちろんだ。

許可なくして殉死する臣下もあるが、これは罪とはされない。世間がすでに「あのお方が殉死なさるのは当然である」と許しているからだ。

しかし、許可もない、殉死して当然といわれるほど濃厚な主従の関係でもない、そういう臣下が殉死すると世評は冷たい。新しい主君の厚遇はうけられないばかりか、悪くすると冷遇され、居たたまれなくなつて、致仕のやむなきにいたることもある。

許可をうけて殉死した士の遺族は鄭重な扱いをうけた。嫡子はすべて父の家督を相続することをゆるされ、祖父や祖母、母には特別の扶持があたえられた。

嫡子があまりにも幼少の場合は相続までが難航するのがふつうだが、こんどは難航どころか、痒いところに手のとどくような鄭重でもって相続がゆるされた。

だが、許可なしに殉死した阿部通信の遺族について、新しい光尚の細川家の扱いには刺々(とげとげ)しいものがあつた。通信の嫡子の権兵衛には父の家督の相続がゆるされなかつたのだ。

阿部通信は忠利の側に仕えて、はじめは千百石あまり、天草・島原の戦争では三人の息子が軍功をあげ、それぞれ二百石の新しい知行をうけた。父と子の知行をあわせると千八百石をこえる。阿部一族は身分も地位も高い家柄であつた。

阿部通信も忠利に殉死を願ひ、ゆるされているものと世間は思ひこんでいた。本人ももちろん殉死を願っていたのである。

だが、忠利はゆるさなかつた。ゆるさぬ理由はあきらかにされて

いない。はつきりとした口調で、「生きのこって光尚に奉公してくれ」というばかりであった。

忠利が死んでしばらくすると、城下における通信の評判が芳しくないものになった。殉死の許可が出ぬのをさいわいに、のうのうと生きつづけるつもりなのだ、と。

通信は切腹して、忠利の跡を追った。

通信の嫡子の権兵衛は父の家督相続をゆるされなかった。千百石あまりの知行は分割され、権兵衛の弟たちに配分された。

阿部一族としての知行に増減はないが、本家たるべき権兵衛は島原戦争の恩賞の二百石だけの、小身になってしまった。

寛永十九年三月十七日、細川忠利の一周忌が妙解院のそばの向陽院でおこなわれた。忠利の法号は妙解院殿臺雲宗伍居士、菩提寺の妙解院はまだ完成していないから、ちかくの向陽院に位牌をうつし、ての法要である。

忠利の霊も、殉死した十九名の霊も手厚く追悼された。

だが、阿部権兵衛は異様な行動をとったのである。妙解院殿の位牌のまえに進んで焼香したあと、脇差しの小柄を抜き、おのれの鬘をぶつとりと切って忠利の位牌のまえに供えた。

権兵衛は身柄を拘束され、異常な行動について釈明をもとめられた。

「乱心ではござらぬ。亡き父と同様の奉公をいたしたいと願っていたが、お上は、わしには奉公のちからが無いと判断なされ、父の知行を分割して弟たちにおあたえになった。不肖の権兵衛、亡き殿にも、ご当主にも、父にたいしても面目ない。さきほど故殿の霊に焼香して、ふつと、武士を棄てる気になったのです」

光尚は権兵衛を押し込めの処分にした。

弟たちや親族は、忠利の法要のために京都の大徳寺から下向していた天佑和尚に権兵衛助命の斡旋を依頼した。

天佑和尚は斡旋を承知してくれたが、光尚は承知しなかった。天

佑和尚が京都へ去るとすぐに、光尚は権兵衛を処刑した。切腹でも斬罪でもなく、白昼の縛り首という無惨な処刑であった。

権兵衛の弟たちや親族は、権兵衛にたいする主君の措置にたいして堂々と異議を唱えたのである。

そして、権兵衛の屋敷にたてこもり、主君の討伐軍と闘って全滅する覚悟をきめた。

権兵衛の表門から攻める軍勢は竹内数馬長政が指揮をとり、裏門の勢は高見権右衛門重政が指揮をする。

四月二十一日、阿部一族の老人や女は自害し、幼い者は刺し殺し、庭に穴を掘って死体を埋めて主君の軍勢を待った。

明け方、表と裏の門から討つ手の軍勢がなだれこみ、斬りあいになった。阿部一族の全員が討ち死にをした。

討つ手の勢のうちでは表門の指揮者の竹内数馬や家来が戦死した。

討つ手側の畑十兵衛は臆病者といわれていた。この日も、阿部の屋敷の裏庭に小屋に火をつけて焼くのを手伝っただけで、合戦の場には近づかなかった。

十兵衛が討つ手の一員に任命されたとき、宮本武蔵が声をかけた。「冥加の至りでありますな。存分にはたらいて手柄をあげなされ」

武蔵は十兵衛の背中をばーんと叩いた。

十兵衛はたちまち色をうしない、袴の紐の緩んでいたのを締めようとしたが、手が震えてどうにもならなかったそうだ。

宮本武蔵が畑十兵衛の背中を叩いて激励したというのは、森鷗外が大正二年（一九一三）雑誌『中央公論』に発表した小説『阿部一族』のなかで書いていることだ。

阿部一族がたてこもった屋敷のとなりに柄本又七郎が住んでいた。又七郎は阿部一族とは親しかった。権兵衛が縛り首になり、一族がとなりの屋敷にたてこもってからも、ひそかに妻を見舞いにやっ

たほどである。

又七郎は討つ手の勢に任命されていない。藩庁からは、当日は手だしをしてはならぬ、火の用心は怠るなど指示されている。

だが、主君の軍勢がとなりの屋敷を征伐するというのに、なにもせずにゆくものかと、その前夜、境目の竹垣の結びを切りはなしておいて夜のあけるのを待った。

討伐隊が突入したのと同時に又七郎は隣家に攻めこみ、阿部一族の主の弥五兵衛の胸を槍を突き刺して、切腹させた。

「手だしをするな」の指示に反した又七郎だが、お咎めはなく、かえって表彰をうけたという。鷗外は、柄本又七郎の回想談『阿部茶事談』によって小説『阿部一族』を書いたといわれる。

武蔵が畑十兵衛の背中をぼーんと打ったのは祝賀と激励のつもりだったのか、どうか。

「冥加の至り」といったのだから一応は祝賀の形式になっているけれども、状況をかんがえると、心底からの祝賀や激励とは思われない。

畑十兵衛が臆病者と評判されているのは武蔵も知っていたはずだ。臆病者として勇名な十兵衛に、阿部一族を殲滅せよと命令がくだった。気の毒で顔を見られない、十兵衛の側を避けるようにして通るのが常識人のやりかたであるはずだ。もちろん武蔵は常識人である。

ところが——鷗外の語るところによれば——武蔵は十兵衛の背中をぼーんと打って、「冥加の至りでありますな」といったのだという。

武蔵は十兵衛がおかれた状況を滑稽に思い、同情をよせたのだと思う。

忠利の死からはじまった殉死のおおさわぎを、武蔵は苦々しい想い、滑稽な想いで眺めていたにちがいない。

殉死——主従のつながりの華とさえいわれるが、武蔵は主従のつながりに係わったことがない。殉死の意味は理解できるけれども、自分をその場においてかんがえたことはないのだ。

奇妙なものだなあと思っているうちに、目の前で殉死、殉死のおさわぎがもちあがった。

小刀が腹に突き刺さり、太刀が頸を斬り落としてゆく。ひとつ、また、ひとつ。

ちがう！ そのように刀をつかつてはならんのだ

武士とは、刀を正しくつかうからこそ武士として生きられる。主君に殉じるのだとか、この世ばかりか、あの世までお供をするのだとか、言葉をいくら飾っても、剣を自分の腹に突き刺したり、介錯という名で頸を斬るのは正しい剣の使い方ではない。

そのように剣をつかえば、武士として生きられもせず、死にもせず

教えてやろうとこころみた——かもしれないが——熊本城下は沸騰している、武蔵が教えてやろうとしても、

理屈は、要らぬ！

問答無用と、蹴散らされてしまいそうな気配であった。だまっっているしかないと、背をすくめる気持ちでいるうち、一周忌の席で阿部権兵衛が髻を切って忠利の霊前に供え、召し捕られて縛り首になった。

こういう混乱では、二天一流など、なんの役にもたたない。弟子たちが騒ぎに巻きこまれないでくれさえすればと祈るうちに、阿部一族が光尚に公然と楯突いて屋敷にたてこもった。

阿部一族は全滅する覚悟をきめた。ここでもまた、剣は正しくない使われ方をするにちがいないと思うと、居ても立ってもいられない気がしてくる。

理由はなんであれ、主が臣を征伐するのに剣をつかつてはならん。こういう場であつかわれても、剣は悦ばないのだ。ただ、汚れるだけである。

武士として正しく生きるか、どうか、が重大なのである。

臣下として正しいか、どうか、などということはたいした意味もない、価値もない。

であるのに、ここでは、主従のことが優先されている。いや、主従のつながりのほかに、なんにもないかのようである。

こんなところで、剣をつかってもらいたくない

ますます苦い想いをしていると、あの、臆病で有名な畑十兵衛が阿部一族殲滅作戦の一員として出動を命じられたという。

滑稽であり、哀しくもある。

全滅を覚悟してたてこもっている阿部一族を攻める、そこでつかわれる剣は輝くことができない。

十兵衛はなによりもまず、正しい剣の使い方をまなばなければならぬ。だが、臣下である境遇がそのことを不可能ならしめる。

畑十兵衛の背中に悲哀の風が吹いている。この男は、武士として正しく生きようとしても、まにあわないのだ。

正しい従者として生きられても、正しい武士として生きられない穴の埋め合わせにはならない。

だが、畑氏よ、十兵衛殿よ、あなたはもうまにあわないのだ。

十兵衛の背中をぼーんと打って、

従者として、がんばっていればよろしいのですぞ！

十兵衛の背中を打った手は、つぎの瞬間、頬をつたわる涙を拭いていた——というふうには森鷗外は書いてもよかったのではないかと思われるが、そこにはそこで、鷗外の間感というものがある。

細川忠利が亡くなり、それだけであつたならば『五輪書』は書かれなかつた可能性が大である。

いや、『五輪書』は書かれたかもしれないが、第一章の『地の巻』の冒頭が「兵法は武家の法なり」とは書かれなかつたはずだ。

忠利の死につづく十九名の殉死、阿部一族のたてこもり、阿部一族殲滅作戦という一連のさわぎのなかに、武蔵は 武士 が 主従

のつながり のなかに埋没している現実を知った。

忠利に献じた『兵法三十五箇条』では、この現実には立ち向かうのは不可能だと悟った。『三十五箇条』の段階でこの世から消えるのは、剣技の理論家としての矜持がゆるさないのである。

書き直そう！

五十八歳から五十九歳を通過して六十歳になろうとしている。この歳で、大作『五輪書』にとりかかれる武蔵は幸運であった。

畑十兵衛の無惨、滑稽、悲哀な姿を目にしたときの衝撃を、わしの『兵法三十五箇条』はあの畑十兵衛には役にたたぬわが課題としてうけとめたから、幸運をひきこむことができた。幸運が向こうから歩いてやってきたわけではない。

正保二年（一六四五）になって、武蔵は死が近いのを悟った。『五輪書』執筆の場としていた靈巖堂にゆくのが辛くなり、そのうちに行けなくなった。

幸いなことに、『五輪書』は完成しかかっていたようだ。

死の近いのを悟ったとき、『五輪書』の扱いについて、武蔵の心境に変化が生じたようである。

新しい主君の光尚——藩庁というべきか——は武蔵の処遇をきめかねていたようだ。

先代の忠利が個人として契約した指南役であるから、代替わりしたいま、契約を解除してもかまわない。

いや、忠利の死によって契約は実質的に解除されているといってもいいが、だからといって掌をかえすように解除するのは憚られるのである。剣士として評価の高い武蔵をいきなり放逐すると、新しい細川家は武芸に熱を入れる姿勢はないらしいと冷評されるおそれもある。

だが、処遇の策が未決なのは、藩庁が武蔵を厄介な存在だと思い、手を切りたいたかんがえているしるしだ。

それでいい、と武蔵は思っている。

剣技、武芸に打ちこむ姿勢は、忠利と光尚では雲泥の差がある。ひきつづき指南役として腰をすえれば光尚から煙たがられるばかりだろう。

死が近いのだから、放っておいてもかまわない——いやいや、それがそうはいかないのである。

藩庁は『五輪書』を献上させてから武蔵と絶縁したい意向である

——武蔵はこのように観察していたようだ。

『五輪書』が細川家のものになるのは断じて拒否するというわけではない。武蔵の想いは『五輪書』が有効に扱われることに集中している。細川家が有効に扱ってくれるなら、それでいい。

有効な扱い、それは『五輪書』を広い世界に公開することだ。

だが、まさにその点に武蔵の疑心が向けられている。新しい細川家は『五輪書』を秘匿してしまうのではないかと武蔵はおそれている。武蔵の疑心は確信に近い。

『五輪書』を隠匿されると、世間では武蔵の剣技論は『三十五箇条』の程度でしかないと評価されてしまう。そんなことになるくらいなら、

死んだほうが、ましだ！

いやいや、死ぬわけにはいかない。いまの状況で死ぬと、『五輪書』は細川家にとりあげられ、先代忠利から継承された宝物として隠匿されてしまうおそれが大だ。

そうさせては、ならん。絶対に、ならん！

作戦を練りにかかると。

急がねばならない。

寿命は尽きかかっている。

四月十三日づけで、武蔵は細川家の家老三人にあてて書簡を發した。

奇妙なる書簡と書いていい。

遺言状らしくあるが、武蔵と家老は遺言状をやりとりする関係で

はない。

この書簡の性質をあえて一言で表現するならば、
絶縁を唆す書

とするのが妥当ではなからうか。

以前から健康が芳しくなかったが、今春から重症といわねばならぬようになり、手足がたたなくなってきたので、

「拝領する知行の望みを致さぬままになっております」

忠利の代では武蔵の知行はきまっていた。だからこの「知行の望みを致さぬ」とは、光尚の代になって知行拝領の手続きをすべきだが、それをせぬままになっている、という意味のようだ。

言外に、わたくしは光尚さまとは剣術指南の契約をしております、する気もありませんと念をおしているような書き方だ。

そのつぎに、いまは亡き忠利にたいする剣術理論書の献上のことに触れている。疲労困憊のなかで書いたからであろうか、言葉にも筋にも混乱があつて意味をつかみにくい。長い文節を短く区切って読むと、武蔵のいいたいことの概略がわかりやすくなる。

「越中守さま（忠利）は兵法に強い関心をおもちであられた」

「わが兵法の要点をもうしあげた」

「兵道のあらかたをご理解なされかかったところで、（忠利は）お亡くなりになった」

「わたくしは絶望した」

ここから、言葉の主格あるいは目的格が忠利から光尚に変わるようだ。もちろん、武蔵自身も主格や目的格として登場する。

「兵法の利（理）を書付にして献上せよと（光尚は）おっしゃった」

「書付だけではご理解しにくいと存じ……」

「下書きだけをととのえて差しあげようとした」

本格的な理論書をさしあげるが、とりあえずの「下書き」をさしあげる計画をたてた、との意味だろうか。

「兵道について新しく考究したことがらを……」

「儒学や佛教の古い用語は使わずに……」

「軍学の古い理屈は使わずに……」

「わが兵法だけの利（理）を考究するのは他の分野の芸能と共通すると存じ……」

「おおかたは世界の利を明らかにし得たのですが、世に合わぬようであり、無念に存じます」

「今迄世間兵法にて身過候様に存じ候」

もつとも難解な一節であるので、あえて原文どおりに引き写した。

「世間兵法でやってきたのは宜しくない」と批判している意味に読めるのだが、だれがやってきたのか、主語が不明なのである。

光尚だとすれば、敬語を使っていないのがおかしい。自分を除く世間の剣士一般、あるいは武士一般の意味かもしれないが、「身過」を「剣技を教授して生活費を稼いできた」と解釈すると、これは武蔵自身とみるのが妥当なようだ。

自己批判である。

誠実に、懸命にやってきましたが、世間にも合わず、愚かで、だめな剣術理論家、それが宮本武蔵なのですと、毒々しいばかりの筆致で自分を貶めている。それはなぜなのか、もうすこし先で理由がわかってくる。

- 3 0 7 -

「真実の兵法が病気になる、右のような次第になります」

「いまは末世ですが、わたくしだけが古今の（剣技）名人なのです」

「（光尚へ）（剣技の）奥意を伝授できるのは唯一の古今の名人のわたくしだけです、手足がうごきません」

「今年かぎりの寿命でしょう」

「山に隠れ、死にます」

「世間にたいしては、『宮本武蔵に蟄居を命じた』と発表してください」

細川家の三家老にあてた宮本武蔵の、まるで遺言状のような奇妙なる書簡の趣意は以上のとおりであった。

三家老や藩庁がどのように反応したのか、わからない。すくなく

とも、武蔵のいうのにまかせて、「宮本武蔵はけしからん。蟄居処分とした」とは発表しなかったようだ。

三家老も藩庁も武蔵が死にかけているのは知っている。秘密事項ということでもない。宮本武蔵とは、なんと大げさなことをいう老剣士だろう——武蔵の書簡は三家老のあいだで読みまわされ、反故紙の箱に放りこまれ、それで一件はおわりという次第であったかもしれない。

それで、いいのである。

『五輪書』が細川家の倉庫で隠匿されるおそれはなくなった。そのことが武蔵の主観によって確認されればいい。

四月十三日——三家老に書簡をおくり、「武蔵は死んだ」ということにしてもらいたいと願った。藩庁からは兎角の反応はなかったようだから、つまり、武蔵は死んだも同様の存在になった。

五月十二日——『五輪書』の五巻のすべての末尾に、つぎの文章を書きつけた。三家老あて書簡のちょうど一カ月後である。

「正保二歳（年）五月十二日

寺尾孫之丞殿

新免武蔵

この措置によって、『五輪書』は寺尾孫之丞の手によって、つまり二天一流の門人によって世にひろまることが保証された。

おなじ日、世話になった面々に遺物を贈呈した。そして、『兵法三十五箇条』を寺尾信行（孫之丞の弟）に伝授した。

またおなじ日、十九箇条の「独行道」を書きあげた。

「世々の道、そむくことなし」

「身に楽しみをたくまず」

「よろずに依怙の心なし」

「一生の間、欲心思わず」

「わが事において後悔せず」

「善悪に他を妬む心なし」

「いずれの道にも別れをかなしまず」

「自他ともに怨み、託つ心なし」

「恋慕の道、思いよる心なし」
「物事に数寄、好むことなし」
「私宅において望む心なし」
「身ひとつに美食を好まず」
「末々什物となる古き道具、所持せず」
「わが身にいたり、物忌みすることなし」
「兵具は格別余の道具、たしなまず」
「道においては死を厭わず、思う」
「老身に財宝所持、もちゆる心なし」
「佛神は尊し、佛神を頼まず」
「常に兵法の道をはなれず」

正保二年五月十九日、宮本武蔵は熊本郊外の千葉城跡の屋敷で六十二年の生涯の幕を閉じた。

武蔵の遺骸は、かれの希望によつて甲冑を着せられ、龍田郡五町手永弓削村に埋葬された。現在、東の武蔵墓と称されているのがここだ。

（第20章 終）

（大尾）

『武芸者で候 武蔵外伝』 参考書

『宮本武蔵 五輪書』 (徳間書店)

『当代記・駿府記』 (『史籍雑纂』・続群書類聚完成会)

『細川家史料』 (『大日本近世史料』・東京大学出版会)

『武芸小伝』 『渡辺幸庵対話』 『吉岡伝』 (『史籍集覧』・同出版会)

『言継卿記』 (太洋社)

『古老茶話』 『洞房語園』 (『日本随筆大成』・中央公論社)

『肥後文献叢書 2』 (隆文社)

『武將感状記』 (金園社)

『本阿弥行状記と光悦』 (正木篤三・中央公論美術出版)

『肥後武道史』 (熊本県体育協会編・新潮社)

『甲子夜話 5・6』 (松浦静山・東洋文庫)

『都甲太兵衛』 『阿部一族』 (『鷗外歴史文学集』・岩波書店)

『宮本武蔵』 (宮本武蔵遺蹟顕彰会・金港堂)

『関ヶ原合戦前後』 (原田伴彦・徳間書店)

『宮本武蔵事典』 (加来耕三・東京堂出版)

『出雲のおくに』 (小笠原恭子・中公新書)

『日本劔道史』 (山田次朗吉・再建社)

『福岡藩史料に基づく宮本武蔵の新たな実像』 (本山真澄・

歴史研究319』・新人物往来社)

慶長ルネッサンス——こういう表現が可能であろう。

個人を見せたい、個人を観たい——慶長ルネッサンスをつらぬく激しい衝動である。激しい衝動にこころを揺すられた典型として宮本武蔵の生涯を描いてみた。

個人を見せ

たい衝動は、武蔵の場合、出雲阿国のかぶき踊りを観たことで触発された。武蔵の天性のものではないということ、そこに慶長という時代の神髄がある。

個 というものを大切にしようとするれば権威や正統との関係に気をつかわねばならない。個 を引きよせ、巻きこもつとする権威のちからはいつの世にも強烈で容赦がない。

足利幕府の権威とともに歩んできた吉岡憲法の剣技からは、おのれの 個 を大切にする姿勢がそだたなかった。吉岡を尊敬することでは人後に落ちぬ武蔵だが、その一方で、吉岡の行き方を真似てはならんと痛感していた。吉岡は消えてゆかねばならない。だが、吉岡はみずから消えようとはしない。武蔵が手をかして吉岡を消滅させてやらねばならなかった。

- 3 1 1 -

宮本武蔵の生涯を、歴史小説の手法で描いてみぬか——日本放送出版協会の道川文夫局長から誘っていた。剣豪小説を、ではないのが幸運であった。わたしは剣技の実際についてほとんど無知なのである。

20 03年正月

高野 澄